

# Bulletin of the Kyushu University Museum



March 2025

The Kyushu University Museum

# Bulletin of the Kyushu University Museum

March 2025  
Number 22

## Contents

- Shinji YAMASAKI, Masahiro FUKUNAGA, Masaki KATATA** ————— 1  
A material report about Ryukyu relics in the Gyokusen-kan Collection
- Katsuya KIDO** ————— 19  
Beetles of the Kasuya Research Forest, Kyushu University
- Shiori YONEMOTO** ————— 53  
Shinmachi site and Ootomo site: Subsistence activities of people during the beginning of the Yayoi period revealed using musculoskeletal stress markers.
- Tsuneo KAKUDA, Shiori YONEMOTO, Hirofumi TAKAMUKU,  
Hideaki KANZAWA-KIRIYAMA, Kyoko FUNAHASHI** ————— 71  
Ancient mitochondrial DNA analysis of skeletal remains excavated from the Otomo archaeological site in Saga Prefecture and Hirota archaeological site in Kagoshima Prefecture, Japan
- Shozo IWANAGA** ————— 81  
Preparatory study on Emperor Monmu's Daijo-kyu
- Akiyo YOSHIDA, Shiori YONEMOTO, Takahiro KUROKI** ————— 117  
Practical Report: Events related to the exhibition "People of the Yayoi Period:  
Natural Anthropology Research at Kyushu University  
Let's Scan Bones with a 3D Scanner!
- Masahiro FUKUNAGA, Yasuhiro ITO** ————— 129  
Shellfish Materials Excavated from Tenjinyama Shell Mound and Yamaga Shell Mound  
—Materials from the Kyushu University Museum Collection—

The Kyushu University Museum

Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>

## 玉泉館旧蔵資料中の琉球関係資料について

山崎 真治<sup>1)\*</sup>・福永 将大<sup>2)</sup>・片多 雅樹<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>沖縄県立博物館・美術館：〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

<sup>2)</sup>九州大学総合研究博物館

<sup>3)</sup>長崎県埋蔵文化財センター

\*libra23@hb.tp1.jp

**要旨：**本稿では、九州大学総合研究博物館所蔵の「玉泉館」旧蔵の考古資料コレクション中に含まれる琉球関係資料について報告する。当該資料には、戦前の沖縄・八重山を含む琉球（沖縄県）で採集された石斧等の石器類や高麗系瓦などが含まれており、収集年代や収集地が明確に記録されている点でも資料的価値の高いものである。また、今回の詳細調査によって従来認識されていなかった黒曜石円礫2点が確認された。このような黒曜石円礫は、これまで沖縄県から多く報告されていた佐賀県伊万里市腰岳産黒曜石とは性状が異なるものであり、その産地や来歴について今後の検討を要する。

**キーワード：**玉泉館，琉球，考古資料，黒曜石

### はじめに

2025年は戦後80年にあたる年である。沖縄県立博物館・美術館では、沖縄の日本復帰50年を迎えた2022年前後から、近・現代の沖縄研究をめぐる研究史の掘り起こしを進めており、東京大学総合研究博物館や早稲田大学會津八一記念博物館の協力を得て、各機関に所蔵されている沖縄関係資料の再報告に取り組んできた（沖縄県立博物館・美術館2021, 山崎2022, 山崎ほか2024）。沖縄県外所在の沖縄関係考古資料については、これまでにいくつかの紹介が公表されているが（安里ほか1996・1997, 石垣市教育委員会2020, 嵩元ほか1997a・b・石井ほか2012）、今回取り上げる九州大学総合研究博物館所蔵の「玉泉館」旧蔵の考古資料コレクション（谷澤・岩永2021）中の琉球関係資料については、戦後詳しい検討がなされたことはないようである。今回、筆者らは玉泉館旧蔵資料のうち、特に琉球関係資料についてやや系統的な確認作業と調査研究を実施したので、本稿ではその概要について報告する。

### 資料の概要

九州大学総合研究博物館の玉泉館旧蔵資料中に含まれる琉球関係資料は、明治・大正期の法曹界で活躍した大井七郎によって収集され、その死後に夫人の大井ウメによって玉泉館に寄贈されたものである。大井ウメが玉泉館に寄贈した資料は580点にのぼり（谷澤・岩永2021）、琉球関係資料はそのうち52点を占める。

収集者である大井七郎（1868～1920）は、山口県山口市出身の法曹で、明治法律学校（現明治大学）、和仏法律学校（現法政大学）卒業後、判検事登用第1回試験に及第し、各地の裁判所検事を歴任した。本資料の主要部分は、大井が那覇に勤務していた際に収集したものと考えられる。『現代防長人物史』（井関1917）によれば、大井は明治42年11月に検事正として那覇地方裁判所に赴任し、大正3年10月には鳥取地方裁判所に転出している。当時の法曹は旧慣調査も積極的に行っており、1910（明治43）年に当時久米島分署長警部だった池口権四郎がまとめた「久米島事情」は、当時那覇地方区裁判所の検事正だった大井七郎あてに提出されている（上江洲1976）。考古資料の収集も、そうした旧慣調査と合わせて実施されたの

かもしれない。

玉泉館所蔵の琉球関係資料は、1928（昭和3）年12月30日に金関丈夫が玉泉館を訪れて資料を詳しく検討し、紀行文の一節に記載したことから学界に知られるようになった（金関1929～1932）。これらの資料は、戦前・戦後の沖縄をめぐる考古学・人類学研究の歩みを紐解く上で、重要な意義をもつことから、今回、山崎と福永の両名で系統的な確認作業と調査を実施することとした。作業は2023年12月26日および2024年8月20日の2回にわたって実施した。また、本資料中に含まれる黒曜石については長崎県埋蔵文化財センターならびに沖縄市立郷土博物館のご協力を得て蛍光X線分析にもとづく産地推定を実施した。

## 資料解説（表1・写真図版1～7）

資料のリストを表1に、個別写真を写真図版1～7に示す。また、採集地別の資料番号リストを表2に示す。

1928年12月30日に本資料を実見した金関によれば、玉泉館の琉球石器には石斧30点、凹石2点、円石6点の計38点があり、このほかに浦添城跡発見の瓦破片14個があったという。現存する資料を見ると石斧29点、凹石2点、円石（円礫・磨石）6点、石杵1点、瓦類14点で、このうち凹石、円石、瓦類は金関の報告と数量において一致する。ただし石斧については数量がやや異なる。この問題について、No. 1537に伴っていた古いラベルには「琉球（計38個）石斧29個 円石6個 凹石2個 石杵1個」と、金関の記載とは異なる点数が記載されており、こちらの方が現状の資料点数と一致する。このことから、当初から石斧の数は29点だった可能性が高いと思われるので、ひとまず、現存する資料は戦前のコレクションの状態をそのまま留めているものと考えておきたい。

各標本の注記は、白字で標本番号が記載され、赤字で日付と出土地が記載される（図1）。赤字注記にある「三、二、一五」のような数字は、日付をあらわしており、「大正3年2月15日」のように解釈できる。このことは、付随するラベルとの照合からも確認できる。また、数字が書かれた小さなシールが添付されたものもあり、こちらは学校備品番号であることが、やはり付随するラベルとの照合から確認できる（図3）。

本資料中、最も古い日付をもつ標本は「明治43年2月琉球八重山島岩崎氏波照間島出」の注記をもつ石斧？（No.1523）である。この「岩崎氏」は、当時石垣島測候所に勤務していた岩崎卓爾の可能性が考えられる。自然石のように見えるが、一部研磨痕がみられるようである。これに次ぐのが「明治44年夏 富川氏ヨリ琉球八重山波照間島」の注記をもつ石斧（No.1513）で、これは後述するように学史上でもしばしば取り上げられてきた著名な分銅形石斧である。

大正2年11月には当時沖縄県立図書館長であった伊波普猷から石器3点（No.1508, 1530, 1531：出所不明）を受領しており、同年同月に浦添城跡で瓦類（高麗系瓦等）を採集している（No.1571～1584）。伊波の著書『古琉球』（伊波1911）所収の「土塊石片録」（明治41年9月「琉球新報」所載）によれば、（恐らく明治40年頃に…引用者註）東恩納寛惇とともに浦添城跡において「癸酉年高麗瓦匠造」の銘のある瓦片（図2）を採集したことを記しており、本資料中に含まれる瓦類は、伊波自身の情報提供または現地案内にもとづいて収集されたものであろう。

そして大正3年には大山、読谷山、荻堂、国吉坂など、各地で28点の石器類を収集しており、この中には大山の駐在巡査から届けられた資料も含まれている。2月から3月にかけて、同一日付で多くの資料が収集されており、大井自身が各地に出向いて探索し、地元住民に資料を乞うたのかもしれない。そして、大正3年秋に沖縄を離任した後は、標本収集も途絶えたと考えられる。

採集地の判明する資料のうち、最も多いのは大山（宜野湾市大山）のもので13点、このうち見付岳、ミツキヲガン、見月うがんだ「見付」とあるものが6点ある。「見付」は、大山貝塚（国史跡）が所在するミスクヤマ（美底山：ミチケーマ、ミスクムイなどと呼ばれることもある）の拝所をさしている可能性が考えられるが、大山集落の屋号にも同様の名称が見られ、別地点の可能性も排除できない（宜野湾市史編集委員会1985、宜野湾市教育委員会1996・2005、平敷兼哉氏私信）。その他、オモロシウトリと記されるものや、駐在巡査から収集したものもあるが、詳細不明である。

大山に次いで数が多いのが読谷山渡久地（渡口）9点と国吉坂6点で、前者は読谷村渡具知に比定でき、ワンパーチン庭と記される資料については、現在でも「ワンパーチン」という屋号が継承されていることから、その

玉泉館旧蔵資料中の琉球関係資料について

表1 資料リスト

番号	写真	名称	保存状態	石材	注記	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	ラベル (抜粋)	備考
1503	1	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 琉球大山村甘藷畑 1503 シール「53」	69.7	67.5	14.2	101.4	第一門之 415	
1504	2	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 大山村オモロシウトリ 1504 シール「54」	74.7	44.6	17.0	98.9	第一門之 416	被火 (部分的に黒色化) 刃部顕著に濡れ
1505	3	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、四月 大山駐在巡查 1505 シール「55」	73.8	56.0	24.7	195.8	第一門之 417	
1506	4	打製石斧または 礪器 (磨製 石斧の転用 品?)	完形	緑色岩 (細粒)	三、三、二八 国吉坂 1506 シール「56」	67.3	39.5	23.7	78.2	第一門之 418	円礪面が大きく残る。一部 に研磨痕が確認できる。
1507	5	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 琉球大山見付岳 1507 シール「57」	80.4	55.1	27.6	178.0	第一門之 419	刃縁摩滅光沢顕著
1508	6	磨製石斧	完形	緑色岩 (粗粒)	二、一、一月 伊波文学士 琉球大山 出か不明 1508 シール「58」	81.1	39.8	22.4	120.6	第一門之 420	刃部損耗
1509	7	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 琉球大山見付岳 1509 シール「59」	55.6	40.7	16.6	64.6		刃縁光沢顕著
1510	8	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、二、二一 琉球中城村荻堂区長宅 1510 シール「60」	87.2	50.3	17.4	116.9	第一門之 422	器体中央部表裏面摩滅顕著 刃部損耗顕著
1511	9	磨製石斧	完形	蛇紋岩	1511 シール「61」	79.3	47.1	14.6	94.1		双刃 八重山の石斧
1512	10	磨製石斧	完形	輝緑岩	三、三、二一 琉球中城村荻堂区長 1512 シール「62」	64.8	47.5	23.7	133.4	第一門之 424	刃部濡れ
1513	11	打製石斧 (磨製石斧の 転用品?)	完形	緑色岩? (細粒)	四四夏富川氏ヨリ 琉球八重山波照間島 1513 シール貼付痕あり	79.9	54.2	20.2	147.3		双刃? 刃部顕著に濡れ 表面黒色物質付着 表裏面研磨痕あり
1514	12	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	三、三、二八 国吉坂下畑満 1514 シール「64」	61.9	48.3	20.0	81.4	第一門之 426	
1515	13	磨製石斧	基部	輝緑岩 (黒っぽい)	三、二、一五 琉球大山村見付岳 1515 シール貼付痕あり	66.4	47.1	31.6	157.2	第一門之 427	よく研磨されている
1516	14	打製石斧または 磨製石斧未 成品	完形	緑色岩 (やや粗粒)	三、二、一五 大山村見月うがん山中 1516	88.0	55.5	19.1	144.7	第一門之 428	表面弱く研磨 右側縁一部研磨 裏面摩滅
1517	15	磨製石斧	刃部	輝緑岩	三、二、一五 大山村オモロシウトリ 庭 1517	66.1	53.3	26.2	145.3	第一門之 429	刃部やや濡れ
1518	16	磨製石斧?	基部	片岩 (片状組織顕著)	三、三、二八 国吉坂 1518 シール「68」	61.2	45.6	17.9	73.6	第一門之 430	左側縁に一部研磨痕ある が、折損面は古い (再利用?)。
1519	17	磨製石斧	完形	緑色岩 (細粒)	三、八、五 大山駐在巡查 1519 シール「69」	137.8	48.4	18.0	218.0	第一門之 431	研磨後打割
1520	18	磨製石斧	完形	安山岩 (斑晶質)	三、二、二〇 琉球読谷山字渡口 ワンペーチン庭 1520 シール「70」	133.3	58.1	33.1	403.0		刃部濡れ
1521	19	磨製石斧?	基部	緑色岩 (細粒)	三、二、一五 大山村見月岳下甘藷畑 1521 シール「71」	88.9	54.9	30.2	222.0	第一門之 433	裏面一部研磨痕あり 折損面は古い (摩滅)

番号	写真	名称	保存状態	石材	注記	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	ラベル (抜粋)	備考
1522	20	磨製石斧	完形	輝緑岩 (黒っぽい)	三、二、二〇 琉球読谷山字渡口 ワンペーチン庭 1522 シール「72」	123.3	51.4	34.7	426.0	第一門之 434	刃部顕著に潰れ
1523	21	磨製石斧?	完形	緑色岩 (細粒)	四三、二月 琉球八重山島 岩崎氏波照間島出 1523 シール「73」	113.4	73.1	27.9	340.0	第一門之 435	表面は研磨されているようにも見えるが刃部は自然の形状のよう
1524	22	磨製石斧	基部	輝緑岩	三、二、一五 大山ミツキワガン ■5■ シール「74」	128.6	57.3	21.7	243.0	第一門之 436	全面研磨しようとしているが不徹底
1525	23	磨製石斧?	基部	輝緑岩	三、二、二八 (一五を消してある) 国吉坂 (大山見付岳を消してある) 1525 シール「75」	101.7	55.3	27.9	290.0	第一門之 437	全体に敲打痕 研磨なし
1526	24	磨製石斧	破損品	緑色岩 (細粒)	三、三、一八 琉球国吉坂 1526 シール「76」	105.5	45.4	25.6	166.3	第一門之 438	裏面、側縁研磨顕著 刃部顕著に潰れ
1527	25	磨製石斧	完形	蛇紋岩	三、八、二七 琉球八重山岩崎氏 黒島出 1527 シール「77」	85.8	43.0	16.4	105.5	第一門之 439	断面半月形 顕著に片刃
1528	26	打製石斧または磨製石斧未成品	刃部	緑色岩 (やや粗粒)	三、二、一五 大山村甘諸畑 1528 シール「78」	84.4	65.2	35.2	311.0	第一門之 440	
1529	27	磨製石斧?	基部	緑色岩 (細粒)	三、三、二八 国吉坂 1529 シール「79」	89.6	44.9	28.4	204.0	第一門之 441	四周弱く研磨
1530	28	磨製石斧	刃部	緑色岩 (細粒)	二、一一月 伊波普猷氏ヨリ受 出所不明 1530 シール貼付痕あり	49.7	78.8	22.2	112.3	第一門之 442	
1531	29	磨製石斧	基部	緑色岩 (やや粗粒)	二、一一月 伊波氏ヨリ受 1531 シール「81」	100.6	42.8	20.5	144.9	第一門之 443	
1532	30	円礫		黒曜石	1532	54.0	41.2	29.3	87.2	第一門之 444 「琉球渡久地」と書かれたラベルもあり	漆黒色。斑状の赤色部あり。
1533	31	磨石		緑色岩 (細粒)	三、三、二〇 渡久地 1533 シール「102」	67.8	51.8	51.2	285.0	第一門之 445	
1534	32	円礫		黒曜石	1534 シール「10■」	51.1	42.2	30.4	90.7	第一門之 446	漆黒色。斑状の赤色部あり。 一面研磨
1535	33	磨石		緑色岩 (細粒)	三、二、二〇 渡久地 1535 シール「104」	51.8	54.3	50.5	224.0		
1536	34	磨石		緑色岩 (細粒)	読谷山渡久地 1536 シール「105」	63.9	48.7	47.6	249.0	第一門之 448	
1537	35	磨石		砂岩	1537 シール「106」	47.1	56.8	36.9	135.5	第一門之 449 ラベルには「読谷渡久地」となっているものもあり	
1538	36	凹石		緑色岩 (細粒)	1538 シール「107」	88.5	65.9	43.6	434.0	第一門之 450 ラベルは「琉球渡久地」となっている	赤色物付着 (注記の顔料?)

玉泉館旧蔵資料中の琉球関係資料について

番号	写真	名称	保存状態	石材	注記	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	ラベル (抜粋)	備考
1539	37	凹石		緑色岩 (細粒)	三、二、二〇 中城村欽堂畑側 1539 シール「108」	65.5	53.0	28.5	128.1	第一門之 451	
1540	38	石柱		花崗岩	三、二、二〇 琉球読谷山村字渡口 1540 シール「110」	116.9	61.5	42.7	498.0	第一門之 452	
1571	39	瓦			大正二年十一月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 1571	67.1	93.3	22.1	149.1	第四門之 313	
1572	40	瓦			1572	95.1	78.3	25.6	138.1	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 314	
1573	41	瓦			1573	81.1	82.6	28.6	156.2	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 315	
1574	42	瓦			1574	93.8	66.1	23.2	161.3	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 316	
1575	43	瓦			1575	96.4	76.9	67.8	263.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 317	
1576	44	瓦 (焼き物)			1576	61.9	55.7	32.7	100.5	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 318	
1577	45	瓦			1577	83.3	59.0	42.2	133.8	琉球浦添城跡採収 第四門之 319	
1578	46	瓦			1577	89.7	76.2	16.8	121.7	琉球浦添城	
1579	47	瓦			1579	100.4	78.8	18.0	140.7	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 321	
1580	48	瓦			1579	146.8	88.0	20.0	311.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 322	
1581	49	瓦			1581	63.4	69.0	19.3	102.6	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 323	
1582	50	瓦			三、一一月 琉球浦添城跡 1582	118.4	85.3	19.1	248.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 324	
1583	51	瓦			1583	81.0	83.6	18.1	99.9	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 325	
1584	52	瓦			三、一一月 琉球浦添城跡 1584	129.3	93.0	23.1	243.0	大正2年11月 琉球浦添城跡採収 紋瓦八個ノ内 第四門之 326	

表2 採集地別の資料番号リスト

採集地	番 号							
大山	1519	1505	1508※	1524	1509	1503	1515	1507
	1504	1517	1528	1521	1516			
荻堂	1539	1512	1510					
国吉坂	1525	1526	1506	1518	1529	1514		
黒島	1527							
渡久地 ／渡口	1520	1522	1532※	1533	1535	1536	1537※	1538※
	1540							
波照間	1513	1523						
黒島	1527							
浦添城跡	1571	1572	1573	1574	1575	1576	1577	1578
	1579	1580	1581	1582	1583	1584		

※は不确实（注記ではなく付属ラベルの記載にもとづく）

番号は表1に対応。



図1 資料の注記等の状況 (No.1504)



図2 浦添城跡採集の高麗系瓦 (No.1582)

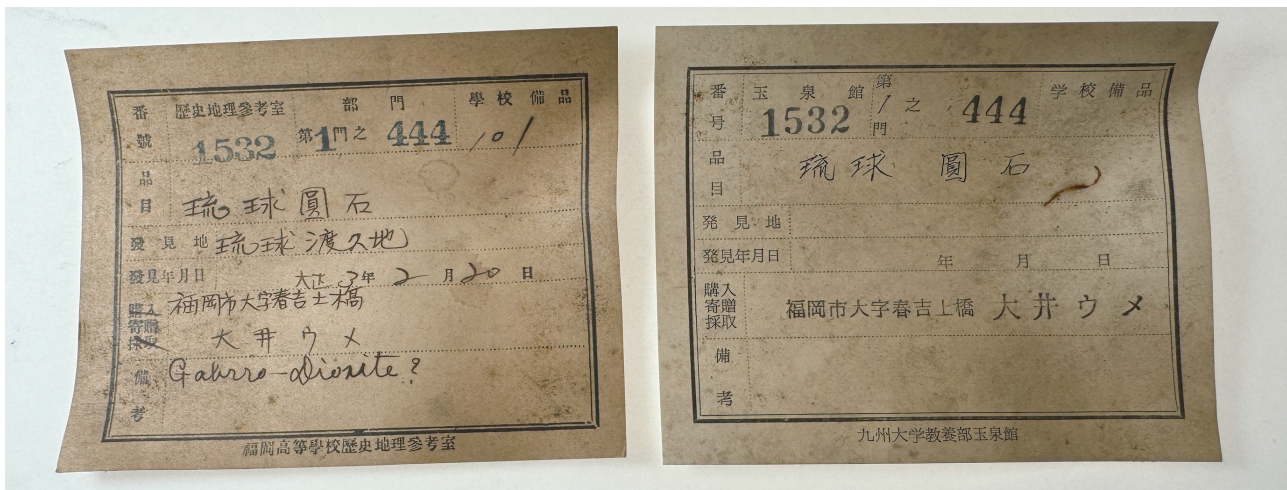


図3 標本に付属するラベル（左が福岡高等学校，右が九州大学教養部時代のラベル）



写真1 No. 1503 磨製石斧



写真2 No. 1504 磨製石斧



写真3 No. 1505 磨製石斧



写真4 No. 1506 打製石斧または礫器



写真5 No. 1507 磨製石斧



写真6 No. 1508 磨製石斧



写真7 No. 1509 磨製石斧

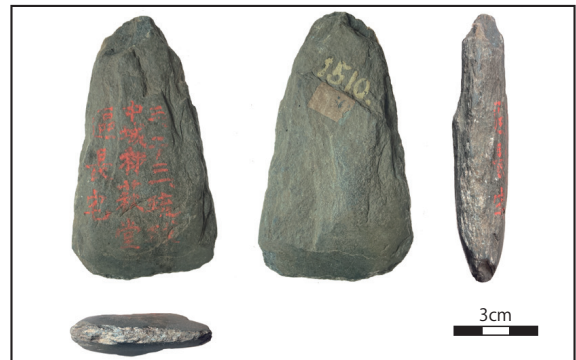


写真8 No. 1510 磨製石斧



写真9 No. 1511 磨製石斧



写真10 No. 1512 磨製石斧



写真11 No. 1513 打製石斧

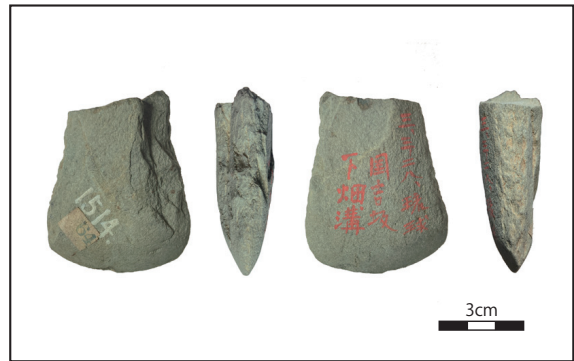


写真12 No. 1514 磨製石斧



写真13 No. 1515 磨製石斧



写真14 No. 1516 打製石斧または磨製石斧  
未成品



写真15 No. 1517 磨製石斧



写真16 No. 1518 磨製石斧？



写真 17 No. 1519 磨製石斧



写真 18 No. 1520 磨製石斧

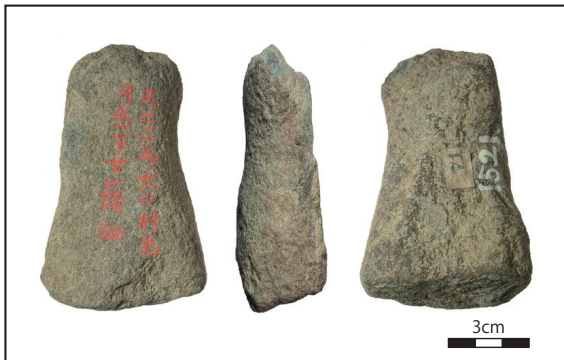


写真 19 No. 1521 磨製石斧？



写真 20 No. 1522 磨製石斧



写真 21 No. 1523 磨製石斧？



写真 22 No. 1524 磨製石斧

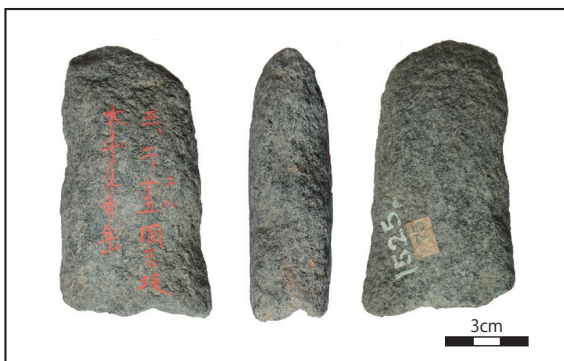


写真 23 No. 1525 磨製石斧？



写真 24 No. 1526 磨製石斧



写真 25 No. 1527 磨製石斧



写真 26 No. 1528 打製石斧または磨製石斧未成品



写真 27 No. 1529 磨製石斧？

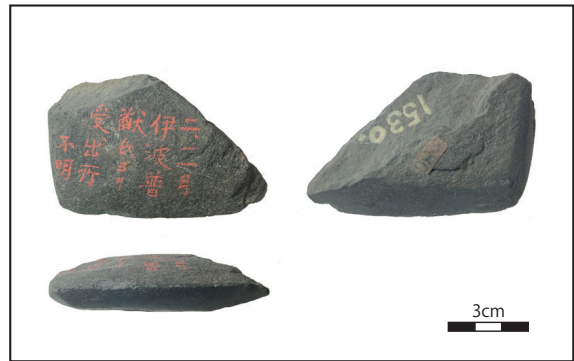


写真 28 No. 1530 磨製石斧



写真 29 No. 1531 磨製石斧



写真 30 No. 1532 円礫（黒曜石）



写真 31 No. 1533 磨石



写真 32 No. 1534 円礫（黒曜石）



写真 33 No. 1535 磨石



写真 34 No. 1536 磨石



写真 35 No. 1537 磨石



写真 36 No. 1538 凹石



写真 37 No. 1539 凹石



写真 38 No. 1540 石杵



写真 39 No. 1571 瓦



写真 40 No. 1572 瓦



写真 41 No. 1573 瓦



写真 42 No. 1574 瓦



写真 43 No. 1575 瓦



写真 44 No. 1576 瓦?



写真 45 No. 1577 瓦



写真 46 No. 1578 瓦



写真 47 No. 1579 瓦



写真 48 No. 1580 瓦



写真 49 No. 1581 瓦



写真 50 No. 1582 瓦



写真 51 No. 1583 瓦



写真 52 No. 1584 瓦

写真図版 7

近辺で採集されたものであろう(上地克哉氏私信)。後者は糸満市真謝原に所在する国吉坂石器片散布地(糸満市教育委員会1981)に相当するものと思われる。このほか、詳細不明ながら荻堂(3点)や黒島(1点)で採集された資料があり、前者は北中城村荻堂に所在する荻堂貝塚や荻道遺跡との関連性が考えられる。

個別の資料について見ていくと、No.1503, 1510, 1514, 1519, 1530のように扁平で刃部磨製(身部の研磨が不徹底)の石斧は、南島爪形文土器や曾畑式など貝塚時代前1~2期(縄文時代早・前期)頃にしばしば見られる(新田2000, 大堀2014)。No.1506のような円礫に刃部を設けた打製石斧は珍しいものである。No.1511は出所不明だが、形態と石材から見て八重山諸島に由来する可能性が考えられる。

No.1513は、いわゆる分銅形を呈する打製石斧で、以前から南方とのつながりを示すものとして取り上げられてきた。金関丈夫ら(1964)は、「刃部の形成は不十分」としつつも、「紅頭嶼に発見される島田髻型(waisted form)の石器と酷似している」と述べており、彼らが類

似資料として言及した、紅頭嶼(現在の蘭嶼)のタオ族(ヤミ族)が使用したといわれるチチブ・チブ・ノ・イナボは、畑作での除草用と推定されている(国分1981:430頁)。ただし、金関らも指摘するように、No.1513の刃部に相当する部位は平坦面をなしており、刃部を持たないことから、Andersonらのようにこれを錘とみなす意見もある(Anderson and Summerhayes 2008)。また、表面の過半と裏面の一部が黒色皮膜状の付着物(?)に覆われているように見える点は、違和感を覚える点である(図4)。このような形態の石斧はその後の波照間島の遺跡調査でも確認されておらず(沖縄県教育委員会1986)、その取り扱いには配慮を要するものと言えよう。

No.1523は石斧とされるものであるが、研磨の程度は非常に弱く、ほぼ自然石と言って良いだろう。No.1532, 1534は黒曜石の円礫で、形状や石質は互いによく類似する。漆黒色・良質の黒曜石だが、一部に赤色の斑文が見られる。人為的な剥離痕はない。No.1534は一面に平坦な研磨面があるが、この周囲のみに泥が付着しており、古いものではない。この2点の黒曜石円礫については、

今回、蛍光X線分析を実施したので、その結果については後述する。No.1538はいわゆるクガニイシ（白木原1978）状を呈する磨石である。No.1571～1575、1577～1578は瓦当、No.1579～1584は平瓦で銘のあるもの。No.1576は瓦質の焼物だが、何らかの部材になるものだろうか。

## 黒曜石の産地推定

玉泉館旧蔵資料中に含まれる黒曜石2点および沖縄市中の町小学校採集の黒曜石1点について、蛍光X線分析にもとづく産地推定を実施した。分析にあたっては長崎県埋蔵文化財センターの機器を使用した。

## 試料の概要

分析試料の写真を図5に示す。玉泉館旧蔵資料中の黒曜石円礫2点については前項で詳しく取り上げているので、ここでは中の町小学校採集の黒曜石円礫1点について述べる。本資料は2008年8月に中の町小学校の6年生から沖縄市立郷土博物館に寄贈されたもので、中の町小学校の運動場で採集したものとされる（比嘉2010）。鶏卵大の大きさで、計測値は長さ6.6cm、幅5.6cm、厚さ4.5cm、重量196gである。ほぼ全体を円磨面に覆われた漆黒かつ良質の黒曜石で、一部に赤みがかった部分も認められる。表面に付着物やマトリクス等はなく、人為的な剥離面も認められない。小学生の採集品であるため、詳しい来歴は不明だが、報告者の比嘉清和によれば、小



図4 No.1513の刃部の状態と黒色付着物(?)の状況



図5 分析資料写真

左2点が玉泉館旧蔵資料（左No.1534、右No.1532）、右が中の町小学校（沖縄市）採集資料。

学校の学校教材である可能性や現代における持込の可能性は低く、沖縄の遺跡から多く出土する佐賀県伊万里市の腰岳産を中心とする黒曜石の中にも、このような黒曜石円礫は認められない(小畑ほか2004)。小学校現地も周知の遺跡とはなっていないが、遺跡に由来する遺物の可能性は否定できないという(比嘉2010)。

## 分析の方法

分析には、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて非破壊で定性分析を実施し、判別図法によって原産地を推定した。装置の仕様及び分析条件は以下のとおりである。

エネルギー分散型蛍光X線分析装置：SHI ナノテクノロジー株式会社(現株式会社日立ハイテクサイエンス)製「SEA1200VX」を使用した。下面照射式で照射径は8mmΦ、Rh(ロジウム)管球、SDD検出器で液体窒素を要しない。分析条件は管電圧40kVで管電流は抵抗値によって自動設定とした。大気雰囲気中で、測定時間100秒(デッドタイム30%前後でのライブタイム)で、資料の平坦部分を選択して2回ずつ分析を実施した。

産地推定の手法は、測定した元素のうち、K(カリウム)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Y(イットリウム)、Zr(ジルコニウム)の7元素のX線強度(CPS値)から下記の①~④のパラメータを用いて、①・②の散布図(以下、Rb散布図)と、③・④の散布図(以下、Sr散布図)の2種類の散布図(判別図)を作成するという望月・池谷方式に基づいている(望月ほか1994)。

- ① Mn 強度×100 / Fe 強度
- ② Rb 分率 = {Rb 強度×100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)}
- ③ Log (Fe 強度 / K 強度)
- ④ Sr 分率 = {Sr 強度×100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)}

表3 分析結果

資料情報			蛍光X線検出強度(cps値)							Rb散布図		Sr散布図	
都道府県	採集地	分析ID	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K
47-沖縄県	九州大学	九大1532-01	57.840	23.368	617.808	241.799	106.923	129.971	230.320	34.10	3.78	15.08	1.03
47-沖縄県	九州大学	九大1532-02	52.033	23.033	627.747	236.442	100.994	126.059	226.729	34.26	3.67	14.63	1.08
47-沖縄県	九州大学	九大1534-01	59.082	25.640	649.170	243.232	104.918	130.675	235.526	34.05	3.95	14.69	1.04
47-沖縄県	九州大学	九大1534-02	59.054	24.429	600.757	232.684	101.323	124.689	224.600	34.05	4.07	14.83	1.01
47-沖縄県	中の町小学校	中の町小学校-01	57.451	23.242	556.242	229.771	101.362	125.677	220.582	33.92	4.18	14.96	0.99
47-沖縄県	中の町小学校	中の町小学校-02	61.736	23.913	563.957	240.550	102.387	127.658	226.248	34.52	4.24	14.69	0.96

※資料1点につき分析対象位置を変えて2回ずつ測定。

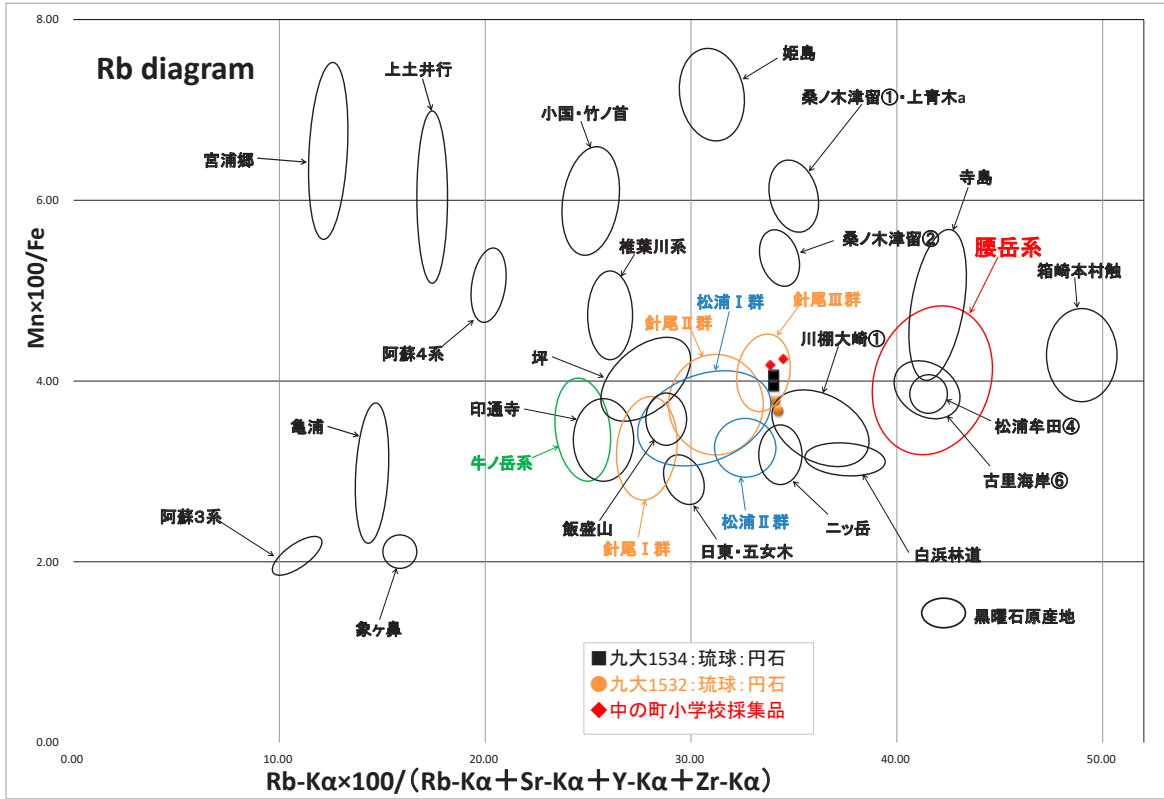
度 + Zr 強度}

長崎県埋蔵文化財センターでは、九州各地から産出する黒曜石の元素データの収集に努めており、現在までに36箇所の原産地から採集した、約1500点の黒曜石原石のデータを整備している。ただし、本州と近隣離島および北海道の産地についてはデータ整備途中であるため、今回採用した判別図法で判別できる範囲は、原則として九州の黒曜石産地に限られる。

## 分析結果

分析結果を表3に、判別図を図6に示す。判別図によれば、いずれの資料も「針尾Ⅲ群」の範囲内あるいはこれに近い位置にプロットされ、「松浦Ⅰ群」の範囲にも隣接する。少なくとも、沖縄で多く出土する腰岳産黒曜石とは異なっている。

今回分析を実施した玉泉館旧蔵資料や中の町小学校のような黒曜石円礫は、肉眼観察では長崎県松浦市牟田から産出する黒曜石(川道・片多2018)に類似するとのことであり(柳田裕三、川道寛氏私信)、今回の産地推定結果でも、牟田を含む「松浦Ⅰ群」に近い位置にプロットされていることは注目される。牟田産黒曜石は、主に旧石器時代に用いられた石材であり、縄文時代以降の使用例は少ないとされる。仮にそのような石材が、沖縄の遺跡から実際に出土したのであるならば、重大な問題を提起することになるが、今回の分析資料は来歴に不明な点も多く、資料が遺跡出土品でない可能性を想定すると、九州以北の日本列島産、あるいはフィリピン以南の東南アジア・オセアニア地域産という可能性も排除できないため、本稿では分析結果の提示に留めたい。いずれにせよ、これらの黒曜石の産地と来歴の探求は、今後の検討課題となるものである。



腰岳系: 腰岳、有田川、松浦Ⅲ群(松浦牟田③、松浦大崎③)、松浦牟田⑤、古里海岸⑦  
 牛ノ岳系: 牛ノ岳(土器田)、針尾米軍基地、久木島米軍基地、砲台山、前畑弾薬庫、淀姫神社・東浜  
 椎葉川系: 椎葉川、古里海岸② 阿蘇4系: 国見町海岸、神代海岸、和泉町、的石 阿蘇3系: 御船町、長谷峠 小国系: 小国、竹ノ首  
 松浦Ⅰ群: 松浦牟田①、松浦大崎① 松浦Ⅱ群: 松浦牟田②、松浦大崎② 松浦Ⅲ群: 松浦牟田③、松浦大崎③  
 針尾Ⅰ群: 針尾中町①、古里海岸③ 針尾Ⅱ群: 針尾中町②、古里海岸④ 針尾Ⅲ群: 針尾中町③、古里海岸⑤

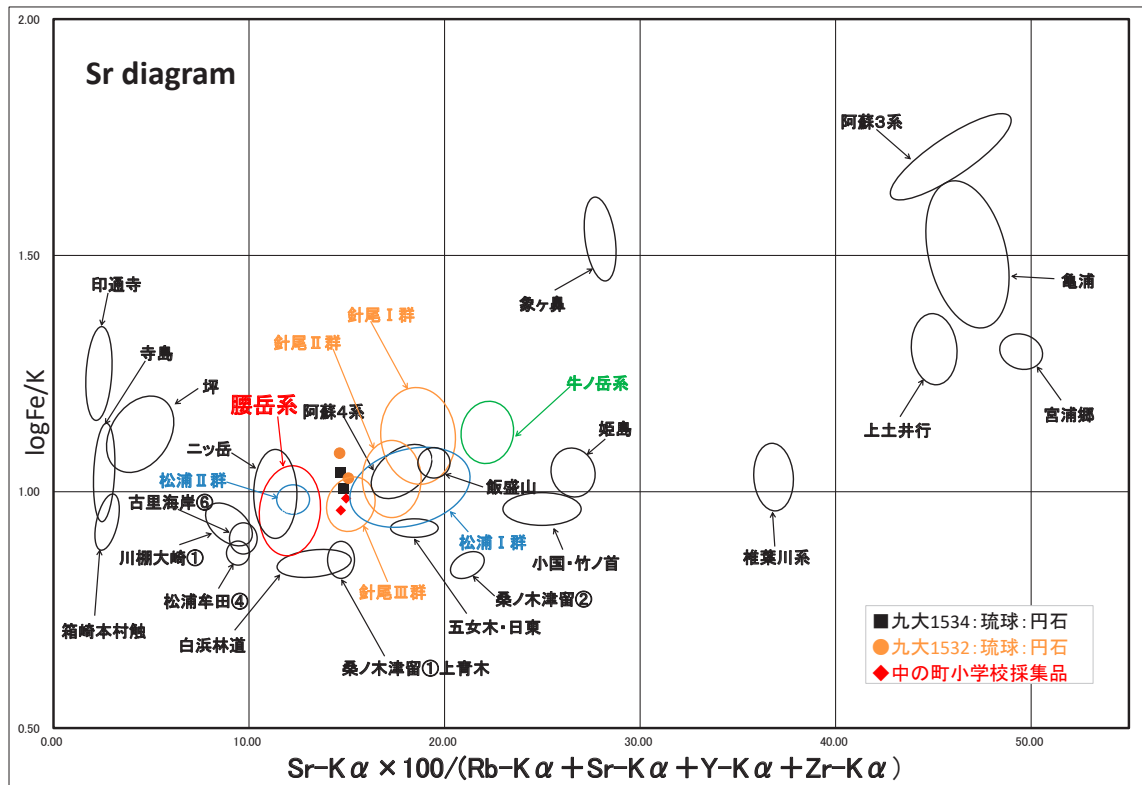


図6 黒曜石原産地判別図(上: Rb 散布図、下: Sr 散布図)

## 謝辞

本報告をまとめるにあたり、長崎県埋蔵文化財センター、沖縄市立郷土博物館、平敷兼哉（宜野湾市立博物館）、大城一成（糸満市教育委員会）、上地克哉・仲宗根求（世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム）、菅原広史（浦添市教育委員会）、柳田裕三（佐世保市教育委員会）、川道 寛（西海市立大瀬戸歴史民俗資料館）、山本正昭（沖縄県立博物館・美術館）、赤井文人（北海道教育委員会）、中村雄紀（北見市教育委員会）、藤木 聡（宮崎県埋蔵文化財センター）の皆様にはさまざまにご教示賜りました。また、本稿の内容について査読者より有益なコメントをいただき、内容を改善することができました。上記の皆様は心より御礼申し上げます。

本研究は科学研究費補助金（18K06445）「沖縄島におけるヒト渡来最初期の人類史を探る」（研究代表者：藤田祐樹）による研究成果の一部である。

## 文献

- 安里嗣淳・丑野 毅・小田静夫・新里 康 1996「東京大学総合研究資料館所蔵沖縄発見石斧一覧」『史料編集室紀要』21 沖縄県立図書館
- 安里嗣淳・丑野 毅・小田静夫・新里 康 1997「東京大学総合研究博物館所蔵の沖縄関係考古資料写真一覧」『史料編集室紀要』22 沖縄県立図書館
- 石垣市教育委員会 2020『八重山における発掘調査——113年の歴史』石垣市史考古ビジュアル版第8巻
- 石井龍太・佐宗亜衣子・諏訪 元 2012「東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵 荻堂貝塚出土器・石器標本」『東京大学総合研究博物館 標本資料報告』92
- 井関九郎 1917『現代防長人物史』 発展社
- 糸満市教育委員会 1981『糸満市の遺跡——詳細分布調査報告書——』
- 伊波普猷 1911『古琉球』沖縄公論社（伊波普猷 著・外間守善 校訂 2000『古琉球』岩波書店を参照）
- 上江洲 均 1976「資料紹介 池口権四郎の報告書『久米島事情』」『沖縄県立博物館紀要』2
- 大堀皓平 2014「琉球列島の石器・石器石材」新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集 第1集 琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房
- 沖縄県教育委員会 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚——第1・2・3次発掘調査報告——』
- 沖縄県立博物館・美術館 2021『博物館企画展 海とジュゴンと貝塚人——貝塚が語る9000年の暮らし—— 図録』

- 小畑弘己・盛本 勲・角縁 進 2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources』No.4
- 金関丈夫 1929～1932「琉球の旅」『歴史と地理』24(6)～29(4)（金関丈夫1978『琉球民俗誌』法政大学出版局所収）
- 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文 1964「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告 人文科学篇』(9)
- 川道 寛・片多雅樹 2018「長崎県における黒曜石原産地研究の進展(2)」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 宜野湾市史編集委員会 1985『宜野湾市史 第5巻資料編4』 宜野湾市
- 宜野湾市教育委員会 1996『ぎのわんの西海岸——土地利用・地名・海（イノー）・自然——』口承民俗文化財記録保存調査報告書
- 宜野湾市教育委員会 2005『読んで知る・ぎのわんの綱引き』市内民俗芸能調査報告書
- 国分直一 1981『台湾考古民族誌』考古民俗叢書18 慶友社
- 白木原和美 1978「クガニイシ」『法文論叢』41（松本雅明教授退官記念号） 熊本大学法文学会
- 髙元政秀・新田重清・安里嗣淳・小田静夫 1997a「京都大学文学部博物館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要』22
- 髙元政秀・新田重清・安里嗣淳・小田静夫 1997b「関西大学博物館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要』22
- 谷澤亜里・岩永省三 2021「玉泉館旧蔵考古資料：近年の再整理を経ての資料紹介」『九州大学総合研究博物館研究報告』18, pp.51-63
- 帝国法曹大観編纂会 1915『帝国法曹大観』
- 新田重清 2000「沖縄縄文時代主要遺跡から出土する石器の様相について」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』（上巻）高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 比嘉清和 2010「中の町小学校で発見された黒曜石原石について」『あやみや』18 沖縄市立郷土博物館
- 望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里 1994「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について——沼津市土手遺跡BBV層の原産地推定から——」『静岡県考古学研究』26
- 山崎真治 2022「沖縄先史時代の赤色顔料関連資料（Ⅱ）——北中城村荻堂貝塚・うるま市天願貝塚・地荒原貝塚出土品の再報告とサメ椎骨製耳飾をめぐる問題——」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要』15
- 山崎真治・谷川 遼・樋泉岳二 2024「資料紹介 會津八一記念博物館所蔵の沖縄関係考古・民俗資料について（上）」『會津八一記念博物館 研究紀要』25
- Anderson, A. and Summerhayes, G. (2008) Edge-Ground and Waisted Axes in the Western Pacific Islands: Implications for an Example from the Yaeyama Islands, Southernmost Japan. *Asian Perspectives*. 47(1).

Received Oct. 30, 2024; accepted Dec. 22, 2024

## A material report about Ryukyu relics in the Gyokusen-kan Collection

Shinji YAMASAKI<sup>1)</sup>, Masahiro FUKUNAGA<sup>2)</sup>, Masaki KATATA<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>Okinawa prefectural museum & art museum, Omoromachi 3-1-1, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan

<sup>2)</sup>The Kyushu University Archaeological Research Office, Hakozaki, 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

<sup>3)</sup>Nagasaki Prefecture Archaeology Center, Fukaetsuruki-fure 515-1, Ashibe-cho, Iki, Nagasaki, 811-5322, Japan

We reported the Ryukyu relics in archaeological materials of the Gyokusen-kan Collection now stored at the Kyushu University Museum in this paper. They include stone tools such as stone adzes and Goryeo-style roofing tiles collected at pre-war Ryukyu (Okinawa Prefecture); Okinawa and Yaeyama islands. They are valuable because the collecting dates and places of them are clearly recorded. In addition, our detailed survey identified two obsidian pebbles which were previously unrecognized. These obsidian pebbles have different properties from the obsidian from Koshidake, Imari city, Saga Prefecture, which has been widely reported from Okinawa Prefecture. Their origins and history require further investigations.

**Key words:** Gyokusen-kan, Ryukyu, archaeological material, obsidian

# 九州大学福岡演習林の甲虫類

城戸 克弥

九州大学総合研究博物館 協力研究員：〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1  
coleop6464@yahoo.co.jp

**要旨：**九州大学福岡演習林（通称：粕屋演習林）において2024年3月から10月の期間、甲虫類の調査を行った。地表式FIT（丸山式FIT）によって227種、それ以外の方法で598種が得られた。これらを合わせ重複種106種を差し引き（227+598-106）、当地から719種を記録した。本調査により、福岡県初記録の種や学術的に重要な種も多数発見された。

**キーワード：**昆虫、篠栗町、里山環境、福岡県初記録

報告に先立ち、現地において筆者の自由な調査活動をお許し頂き、さらに様々なご便宜を頂いた福岡演習林の鍛冶清弘氏、中村琢磨氏、荒木利恵氏をはじめ、職員の皆様に厚くお礼申し上げます。

また、久留米昆虫研究会副会長の今坂正一氏、九州大学大学院の橋爪拓斗氏ならびに関 峻大氏には多数の標本の同定を願った上、様々なご指導を頂いた。心よりお礼申し上げます。最後になるが、終始ご指導いただき、様々な手続きを取っていただいた九州大学総合研究博物館の丸山宗利先生に厚くお礼申し上げます。

なお、当演習林への立ち入りや採集は入林許可や小型資料採取許可を得た上でやっている。

## 調査目的

筆者はこれまでに、県内各地で同様の調査を行ってきた。今回、当演習林を選んだのは大都市である福岡市近郊の典型的な里山環境であり、低地に残された貴重な森林と思われる。一方で、当演習林の周りには新たに造成された地に工業団地や宅地が隣接していて、現在も造成は続いているようである。また、森林があっても大部分はスギやヒノキの人工林であり、その上、私有地が多く

簡単に入林ができないのが現状である。また、このような低地からの甲虫類の過去の記録は大変少ない。

このような現状から早急に当演習林内の調査を行い、都市近郊の典型的な里山林の甲虫相を少しでも明らかにすることは有意義なものと考えた。

## 調査地の概要

当演習林は福岡県粕屋郡久山町と篠栗町にあり、数カ所に分散している。全体としては464haで、演習林としては珍しいほど狭い敷地である。

実際に調査を行ったのは9、10、11班区と呼ばれる事務棟付近の限られた地域である。登記上は福岡県糟屋郡篠栗町津羽黒である。以下、この地域の植生などについて記す。

調査範囲は最大で南北約0.6km、東西1.5km程の丘陵地である。最高標高は107mであるが、実際に調査したのは標高50m前後の地である。当演習林（旧糟屋演習林）が設置されたのは1922年（大正11年）であり、100年前のことである。その当初からあった地と思われる自然植生はカシ類、シイ類、クスノキ、タブノキ、ヤマモモ、コナラ、クロキ、ネズミモチなどと思われる。ただ、ヤ

マモモやクスノキなどは巨木でありながら萌芽を形成するものが多く、ほとんどの樹木が一度伐採を受けているものと思われる。一方で、開設以来、移植された標本林、標本木も多く、普段目にしない不思議な光景も見られる。例えば、旧台湾演習林、宮崎演習林、北海道演習林から持ち込まれた樹木区、ユーカリの見本林、タケ類の見本林、ヤクスギの林、アベマキの林、亜熱帯植物区、街路樹区などといった具合である。樹木となるとさらに多く、バクチノキ、モミ、コウヨウザン、ヌマスギ、メタセコイア、ボダイジュ、ヒメシャラ、カントンアブラギリ、ナギノキなどの珍しい樹木も多い。一方で、スギやヒノキの人工林は全く見られなかった。草本類は特に目につくものはなかったが、外来種や園芸種があちらこちらに見られた。

全体としてかなり乾燥が強く、森林内にもよく日が届くような場所が多かった。また、狭いながらも池やピオトープ（だったと思われる）といった水環境もあり、水生や湿地性の甲虫のよい生息環境となっていた。池は広い草原の中にあり、長径50m、短径10m程の埋もれかけたような状態で、水面はスイレンで覆われ、周りはキショウブやイネ科などの植物で囲まれている。ピオトープの方は林の中にあり、長径7m、短径2m程で、水面はスイレンのほかヒメガマなどが茂っている。こちらも埋もれかかっており、周りにはタデ科植物が密生している。

演習林内にはイノシシやシカ、ノウサギがかなり生息しているようで、個体数は多く、昼間でもたびたび見かけた。

## 出現種リスト

今回の調査は、筆者が過去に行った調査との比較のため、「地表式 FIT (丸山式 FIT) で得られた種」と「地表式 FIT (丸山式 FIT) 以外で得られた種」の2つに分けて行い、それぞれの方法や出現種リストについても2つに分けて報告する。

データは採集年の2024年を省き、採集月日、( )内に採集個体数、同定者名を示す。同定者名は筆者が行ったものはこれを省く。また、科名を入れているが、最近の科の範囲の変更は著しく、ここで使用したものも必ずしも最近のものや順序ではない。

福岡県レッドデータブック2014は福岡県RDB2014と略した。

なお、記録に使用した標本の大部分は九州大学総合研究博物館に保管しているが、一部は九州大学福岡演習林に保管している。

## 1 地表式 FIT (丸山式 FIT) で得られた種

### (1) 調査方法

基本的には丸山(2006)が紹介した屋根付きの簡易式地表設置型 FIT (丸山式 FIT) で、衝突面はA3サイズのクリアファイルを開いた面で、縦43cm、横62cmとなる。これに屋根がつくので、縦が若干狭くなる。受け皿トレイ内の保存液は1%酢酸水に逆性石けん液(オスバン)を数滴加えたもので、回収のたびに新しいものと入れ替えた。

FITは10m四方の範囲に設置し、設置数は12基である。

### (2) 調査場所の環境

設置場所は標高60m、比較的平地になった広葉樹の二次林の中で、高木はヤマモモ、コナラなどが多く、低木はクロキ、ネズミモチなどが多い。ヤマモモは萌芽を形成し、高木は7~8m程にもなる。樹幹はおおむね詰まっているが、林内はやや明るい。下草はほとんどない。落葉層は浅く、硬いヤマモモの葉が覆っている。少し高台になっていて、また、樹木も疎らなので、風が良く通り、常に乾燥しているようである。設置場所のすぐ東側は草原に連なり、西側は下り坂となり演習林の外側へと向かっている。

### (3) 設置期間・回収日

2024年3月15日(最初の設置日)、3月29日(回収日、以下同じ)、4月12日、26日、5月10日、24日、6月7日、19日、7月5日、19日、8月2日、16日、9月2日(最後の回収、撤去日)。

### (4) 調査で得られた種のリスト

種のリストは設置期間を省き、回収日のみを示す。

(オサムシ科)

1. *Carabus japonicus japonicus* Motschulsky ヒメオサムシ VII.5(1)

大型のオサムシは、わずかこの1頭が得られたのみ。

2. *Agonum modestior* (Bates) イクビモリヒラタゴミムシ VI.19(1)
3. *Synuchus nitidus* (Motschulsky) オオクロツヤヒラタゴミムシ V.10(1)
5. *Synuchus melantho* (Bates) コクロツヤヒラタゴミムシ V.10(1)
6. *Stenolophus difficilis* (Hope) ミドリマメゴモクムシ III.29(1)
7. *Chlaenius tetragonoderus* Chaudoi ムナビロアトボシアオゴミムシ VI.19(1)
8. *Chlaenius micans* (Fabricius) オオアトボシアオゴミムシ VIII.2(1)
9. *Lebia bifenestrata* Morawitz フタホシアトキリゴミムシ V.10(1)
10. *Dromius quadraticollis* Morawitz イクビホソアトキリゴミムシ IV.26(1) 今坂氏同定
11. *Galerita orientalis* Schmidt-Göbe クビボソゴミムシ V.10(1)
- (ガムシ科)
12. *Peratogonus reversus* Sharp コウセンマルケシガムシ V.10(1)
- (エンマムシ科)
13. *Bacanius niponicus* Lewis アカツブエンマムシ VII.19(6)
14. *Pachylomalus musculus* (Marseul) ハスジチビヒラタエンマムシ VI.19(3)
15. *Paromalus vernalis* Lewis コチビヒラタエンマムシ V.24(1)
16. *Onthophilus flavicornis* Lewis キノコセスジエンマムシ IV.12(10)
- 3月から5月頃のみ, 地表設置型FITでよく得られる.
17. *Margarinotus niponicus* (Lewis) コエンマムシ IV.12(1)
- (タマキノコムシ科)
18. *Leiodes koreana* Park et Ahn チョウセンオオタマキノコムシ IV.12(4)
19. *Anisotoma didymata* (Portevin) オビスジタマキノコムシ V.10(1), VI.7(1)
- (コケムシ科)
20. *Euconnus fustiger* (Sharp) シリプトヒメコケムシ V.24(1) 橋爪氏同定.

(シデムシ科)

21. *Nicrophorus concolor* Kraatz クロシデムシ V.10(1)
22. *Nicrophorus quadripunctatus* Kraatz ヨツボシモンシデムシ IV.12(1)
23. *Ptomascopus morio* Kraatz コクロシデムシ V.10(1)
24. *Calosilpha brunneicollis* (Kraatz) ベッコウヒラタシデムシ V.24(1)

この4種のシデムシは各地の調査で普通に見られる種だが, 当地での個体数は極端に少なかった.

(デオキノコムシ科)

25. *Episcaphium semirufum* Lewis アカバデオキノコムシ V.24(1)
26. *Scaphidium japonum* Reitter ヤマトデオキノコムシ III.29(1)
27. *Cyparium mikado* Achard カメノコデオキノコムシ VI.7(7)

(ハネカクシ科)

この科の種は, すべて橋爪氏同定.

28. *Micropeplus fulvus japonicus* Sharp セスジチビハネカクシ IV.12(3)
29. *Megarthus japonicus* Sharp ハバビロハネカクシ III.29(1)
30. *Megarthus convexus* Sharp セマルハバビロハネカクシ III.29(1)
31. *Megarthus parallelus* Sharp ムツトゲハバビロハネカクシ III.29(3), IV.12(2), IV.26(9), V.10(6), V.24(2)
32. *Boreaphilus japonicus* Sharp ムネボソヨツメハネカクシ IV.12(1)
33. *Clavilispinus exiguus* (Erichson) ミナミウスイロツツハネカクシ VI.7(1)
34. *Paederus fuscipes* (Curtis) アオバアリガタハネカクシ IV.12(2)
35. *Homaeotarsus kurosai* Itô ツマアカカワベナガエハネカクシ VII.5(1)
36. *Megalimus suffuses* (Sharp) キバネナガハネカクシ VI.19(1)
37. *Hypnogyra tubula* (Sharp) アカバネツツガタナガハネカクシ III.29(7), IV.12(31), IV.26(4)
38. *Liotessa punctiventris* (Sharp) アカバツヤクビナガハネカクシ IV.12(2), IV.26(1)
39. *Bisnius germanus* (Sharp) チャイロニセコガシラハ

- ネカクシ V.24 (3), VI.7 (1)
40. *Philonthus tardus* Kraatz ヘリアカバコガシラハネカクシ IV.26(1), V.24(4), VI.7(3), VI.19(1), VIII.2(2)
41. *Hesperus tiro* (Sharp) ツマグロムネスジハネカクシ V.24(1)
42. *Platydracus brevicornis* (Motschulsky) アカバトガリオオズハネカクシ (アカバハネカクシ) IV.12(1), IV.26(2), V.10(1), VIII.16(1)
43. *Ontholestes gracilis* (Sharp) サビハネカクシ VI.7 (1), VI.19(2), 1(F6), VII.5(2), VII.19(1), VIII.2(1)
44. *Tympanophorus sauteri* Bernhauer カクツヤケシアバタハネカクシ VI.7(3), VI.19(5), VII.5(5), VII.19(2), VIII.2(2)
45. *Lordithon japonicus* (Sharp) ニホンキノコハネカクシ IV.12(3)
46. *Sepedophilus germanus* (Sharp) ムクゲヒメキノコハネカクシ III.29(1) IV.12(1)
47. *Hoplandria spiniventris* Bernhauer ハサミニセヒゲブトハネカクシ IV.12(1)
48. *Saphocallus parviceps* Sharp カクバラハネカクシ IV.12(2) かなり珍しい種である。(丸山氏私信)
49. *Aleochara curtula* (Goeze) ナカアカヒゲブトハネカクシ V.24(2)
50. *Homoeusa prolongata* Sawada ヒラタアリヤドリ V.10(2)
- (クワガタムシ科)
51. *Dorcus rectus rectus* (Motschulsky) コクワガタ VI.19(1)
- (コブスジコガネ科)
52. *Trox opacotuberculatus* Motschulsky ヒメコブスジコガネ III.29(5) 多い.
- (センチコガネ科)
53. *Phelotrupes laevistriatus* (Motschulsky) センチコガネ III.29(1) 多い.
- (アカマダラセンチコガネ科)
54. *Notochodaenus maculatus* (Waterhouse) アカマダラセンチコガネ IV.12(4) 多い.
- (コガネムシ科)
55. *Saprosites japonicus* Waterhouse クロツツマグソコガネ V.24(1)
56. *Aphodius mizo* Nakane ミゾムネマグソコガネ III.29(6) この時期にだけ見られる.
57. *Liatongus phanaeoides* (Westwood) ツノコガネ VII.5(2) 得られたのはこの2頭だけで、当地では個体数は少ないものと思われる。福岡県 RDB2014では絶滅危惧II類に指定されている。福岡県内では近年のシカやイノシシの分布拡大により急激に生息地が広がり、個体数も増している。現在、福岡県 RDB2014の改訂作業を行っているが本種については指定解除を検討している.
58. *Onthophagus lenzii* Harold カドマルエンマコガネ VIII.2(1)
59. *Onthophagus nitidus* Waterhouse ツヤエンマコガネ VI.7(1), VIII.2(2)
60. *Onthophagus atripennis* Waterhouse コブマルエンマコガネ VI.7(1), VII.5(1) 非常に多い.
61. *Onthophagus fodiens* Waterhouse フトカドエンマコガネ III.29(2) 多い.
62. *Paratrichius septemdecimguttatus* (Snellen van Vollenhoven) ジュウシチホシハナムグリ V.10(5), V.24(1) 前者の1頭と後者の1頭は背面が赤地で、他の個体は黒.
63. *Parastasia ferrieri* Nonfried ヨツバコガネ VIII.2(2), VIII.16(1)
64. *Anomala albopilosa albopilosa* Hope アオドウガネ VIII.16(1)
65. *Heptophylla picea picea* Motschulsky ナガチャコガネ VI.19(1)
66. *Gametis jucunda* (Faldermann) コアオハナムグリ V.24(1)
67. *Glycyphana gracilis viridis* Sawada ホソコハナムグリ V.24(1)
68. *Nipponovalgus angusticollis angusticollis* (Waterhouse) ヒラタハナムグリ IV.12(1)
69. *Adoretus tenuimaculatus* Waterhouse コイチャコガネ V.10(1)
70. *Pseudotorynorhina japonica* (Hope) カナブン VII.19(1)
71. *Nipponoserica pubiventris* Nomura ハラゲビロウドコガネ V.10(1)
72. *Maladera japonica* (Motschulsky) ビロウドコガネ VIII.16(1)

(マルハナノミダマシ科)

73. *Eucinetus haemorrhoidalis* (Germar) ツマアカマルハ  
ナノミダマシ VII.19(2), VIII.2(1)

(マルトゲムシ科)

74. *Simplocaria hispidula* Fairmaire シラフチビマルトゲ  
ムシ IV.12(1)

(ナガハナノミ科)

75. *Ptilodactyla chujoi* Nakane コヒゲナガハナノミ  
VII.19(1)

(タマムシ科)

76. *Agrilus viridiobscurus* E.Saunders アオグロナガタマ  
ムシ V.24(10)

77. *Habroloma subbicornis* (Motschulsky) ヒラタチビタ  
マムシ V.24(1)

78. *Endelus collaris collaris* (E. Saunders) キンイロエグ  
リタマムシ V.10(1), V.24(4)

(コメツキムシ科)

79. *Agrypnus binodulus binodulus* (Motschulsky) サビキ  
コリ V.10(1)

80. *Adelocera difficilis* (Lewis) シロオビチビサビキコリ  
IV.12(1)

81. *Adelocera ichihashii* (Ohira) イチハシチビサビキコ  
リ IV.26(2), IV.26(2) 本州の山地には近似種を産  
するというが、ここでは一応、イチハシチビサビキ  
コリとして記録しておく。

82. *Cryptalaus berus* (Candèze) ウバタマコメツキ  
V.24(1)

83. *Limoniciscus vittatus* (Candèze) タテスジカネコメツキ  
IV.12(1), V.24(1)

84. *Paraphotistus notabilis notabilis* (Candèze) オオヒラ  
タコメツキ V.24(1)

85. *Ampedus carbunculus* (Lewis) ヒメクロコメツキ  
IV.12(1)

86. *Ampedus hypogastricus hypogastricus* (Candèze) アカ  
ハラクロコメツキ IV.12(1)

87. *Procræus helvolus* (Candèze) ヒメホソキコメツキ  
VII.5(2) 今坂氏同定

88. *Podeonius aquilis aquilis* (Candèze) クリイロアシブ  
トコメツキ VII.19(1)

89. *Dolerosomus gracilis* (Candèze) キバネホソコメツキ  
IV.12(1)

90. *Mulsanteus junior junior* (Candèze) ヒゲナガコメツ  
キ IV.26(1)

91. *Mulsanteus linteatus* (Candèze) コヒゲナガコメツキ  
VII.19(6) 通常の採集ではなかなか得難い種だが、  
これ以外にも多数の個体が入っていた。平地～低山  
に設置した地表式 FIT で得られることが多い。

92. *Nipponoelater sieboldi sieboldi* (Candèze) オオナガコ  
メツキ VII.19(1) 多い。

93. *Platynychus adjutor adjutor* (Candèze) アカアシハナ  
コメツキ VI.7(1), VI.19(1)

94. *Melanotus legatus legatus* Candèze クシコメツキ  
V.10(1)

95. *Melanotus spernendus spernendus* Candèze ナガチャ  
クシコメツキ IV.26(2)

(ヒゲブトコメツキ科)

96. *Trixagus micado* Reitter ミカドヒゲブトコメツキ  
IV.12(1)

(コメツキダマシ科)

97. *Microrhagus mystagogus* (Fleutiaux) コガタフチトリ  
コメツキダマシ VI.7(1)

98. *Fornax nipponicus* Fleutiaux コチャイロコメツキダ  
マシ VII.5(1), VII.19(1)

99. *Fornax victor* Fleutiaux オオチャイロコメツキダマ  
シ VI.19(1)

100. *Bioxylyx natsumiae* A. Watanabe ネアカヒメフトコメ  
ツキダマシ VII.5(1)

この科には未同定のもの多数ある。

(ベニボタル科)

101. *Lycostomus modestus* (Kiesenwetter) ベニボタル  
V.24(1)

(ホタル科)

102. *Cyphonocerus ruficollis* Kiesenwetter ムネクリイロボ  
タル V.10(1)

103. *Lucidina biplagiata* (Motschulsky) オバボタル IV.26  
(1)

104. *Drilaster axillaris* Kiesenwetter カタモンミナミボタル  
VI.7(6)

本種は最近の分類体系では、ジョウカイボン科に  
移されている。この日だけに多数の個体が入ってい  
た。

(ジョウカイボン科)

105. *Habronychus providus* (Kiesenwetter) クロヒゲナガ  
ジョウカイ V.10(1)
106. *Lycocerus vitellinus* (Kiesenwetter) セボシジョウカイ  
V.24(1)
107. *Prothemus ciusianus* (Kiesenwetter) マルムネジョウ  
カイ V.10(1)
108. *Asiopodabrus hayato* (Nakane) ハヤトクビボソジョ  
ウカイ IV.26(3) 今坂氏同定
109. *Lycocerus suturellus luteipennis* (Kiesenwetter) ジョ  
ウカイボン西日本亜種 VI.7(1)
110. *Lycocerus japonicus* (Kiesenwetter) ヒメジョウカイ  
IV.26(1) 今坂氏同定

(カツオブシムシ科)

111. *Thaumaglossa rufocapillata* Redtenbacher カマキリタ  
マゴカツオブシムシ VI.7(1)

(ヒョウホンムシ科)

112. *Ptinus senilis senilis* Kiesenwetter ケジロヒョウホン  
ムシ VI.7(2)

(シバンムシ科)

113. *Indanobium kyushuense* (Nakane) ツツガタホソシバ  
ンムシ VII.5(2)
114. *Nesocoelopus miyatakei* Sakai ホソアシシバンムシ  
VIII.16(1)
115. *Byrrhodes nipponicus* Sakai クリイロタマキノコシバ  
ンムシ V.10(1), VI.19(1)

116. *Caenocara rufitarse* (Reitter) ヒメホコリタケシバン  
ムシ VI.19(1)

(コクヌスト科)

117. *Ancyrona haroldi* Reitter ハロルドヒメコクヌスト  
IV.12(1)

(ジョウカイモドキ科)

118. *Intybia histrio* (Kiesenwetter) ヒロオビジョウカイモ  
ドキ IX.2(1)
119. *Kuatunia oblongulus oblongulus* (Kiesenwetter) クギ  
ヌキヒメジョウカイモドキ IV.12(1)

(ムクゲキスイ科)

120. *Biphyllus lewisi* (Reitter) アカグロムクゲキスイ  
III.29(1)
121. *Biphyllus rufopictus* (Wollaston) ハスモンムクゲキス  
イ V.10(1)

(オオキノコムシ科)

122. *Cryptophilus hiranoi* Sasaji アカスジナガムクゲキス  
イ IV.12(1)
123. *Aulacochilus sibiricus bedeli* Harold ルリオオキノコ  
ムシ VII.19(1)
124. *Satelia scitula* Lewis ツヤヒメオオキノコムシ V.24  
(1)
125. *Spondotriplax flavofasciata* Chûjô キオビチビオオキノ  
コムシ VI.19(1), VII.5(1), VII.19(3), VIII.2(2),  
IX.2(1) 極めて稀な種で、福岡県からは2007年に東  
峰村浅間山で1頭採集されて以来の記録である(城  
戸, 2007).

126. *Neotriplax lewisii* (Crotch) アカハバビロオオキノコ  
ムシ IV.12(1)

127. *Triplax canalicollis* Lewis キアシチビオオキノコム  
シ VI.7(1)

128. *Triplax sibirica connectens* (Lewis) シベリアチビオ  
オキノコムシ V.24(1)

129. *Pseudotritoma laetabilis* (Lewis) セグロチビオオキ  
ノコムシ IV.12(2)

130. *Tritoma tripartaria* (Lewis) カタバニチビオオキノ  
コムシ VI.7(1)

131. *Tritoma nipponensis* (Lewis) クロチビオオキノコムシ  
IV.12(1)

132. *Tritoma maculifrons* (Lewis) ミツボシチビオオキノ  
コムシ VII.5(1)

133. *Tritoma nigropunctata* (Lewis) ツマグロチビオオキ  
ノコムシムシ IV.12(2)

稀な種であるが地表式 FIT ではよく得られる。

134. *Dacne kidoi* Nakane カクモンホソオオキノコムシ  
IV.12(8), IV.26(1), V.10 (3), VI.7 (1), VII.5 (1)  
クロキの枯れ木によく見られる種。この FIT を設置  
した付近にもクロキの枯れ木が多数見られた。

(ネスイムシ科)

235. *Rhizophagoides* sp. ニセケブカネスイの近似種  
IV.12(5)

(キスイムシ科)

136. *Cryptophagus decoratus* Grouvelle クロモンキスイ  
IV.12(3)

137. *Atomaria lewisi* Reitter キイロセマルキスイ V.24(1)

- (ヒメハナムシ科)
138. *Olibrus consanguineus* Flach トビイロヒメハナムシ III.29(1)
- (チビヒラタムシ科)
139. *Placonotus fenestratus* (Reitter) キイロチビヒラタムシ V.10(1)
- (ケシキスイ科)
140. *Eपुरaea paulula* Reitter マメヒラタケシキスイ IV.12(1)
141. *Stelidota multiguttata* Reitter マルキマダラケシキスイ IV.12(1)
142. *Ipidia variolosa* Reitter クロヒラタケシキスイ IV.12(1), VI.7(1)
143. *Phenolia picta* (MacLeay) アカマダラケシキスイ V.24(1)
144. *Pocadites dilatimanus* (Reitter) ウスオビカクケシキスイ IV.12(1)
145. *Pocadites japonus* (Reitter) マルガタカクケシキスイ V.10(1)
146. *Neopallodes inermis* Reitter ネアカマルケシキスイ IV.12(2)
- (カクホソカタムシ科)
147. *Thyroderus porcatus* Sharp アナムネカクホソカタムシ VI.19(1)
- (ミジンムシダマシ科)
148. *Aphanocephalus hemisphericus* Wollaston クロミジンムシダマシ V.10(1), VI.19(1)
- (テントウダマシ科)
149. *Ectomychus musculus* (Gorham) クロモンケブカテントウダマシ IV.12(1)
150. *Mycetina amabilis* Gorham キボシテントウダマシ IV.12(1), V.24(1)
151. *Mycetina ancoriger* Gorham イカリモンテントウダマシ V.10(1)
- (テントウムシ科)
152. *Scymnus rectus* (Ohta) オオタツマアカヒメテントウ VII.19(1) 関氏同定
153. *Scymnus posticalis* Sicard コクロヒメテントウ VI.7(1)
154. *Amida tricolor* (Harold) アミダテントウ VIII.2(1), VIII.16(1)
155. *Telsimia nigra* (Weise) クロテントウ V.24(1), VI.7(1) 共に関氏同定
156. *Cryptogonus orbiculus* (Gyllenhal) フタモンクロテントウ III.29(1)
- (ミジンムシ科)
157. *Parmulus politus* (Matthews) ベニモンツヤミジンムシ V.10(1)
- (ツツキノコムシ科)
158. *Nipponocis longisetosus* Nobuchi ケナガナガツツキノコムシ IV.12(1)
- (キノコムシダマシ科)
159. *Synstrophus macrophthalmus* (Reitter) カツオガタナガクチキ VI.7(1)
160. *Holostrophus orientalis* Lewis アヤモンヒメナガクチキムシ VI.7(1)
- (ナガクチキムシ科)
161. *Microtonus dimidiatus* (Marseul) フタモンヒメナガクチキムシ IV.12(1)
- (ハナノミ科)
161. *Glipa shirozui* Nakane オオオビハナノミ VII.19(1) 低山で見られるが, 稀.
- (アトコブゴミムシダマシ科)
162. *Microprius opacus* (Sharp) ツヤケシヒメホソカタムシ V.24(1), VI.19(1) 乾燥に強い種と思われ, 都市部の公園などでも見られる.
163. *Synchita tokaraensis* (Nakane) クロヒメヒラタホソカタムシ V.24(1), VI.19(1), VII.19(2), VIII.2(1)
- (ゴミムシダマシ科)
164. *Uloma marseuli marseuli* Nakane エグリゴミムシダマシ VII.19(1)
165. *Plesiophthalmus nigrocyaneus* Motschulsky キマワリ VII.19(1)
166. *Upinella fuliginosa* (Maklin) オオクチキムシ VII.5(1)
167. *Upinella melanaria* (Maklin) クチキムシ V.24(1)
168. *Borboresthes cruralis* (Marseul) トビイロクチキムシ VII.19(1)
169. *Allecula tenuis* Marseul ホンドホソアカクチキムシ VII.5(1)
170. *Hymenalia rufipennis* (Marseul) アカツヤバネクチキムシ V.10(1)

171. *Isomira oculata* (Marseul) フナガタクチキムシ VI.19(1)
172. *Cteniopinus hypocrita* (Marseul) キイロクチキムシ VI.19(1)
173. *Platydemia subfascia subfascia* (Walker) ベニモンキノコゴミムシダマシ VIII.16(1)
174. *Platydemia higonium* Lewis ヒゴキノコゴミムシダマシ VII.19(2)  
(カミキリモドキ科)
175. *Nacerdes caudata* (Kôno) シリナガカミキリモドキ VI.7(1)  
雄個体. 稀な種と思われ, 県内から英彦山, 鷹巢山, 石割岳, 釈迦岳の記録がある. 山地性の種と思われるが, このような平地に近いところで採れたのには驚いた. 第5腹板は長く, 後縁中央が三角形に深くえぐれ, 生殖節の両葉は細長いなどの特徴がある.
176. *Dryopomera yatoi yatoi* (Nakane) ホソカミキリモドキ IV.26(1)
177. *Oedemera lucidicollis lucidicollis* (Motschulsky) モモブトカミキリモドキ V.24(1)  
(チビキカワムシ科)
178. *Lissodema myrmido* Marseul ドウチビキカワムシ III.29(1), IV.12(1), IV.26(1)  
(アリモドキ科)
179. *Anthicomorphus cruralis* Lewis モモキアリモドキ V.10(1), VII.19(1)
180. *Anthicomorphus niponicus niponicus* Lewis クロチビアリモドキ V.24(1), VII.19(1)
181. *Clavicollis fugiens* (Marseul) アカホソアリモドキ III.29(1), IV.12(1)  
(ニセクビボソムシ科)
182. *Phytobaenus amabilis scapularis* (Marseul) マダラニセクビボソムシ V.24(1)  
(カミキリムシ科)
183. *Lemula decipiens* Bates キバネニセハムシハナカミキリ IV.26(1)
184. *Pyrrhona laeticolor laeticolor* Bates ヘリウスハナカミキリ IV.26(1)
185. *Leptura ochraceofasciata ochrotela* Bates ヨツスジハナカミキリ四国九州亜種 VI.19(1)
186. *Chlorophorus quinquefasciatus* (Laporte & Gory) ヨツスジトラカミキリ VIII.2(1)
187. *Rhaphuma diminuta diminuta* (Bates) ヒメクロトラカミキリ IV.12(1), VI.7(1)
188. *Acalolepta sejuncta sejuncta* (Bates) ニセビロウドカミキリ VII.19(1)
189. *Rhopaloscelis unifasciatus* Blessig ヒトオビアラゲカミキリ V.24(1)
190. *Arhopaloscelis nipponensis* (Pic) フタオビアラゲカミキリ V.24(1)  
(ハムシ科)
191. *Temnaspis japonica* Baly カタビロハムシ IV.12(1)  
ネズミモチに見られる種.
192. *Adiscus lewisii* (Baly) タマツツハムシ VI.19(1)
193. *Chlamisus spilotus* (Baly) ムシクソハムシ III.29(1)
194. *Oomorphoides nigrocaeruleus* (Baly) アオグロツヤハムシ IV.12(1)
195. *Hyperaxis fasciata* (Baly) クロオビカサハラハムシ IV.26(1)
196. *Demotina fasciculata* Baly マダラアラゲサルハムシ IV.26(1)
197. *Demotina bipunctata* Jacoby フタモンアラゲサルハムシ IV.26(1)
198. *Aulacophora nigripennis* Motschulsky クロウリハムシ IV.12(1)
199. *Taphinellina flaviventris* (Motschulsky) キバラヒメハムシ VI.19(1), VII.5(1)
200. *Aphthona perminuta* Baly ツブノミハムシ III.29(1), IV.12(1)
201. *Luperomorpha pryeri* (Baly) クビアカトビハムシ VII.19(1)
202. *Longitarsus bimaculatus* (Baly) クロボシトビハムシ IV.12(1), V.10(1), V.24(1), VIII.2(1)
203. *Hemipyxis flavipennis* (Baly) キバネマルノミハムシ IV.26(1)
204. *Argopus punctipennis punctipennis* (Motschulsky) アカイロマルノミハムシ VI.19(1)
205. *Borowiecius ademptus* (Sharp) チャバラマメゾウムシ IX.2(1)

(ヒゲナガゾウムシ科)

206. *Ozotomerus japonicus japonicus* Sharp ウスモンツツ  
ヒゲナガゾウムシ VIII.16(1)207. *Tropideres roelofsi* (Lewis) クロフヒゲナガゾウムシ  
V.10(1)208. *Aphaulimia debilis* (Sharp) キスジヒゲナガゾウムシ  
VI.7(2)209. *Habrissus unciferoides* (Nakane) ネプトヒゲナガゾ  
ウムシ V.24(1)

(ゾウムシ科)

210. *Myosides seriehispidus* Roelofs チビヒョウタンゾウ  
ムシ III.29(1), V.24(2)211. *Trachyphloeosoma advena* Zimmerman ホソゲチビツ  
チゾウムシ IV.12(1)212. *Trachyphloeosoma roelof* Sharp フトゲチビツチゾウ  
ムシ VII.5(2)213. *Anthonomus minor* Kojima & Morimoto チビハナゾウ  
ムシ IV.26(1)214. *Endaeus flavidus* Kojima & Morimoto キイロアシブ  
トゾウムシ VI.19(1)215. *Omobaris parvula* Kojima & Yoshihara サビカタビロ  
ヒメゾウムシ VI.19(1) 稀な種だが、地表式 FIT  
で得られる。216. *Sinauleutes bigibbosus* (Hustache) ジュウジコブサル  
ゾウムシ V.10(3), V.24(2)217. *Simulatacalles simulator* (Roelofs) ヒサゴクチカクシ  
ゾウムシ VII.5(1)218. *Ectatorhinus adamsii* Pascoe マダラアシゾウムシ  
VIII.2(1)219. *Catabonops monachus* Roelofs ボウサンクチカクシ  
ゾウムシ VII.5(1)220. *Rhadinopus sulcastriatus* (Roelofs) アラハダクチカ  
クシゾウムシ IV.26(2)221. *Caenocryptorrhynchus frontalis* Morimoto アタマクチ  
カクシゾウムシ VII.5(1)222. *Phloeophagosoma curvirostre* Wollaston ワシバナヒ  
メクイゾウムシ IV.12(6), VII.19(1)223. *Macrorhyncholus crassiusculus* Wollaston マツオオキ  
クイゾウムシ VI.19(2)

(オサゾウムシ科)

224. *Dryophthorus sculpturatus* (Wollaston) キクイサビゾ

ウムシ VIII.2(1)

225. *Dryophthoroides sulcatus* Roelofs ニセクイサビゾ  
ウムシ VI.7(1)

(ナガキクイムシ科)

226. *Platypus quercivorus* (Murayama) カシノナガキクイ  
ムシ V.24(1)

(キクイムシ科)

227. *Acanthotomicus spinosus* Blandford シラカシノキク  
イムシ VI.19(1)

## 2 地表式 FIT(丸山式 FIT)以外で得られた種

### (1) 調査方法

主にビーティングによるもので、その他に次のよう  
な方法もとった。

#### ① 吊り下げ式 FIT

衝突面はほぼ A 3 版サイズ(縦型)で、丸山式 FIT  
を設置した雑木林(標高60m)付近やその林縁に計10  
基設置した。3月15日から8月16日までの期間、連続  
して設置した。

#### ② LED ライトトラップ

雑木林の林縁、ナラ枯れのため伐採されたコナラが  
ある場所、草原、池周辺などに計10~12基を6月から  
9月の新月(月始め)を挟んで設置した。ライトは紫  
外線 LED4個を使用した乾電池式。吊り下げ式 FIT の  
形をとったが、衝突板は FIT の機能を避けるため狭い  
もの(20cm 四方)にした。

#### ③ バナナトラップ

2ℓ ペットボトルにバナナを入れたトラップで、7  
月末から8月初旬に4基設置した。

#### ④ 落葉篩い 9月と10月に計3回、落葉を篩った。

#### ⑤ U字溝

演習林内の各地に U 字溝が設置されている。これら  
の U 字溝は地表性の甲虫が多数徘徊しており、一種の  
ピットホール(落とし穴)トラップの役目を果たして  
いる。特に、池付近の草原には幅45cmの大型の U 字溝  
が150m程にわたって設置されて、多種の甲虫が見ら  
れた。

### (2) 調査で得られた種のリスト。

採集方法について、ビーティングやルッキングなど

によるものはこれを省いた。トラップ類による採集については、個体数の後に次のように略記した。

- ① 吊り下げ式 FIT…FIT, ② LED ライトトラップ…LT, ③ バナナトラップ…BT

先に「地表式 FIT (丸山式 FIT) で得られた種」を示したが、ここでは「地表式 FIT (丸山式 FIT) で得られた種」と重複する種はあえて採集しないように努めた。従って特に重要な種や地表式 FIT で採集されるより前に採集した種を除きこのリストには掲載していない。和名の後に※を付した種は「地表式 FIT (丸山式 FIT) で得られた種」で記録した種と重複する種である。

(ナガヒラタムシ科)

1. *Tenomerga mucida* (Chevrolat) ナガヒラタムシ VII.2-5(1-LT), VIII.2-5(1-LT)

(ハンミョウ科)

2. *Myriochila speculifera speculifera* (Chevrolat) コハンミョウ VIII.5-9(1-LT)

ハンミョウ科で得られたのは、この1種1頭のみ。

(ヒゲブトオサムシ科)

3. *Eustra japonica* Bates エグリゴミムシ IX.5(1-落葉中), IX.24(3-落葉中)

(オサムシ科)

4. *Scarites terricola pacificus* Bates ナガヒョウタンゴミムシ VIII.16(1-U字溝)

次種が見られたU字溝から1頭だけ採集できた。普通種で、県内各地の河川敷や荒地から記録されている。中脛節外縁に1本の棘がある。

5. *Scarites acutidens* Chaudoir ホソヒョウタンゴミムシ V.24(1-U字溝), VI.7(3-U字溝), VI.19(1-U字溝), VIII.9(1-U字溝)

池の近くの草原中のU字溝に多数見られた。福岡県初記録。前種とは前胸の形ではほとんど区別ができない。中根(1953)が示すように中脛節外縁に2本の棘があることと、後角付近に顆粒があることで確実に区別できる。

6. *Clivina schillhammeri* Balkenoh ツヤヒメヒョウタンゴミムシ V.29(2-U字溝), VI.3(4-U字溝), VI.11(2-U字溝), VII.2-5(1-LT), VII.5-9(2-LT), VII.29-VIII.2(14-LT), VIII.2-5(7-LT), VIII.5-9(1-LT)

前種がいたU字溝に多数見られ、付近に設置した

ライトトラップにも多数飛来した。

7. *Clivina lewisi* Andrewes クロヒメヒョウタンゴミムシ VII.29-VIII.2(2-LT)

8. *Clivina vulgivaga* Boheman コヒメヒョウタンゴミムシ IX.5-9(1-LT)

前種と共にライトトラップに飛来したが、両種ともここに記録した個体のみ。

9. *Perileptus japonicus* Bates ホソチビゴミムシ VII.5-9(2-LT) 今坂氏同定 平地性の種。

10. *Tachyura fumicata* (Motschulsky) クリイロコミズギワゴミムシ VII.2-5(3-LT), VII.5-9(6-LT), VII.29-VIII.2(3) 今坂氏同定 県内各地の記録がある。

11. *Tachyura laetifica* (Bates) ヨツモンコミズギワゴミムシ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(5-LT)

12. *Bembidion niloticum batesi* Putzeys アトモンミズギワゴミムシ VII.5-9(6-LT)

13. *Archipatrobis flavipes flavipes* Motschulsky キアシヌレチゴミムシ VIII.5(1-U字溝)

14. *Lesticus magnus* (Motschulsky) オオゴミムシ V.24(1-U字溝)

15. *Trigonotoma lewisii* Bates ルイスオオゴミムシ VII.22(1-U字溝)

16. *Poecilus versicolor* (Sturm) キンナガゴミムシ VIII.21(1), IX.2(1-U字溝)

17. *Pterostichus procephalus* Bates ナガサキヒメナガゴミムシ V.24(1) 今坂氏同定

18. *Platynus magnus* (Bates) オオヒラタゴミムシ V.16(1)

19. *Anchomenus leucopus* (Bates) タンゴヒラタゴミムシ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(1-LT), IX.2-5(2-LT), IX.5-9(1-LT)

20. *Agonum ogurae* (Bates) オグラヒラタゴミムシ VII.5-9(1-LT)

21. *Metacolpodes buchannani* (Hope) オオアオモリヒラタゴミムシ III.29(1), VI.3-7(1-LT), VII.5-9(1-LT)

22. *Agonum japonicum japonicum* (Motschulsky) ハラアカモリヒラタゴミムシ III.29(1), VII.5-9(1-LT), IX.5-9(1-LT), IX.5-9(2-LT)

23. *Dolichus halensis* (Schaller) セアカヒラタゴミムシ V.24(1-U字溝), VI.11(1-U字溝)

24. *Synuchus arcuaticollis* (Motschulsky) マルガタツヤ

- ヒラタゴミムシ VIII.5(2-U字溝), IX.24(1-落葉中)
25. *Amara simplicidens* Morawitz コマルガタゴミムシ VIII.5(2-U字溝) 今坂氏同定
26. *Amara congrua* Morawitz ニセマルガタゴミムシ V.2(1)
27. *Harpalomimetes fukiensis* (Jedlička) タナカツヤハネゴミムシ VII.5-9(1-LT) 今坂氏同定
28. *Harpalus capito* Morawitz オオゴモクムシ VI.11(1-U字溝)
29. *Harpalus griseus* (Panzer) ケウスゴモクムシ IX.5-9(1-LT)
30. *Harpalus eous* Tschitschérine オオズケゴモクムシ VI.7(1-U字溝), VIII.5(1-U字溝), X.2-5(1-LT)
31. *Harpalus pastor sinicus* Hope ウスアカクロゴモクムシ VI.3-7(1-LT), VII.9(1-U字溝) 共に今坂氏同定, V.24(1-U字溝)
32. *Harpalus tinctulus tinctulus* Bates アカアシマルガタゴモクムシ V.2(1), V.29(1-U字溝) 共に今坂氏同定, X.25(1-U字溝)
33. *Platymetopus flavilabris* (Fabricius) カラカネゴモクムシ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(1-LT), VIII.5-9(1-LT) 乾燥した荒れ地に見られる種.
34. *Trichotichnus noctuabundus* Habu ヒコサンツヤゴモクムシ VII.5-9(1-LT), IX.5-9(1-LT) 今坂氏同定
35. *Acupalpus inornatus* Bates キイロチビゴモクムシ VII.2-5(3-LT), VII.5-9(2-LT), VIII.2-5(1-LT)
36. *Stenolophus fulvicornis* Bates マメゴモクムシ VI.3-7(1-LT)
37. *Stenolophus difficilis* (Hope) ミドリマメゴモクムシ ※ VI.3-7(1-LT)
38. *Loxoncus circumcinctus* (Motschulsky) キベリゴモクムシ VII.2-5(1-LT), IX.5-9(2-LT) 今坂氏同定
39. *Diplocheila zeelandica* (Redtenbacher) オオスナハラゴミムシ VIII.9(1-U字溝)
40. *Dischissus japonicus* Andrewes ニッポンヨツボシゴミムシ VI.7(1-U字溝)
41. *Chlaenius nigricans* Wiedemann オオキベリアオゴミムシ VII.2-5(1-LT)
42. *Chlaenius virgulifer* Chaudoir アトワアオゴミムシ VI.7(1-U字溝), VIII.16(1-U字溝)
43. *Chlaenius micans* (Fabricius) オオアトボシアオゴミムシ※ VI.11(2-U字溝)
44. *Chlaenius tetragonoderus* Chaudoi ムナビロアトボシアオゴミムシ※ VIII.2-5(1-LT)
45. *Chlaenius hamifer* Chaudoir コアトワアオゴミムシ VII.29-VIII.2(1-LT), IX.2-5(1-LT), IX.5-9(1-LT) つい最近, 久留米市北野町の筑後川から福岡県初記録として報告されている。(今坂・有馬・國分・斉藤, 2024)
46. *Oodes vicarious* Bates オオトックリゴミムシ VIII.2-5(1-LT) 珍しい種で, 近くでは篠栗町高田の記録がある.
47. *Perigona nigriceps* (Dejean) クロズホナシゴミムシ IV.26-V.10(FIT-1), VIII.2-5(1-LT), IX.24(3-落葉中)
48. *Archicolluris bimaculata nipponica* Habu フタモンクビナガゴミムシ VII.29-VIII.2(1-LT)
49. *Pentagonica subcordicollis* Bates クロツブゴミムシ VII.5-9(1-LT)
50. *Aephnidius adelioides* (MacLeay) トゲアトキリゴミムシ IX.2-5(1-LT) 平地性の種で, 熱帯域に広く分布する. 福岡県から行橋市沓尾海岸(高倉, 1974)の記録がある.
51. *Coptodera japonica* Bates コキノコゴミムシ VII.29-VIII.2(1-LT), IX.2-5(1-LT)
52. *Coptodera osakana* (Nakane, Ohkura & S.Uéno) ヒメキノコゴミムシ VII.5-9(1-LT), VII.29-VIII.2(1-LT)
53. *Coptodera subapicalis* Putzeys ハギキノコゴミムシ VIII.2-5(2-LT)
54. *Lioptera erotyloides* Bates キノコゴミムシ VII.5-9(1-LT) 稀な種で, 福岡県からうきは市浮羽町新川(城戸, 2023)の記録がある.
55. *Dolichoctis striatus striatus* Schmidt-Göbel コヨツボシアトキリゴミムシ VI.19(1), VIII.2-5(2-LT)
56. *Anomotarus stigmula* (Chaudoir) キボシアトキリゴミムシ IX.24(5-落葉中) 落葉下に生息する種. 筆者は県内各地で落ち葉篩をしてきたが, 初めて採集した. 福岡県初記録.
57. *Orionella lewisii* (Bates) メダカアトキリゴミムシ VII.2-5(2-LT), IX.2-5(1-LT)
58. *Parena nigrolineata nipponensis* Habu クロヘリアトキリゴミムシ V.29(1)

59. *Parena cavipennis* (Bates) ヒラタアトキリゴミムシ VII.29-VIII.2(2-LT)
60. *Lebia retrofasciata* Motschulsky ジュウジアトキリゴミムシ III.29(1), VI.19(1)
61. *Lebia calycophora* Schmidt-Göbel ホシハネピロアトキリゴミムシ IV.12(1), VIII.2-5 (1-LT)
62. *Lachnolebia cribricollis* (Morawitz) キクピアオアトキリゴミムシ V.16(1)
63. *Philorhizus optimus* (Bates) キイロアトキリゴミムシ IX.24(1- 落葉中)  
稀な種で、福岡県 RDB2014では準絶滅危惧種に指定されている。
64. *Planetes puncticeps* Andrewes フタホシスジバネゴミムシ V.16(1)
65. *Drypta japonica* Bates アオヘリホソゴミムシ VII.5-9(1-LT)  
筑後川など大河川の河川敷などに見られる種で、当地での発見には驚いた。  
(クビボソゴミムシ科)
66. *Pheropsophus jessoensis* Morawitz ミイデラゴミムシ VI.11(1-U 字溝) U 字溝に多数見られた。
67. *Brachinus scotomedes* Redtenbacher オオホソクビゴミムシ VI.11(1-U 字溝)
68. *Brachinus incomptus* Bates ヒメホソクビゴミムシ VIII.2-5(1-LT), IX.5-9(1-LT) 今坂氏同定  
低地の河川敷や水田地帯に生息する種という。愛知県 RDE2014 では絶滅危惧 2 類に指定されている。福岡県初記録。  
(コガシラミズムシ科)
69. *Peltodytes intermedius* (Sharp) コガシラミズムシ VII.29-VIII.2(1-LT), VIII.2-5(1-LT)  
この科と続くゲンゴロウ科、ガムシ科の内、ライトトラップに飛来した種はすべて池周辺に設置したトラップによるもの。  
(ゲンゴロウ科)
70. *Hydrovatus acuminatus* Motschulsky コマルケシゲンゴロウ VII.2-5(1-LT), IX.2-5(1-LT)
71. *Hydroglyphus japonicus* (Sharp) チビゲンゴロウ VII.5-9(2-LT)
72. *Eretes sticticus* (Linnaeus) ハイイロゲンゴロウ VII.2-5(1-LT)
73. *Hydaticus grammicus* (Germar) コシマゲンゴロウ VII.5-9(1-LT)
74. *Hydaticus rhantoides* Sharp ウスイロシマゲンゴロウ VII.29-VIII.2(1-LT), IX.2-5(2-LT), IX.5-9(1-LT)  
(ガムシ科)
75. *Coelostoma stultum* (Walker) セマルガムシ V.29(2-U 字溝), VII.2-5(2-LT)
76. *Peratogonus reversus* Sharp コウセンマルケシガムシ ※ IX.5(1), IX.5(1- 落葉中)
77. *Cercyon usutus* Sharp ケシガムシ III.15-29(FIT-1)
78. *Helochares pallens* (MacLeay) ルイスヒラタガムシ VII.29-VIII.2(5-LT) 今坂氏同定
79. *Enochrus esuriens* (Walker) チビヒラタガムシ VII.2-5(6-LT)
80. *Enochrus japonicus* (Sharp) キベリヒラタガムシ VII.2-5(4-LT), VII.29-VIII.2(1-LT)
81. *Sternolophus rufipes* (Fabricius) ヒメガムシ VI.19(1-U 字溝)  
(エンマムシ科)
82. *Bacanius niponicus* Lewis アカツブエンマムシ ※ VI.3-7(1-LT), VII.2-5(3-LT), IX.5(2-落葉中), IX.24(3- 落葉中) ライトトラップには多数飛来し、落葉中にも多数見られた。
83. *Pachylomalus musculus* (Marseul) ハスジチビヒラタエンマムシ ※ V.10-24(FIT-1), V.24-VI.7(FIT-2), IX.24(2- 落葉中) 沿岸部などの暖地の落葉中に多い種。
84. *Hister japonicus* Marseul ヤマトエンマムシ VII.5(1-U 字溝)  
2002年に糸島市志摩桜井(城戸, 2004)で採集されて以来記録がなかった種。本種のような大型のエンマムシ類は個体数、産地とも急減少している。
85. *Hister salebrosus subsolanus* (Newton) アラメエンマムシ V.24(3), V.29(2), VI.3(2), VI.7(2), VI.11(11), VI.19(17), VII.5(14), VII.9(13), VII.22(7), VII.29(11), VIII.5(8), VIII.9(2), VIII.16(18), VIII.21(13), IX.2(5), IX.5(1), IX.24(1) すべて U 字溝。  
城戸(2024)で一部を記録済みだが、ここでは採集した全記録を示した。低地の河川敷や草原に生息する種で、稀なものとされてきた。そのため、いくつかの県 RDB に掲載されている。

- 当地ではU字溝によく見られ、コンクリートの壁面を伝って出入りしているものも見た。詳しい生態は不明だが、このように多数見られるのには大変驚いた。
86. *Paromalus vernalis* Lewis コチビヒラタエンマムシ  
※ IV.26-V.10(FIT-1)  
(タマキノコムシ科)
87. *Dermatohomoeus terrenus* (Hisamatsu) オチバヒメタマキノコムシ IX.24(2- 落葉中)  
落葉中に生息する種で、多数見られた。  
(シデムシ科)
88. *Necrodes nigricornis* Harold モモブトシデムシ VII.29-VIII.2(1-LT)
89. *Eusilpha japonica* (Motschulsky) オオヒラタシデムシ V.24(1-U 字溝)  
(デオキノコムシ科)
90. *Scaphidium incisum* Lewis ヒメクロデオキノコムシ IX.2(1)  
(ハネカクシ科)
91. *Paederus fuscipes* (Curtis) アオバアリガタハネカクシ※ VII.5-9(1-LT) 多数飛来した。
92. *Platydacus brevicornis* (Motschulsky) アカバトガリオオズハネカクシ (アカバハネカクシ) ※ VII.29(1-U 字溝), VIII.5(2-U 字溝) 今坂氏同定
93. *Platydacus sharpi* Fauvel カラカネトガリオオズハネカクシ (カラカネハネカクシ) VII.22(1-U 字溝), VIII.5(3-U 字溝) この種はクロガネトガリオオズハネカクシ (クロガネハネカクシ) に近似だが、雄の第6腹板中央に黒褐色毛塊があること、第7腹板中央が三角形に大きくえぐられることで区別できる。福岡県初記録。
94. *Agelosus weisei* (Harold) キンボシマルズオオハネカクシ (キンボシハネカクシ) VI.19(1) 橋爪氏同定, VII.29(1-U 字溝), VIII.5(1-U 字溝) 6月のものは草の根際を這っていた。草の間に見え隠れする金色の毛塊が非常に美しかった。県内から1981年に福岡市東区美和台で採集(直海, 1982)されて以来、40年以上記録がなかった種である。
95. *Algon grandicollis* Sharp ムネビロハネカクシ VIII.5(1-U 字溝) 今坂氏同定
96. *Isocheilus staphylinoides* (Kraatz) ニセトガリハネカクシ VII.29-VIII.5(1-LT) 橋爪氏同定
97. *Lithocharis nigriceps* Kraatz クロズトガリハネカクシ VII.29-VIII.5(2-LT) 橋爪氏同定
98. *Scopaeus virilis* Sharp チビヒメクビボソハネカクシ VII.29-VIII.5(1-LT) 橋爪氏同定
99. *Scopaeus complex* Sharp ヤマトヒメクビボソハネカクシ VII.29-VIII.5(2-LT) 橋爪氏同定
100. *Homaeotarsus kurosai* Itô ツマアカカワベナガエハネカクシ※ VII.29-VIII.5(3-LT) 橋爪氏同定
101. *Philonthus numata* Dvořák キアシチビコガシラハネカクシ VII.29-VIII.5(7-LT) 橋爪氏同定  
(クワガタムシ科)
102. *Prosopocoilus inclinatus inclinatus* (Motschulsky) ノコギリクワガタ VI.11(1) クリ。
103. *Dorcus rectus rectus* (Motschulsky) コクワガタ※ VII.22(1) タブ, シラカシなどに多い。
104. *Dorcus titanus pilifer* (Snellen van Vollenhoven) ヒラタクワガタ VII.5(1), VIII.2-5(1-LT)  
前者はアキニレの樹液にいたもの。  
(コガネムシ科)
105. *Aphodius troitzyi* Jacobson マルツヤマグソコガネ VII.5-19(FIT-1), VII.5-9(1-LT), VII.19-VIII.2(FIT-1) 珍しい種である。
106. *Aphodius mizo* Nakane ミゾムネマグソコガネ※ III.15-29(FIT-2)
107. *Ataenius australasiae* (Boheman) オオニセツツマグソコガネ VII.5-9(1-LT) 今坂氏同定, VII.29-VIII.2(2-LT), VIII.2-5(1-LT)  
平地や低山地で見られ、灯火にも飛来する。最近になって分布を拡大しているようである。
108. *Onthophagus lenzii* Harold カドマルエンマコガネ※ VI.3-7(1-LT), VI.19(4-U 字溝) 当地では多い種で、U字溝の中でよく見かける。
109. *Onthophagus nitidus* Waterhouse ツヤエンマコガネ※ V.29(1-U 字溝), VII.29-VIII.2(2-LT) 今坂氏同定多い。
110. *Paratrichius septemdecimguttatus* (Snellen van Vollenhoven) ジュウシチホシハナムグリ※ V.10-24(FIT-1)
111. *Lasiotrichinus succinctus* (Pallas) ヒメトラハナムグリ VI.7(1), VII.19-VIII.2(FIT-1) 前者はマテバシ

- イの花にいた。
112. *Rhomborhina polita* Waterhouse クロカナブン VII. 25-29(1-BT) 平地性の種で少ない種だが、バナナトラップには多数飛来していた。
113. *Pseudotorynorrhina japonica* (Hope) カナブン※ VII.5(1) アキニレの樹液、多い。
114. *Protaetia brevitarsis brevitarsis* (Lewis) シラホシハナムグリ VI. 3(1), VI.7(1), VI.11(1), VII.22-25(2-BT), VII.25(2)  
6月中はクリの花などに次種と共に見られたが、7月に入ってシラカシの樹液やバナナトラップに多数集まるようになった。福岡県では広い範囲から記録があるが、古い記録が多く、なかなか採集しがたい種である。山地よりもむしろ平地に見られるようで、福岡市周辺からたびたび得られている。当地では普通に見られ、むしろ次種よりも多いようである。
115. *Protaetia orientalis submarmorea* (Burmeister) シロテンハナムグリ VI.3(1), VI.19(1) VII.25-29(1-BT) 県内各地に普通に見られる種。
116. *Gametis jucunda* (Faldermann) コアオハナムグリ※ IV.12(1)
117. *Glycyphana gracilis viridis* Sawada ホソコハナムグリ※ IV.17(1), V.10(9), V.10-24(FIT-1), V.24(1), VI.19(11)  
平地や低山で稀に見られる種。当地では多く、イボタ、ニオイシュロラン、ムクロジの花に多数見られた。県内でこのように多くみられる場所は稀。
118. *Cetonia pilifera pilifera* (Motschulsky) ナミハナムグリ VI.3(1)  
次種と共にネズミモチの花に飛来していた。
119. *Eucetonia roelofsi roelofsi* (Harold) アオハナムグリ VI.3(1) ネズミモチ。
120. *Glycyphana fulvitemma* Motschulsky クロハナムグリ V.24(1), VI.3(1), VI.19(5)  
多いものではないが、当地ではネズミモチ、クリなどの花によく見られた。
121. *Adoretus tenuimaculatus* Waterhouse コイチャコガネ※ IV.17(1)
122. *Popillia japonica* Newmann マメコガネ VI.3(1) VI.3(1)
123. *Exomala orientalis* (Waterhouse) セマダラコガネ VI.3(1)
124. *Anomala cuprea* (Hope) ドウガネブイブイ VI.7(1)
125. *Anomala albopilosa albopilosa* Hope アオドウガネ※ VI.19(1)
126. *Anomala octiescostata* Burmeister ヒラタアオコガネ IV.12(1)
127. *Anomala testaceipes* (Motschulsky) スジコガネ VII.5-9(1-LT)
128. *Phyllopertha diversa* Waterhouse ウスチャコガネ IV.12(6)  
4～5月頃、ウバメガシの花に多数集まっていた。
129. *Parastasia ferrieri* Nonfried ヨツバコガネ※ VII. 5-19(FIT-1), VII.5-9(1-LT), VII.19-VIII.2(FIT-4), VII.29-VIII.2(1-LT), VIII.2-5(4-LT), VIII.5-9(4-LT), VIII.2-16(FIT-1)  
良好な自然林に多い種で、灯火に飛来する。日中は固い朽木の中に潜んでいて、まず見かけることはない。当地では多い。
130. *Trypoxylus dichotomus septentrionalis* Kôno カブトムシ VII.25-29(1-BT)  
シラカシの樹液でもよく見かけた。
131. *Ectinohoplia obducta* (Waterhouse) ヒメアシナガコガネ IV.17(1)
132. *Nigrotrichia kiotoensis* (Brenske) クロコガネ V.24(1-U字溝)
133. *Holotrichia picea* Waterhouse コクロコガネ VII.2-5(1-LT)
134. *Holotrichia parallela* (Motschulsky) オオクロコガネ VI.3(1)
135. *Miridiba castanea* (Waterhouse) クリイロコガネ VI.3-7(1-LT)
136. *Nipponoserica pubiventris* Nomura ハラゲビロウドコガネ※ IV.12-26(FIT-1), IV.26-V.10(FIT-3)
137. *Maladera secreta secreta* (Brenske) マルガタビロウドコガネ VI.3-7(1-LT)
138. *Maladera japonica* (Motschulsky) ビロウドコガネ※ VII.29-VIII.2(1-LT), VIII.2-5(1-LT)
139. *Maladera cariniceps* (Moser) スジビロウドコガネ VI.11(1-U字溝)  
大きな河川のアシ原などに生息する種で、当地で発見には驚いた。

(マルハナノミダマシ科)

140. *Eucinetus haemorrhoidalis* (Germar) ツマアカマルハ  
ナノミダマシ※ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(3-LT) 稀  
な種である。

(マルハナノミ科)

141. *Contacyphon consobrinus* (Nyholm) チャイロチビマ  
ルハナノミ VII.5-9(1-LT) 今坂氏同定
142. *Sacodes nakanei* (Klausnitzer) コキムネマルハナノ  
ミ IV.26(1)
143. *Prionocyphon ovalis* Kiesenwetter セダカマルハナノ  
ミ VI.3-7(1-LT), VII.29-VIII.2(1-LT)
144. *Scirtes japonicus* (Kiesenwetter) トビイロマルハナノ  
ミ VII.29-VIII.2(1-LT)

(マルトゲムシ科)

145. *Simplocaria hispidula* Fairmaire シラフチビマルトゲ  
ムシ※ IX.5(1-落葉中)
146. *Microchaetes* sp. ミナミケモンマルトゲムシ VII.  
2-5(6-LT), VII.5-9(2-LT)

最近になって日本各地で採集されている種。福岡  
県でも釈迦岳や筑後川から記録され、県内では3ヶ  
所目の産地となる。この属の分布はオーストラリア・  
タスマニアに限られ、侵入種と言われる。

(チビドロムシ科)

147. *Pelochares ryukyensis* M.Satô リュウキュウダエン  
チビドロムシ VII.2-5(3-LT), VII.29-VIII.2(1-LT)  
共に今坂氏同定

(ヒメドロムシ科)

148. *Ordobrevia foveicollis* (Schönfeldt) キスジミゾドロ  
ムシ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(1-LT), IX.5-9(1-LT)

(ドロムシ科)

149. *Elmomorphus brevicornis* Sharp ムナビロツヤドロム  
シ VIII.2-5(1-LT), VIII.5-9(1-LT)

(ヒラタドロムシ科)

150. *Eubrianax ramicornis* Kiesenwetter マルヒラタドロ  
ムシ IV.17(1)

(ナガドロムシ科)

151. *Heterocerus fenestratus* Thunberg タテスジナガドロ  
ムシ VII.29-VIII.2(1-LT), VIII.5-9(1-LT), IX.2-5  
(3-LT) トラップに多数飛来した。

(ナガハナノミ科)

152. *Ptilodactyla chujoii* Nakane コヒゲナガハナノミ※

VII.2-5(2-LT)

(タマムシ科)

153. *Chrysochroa fulgidissima fulgidissima* (Schönherr) タ  
マムシ VII.9(1) アキニレの傍を旋回していた。
154. *Chrysobothris succedanea* E. Saunders ムツボシタマ  
ムシ VI.3(2)
155. *Agrius viridiobscurus* E. Saunders アオグロナガタマ  
ムシ※ V.2(6), V.24(3)
156. *Agrius chekiangensis* Gebhardt キュウシュウナガタ  
マムシ V.24 (2) 今坂氏同定
157. *Agrius imitans* Lewis ムネアカナガタマムシ V.29  
(1)
158. *Agrius tempestivus* Lewis ウグイスナガタマムシ  
V.29(1), VI.7(1)
159. *Endelus collaris collaris* (E. Saunders) キンイロエグ  
リタマムシ※ V.10(3), IV.26-V.10(FIT-1), V.10-24  
(FIT-2) ベニシダに多い。
160. *Trachys auricollis* E. Saunders クズノチビタマムシ  
IV.26(1), IX.24(2)
161. *Trachys inconspicua* E. Saunders ウメチビタマムシ  
VII.29(4) ウメに多い。
162. *Trachys broussonetiae* Y. Kurosawa コウゾチビタマ  
ムシ IV.26-V.10(FIT-1)
163. *Trachys reitteri* Obenberge マメチビタマムシ IX.2  
(2), IX.5(2), IX.5(2) ノササゲ。
164. *Trachys yamoi* Y. Kurosawa ヤノナミガタチビタマム  
シ IV.12(3) ケヤキ。
165. *Trachys robustus* E. Saunders サシゲチビタマムシ  
IX.5(1), IX.24(1)  
スタジイに見られる暖地性の種で、福岡県では稀。
166. *Habroloma subbicorne* (Motschulsky) ヒラタチビタ  
マムシ※ V.2(1)  
(コメツキムシ科)
167. *Pectocera hige hige* Kishii ヒゲコメツキ IV.17(1)
168. *Agrypnus binodulus binodulus* (Motschulsky) サビキ  
コリ※ IV.17(1)
169. *Agrypnus tsushimensis tsushimensis* Ôhira ツシマヒメ  
サビキコリ V.29(4-U字溝) 多い。
170. *Adelocera difficilis* (Lewis) シロオビチビサビキコリ  
※ III.29-IV.12(FIT-6)
171. *Adelocera ichihashii* Ôhira イチハシチビサビキコリ

- ※ III.29-IV.12(FIT-2), IV.12-26(FIT-5)  
シイに見られる種で, 産地は局所的.
172. *Lacon parallelus parallelus* (Lewis) コガタノサビコ  
メツキ VIII.5-9(2-LT)
173. *Lacon maeklinii maeklinii* (Candèze) オオサビコメツ  
キ VII.2-5(1-LT)
174. *Cryptalaus larvatus pini* (Lewis) フタモンウバタマ  
コメツキ V.29(1) シラカシの樹液に多数集まっ  
ているものを見かけた.
175. *Tetrigus lewisi* Candèze オオクシヒゲコメツキ  
VII.2-5(1-LT), VII.29-VIII.2(1-LT)
176. *Drasterius agnatus* (Candèze) マダラチビコメツキ  
VIII.5-9(1-LT), VIII.9(1-U字溝)
177. *Limonicus atricolor* (Lewis) クロカネコメツキ  
IV.26(1)
178. *Paraphotistus notabilis notabilis* (Candèze) オオナガ  
ヒラタコメツキ IV.26(1)
179. *Corymbitodes gratus* (Lewis) ドウガネヒラタコメツ  
キ IV.12(1), IV.17(1)
180. *Actenicerus pruinosus* (Motschulsky) シモフリコメ  
ツキ IV.17(2)  
平地性の種で, 最近はあまり見なくなった. 明る  
く乾燥した照葉樹林で見られる.
181. *Hemicrepidius desertor desertor* (Candèze) ヒメクロ  
ツヤハダコメツキ V.29(3)
182. *Haterumelater bicarinatus bicarinatus* (Candèze)  
チャイロコメツキ VII.5-19(FIT-1), VII.2-5(1-LT)
183. *Agaripenthes helvolus* (Candèze) ヒメホソキコメツ  
キ V.24-VI.7(FIT-1), VI.7-9(1-LT) 今坂氏同定
184. *Podeonius aquilis aquilis* (Candèze) クリイロアシブ  
トコメツキ※ VII.2-5(2-LT)
185. *Lanecarus palustris* (Lewis) ニセクチブトコメツキ  
VII.5-9(1-LT)
186. *Glyphonyx bicolor bicolor* Candèze キバネクチボソ  
コメツキ VI.7(1), VI.11(3), VII.2-5(1-LT), VII.  
5-9(1-LT)
187. *Dolerosomus gracilis* (Candèze) キバネホソコメツキ  
VII.2-5(1-LT) 今坂氏同定
188. *Mulsanteus junior junior* (Candèze) ヒゲナガコメツ  
キ※ IV.17(1)
189. *Nipponoelater sieboldi sieboldi* (Candèze) オオナガ  
コメツキ※ VII.2-5(1-LT), VII.19-VIII.2(FIT-1)
190. *Platynychus adjutor adjutor* (Candèze) アカアシハナ  
コメツキ※ V.29(1)
191. *Melanotus legatus legatus* Candèze クシコメツキ  
IV.17(1) ※
192. *Melanotus lewisi lewisi* Schenkling ルイスクシコメツ  
キ VII.5-19(FIT-1), VII.29-VIII.2(1-LT), VIII.2-5  
(1-LT) 大型のクシコメツキで, 平地・暖地で見ら  
れる.
193. *Melanotus legatoides* Kishii ヒメクシコメツキ VII.  
29-VIII.2(1-LT)
194. *Melanotus annosus* Candèze クロツヤクシコメツキ  
IV.17(1), V.29(1)  
(コメツキダマシ科)
195. *Poecilochrus japonicus* Fleutiaux ウスグロミゾコメツ  
キダマシ VII.5(1), VII.2-5(4-LT), VII.5-9(2-LT)  
たびたび得られたが, 一般には稀な種である.
196. *Microrhagus mystagogus* (Fleutiaux) コガタフチトリ  
コメツキダマシ※ V.10-24(FIT-1)
197. *Fornax nipponicus* Fleutiaux コチャイロコメツキダ  
マシ※ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(2-LT)
198. *Fornax consobrinus* Hisamatsu ヒメチャイロコメツ  
キダマシ VII.5-19(FIT-1)
199. *Fornax victor* Fleutiaux オオチャイロコメツキダマシ  
※ VII.5-19(FIT-1)  
この属の種は新たなものが複数知られているが,  
一応既知種で同定している.
200. *Farsus aimu* Fleutiaux アイヌコメツキダマシ  
VII.2-5(5-LT), VII.5-9(2-LT)  
(ベニボタル科)
201. *Lycostomus modestus* (Kiesenwetter) ベニボタル※  
V.24(1)
202. *Plateros coracinus* (Kiesenwetter) クロハナボタル  
V.2(1), V.29(1), VI.3-7(2-LT), VII.5-9(5-LT),  
VII.29-VIII.2(3-LT), VIII.2-5(2-LT)
203. *Plateros koreanus* Kleine チョウセンハナボタル  
VI.7(1), VI.3-7(6-LT), VI.11(1), VII.5-9(3-LT),  
VII.29-VIII.2(6-LT), VIII.2-5(1-LT), VIII.5-9  
(2-LT), IX.2-5(4-LT), IX.5-9(15-LT)  
黄色のベニボタルで良く目につく. 平地や丘陵地  
などの草原やそれに近い環境下に見られ, 県内では

- 北九州市小倉南区，福智町の古い記録があったが，最近になってうきは市浮羽町新川（城戸，2023）や筑後川中流域（今坂ほか，2024）からも記録された。当地では多く見られたが，一般には珍しい種である。
204. *Lyponia delicatula* (Kiesenwetter) ヒメベニボタル IV.12-26(FIT-1)
205. *Benibotarus spinicoxis* (Kiesenwetter) ミスジヒシベニボタル V.10-24(FIT-1), V.24-VI.7(FIT-1)  
(ホタル科)
206. *Cyphonocerus ruficollis* Kiesenwetter ムネクリイロボタル※ V.10(1)  
(ジョウカイボン科)
207. *Asiopodabrus hayato* (Nakane) ハヤトクビボソジョウカイ※ III.29(1), IV.12(3) 共に今坂氏同定
208. *Lycocerus suturellus luteipennis* (Kiesenwetter) ニシジョウカイボン IV.26(1)
209. *Prothemus ciusianus* (Kiesenwetter) マルムネジョウカイ※ V.2(1)  
(カツオブシムシ科)
210. *Orphinus japonicus* Arrow ベニモンチビカツオブシムシ VIII.2-5(1-LT)
211. *Thaumaglossa rufocapillata* Redtenbacher カマキリタマゴカツオブシムシ※ V.24(2)
212. *Thaumaglossa hilleri* Reitter クロヒゲブトカツオブシムシ IV.12-26(FIT-1)
213. *Anthrenus verbasci* (Linnaeus) ヒメマルカツオブシムシ V.10(1)  
(ナガシクイムシ科)
214. *Lichenophanes carinipennis* (Lewis) セマダラナガシクイ VII.5-9(3-LT), VII.29-VIII.2(1-LT)
215. *Heterobostrychus hamatipennis* (Lesne) オオナガシクイ VII.5-9(1-LT)  
前種と共に，ナラ枯れで伐採されたコナラが置かれているところに設置したトラップに飛来した。  
(シバンムシ科)
216. *Indanobium kyushuense* (Nakane) ツツガタホソシバンムシ※ VII.5(5), VII.5(12-FIT)  
宗像市城山産をホロタイプとした種。クロキの立ち枯れに多数見られた。
217. *Gastrallus immarginatus* (Müller) フルホンシバンムシ V.29(1), VI.19-VII.5(FIT-12), VII.5(5)
218. *Holcobius japonicus* (Pic) セスジタワラシバンムシ VI.3(1)
219. *Stagetodes zozu* Sakai ゴウズニセスジキノコシバンムシ VIII.2-5(1-LT), IX.2-5(1-LT), IX.5-9(1-LT)  
本種の和名だが，原記載に Zozu-nise-suji-kinoko-shibanmushi とあり，これをそのまま読んでゴウズニセスジキノコシバンムシと呼ばれているようである。本種のホロタイプ産地が Mt. Kotohira (Mt. Zozu) となっていて，これにちなむものと思われる。しかし，琴平山，別名は象頭山（ぞうずさん）なので，「ゾズ」でなく「ゴウズ」と読むのが自然ではなからうかと考える。
220. *Mizodorcatoma pulcherrima* Sakai フタイロミゾキノコシバンムシ VII.19-VIII.2(FIT-1)  
稀な種と思われ，福岡県初記録。
221. *Byrrhodes nipponicus* Sakai クリイロタマキノコシバンムシ※ V.10-24(FIT-1)  
(コクヌスト科)
222. *Ancyrona haroldi* Reitter ハロルドヒメコクヌスト III.29-IV.12(FIT-1)  
(サビカッコウムシ科)
223. *Isoclerus disinlei* Kolibac タイワンチビカッコウムシ III.29-IV.12(FIT-1)  
カワラタケに見られる種で，平地から山地で見られるが多くはない。  
(カッコウムシ科)
224. *Tillus igarashii* Kôno イガラシカッコウムシ V.24(1), V.29(1) 多い。
225. *Tenerus hilleri* Harold ツマグロツツカッコウムシ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(2-LT), VII.29-VIII.2(1-LT)  
(ジョウカイモドキ科)
226. *Semijulistus spectabilis* (Lewis) コケシジョウカイモドキ IV.26-V.10(FIT-1)
227. *Intybia histrio* (Kiesenwetter) ヒロオビジョウカイモドキ※ VI.7(1)
228. *Malachius prolongatus* Motschulsky ツマキアオジョウカイモドキ IV.17(1)
229. *Kuatunia oblongulus oblongulus* (Kiesenwetter) クギヌキヒメジョウカイモドキ※ III.29(1)
230. *Attalus elongatulus* Lewis ホソヒメジョウカイモドキ IV.17(1)

(キシイモドキ科)

231. *Byturus atricollis* Reitter ズグロキシイモドキ III.29  
(1)

(オオキシイムシ科)

232. *Helota gemmata* Gorham ヨツボシオオキシイ  
IV.12(1) タブの樹液に多い。

(ヒメキノコムシ科)

233. *Aspidiphorus sakaii* Sasaji サカイマルヒメキノコム  
シ V.24-VI.7(FIT-1)

(ムクゲキシイムシ科)

234. *Biphyllus lewisi* (Reitter) アカグロムクゲキシイ※  
VI.11(1)

235. *Biphyllus aequalis* (Reitter) ムナビロムクゲキシイ  
IV.26-V.10(FIT-2)

236. *Biphyllus humeralis* (Reitter) カタモンムクゲキシイ  
IV.26-V.10(FIT-1)

237. *Biphyllus throscooides* (Wollaston) クリイロムクゲキ  
スイ V.10-24(FIT-1)

(オオキノコムシ科)

238. *Cathartocryptus hiranoi* (Sasaji) ヒラタコメツキモド  
キ III.29-IV.12(FIT-1), VI.3-7(1-LT), VII.29-  
VIII.2(15-LT), VIII.2-5(13-LT), VIII.5-9(4-LT),  
IX.2-5(2-LT), IX.5-9(3-LT)

一般に珍しい種とされるが、当地ではトラップに  
多数飛来した。ナラ枯れのコナラが伐採されている  
ところに多いようである。

239. *Cryptophilus propinquus* Reitter ヒメムクゲオオキノ  
コムシ VII.29-VIII.2(4-LT), VIII.2-5(1-LT)

240. *Cryptophilus hiranoi* Sasaji アカスジナガムクゲキシ  
イ※ III.15-29(FIT-2), III.29-IV.12(FIT-1)

241. *Microlanguria jansoni jansoni* (Crotch) ケシコメツキ  
モドキ V.2(1)

242. *Anadastus ruficeps* (Crotch) アカアシヒメコメツキ  
モドキ V.2(1), IX.5(1)

243. *Aulacochilus sibiricus bedeli* Harold ルリオオキノコ  
ムシ※ V.16(1)

244. *Aulacochilus japonicus* Crotch カタモンオオキノコム  
シ VI.11(1)

245. *Satelia scitula* Lewis ツヤヒメオオキノコムシ※  
III.29-IV.12(FIT-1)

246. *Triplax japonica japonica* Crotch ホソチビオオキノ

コムシ V.10-24(FIT-2)

247. *Triplax sibirica connectens* (Lewis) シベリアチビオ  
オキノコムシ V.10-24(FIT-1) V.10-24(FIT-1)

248. *Pseudotritoma laetabilis* (Lewis) セグロチビオオキ  
ノコムシ※ III.29-IV.12(FIT-1)

249. *Tritoma tripartaria* (Lewis) カタベニチビオオキノ  
コムシ※ IV.26-V.10(FIT-1), V.10-24(FIT-1), VII.  
19-VIII.2(FIT-1)

250. *Dacne picta* Crotch セモンホソオオキノコムシ III.  
29-IV.12(FIT-1), V.24-VI.7(FIT-1), VII.5(3)

251. *Dacne kidoi* Nakane カクモンホソオオキノコムシ※  
III.29-IV.12(FIT-35), IV.12-26(FIT-22), IV.26-V.10  
(FIT-30), V.10-24(FIT-2), V.24-VI.7(FIT-1), V.24-  
VI.7(FIT-7), VI.19-VII.5(FIT-6), VII.5-19(FIT-2),  
VII.19-VIII.2(FIT-1)

クロキが立ち枯れした傍に設置したFITに多数入っ  
ていた。当地にはクロキが多くその枯れ木に多い種  
だが、ビーティングでは全く得られなかった。

宗像市城山産をホロタイプとした種。一般に稀な  
種とされるが、福岡県北部ではしばしば得られてい  
る。ただ、このようにまとまって得られることはな  
い。

252. *Episcapha fortunei fortune* Crotch ヒメオビオオキノ  
コムシ V.2(1), VII.5-19(FIT-1), IX.2-5(1-LT)

(キシイムシ科)

253. *Cryptophagus dilutus* Reitter ウスイロキシイ IV.12-  
26(FIT-1)

254. *Atomaria horridula* Reitter ケナガセマルキシイ VI.  
3-7(1-LT)

255. *Atomaria punctatissima* Reitter ナガマルキシイ IX.  
2-5(2-LT)

256. *Atomaria lewisi* Reitter キイロセマルキシイ※ IX.  
2-5(1-LT)

257. *Curelius japonicus* (Reitter) マルガタキシイ VII.  
5-9(4-LT), VIII.5-9(1-LT)

(ホソヒラタムシ科)

258. *Protosilvanus lateritius* (Reitter) ヒラムネホソヒラタ  
ムシ VII.29-VIII.2(1-LT) 細長い前胸と上翅第7  
間室が陵状に盛り上がる特徴的な種。福岡県初記録。

259. *Silvanoprus scuticollis* (Walker) ミツカドホソヒラタ  
ムシ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(1-LT), VIII.2-5(1-LT),

- IX.2-5(2-LT)
260. *Silvanoprus grouvellei* (Reitter) ホソミツカドホソヒラタムシ VIII.2-5(1-LT)  
(チビヒラタムシ科)
261. *Microbrontes laemphloeoides* Reitter カギヒゲチビヒラタムシ V.24-VI.7(FIT-1) 稀な種で、県内から行橋市泉, 高良山, 八女市泉の記録がある。
262. *Nipponophloeus dorcooides* (Reitter) オオキバチビヒラタムシ VII.2-5(1-LT)
263. *Notolaemus cribratus* (Reitter) モンチビヒラタムシ IV.12-26(FIT-1)
264. *Notolaemus lewisi* (Reitter) ルイスチビヒラタムシ IV.12-26(FIT-1)
265. *Notolaemus ussuriensis* Iablokoff-Khnzorian ウスリーチビヒラタムシ VII.5-19(FIT-1), VII.29-VIII.2(1-LT), IX.2-5(1-LT)  
稀な種で、県内から宗像市城山, 大根地山, 高良山, 八女市吉田の記録がある。
266. *Placonotus fenestratus* (Reitter) キイロチビヒラタムシ※ VII.2-5(1-LT), IX.5-9(1-LT)
267. *Placonotus hilleri* (Reitter) ヒレルチビヒラタムシ IX.2-5(1-LT) 特徴的な種だが、稀な種である。県内から行橋市泉, 大根地山の記録がある。
268. *Placonotus testaceus* (Fabricius) カドムネチビヒラタムシ VII.2-5(2-LT), VII.5-9(1-LT), VIII.2-5(3-LT), VIII.5-9(2-LT)
269. *Xylolestes laevior* (Reitter) セマルチビヒラタムシ VII.29-VIII.2(4-LT), VIII.2-5(1-LT)
270. *Pseudophloeus fuscicornis* (Reitter) ウスグロチビヒラタムシ VII.29-VIII.2(2-LT) 稀な種で、県内から田川市白鳥町, 笠置山の記録がある。  
当地のチビヒラタムシ科は10種で、このようにまとまって多くの種が得られることは大変珍しいことである。比較的新しい枯れ木に生息するため、ナラ枯れをはじめ、各種の立ち枯れ木が多いことによるものかもしれない。  
(ケシキスイ科)
271. *Carpophilus chalybeus* Murray クロハナケシキスイ V.2(1), VII.22(1)
272. *Eपुरaea concolor* (Murray) ツヤチビヒラタケシキスイ IV.17(2)
273. *Eपुरaea paulula* (Reitter) マメヒラタケシキスイ※ X.25(1)
274. *Eपुरaea foveicollis* Reitter ムナクボヒラタケシキスイ V.10(1) V.10(1) V.10(1)
275. *Stelidota multiguttata* Reitter マルキマダラケシキスイ※ IX.24(1-落葉中)  
落葉中に生息する種で、当地でも落葉中に多数見られた。
276. *Soronia grisea* Linnaeus キマダラケシキスイ V.16(1)
277. *Ussuriphia hilleri* (Reitter) アミモンヒラタケシキスイ V.2(1)
278. *Pocadites japonus* (Reitter) マルガタカケシキスイ※ V.2(1)
279. *Aethina aeneipennis* Reitter ドウイロムクゲケシキスイ V.16(1)
280. *Amphicrossus lewisi* Reitter ナガコゲチャケシキスイ VIII.2-5(4-BT), VIII.5-9(2-BT)
281. *Meligethes violaceus* Reitter キベリチビケシキスイ IV.17(1), V.2(1)
282. *Glischrochilus japonicus* (Motschulsky) ヨツボシケシキスイ V.16(1)  
タブヤシラカシなどの樹液に多く、バナナトラップにも多数集まっていた。  
(ムキヒゲホソカタムシ科)
283. *Sosylus crassus* Aoki & Narukawa ヒュウガツツホソカタムシ VII.29-VIII.2(2-LT)  
城戸 (2024). 福岡県初記録として、データを再録した。2013年に宮崎県, 対馬, 奄美大島から新種記載された種である。  
(カクホソカタムシ科)
284. *Cautomus hystriculus* Sharp ムネビロカクホソカタムシ IV.26-V.10(FIT-1)  
(テントウダマシ科)
285. *Saula japonica* Gorham キイロテントウダマシ VII.22(1)
286. *Ancylopus pictus asiaticus* Strohecker ヨツボシテントウダマシ III.15(1)
287. *Endomychus gorhami* (Lewis) ルリテントウダマシ V.2(1)

(テントウムシ科)

288. *Serangium japonicum* Chapin クロツヤテントウ IV.17(1)
289. *Pseudoscymnus hareja* (Weise) ハレヤヒメテントウ V.24-VI.7(FIT-1)
290. *Nephus yotsumon* (H. Kamiya) ヨツモンヒメテントウ IV.12(1)  
ケヤキの樹皮下で越冬することが知られている。
291. *Scymnus kawamurai* (Ohta) カワムラヒメテントウ V.24(1), VI.17(1), VII.27(1), IX.5(2), IX.9(1)  
全て関氏同定
292. *Scymnus rectoides* Sasaji ニセツマアカヒメテントウ IX.5 関氏同定
293. *Scymnus rectus* (Ohta) オオタツマアカヒメテントウ ※ III.29(1), IX.5(1)
294. *Scymnus posticalis* Sicard コクロヒメテントウ ※ III.29(1) 関氏同定, IV.12(1)
295. *Scymnus hoffmanni* Weise クロヘリヒメテントウ VI.17(1) 関氏同定
296. *Scymnus otohime* H. Kamiya オトヒメテントウ IV.17(1) 関氏同定
297. *Hyperaspis sinensis* (Crotch) フタホシテントウ VII.29(1)
298. *Amida tricolor* (Harold) アミダテントウ ※ IV.26(1) 暖地性の種で, 多い。
299. *Cryptogonus orbiculus* (Gyllenhal) フタモンクロテントウ ※ IV.17(1)
300. *Phymatosternus lewisii* (Crotch) ヨツボシテントウ V.16(1)
301. *Phymatosternus maculosus* (Weise) モンクチビルテントウ IV.12(1), IX.5(1) 多い。台湾や中国などに分布していた種で, 2002年に沖縄で発見され, 徐々に北上, 2009年には福岡市でも発見され, 現在では県内に普通に分布している。
302. *Chilocorus kuwanae* Silvestri ヒメアカホシテントウ VII.5(1)
303. *Phaenochilus Mikado* (Lewis) ミカドテントウ IV.26(1) 成虫が冬期にイチイガシの葉裏で越冬することが知られている。当地では少ないながら4月から8月初旬まで, イチイガシに成虫が見られた。
304. *Rodolia cardinalis* (Mulsant) ベダリアテントウ V.16(1), VI.11(1) 平地や離島, 沿岸部などの暖地で見られる種である。
305. *Coccinella septempunctata* Linnaeus ナナホシテントウ IV.26(1)
306. *Oenopia scalaris* (Timberlake) ムツキボシテントウ IV.17(1), V.24-VI.7(FIT-1) クロマツから得られる種である。
307. *Propylea japonica* (Thunberg) ヒメカメノコテントウ III.29(1)
308. *Calvia quatuordecimguttata* (Linnaeus) シロジュウシホシテントウ IV.26(1)
309. *Calvia muiri* Timberlake ムーアシロホシテントウ IV.17(1)
310. *Harmonia axyridis* (Pallas) ナミテントウ IV.12(1)
311. *Synona consanguinea* Poorani, Ślipiński & Booth ムネアカオオクロテントウ IV.17(1), V.10(1), VII.9(1), VII.22(1), IX.2(2), IX.5(2), IX.5(1), X.25(5)  
城戸 (2024)。福岡県初記録として。データの一部を再録した。タブ, ホソバタブ, ネズミモチなど, いろいろな樹木の葉上から採集される。クズに多いマルカメムシを食害することが知られている。中国・台湾などからの侵入種(外来種)とされ, 先に侵入した関東や関西地域では分布が拡大している。
312. *Menochilus sexmaculata* (Fabricius) ダンダラテントウ IV.12(1)
313. *Kiuro koebelei koebelei* (Timberlake) キイロテントウ IV.17(1)
314. *Henosepilachna vigintioctopunctata* (Fabricius) ニジュウヤホシテントウ IX.2(1) どこにでもいる極めて普通な種だが, 当地ではなかなか採れず, この日にやっと見つけたイヌホオズキから1頭を採集した。
315. *Afissa chinensis* (Weise) ツシママダラテントウ V.16(4), VI.19(1) 日本では対馬に分布していたが, 後に壱岐からも知られていた。それ以外の地では, 2015年に宗像市で多数発見され, その後, 北九州市や平尾台で発見されている。当地での個体数は多く, 至る所でよく見られる。食草はヘクソカズラが知られている。

(ミジンムシ科)

316. *Parmulus politus* (Matthews) ベニモンツヤミジンムシ III.29-IV.12(FIT-3), VII.2-5(1-LT)

(ヒメマキムシ科)

317. *Melanophthalma japonica* Johnson ヤマトケシマキムシ VIII.2-5(2-LT)

(ツツキノコムシ科)

318. *Nipponocis longisetosus* Nobuchi ケナガナガツツキノコムシ※ VI.11(1)

(コキノコムシ科)

319. *Litargus lewisi* Reitter ウスモンヒメコキノコムシ VII.2-5(3-LT)

(キノコムシダマシ科)

320. *Holostrophus orientalis* Lewis アヤモンヒメナガクチキムシ※ V.2(1)

(ナガクチキムシ科)

321. *Phloiотrya obscura* (Lewis) ビロウドホソナガクチキ IV.17(1), IV.12-26(FIT-1)322. *Phloiотrya rugicollis* Marseul クロホソナガクチキ VII.2-5(1-LT)323. *Serropalpus barbatus* Schaller キイロホソナガクチキムシ VIII.2-5(1-LT)324. *Osphyra orientalis* (Lewis) アオオビナガクチキ V.16(2)

(ハナノミ科)

325. *Macrotomoxia castanea* Pic クリイロヒゲハナノミ VII.5(1) マテバシイの枯れ枝から得られた。灯火に飛来するものを得ることが多い。社寺林や緑地公園など、シイやカシなどの大木が残っているような低地林で見られる。最近になって、ナラ枯れの山林で多数発生したという記録がある。県内では稀な種で、福岡県 RDB2014では準絶滅危惧種に指定されている。326. *Mordellina brunneotincta* (Marseul) チャオビヒメハナノミ V.24-VI.7(FIT-1), VI.3-7(1-LT)

この科には未同定の小型種が複数ある。

(アトコブゴミムシダマシ科)

327. *Penthelispa vilis* (Sharp) ツヤナガヒラタホソカタムシ V.10-24(FIT-1)328. *Microprius opacus* (Sharp) ツヤケシヒメホソカタムシ※ V.10-24(FIT-1), VI.19-VII.5(FIT-1), VII.5-19(FIT-1), IX.5-9(1-LT)

かなり乾燥した場所でも得られる種で、街中の公園などでも得られている。

329. *Pseudotarphius lewisii* Wollaston ダルマチビホソカタムシ V.2(1)330. *Glyphocryptus brevicollis* Sharp ヒサゴホソカタムシ III.29-IV.12(FIT-1)

(ゴミムシダマシ科)

331. *Luprops orientalis* (Motschulsky) ヒゲブトハムシダマシ V.2(1)332. *Macrolagria rufobrunnea* (Marseul) ナガハムシダマシ IV.12(1)333. *Uloma bonzica* Marseul モトヨツコブゴミムシダマシ IX.24(1)334. *Uloma marseuli marseuli* Nakane エグリゴミムシダマシ※ IX.24(1- 落葉中)335. *Nalassus brunnea brunnea* (Marseul) コマルムネゴミムシダマシ III.15(1)336. *Plesiophthalmus nigrocyanus* Motschulsky キマワリ※ V.29(1), VI.7(1)337. *Blindus strigosus* (Faldermann) ゴモクムシダマシ V.24(1-U 字溝), VI.3(1-U 字溝)

以下、スジコガシラゴミムシダマシまで地表を徘徊する種で、いずれの種も U 字溝には多数見られた。

338. *Gonocephalum coenosum* Kaszab ヤマトスナゴミムシダマシ V.2(1), V.24(1-U 字溝)339. *Gonocephalum coriaceum* Motschulsky コスナゴミムシダマシ VII.5(1-U 字溝)340. *Heterotarsus carinula* Marseul スジコガシラゴミムシダマシ III.15(1)

ユーカリの樹皮がはがれ、木の俣にたくさん重なり、その中に多数の個体が見られた。成虫越冬していたものと思われる。

341. *Allecula tenuis* Marseul ホンドホソアカクチキムシ※ VI.7(1)342. *Allecula bilamellata* Marseul ウスイロクチキムシ VII.5-9(1-LT)343. *Borboresthes acicularis* (Marseul) クリイロクチキムシ V.10(1), V.16(2)344. *Hymenalia rufipennis* (Marseul) アカツヤバネクチキムシ※ IV.17(1)345. *Isomira oculata* (Marseul) フナガタクチキムシ※ V.24(1), VI.11(1)346. *Cteniopinus hypocrita* (Marseul) キイロクチキムシ※

- V.24(1)
347. *Diaperis lewisi lewisi* Bates モンキゴミムシダマシ VII.5(2)
348. *Platydema kurama* Nakane マルツヤキノコゴミムシダマシ VII.5(1)
349. *Platydema marseuli* Lewis アオツヤキノコゴミムシダマシ V.2(1), V.10(1)
350. *Platydema nigroaeneum* Motschulsky クロツヤキノコゴミムシダマシ VII.5(1)
351. *Platydema higonium* Lewis ヒゴキノコゴミムシダマシ※ VI.7(2)
352. *Platydema subfascia subfascia* (Walker) ベニモンキノコゴミムシダマシ※ VI.19(2), VII.5(1)
353. *Platydema nigropicta* Nakane ヒメオビキノコゴミムシダマシ IX.5-9(1-LT)  
稀な種で、県内では宗像市城山と久留米市宮本からの記録がある。
354. *Ceropria laticollis* Fairmaire フトナガニジゴミムシダマシ VII.22(1)  
低山の森林中でよく見られる種だが、わずか1頭を得ただけ。
355. *Ceropria induta induta* (Wiedemann) ナガニジゴミムシダマシ IV.12-26(FIT-1)
356. *Ades convexus* (Lewis) クロテントウゴミムシダマシ V.10-24(FIT-1) 落葉中に生息する種である。
357. *Promethis valgipes valgipes* (Marseul) ユミアシゴミムシダマシ V.24(1-U字溝), VI.11(1)
358. *Derosphaerus subviolaceus* (Motschulsky) ルリゴミムシダマシ VIII.5-9(1-LT)
359. *Tetraphyllus paykullii* (Dalman) ニジゴミムシダマシ VII.9(1) 伐採されたアカマツと思われる古い朽木の樹皮下に見られた。
360. *Gnesis haagi* (Harold) ズビロキマワリモドキ IV.26(1), IX.5(1-落葉中)
361. *Simalura coerulea* (Lewis) ルリツヤヒメキマワリモドキ V.29(1)
362. *Strongylium marseuli* Lewis ハネナシセスジナガキマワリ VII.22(1)  
(カミキリモドキ科)
364. *Nacerdes luteipennis* (Marseul) キバネカミキリモドキ V.24(1) クリの花
365. *Dryopomera yatoi yatoi* (Nakane) ホソカミキリモドキ※ IV.17(1)
366. *Oedemera sexualis sexualis* Marseul フタイロカミキリモドキ IV.17(2)  
(ツチハンミョウ科)
367. *Meloe coarctatus* Motschulsky ヒメツチハンミョウ V.24(1-U字溝) ほぼ完全な死体。  
(チビキカワムシ科)
368. *Trogocryptoides shintaroi* Sasaji カクチビキカワムシ V.24-VI.7(FIT-1) 宗像市城山産をホロタイプとした種。頭胸部を欠いていたが、完全な標本と比較して本種と同定した。
369. *Chilopeltis laevipennis* (Marseul) ツヤチビキカワムシ VI.7(1)
370. *Lissodema morimotoi* Sasaji モリモトチビキカワムシ VI.3-7(1-LT), VIII.2-5(1-LT)
371. *Lissodema myrmido* Marseul ドウチビキカワムシ※ III.29(1)  
(アリモドキ科)
372. *Macratris serialis* Marseul アカクビボソムシ VI.11(1), VII.5-9(1-LT)
373. *Anthicomorphus cruralis* Lewis モモキアリモドキ※ V.10-24(FIT-1), IX.5-9(1-LT)
374. *Anthicomorphus niponicus niponicus* Lewis クロチビアリモドキ※ III.29-IV.12(FIT-1), IX.5-9(1-LT) 当地のものは背面色彩が薄い褐色で、前種とよく似ているものが多い。前種に比べ眼が大きい。前種はこの属としては眼が小さい。
375. *Anthelephila bramina coiffaiti* (Bonadona) ホソクビアリモドキ III.29(1), IX.5(1)
376. *Stricticollis valgipes* (Marseul) ヨツボシホソアリモドキ V.2(1), VI.11(1), IX.5(1)
377. *Omonadus confucii confucii* (Marseul) ウスモンホソアリモドキ VI.3-7(1-LT) VI.3-7(1-LT)
378. *Sapintus marseuli* (Pic) アカモンホソアリモドキ VII.2-5(1-LT), VII.5-9(1-LT), IX.2-5(1-LT)  
(ニセクビボソムシ)
379. *Phytobaenus amabilis scapularis* (Marseul) マダラニセクビボソムシ IX.5-9(1-LT)  
(ハナノミダマシ科)
380. *Anapsis marseuli* Csiki クロフナガタハナノミ IV.

- 12(1)  
(カミキリムシ科)
381. *Aegosoma sinicum sinicum* (White) ウスバカミキリ VIII.5(2-U字溝) ばらばらの状態で頭部や前胸部を欠いていたが、上翅などは残っていたので本種と同定した。
382. *Prionus sejunctus* Hayashi ニセノコギリカミキリ VII.5-9(1-LT)
383. *Lemula decipiens* Bates キバネニセハムシハナカミキリ※ IV.12(1)
384. *Pidonia aegrota aegrota* (Bates) チャイロヒメハナカミキリ IV.17(1)
385. *Leptura modicenotata* (Pic) ツマグロハナカミキリ V.2(1)
386. *Aeolesthes chrysothrix chrysothrix* (Bates) キマダラカミキリ V.10(1), VI.3(1), VII.29-VIII.2(1-LT)  
5月のものはホソバタブの樹液, 6月のものはネズミモチの花から得られた。
387. *Margites fulvidus* (Pascoe) キイロミヤマカミキリ VI.3(1), VII.2-5(1-LT) クリの花から得られた。かつては平地や低山のクリの花によく見られていた種だが、1990年代を最後に全く見ることができなくなった。2006年に大島で採集されて以来、県内から記録がなかった種。
388. *Allotraeus sphaerioninus* Bates トビイロカミキリ V.10(1) クリの花。
389. *Nysina rufescens* (Pic) トゲヒゲトビイロカミキリ V.29(2) クリの花。
390. *Stenodryas clavigera clavigera* Bates アメイロカミキリ VI.7(1) ミズキの花。
391. *Ceresium sinicum* A. White テツイロヒメカミキリ IV.26(1), IV.12(1) クリの枯れ枝などに多い。
392. *Ceresium longicorne* Pic ヒゲナガヒメカミキリ VI.11(1), VI.19(1) マテバシイの枯れ枝に見られた。
393. *Stenhomalus cleroides* Bates カッコウメダカカミキリ V.2(1)
394. *Xylotrechus rufilius rufilus* Bates クビアカトラカミキリ VI.19(1)
395. *Xylotrechus lautus lautus* Matsushita ズマルトラカミキリ III.29(1), IV.12(3) 一般には少ない種。
396. *Perissus kiusiuensis kiusiuensis* K. Ohbayashi キュウシュウチビトラカミキリ VI.19(5), VII.5(1)
397. *Clytus melaenus* Bates シラケトラカミキリ IV.17(1), V.10(1)  
伐採されたコナラの小枝から得られた。稀な種で、低山からの記録が多いが、2000年以降は四王寺山と筑前町砥上岳から知られるのみ。
398. *Chlorophorus quinquefasciatus* (Laporte & Gory) ヨツスジトラカミキリ※ VII.5(1) タラの花。
399. *Rhaphuma diminuta diminuta* (Bates) ヒメクロトラカミキリ※ V.16(1)
400. *Grammographus notabilis notabilis* (Pascoe) キイロトラカミキリ V.10(1)
401. *Demonax transilis* Bates トゲヒゲトラカミキリ IV.17(1), V.10-24(FIT-1)
402. *Purpuricenus temminckii* (Guérin-Méneville) ベニカミキリ V.10(1)
403. *Dere thoracica* White ホタルカミキリ V.10(1)
404. *Kurarua rhopalophoroides* Hayashi クビアカモモブトホソカミキリ V.29(1), IV.26-V.10(FIT-1) 雌による単為生殖をすることで知られる。平地性の稀な種で、福岡県 RDB2014では準絶滅危惧種に指定されている。
405. *Mesosa japonica* Bates ゴマフカミキリ V.2(2)
406. *Mesosa perplexa* Pascoe チャゴマフカミキリ VII.22(1) 産地は局所的で、福岡市舞鶴公内は有名な産地の一つである。兵庫県、福岡県、長崎県など港湾都市部、またはその周辺地域からの記録が多く、中国や台湾からの移入種と考えられている。
407. *Mesosa longipennis* Bates ナガゴマフカミキリ V.29(1)
408. *Mesosa hirsuta hirsuta* Bates カタジロゴマフカミキリ VI.19(1), VII.25(1), VII.25(1)
409. *Atimura japonica* Bates コブスジサビカミキリ IV.17(1)
410. *Asaperda rufipes* Bates キクスイモドキカミキリ IV.17(1)
411. *Aulaconotus pachypezoides* Thomson タテジマカミキリ V.2(1) ハリギリから得られた。
412. *Pterolophia caudata caudata* (Bates) トガリシロオビサビカミキリ V.29(1)
413. *Pterolophia annulata* (Chevrolat) ワモンサビカミキリ

- り IV.12(1), IV.17(1)
414. *Pterolophia jugosa jugosa* (Bates) ナカジロサビカミキリ V.2(1)
415. *Egesina bifasciana bifasciana* (Matsushita) ニイジマチビカミキリ VI.7(1) クリの枯れ木.
416. *Eupromus ruber* (Dalman) ホシベニカミキリ V.16(1) タブに多い.
417. *Acalolepta sejuncta sejuncta* Bates ニセビロウドカミキリ※ V.29(1)
418. *Batocera lineolata* Chevrolat シロスジカミキリ VI.7(1) ウバメガシに見られた.
419. *Apriona japonica* Thomson クワカミキリ VIII.2-5(1-LT)
420. *Anoplophora malasiaca* (Thomson) ゴマダラカミキリ VII.9(1) ムクロジの葉に静止していた.
421. *Monochamus subfasciatus subfasciatus* (Bates) ヒメヒゲナガカミキリ V.29(1)
422. *Rhodopina lewisii lewisii* (Bates) セミスジコブヒゲカミキリ V.16(1)
423. *Rhopaloscelis unifasciatus* Blessig ヒトオビアラゲカミキリ※ IV.17(1)
424. *Arhopaloscelis nipponensis* (Pic) フタオビアラゲカミキリ※ VI.3(1)
425. *Sciades tonsus* (Bates) ケシカミキリ V.24(2), V.29(3), VI.3(4) クリの枯れ枝に多い.
426. *Exocentrus galloisi* Matsushita ガロアケシカミキリ V.29(1)
427. *Exocentrus lineatus* Bates アトモンマルケシカミキリ V.24(1)
428. *Exocentrus fasciolatus* Bates クモガタケシカミキリ VII.29(2)
429. *Eutetrappa ocelota* (Bates) ヤツメカミキリ V.10(1) ソメイヨシノに見られた.
430. *Paraglenea fortunei* (Saunders) ラミーカミキリ VI.3(1) この1頭を見かけただけ.  
(ハムシ科)
431. *Lilioceris rugata* (Baly) キイロクビナガハムシ V.29(1) ヤマイモに見られた.
432. *Lilioceris merdigera* (Linnaeus) ユリクビナガハムシ V.10(2), V.16(1), V.24(2)  
池の傍にあった大形のユリ(オニユリの仲間)に多数見られた. 花を確認したが、成長するたびに草刈りの巻き添えになり、とうとう花を確認できなかった. 植栽された大形のユリ類に見られ、普通、山野で見るとは少ない.
433. *Lilioceris subpolita* (Motschulsky) アカクビナガハムシ V.16(1) サルトリイバラに見られる.
434. *Lema diversa* Baly アカクビボソハムシ V.2(1), V.10(1), IX.5(1) ツククサ.
435. *Lema honorata* Baly ヤマイモハムシ V.2(1)
436. *Oulema atrosuturalis* (Pic) セスジクビボソハムシ VI.11(1) あまり多くない種である.
437. *Cryptocephalus approximatus* Baly バラルリツツハムシ IV.17(1), VI.7(1)
438. *Cryptocephalus luridipennis pallescens* Kraatz クロボシツツハムシ IV.12(1)
439. *Cryptocephalus nobilis* Kraatz ヨツモンクロツツハムシ V.24(1) クリの花.
440. *Cryptocephalus perelegans perelegans* Baly キボシツツハムシ V.24(2) アキニレ.
441. *Chlamisus spilotus* (Baly) ムシクソハムシ※ IV.12(1)
442. *Chlamisus diminutus* (Gressitt) ヒメコブハムシ IV.26(1)
443. *Chlamisus interjectus* (Baly) ミズキコブハムシ VI.11(1), IX.5(1) ミズキの葉を加害する.
444. *Oomorphoides nigrocaeruleus* (Baly) アオグロツヤハムシ※ III.15(1) キヅタ.
445. *Oomorphoides cupreatus* (Baly) ドウガネツヤハムシ IV.12(1) タラノキに普通.
446. *Cleoporus lateralis* (Motschulsky) サクラサルハムシ VI.3(2), VI.11(5)  
普通種の割にあまり見ない種だが、事務棟近くのソメイヨシノに大発生していた.
447. *Nodina chalcosoma* Baly アオガネヒメサルハムシ V.29(1) クリの花.
448. *Basilepta fulvipes* (Motschulsky) アオバネサルハムシ V.24(1), V.29(1)
449. *Pagria flavopustulata* (Baly) ツヤキバネサルハムシ V.29(2)
450. *Pagria ussuriensis* Moseyko et Medvedev マルキバネサルハムシ IV.17(1), VI.3(1) クズ.

451. *Heteraspis lewisii* (Baly) ドウガネサルハムシ IV.17(1)
452. *Demotina fasciata* (Baly) クロオビカサハラハムシ ※ III.29(1)
453. *Demotina fasciculata* Baly マダラアラゲサルハムシ ※ III.15(1), III.29(1)
454. *Demotina modesta* Baly カサハラハムシ IV.17(1), IV.26(4), V.16(1)
455. *Demotina bipunctata* Jacoby フタモンアラゲサルハムシ ※ III.29(1), IV.12(1), VIII.5-9(4-LT)
456. *Acrothinium gaschkevitchii gaschkevitchii* (Motschulsky) アカガネサルハムシ IV.17(1) 植栽されたブドウに多数見られた。
457. *Lypesthes ater* (Motschulsky) リンゴコフキハムシ V.24(1)
458. *Lypesthes lewisi* (Baly) ケブカサルハムシ IV.12(1)
459. *Fidia japonica* (Ohno) ニホンケブカサルハムシ IV.17(1) 稀な種である。
460. *Gastrophysa atrocyanea* Motschulsky コガタルリハムシ V.10(1)
461. *Chrysolina aurichalcea* (Mannerheim) ヨモギハムシ V.2(1) U字溝でもよく見られた。
462. *Chrysolina exanthematica exanthematica* (Wiedemann) ハッカハムシ VII.22(1), VIII.21(1-U字溝) あまり見ない種で、食草のハッカ類は園芸種も含めて見かけなかった。
463. *Gonioctena rubripennis* Baly フジハムシ IV.26(1)
464. *Gonioctena nigroplagiata* Baly ヤツボシハムシ IV.17(6) エノキに多く、かなり加害されているのを見た。かつて九州本土からの分布は知られてなかったが、2015年頃から福岡県北部で発見されるようになった。本州からの移入の可能性が高い。
465. *Galerucella grisescens* (Joannis) イチゴハムシ IV.12(1), V.10(1)
466. *Pyrrhalta tibialis* (Baly) エノキハムシ VI.11(2) エノキに多数見られた。
467. *Tricholochmaea semifulva* (Jacoby) アカタデハムシ V.10(1)
468. *Pyrrhalta humeralis* (Chen) サンゴジュハムシ V.29(1)
469. *Xanthogaleruca maculicollis* (Motschulsky) ニレハムシ IV.12(1), V.10(1), VI.19(1)
470. *Ophraella communis* LeSage ブタクサハムシ VI.7(2) 日本には1990年代にアメリカから侵入。事務棟南の繁茂するブタクサに非常に多く見られた。
471. *Aulacophora indica* (Gmelin) ウリハムシ IV.26(1)
472. *Aulacophora nigripennis* Motschulsky クロウリハムシ ※ III.29(1)
473. *Fleutiauxia armata* (Baly) クワハムシ IV.12(1)
474. *Paridea oculata* Laboissière ヨツボシハムシ IV.12(1), VIII.9(1-U字溝), VIII.21(3) カラスウリなどが食草としてあげられているが、筆者自身はつきり確認できずにいた。今回、8月21日にはスズメウリに多数発生し、葉をぼろぼろに食害しているのを観察した。
475. *Paridea angulicollis* (Motschulsky) アトボシハムシ IV.17(1), V.24(1), VII.22(1)
476. *Morphosphaera japonica* (Hornstedt) イチモンジハムシ IV.12(1)
477. *Hesperomorpha hirsuta* (Jacoby) ケブカクロナガハムシ IV.17(1)
478. *Luperus moorii* Baly クロウスバハムシ IV.12(1)
479. *Medythia nigrobilineata* (Motschulsky) フタスジヒメハムシ III.29(1), V.29(1), IX.2(1)
480. *Taphinellina flaviventris* (Motschulsky) キバラヒメハムシ ※ V.2(2)
481. *Taphinellina chujoi* (Nakane) ニセキバラヒメハムシ V.16(1)
482. *Atrachya menetriesi* (Faldermann) ウリハムシモドキ VIII.9(1-U字溝)
483. *Gallerucida bifasciata* Motschulsky イタドリハムシ VI.11(2) U字溝にもよく見られた。
484. *Altica caerulea* (Baly) ヒメカミナリハムシ IV.17(1), VIII.21(2-U字溝)
485. *Trachytetra lewisi* (Jacoby) アラハダトビハムシ V.2(1)
486. *Phygasia fulvipennis* (Baly) チャバネツヤハムシ IV.26(1) キジョラン。
487. *Pseudodera xanthospila* Baly フタホシオオノミハムシ IV.12(1), V.10(1)
488. *Aphthona strigosa* Baly サメハダツブノミハムシ

- III.29(1), VI.11(2) アカメガシワに多い。
489. *Hemipyxis plagioderoides* (Motschulsky) ヒゲナガリマルノミハムシ V.10(1)
490. *Argopistes coccinelliformis* Csiki ヘリグロテントウノミハムシ III.15(1) ヒイラギ, ヒイラギモクセイに多い。
491. *Argopus punctipennis punctipennis* (Motschulsky) アカイロマルノミハムシ※ IV.17(1)
492. *Pseudoliprus hirtus* (Baly) クビボソトビハムシ V.16(1)
493. *Dactylispa subquadrata subquadrata* (Baly) カタビロトゲハムシ V.2(1) コナラに多い。
494. *Dactylispa issikii* Chûjô タケトゲハムシ III.29(1)
495. *Cassida fuscorufa* Motschulsky ヒメジンガサハムシ VII.22(1) ヨモギ。
496. *Lacoptera nepalensis* Boheman ヨツモンカメノコハムシ IV.12(1) 国内での分布は沖縄であったが, 徐々に北上, 福岡県では2011年に大野城市で発見された。ノアサガオをひどく加害し, 現在では県内に広く分布する。
497. *Cassida japana* Baly イノコズチカメノコハムシ V.2(1)
498. *Bruchidius japonicus* (Harold) サムライマメゾウムシ IX.5(1) ヌスビトハギの花にいた。  
(ヒゲナガゾウムシ科)
499. *Ozotomerus japonicus japonicus* Sharp ウスモンツツヒゲナガゾウムシ※ V.16(3)  
コナラの枯れ枝に多くみられ, 当地では最も普通に見られるヒゲナガゾウムシである。
500. *Exillis japonicola* Nakane イトヒゲナガゾウムシ VI.3(1), VI.19(1)
501. *Xylinada striatifrons* (Jordan) ナガフトヒゲナガゾウムシ VII.2-5(1-LT), VIII.5-9(1-LT)  
城戸 (2024)。福岡県初記録として, データを再録した。次種と共に, ナラ枯れで伐採されたコナラが置かれているところに設置したトラップに飛来した。九州からは宮崎, 大分, 長崎の各県からの記録がある。
502. *Dendropemon nagaai* (Morimoto) ツシマオノヒゲナガゾウムシ VII.5-9(1-LT) 極めて稀な種で, 宗像市城山・吉留, 立花山, 清水山の記録がある。自然状態の良い照葉樹林が残る地で得られている。ライ
- トにも飛来する。
503. *Litocerus multiguttatus* (Nakane) コモンマダラヒゲナガゾウムシ IV.26-V.10(FIT-1)
504. *Tropideres roelofsi* (Lewis) クロフヒゲナガゾウムシ ※ V.2(1)
505. *Autotropis distinguendus* (Sharp) スネアカヒゲナガゾウムシ IV.17(1)
506. *Rhaphitropis guttifer guttifer* (Sharp) コモンヒメヒゲナガゾウムシ V.2(1)
507. *Unciferina japonica* Morimoto クロホシチビヒゲナガゾウムシ V.24(1)
508. *Phaulimia confinis* (Sharp) シリジロメナガヒゲナガゾウムシ V.16(1), V.29(3), VI.19(1)
509. *Habrissus unciferoides* (Nakane) ネプトヒゲナガゾウムシ※ IV.26-V.10(FIT-1)  
(オトシブミ科)
510. *Agomadaranus pardalis* (Vollenhoven) ゴマダラオトシブミ V.29(1), VI.3(1) クリに多い。
511. *Paroplapoderus vanvolxemi* (Roelofs) ヒメゴマダラオトシブミ V.24(1) エノキにいるが稀。
512. *Compsapoderus erythrogaster* (Snellen van Vollenhoven) ヒメクロオトシブミ IV.26(1)
513. *Cycnotrachelodus roelofsi* (Harold) エゴツルクビオトシブミ V.10(1) エゴノキに見られる。
514. *Phialodes rufipennis* Roelofs アシナガオトシブミ IV.17(1) アラカシ。
515. *Euops splendidus* Voss カシルリオトシブミ VI.19(1)
516. *Pseudomesauletes uniformis* (Roelofs) クロケシツブチョッキリ VIII.9(1)
517. *Aderorhinus crioceroides* (Roelofs) チャイロチョッキリ IV.17(1) マテバシイ, クリに多い。
518. *Eugnampobius aurifrons* (Roelofs) ホソチョッキリ VI.7(1)
519. *Deporaus unicolor* (Roelofs) コナライクビチョッキリ IV.12(1), V.2(1)
520. *Lasiorhynchites brevirostris* (Roelofs) クチブトチョッキリ IV.17(1), V.2(1)
521. *Cyllorhynchites ursulus ursulus* (Roelofs) ハイイロチョッキリ VI.19(1) コナラ, クリに多い。
522. *Japanorhynchites caeligenus* (Y. Sawada) カゼチョッキリ 10-24.V.10-24(1-FIT)

城戸 (2024). 福岡県初記録として. データを再録した. 本種は宮崎県高千穂の峰から記載され, 極めて稀な種で, その後屋久島愛子岳からも記録されている. いずれも高山の吹き上げで得られていて, 当地の様な平地の照葉樹が多い場所から得られたのには大変驚いた. 当地には宮崎演習林 (椎葉村) から移植された樹木や, 各地から移植された樹木も多く, これらに起因している可能性もある.

(ミツギリゾウムシ科)

523. *Baryrhynchus poweri* Roelofs ミツギリゾウムシ VI.3(1)

(ホソクチゾウムシ科)

524. *Piezotrachelus japonicus* (Roelofs) アザミホソクチゾウムシ IV.26(1) 池の周辺にあったキツネノアザミに多数見られた.

525. *Pseudopiezotrachelus placidus* (Faust) ヒゲナガホソクチゾウムシ V.29(1), X.25(1)

(チビゾウムシ科)

526. *Nanophyes pallipes* Roelofs モンチビゾウムシ VIII.5-9(1-LT)

(ゾウムシ科)

527. *Phyllobius rotundicollis* Roelofs キュウシュウヒゲボソゾウムシ IV.17(1), IV.17(1), IV.17(1)

528. *Nothomylocerus griseus* (Roelofs) カシワクチブトゾウムシ IX.5(1)

529. *Lepidepistomodes fumosus* (Faust) ケブカクチブトゾウムシ IV.17(1)

530. *Phyllolytus variabilis* (Roelofs) オオクチブトゾウムシ VI.19(1)

この日から急に普通に見られるようになった. 発生のはじめらしい.

531. *Lepidepistomodes griseoides* (Zumpt) コカシワクチブトゾウムシ IV.12(3), V.24(1)

532. *Pseudoedophrys hilleri* (Faust) ヒレルクチブトゾウムシ III.15(1)

533. *Myosides seriehispidus* Roelofs チビヒョウタンゾウムシ※ IX.5(1- 落葉中), IX.24(1- 落葉中)

534. *Trachyphloeosoma advena* Zimmerman ホソゲチビツチゾウムシ※ IX.24(1- 落葉中)

535. *Trachyphilus* sp. ツチゾウムシ属の一種※ IX.5(2- 落葉中), IX.24(9- 落葉中) この属の種は落葉中に

生息し, 後翅は退化し非常に狭い範囲で種分化をしていることが知られている. 当地に近い犬鳴山, 立花山, 油山からそれぞれ別種が知られている. また, スギ林などの人工林にも普通に生息し, わずかな落葉や土壌を移動するだけで直ちに種のかく乱に結びつくものと思われる.

536. *Episomus turritus turritus* (Gyllenhal) シロコブゾウムシ IV.17(1) クズ.

537. *Dermatoxenus caesicollis* (Gyllenhal) ヒメシロコブゾウムシ VIII.9(1) タラノキ.

538. *Sympiezomias lewisi lewisi* (Roelofs) ワモンヒョウタンゾウムシ IV.17(1)

この時期だけ, ノアザミから多数得られた. ノアザミの花がなくなつてからは見ない.

539. *Pseudocneorhinus bifasciatus* Roelofs スグリゾウムシ IV.17(1), IX.5(2)

540. *Eugnathus distinctus* Roelofs コフキゾウムシ IV.17(1) クズ.

541. *Sitona japonicus* Roelofs チビコフキゾウムシ IV.26(3), V.2(1)

542. *Listroderes costirostris* Schoenherr ヤサイゾウムシ VI.7(2)

1942年に日本に侵入した外来種で福岡県では1951年に行橋市と築城町に発見された種. ビオトープ近くのブタクサから得られた. 多い.

543. *Hypera postica* (Gyllenhal) アルファルファタコゾウムシ IV.26(1)

日本では1982年6月に福岡空港周辺で初めて確認された外来種. 多い.

544. *Hypera basalis* (Voss) ハコベタコゾウムシ IV.17(1)

545. *Phaeopholus ornatus* Roelofs ミスジマルゾウムシ V.16(2)

546. *Phaeopholus major* Roelofs オオミスジマルゾウムシ IV.17(1)

前種と共にタブやホソバタブに見られるが, この地では本種の方が多くみられる.

547. *Lixus acutipennis* (Roelofs) ハスジカツオゾウムシ VI.11(1), VI.11(1)

548. *Sternuchopsis trifida* (Pascoe) オジロアシナガゾウムシ IV.12(1) クズ.

549. *Merus erro* (Pascoe) ホホジロアシナガゾウムシ  
IV.26(1), VI.11(1) ヌルデ.
550. *Orchestes koltzei* Faust カシワノミゾウムシ V.24  
(1)
551. *Orchestes horii* (Kôno) エノキノミゾウムシ IV.12  
(1), VI.11(1) エノキ.
552. *Orchestes excellens* Roelofs フトノミゾウムシ V.10  
(2)
553. *Orchestes sanguinipes* Roelofs アカアシノミゾウム  
シ V.10(1) ケヤキ.
554. *Orchestes galloisi* Kôno ガロアノミゾウムシ V.24  
(1), V.29(1)
555. *Orsophagus trifasciatus* Roelofs オビデオゾウムシ  
IV.26(1) センダンに多い.
556. *Ochyromera japonica* (Roelofs) モンアシブトゾウム  
シ III.29(3), IV.12(4), V.24(6)VI, I.29(1)  
一般には珍しい種だが、当地ではイヌマキからよ  
く得られた.
557. *Endaeus flavidus* Kojima & Morimoto キイロアシブ  
トゾウムシ※ V.10(1)
558. *Anthonomus bisignifer* Schenkling イチゴハナゾウム  
シ III.29(1) ノイバラに多い.
559. *Archarius roelofsi* (Heller) レロフチビシギゾウムシ  
V.10-24(FIT-1), V.24-VI.7(FIT-1)
560. *Archarius pictus* (Roelofs) ジュウジチビシギゾウム  
シ IV.26(3)
561. *Curculio funebris* (Roelofs) イヌビワシギゾウムシ  
IV.17(1)  
イヌビワにいる普通種だが、当地では少ない.
562. *Curculio dentipes* (Roelofs) コナラシギゾウムシ  
IV.17(2), IV.26(1) コナラに多い.
563. *Curculio hilgendorfi* (Harold) シイシギゾウムシ  
IX.24(3)  
シイ類に見られるが少ない種である. 9月から10  
月に成虫が見られる.
564. *Baris kidoi* Yoshihara チャマダラヒメゾウムシ  
VIII.21(1)  
福岡県新宮町相島から発見された種で、イノコズ  
チから採集した.
565. *Baris ezoana* Kôno エゾヒメゾウムシ V.2(2),  
V.24(2)
- ヨモギにいる普通種だが、当地では少ない.
566. *Manilabaris armipes* (Roelofs) トゲアシヒメゾウム  
シ IV.17(1), V.24(1), V.29(2)  
クリの花によく見られたが、7月に入ってから  
カラスウリに多数見られた.
567. *Rhinoncus jakovlevi* Faust ギシギシクチブトサルゾ  
ウムシ IV.26(1)
568. *Rhinoncus nigrotibialis* Wagner コブナシクチブトサ  
ルゾウムシ V.10(2), IX.2(4), IX.5(1)  
前種と共に、ピオトープ付近のタデ類に多数見ら  
れた.
569. *Trichocoeliodes excavatus* (Huetache) ケナガサルゾ  
ウムシ VI.3(1) クリの花.
570. *Homorosoma asperum* (Roelofs) タデトゲサルゾウ  
ムシ V.10(1), VII.9(1) タデ類.
571. *Metialma signifera* Pascoe ヒラセクモゾウムシ V.2  
(2) ヤブマオに普通に見られる.
572. *Egiona picta* (Roelofs) クロホシタマクモゾウムシ  
III.15-29(FIT-1), IV.12-26(FIT-2)
573. *Acicnemis palliata* Pascoe ウスモンカレキゾウムシ  
IV.17(1)
574. *Acicnemis suturalis* Roelofs ナカスジカレキゾウムシ  
V.2(1)  
前種と共に、枯れたヤマフジのつるに多い.
575. *Kobuzo rectirostris* (Roelofs) アカコブコブゾウムシ  
IV.12(1), VI.19(1), VII.5(3), VII.25(1), VII.25(1),  
VIII.21(3), IX.2(2), IX.5(5)  
一般にはあまり多くない種だが、ウバメガシ、シ  
ラカシ、アラカシからよく得られた.
576. *Pimelocerus perforatus perforates* (Roelofs) オリーブ  
アナアキゾウムシ V.29(1) ネズミモチ
577. *Pimelocerus hylobioides* (Desbrochers) クスアナアキ  
ゾウムシ VII.25-29(1-BT) ホソバタブに設置した  
バナナトラップで得られた.
578. *Rhadinomerus annulipes* (Roelofs) アカナガクチカク  
シゾウムシ IV.26-V.10(FIT-1), VII.5-9(1-LT)
579. *Rhadinomerus subovatus* Morimoto マルミナガクチ  
カクシゾウムシ VII.5-9(1-LT)
580. *Rhadinomerus unmon unmon* Nakane ウンモンナガクチ  
カクシゾウムシ VII.29-VIII.2(1-LT), IX.2-5(1-LT)
581. *Deiradocranus setosus* (Morimoto) チビクチカクシ

ゾウムシ IX.5(1)

582. *Colobodes valbum* Roelofs ハイイロトゲトゲゾウムシ IV.17(2)

枯れたアケビのつるに見られる。

583. *Simulatacalles simulator* (Roelofs) ヒサゴクチカクシゾウムシ※ IV.26(1)

584. *Ectatorhinus adamsii* Pascoe マダラアシゾウムシ※ VII.5(1) アキニレの樹液

585. *Cechania eremita* Pascoe ツツクチカクシゾウムシ IV.26-V.10(FIT-1), V.29(1), IX.5(1)

586. *Sclerolips maculicollis* (Morimoto) モンクチカクシゾウムシ III.29(1)

587. *Sternochetus navicularis* (Roelofs) フナガタクチカクシゾウムシ IV.12(1)

588. *Rhadinopus sulcatostrigatus* (Roelofs) アラハダクチカクシゾウムシ※ IV.12(1)

589. *Caenocryptorrhynchus frontalis* Morimoto アタマクチカクシゾウムシ※ VII.5-19(FIT-1)

590. *Stenoscelis gracilitarsis* Wollaston マツクチブトクイゾウムシ VII.5-19(FIT-1)

591. *Pholidoforus squamosus* Wollaston メダカケブカクイゾウムシ VI.11(1)

592. *Phloeophagosoma curvirostre* Wollaston ワシバナヒメクイゾウムシ※ IV.12(1), III.29-IV.12(FIT-1)

593. *Sphaerocorynes lewisianus* Wollaston ルイスチャバナキクイゾウムシ III.29(1)

(オサゾウムシ科)

594. *Sipalinus gigas gigas* (Fabricius) オオゾウムシ VIII.2-5(1-LT)

595. *Sphenophorus venatus vestitus* Chittenden シバオサゾウムシ VI.11(1-U字溝), VIII.16(1-U字溝)

アメリカ合衆国大西洋沿海州原産の種で、1979年に沖縄、1980年に福岡県福岡市と古賀市のゴルフ場の芝から発見されている。現在では福岡県各地の低地、河川敷などで発見されている。

596. *Aplotes roelofsi* (Chevrolat) トホシオサゾウムシ IV.26(1) ツユクサに多い。

(ナガキクイムシ科)

597. *Dinoplatypus calamus* Blandford ヨシブエナガキクイムシ III.15-29(FIT-1), VI.3-7(1-LT)

(キクイムシ科)

598. *Scolytoplatypus Mikado* Blandford ミカドキクイムシ VI.3-7(1-LT)

## まとめ

今回調べた地は、全体として標高が低く、風通しが良く、森林は貧弱な二次林が多い地域と言える。深い森林やマント群落に取り囲まれたような薄暗く湿度が高い森林はほとんど見られなかった。そのため、明るい地や乾燥した地、生きた樹木や草に見られる種が多く、暗い森林中や菌類に依存するような種はあまり見られなかった。一方、特異的なこととして、草原内にほぼ自然状態の小さな池があることで、水辺環境に依存する種が多く見られた。また、演習林内のコナラの巨木がいわゆる「ナラ枯れ」の被害を受けていて、それに関連する甲虫も少なくなかった。

さらに、当地の大きな特徴として、二次林のほかに、各地から持ち込まれた標本林、標本木、見本林が随所に見られることがある。例えば、ブナ科だけでもコナラ、アベマキ、イチイガシ、シイ、シラカシ、アラカシ、クリなどが見られ、その花に飛来するコガネムシやカミキリムシなどの甲虫が3月から6月中旬まで、連続的に見られるなどした。また、台湾演習林の森や亜熱帯植物林などでは、普段見かけないような樹木の花が次々に開花し、多くの甲虫が飛来していた。

当地では草原環境はかなりの面積を占める。池を中心に広い草原となり、また、事務棟周辺は草原や芝地となって、草食性の甲虫が多く見られた。ただ、これらの草原は定期的に徹底した草刈りがされていて、ハムシ類は思ったより少なかった。ゴミムシ類は多く見られた。

池は浅くて狭いがスイレンなどが繁茂し、ゲンゴロウやガムシをはじめ多くの水生昆虫が見られた。また、周辺の草原は河川敷に見られるゴミムシ類が多数見られ、筑後川河川敷期から記録された種と共通の種も多く見られた。池から離れた演習林と私有地の境付近数カ所に設置したライトトラップにも水生又は水辺環境に生息する甲虫が多数飛来し、この池の存在は当地の甲虫相の多様性にとって重要なものとなっている。

一方、多様な甲虫が見られた割に個体数が少ないもの

が多かった。今回記録のために採集した個体が普通種と言われるものでもただ1頭しか見いだせなかったものが多数ある。また、当然いるはずの普通種が全く採れないものも多かった。たとえば、大型のオサムシ類（ヒメオサムシが1頭得られただけ）、サクラコガネ、ヒメコガネ、サツマコフキコガネ、ミヤマカミキリなどはついに見ることがなかった。

都市部に近接し、また、空港や港湾が近いいためか、外来種・侵入種が多く見られた。ミナメケモンマルトゲムシ、ムネアカオオクロテントウ、モンクチビルテントウ、ツシママダラテントウ、チャゴマフカミキリ、ブタクサハムシ、ヨツモンカメノコハムシ、アルファルファタコゾウムシ、ヤサイゾウムシ、シバオサゾウムシなど。また、当地では個体数が多い種が多数ある。

「ナラ枯れ」にかかわる種としてカシノナガキクイムシ、チビヒラタムシ類（種数、個体数ともに多い。）、ヒゲナガゾウムシ類などは多かった。

福岡県 RDB2014掲載種は、キイロアトキリゴミムシ、ツノコガネ、クリイロヒゲハナノミ、クビアカモモブトホソカミキリの4種。その他、福岡県初記録の種や学術的に重要な種も多数発見されている。（種の記録で解説し

た。）

以上、「3-1 地表式 FIT（丸山式 FIT）で得られた種」において227種、「3-2 地表式 FIT（丸山式 FIT）以外で得られた種」において598種を記録した。これらを合わせ重複種106種を差し引く（227+598-106）と当地から719種記録したことになる。

筆者は過去に福岡県内各地に置いて同様の調査をしてきたが、1年間で718種というのは決して少ない数ではない。かなり人工的に手を加えられた当地の自然環境ではあるが、そのことが細切れながらいろいろな生息環境を生み出していると考える。個々の種類や個体数は別とし、多くの甲虫はしたたかに生息を続けていると感じたところである。

## 引用文献

城戸克弥, 2024. 九州大学福岡演習林で得られた甲虫5種の記録. 月刊むし, (646): 35-36.

*Received Nov. 11, 2024; accepted Dec. 10, 2024*



福岡演習林事務棟



事務棟から南を望む(中央の山までが敷地)



事務棟西のカシ類の見本林



演習林内の作業道



草原の中のU字溝(草刈りの直後)



草原の中の池(手前斜め横にU字溝が見える)

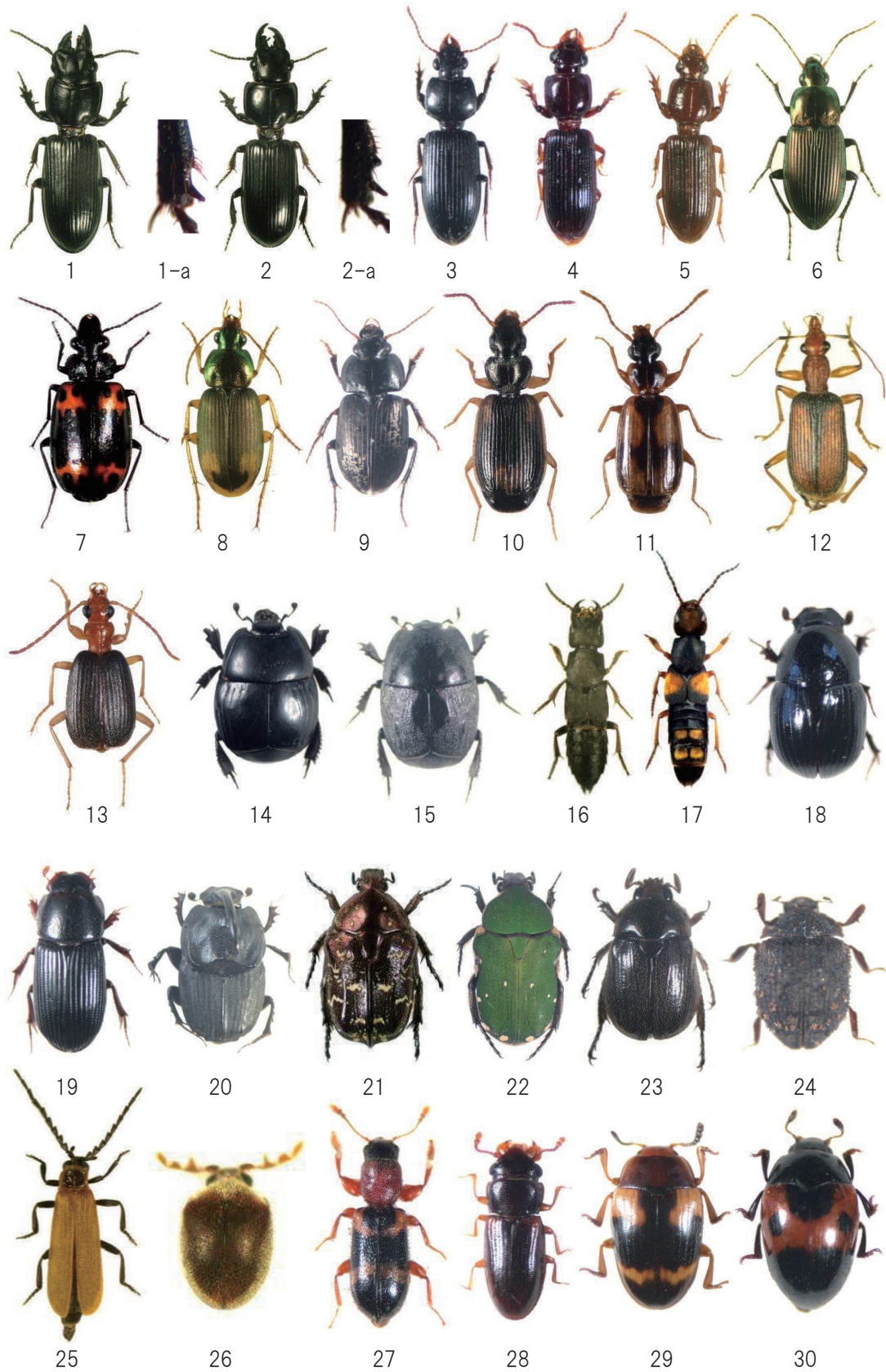


森林内に設置した地表式FIT(丸山式FIT)



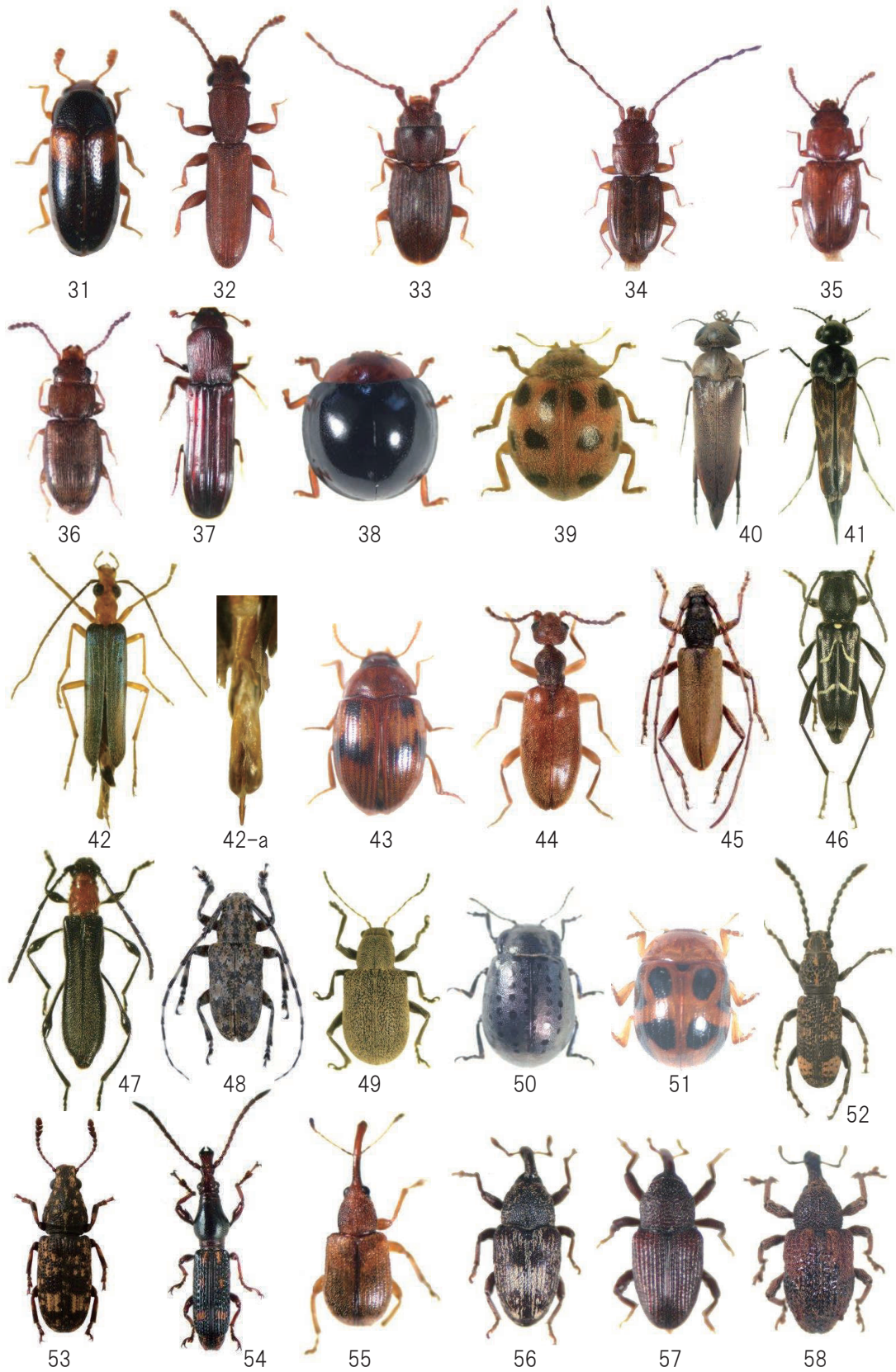
池の周辺に設置したUV-LED ライトトラップ

図版1 演習林内風景とトラップの設置状況



図版2

1 ナガヒョウタンゴミムシ1-a 同中脛節 外縁に1本の棘がある2 ホソヒョウタンゴミムシ2-a 同中脛節 外縁に2本の棘がある3 ツヤヒメヒョウタンゴミムシ  
4 クロヒメヒョウタンゴミムシ5 コヒメヒョウタンゴミムシ6 キンナガゴミムシ7 キノコゴミムシ8 コアトワアオゴミムシ9 トゲアトキリゴミムシ10 キボ  
シアトキリゴミムシ11 キイロアトキリゴミムシ12 アオヘリホソゴミムシ13 ヒメホソクビゴミムシ14 ヤマトエンマムシ15 アラメエンマムシ16 カラカネ  
トガリオズハネカクシ17 キンボシマルズハネカクシ18 マルツヤマグソコガネ19 オオニセツツマグソコガネ20 ツノコガネ21 シラホシハナムグリ22 ホ  
ソコハナムグリ23 ヨツバコガネ24 ミナミケモンマルトゲムシ25 チョウセンハナボタル26 フタイロミゾキノコシバンムシ27 タイワンチビカッコウムシ  
28 ヒラタコメツキモドキ29 キョビチビオキノコムシ30 ツマグロチビオキノコムシ



図版3

31 カグモンホソオオキノコムシ 32 ヒラムネホソヒラタムシ 33 カギヒゲチビヒラタムシ 34 ウスリーチビヒラタムシ 35 キイロチビヒラタムシ 36 ウスグロチビヒラタムシ 37 ヒュウガツツホソカタムシ 38 ムネアカオオクロテントウ 39 ツシマダグラテントウ 40 クリイロヒゲハナノミ 41 オオオビハナノミ 42 シリナガカミキリモドキ 42-a 同腹部末端 43 ヒメオビキノコゴミムシ 44 モモキアリモドキ 45 キイロミヤマカミキリ 46 シラケトラカミキリ 47 クビアカモプトホソカミキリ 48 チャゴマフカミキリ 49 ニホンケブカサルハムシ 50 ハッカハムシ 51 ヤツボシハムシ 52 ナガフトヒゲナガゾウムシ 53 ツシマオノヒゲナガゾウムシ 54 ミツギリゾウムシ 55 カゼチョッキリ 56 チャマダラヒメゾウムシ 57 サビカタビロヒメゾウムシ 58 アカコブコブゾウムシ

## Beetles of the Kasuya Research Forest, Kyushu University

Katsuya KIDO

Collaborative Researcher, Kyushu University Museum:  
6-10-1 Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka City, Fukuoka Prefecture, 812-8581, Japan  
coleop6464@yahoo.co.jp

A survey of beetle species was conducted in the Kasuya Research Forest of Kyushu University from March to October 2024. Using ground-level FIT (Maruyama-style FIT), 227 species were collected, while 598 species were obtained through other collection methods. After accounting for 106 overlapping species between the two methods ( $227 + 598 - 106$ ), a total of 719 species were recorded from the area. This investigation also led to the discovery of numerous species newly recorded in Fukuoka Prefecture and others of significant scientific interest including Red List species.

**Key words:** Sasaguri Town, Satoyama, Coleoptera, First record from Fukuoka Pref.

# 新町遺跡と大友遺跡：筋骨格ストレスマーカーから明らかにする 弥生時代開始期の人々の身体活動

米元 史織

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
yonemoto@museum.kyushu-u.ac.jp

**要旨：**本研究では支石墓を主な墓制とする福岡県糸島市新町遺跡と佐賀県唐津市大友遺跡から出土した古人骨の筋骨格ストレスマーカー (MSMs) を検討した。検討対象部位は上肢下肢の15部位、MSMs の評価は、Hawkey and Merbs (1995) の基準に従っている。カテゴリカル主成分分析を用いて MSMs パターンを分析した結果、大友遺跡出土人骨は、MSMs パターンとしては縄文各集団にやや似ていること、一方で新町遺跡出土人骨の MSMs パターンは弥生時代の各集団、特に響灘沿岸や三国丘陵の人々と類似することが明らかとなった。この結果から、四肢骨の形状という観点からは上肢が下肢よりも相対的に太いという点で共通する傾向を持つといわれていた大友遺跡と新町遺跡だが、MSMs を検討すると若干傾向が異なることが明らかとなった。この差の要因として、新町遺跡の人々は水稲農耕に携わりつつも狩猟や漁撈のような多様な生業活動を行っていた一方で、大友遺跡の人々は、漁撈活動への比重がより高く、水稲農耕のような他生業の内部化を進行 (安室1992, 2001) させるような活動は主流ではなかった可能性が考えられ、弥生時代開始期における両者の生業活動の内容に違いがあった可能性が示唆される。

**キーワード：**筋骨格ストレスマーカー、MSMs、新町遺跡、大友遺跡、弥生時代開始期、生業活動

福岡県糸島市に位置する新町遺跡は形質的な検討が可能な弥生時代早期の人骨が初めて出土した遺跡である。また、佐賀県唐津市大友遺跡 (5次・6次調査) も同様に弥生時代開始期にあたる人骨が数多く出土した遺跡である。本研究では支石墓を主な墓制とするこの2つの遺跡 (図1) から出土した古人骨の筋骨格ストレスマーカー (Musculoskeletal stress markers, 以下 MSMs) を検討する。

まずは各遺跡の位置づけと出土人骨に関する研究をまとめる。

福岡県糸島市に位置する新町遺跡は弥生時代早期の人骨が初めて出土した遺跡である。西側は引津湾に面した砂丘上に位置する。1917年に中山平次郎氏によって報告され (中山1917), その後1986年に志摩町教育委員会が主体となって発掘調査が行われた。新町遺跡や南に隣接する御床松原遺跡が位置する砂丘の北側には幅150mほどの谷間をなす後背湿地があり、それが東側にひらけている。この谷間で稲作を行うには支障はなく、さらに、農耕とともに漁撈・狩猟をまじえた稲作開始期の一般的

様相を呈していたと述べられている (志摩町教育委員会1987)。

この遺跡では弥生時代開始期を象徴する支石墓という墓制が採用されており、人骨が計14体出土した。弥生時代開始期に存在した人の形質的な特徴が明らかになったという点でも極めて有名な遺跡である (中橋・永井1987b, 1989, 田中1991, 米元2022a, 2023)。四肢骨の形質的特徴は、上腕骨の骨幹部の太さ、下肢骨の短さと上腕骨と比べると相対的に細いこと、大腿骨の柱状性が認められたこと、低身長であることなどが指摘されている。この点について中橋・永井 (1987) は、海岸部の遺跡から出土した人骨資料は総じて上腕骨の発達が良い、本例もそうした居住環境と四肢形態の相関を追認させる一例となっていると指摘した。

さらに、新町遺跡と隣接する御床松原遺跡は武末によって海村、農業をあまりせず漁撈活動を基礎に海上交易活動に従事する村、とされており (武末1989, 2009, 2011)、中国銭貨が出土する。御床松原遺跡は弥生時代前期末に

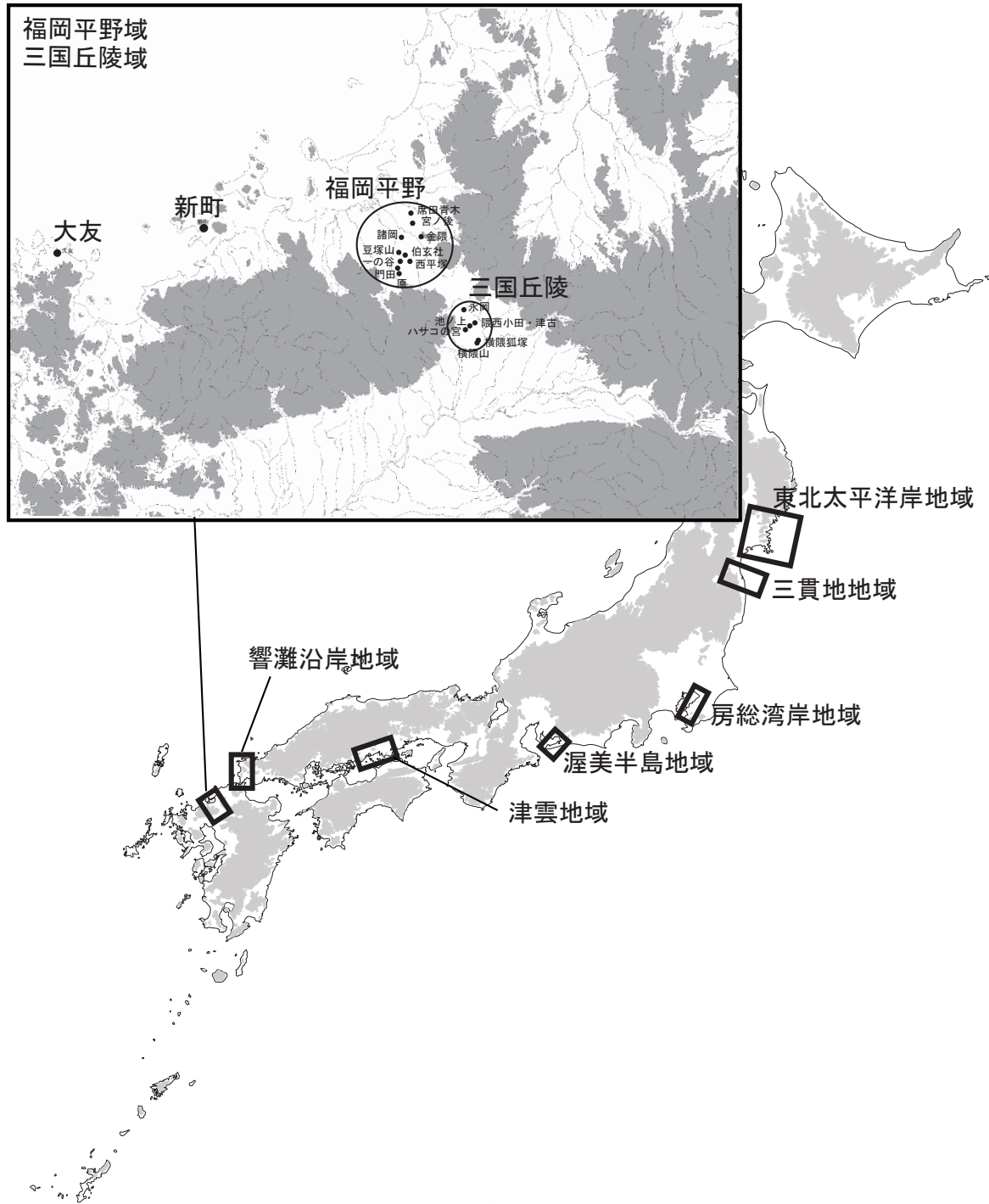


図1 対象資料地図

始まり中・後期と古墳前半期にピークを迎える長期的継続性のある集落である（下條1989）が，中国銭貨に示されるような対外的な交易活動が活発化するの弥生時代後半期とされており，海村の成立時期と新町遺跡出土人骨とは时期的な差異があること、新町遺跡はこの集落の最初の一時期にしか対応しないことは注意が必要であろう。下條（1989）は御床松原遺跡について，洞状の内海がはいりこんでいたと考えられていて農耕地に恵まれて

いないと述べており，この地域の人々にとって農耕が生業の主体をなしたとは考え難い。しかし，漁具以外にも石包丁も頻度は低いが出土しており，小規模ながら水稻農耕を行っていた可能性が示唆されている（下條1989，武末2009）。

佐賀県唐津市大友遺跡は，玄界灘に面する東松浦半島の北端に位置し，遺跡一帯は玄武岩の急崖にある延長約2 kmにおよぶ弧状の入り江で遠浅の海岸砂丘となってい

る(東中川1981)。最初にこの遺跡が発見されたのは1967年、その後1968年から1969年まで地元の研究グループによる発掘調査が行われ、それ以降1985年まで佐賀県教育委員会が主体となって4回にわたって発掘調査が行われた。さらに、1999年から2000年にわたって、平成12年度文部科学省科学研究費(特定領域研究A:代表春成秀爾)の研究の一環として九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室を中心に第5,6次発掘が行われた。

墓地の立地から主に漁撈に生業を依存する人たちであることが想定され、人骨の食性分析からもこの結果は支持されている(三原など2003)。さらに時代を経るごとに次第に穀物依存の度合いが高まることも指摘されている(宮本2003)。大友遺跡出土人骨(第1~4次)については松下・内藤(1989)によって西北九州タイプの弥生人と位置付けられている。また、中橋(2003)も支石墓出土人骨は低顔性が強く低眼窩や広鼻といった形質をもつと指摘した。四肢骨の形態については北部九州・山口地域の農耕を主体としていた人々と比べて、大友遺跡出土人骨は縄文や広田遺跡出土人骨と同様でやや華奢な下肢骨に太い上肢をもつと指摘されている(中橋・永井1989, 松下・内藤1989, 中橋2003)。

これまで、西北九州地域あるいは支石墓に埋葬された弥生時代開始期の人骨の四肢骨の形態に関しては下肢よりも上肢が頑丈という点で共通性が指摘されてきた。考古学的には両遺跡ともに水稲農耕をいち早く受容した糸島平野・唐津平野に近接する(家根1993, 端野2003, 宮地2009, 宮本2012, 下條2014, 三阪2022)が、遺跡周辺は農耕適地とは言い難く、海村や漁村として位置付けられてきた。武末(1989)によると対外交渉の経路上にある海村の人々がある時期に単なる漁民の枠を越えて海上交易活動を行ったことも想定されており、これらの遺跡から出土した人々の身体活動をより詳細に明らかにすることは極めて重要な課題といえる。さらに、新町遺跡に関しては水稲農耕も行っていた可能性も指摘されているように(志摩町教育委員会1987, 中橋・永井1989)、大

友遺跡と新町遺跡とでは生業活動がいくらか異なる可能性もある。そこで、本研究では身体活動をより詳細に検討することが可能なMSMsを用いて、新町遺跡出土人骨と大友遺跡出土人骨の比較を行うこととした。

## 資料と方法

### 資料

新町遺跡と大友遺跡で対象となった個体は表1の通りである。また比較対象として縄文時代と弥生時代の各地域の集団を用いた。比較群の詳細については米元(2016a, b)を参照されたい。新町遺跡と大友遺跡では老年個体がみられなかったことから比較群でも老年個体を分析に用いていない。新町遺跡出土人骨は、9号, 11号, 19号-1と2, 24号を対象とした。各個体の残存状況は良好ではなく、左右ともに四肢の一部が部分的に残るのみである。そのため、平均値というよりもむしろ各個体で残存していた部位を寄せ集めたような形となってしまう。さらに新町遺跡の人々に関しては右側よりも左側の方が検討可能な部位が多かったため左側を用いる。大友遺跡は、2号支石墓1号甕棺, 5号支石墓, 6号, 1号支石墓1号甕棺, 3号支石墓を対象とした。各個体の残存状況は良好ではなく、2号支石墓1号甕棺以外の個体は四肢の一部が部分的に残るのみである。

### 方法

年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』(九州大学医学部解剖学第二講座編1988)記載の区分に従い、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上とした。年齢の推定は、主に恥骨結合面と耳状面を基準に推定を行った。恥骨結合面による年齢推定にはBrooks and Suchey(1990), Sakaue(2006)を、耳状面はLovejoy et al.(1985)の方法を用い、上記3区分に分類した。性判定に関しては、骨盤が

表1 新町遺跡と大友遺跡から出土した対象人骨

No.	新町遺跡					大友遺跡				
	9	11	19-1	19-2	K24-1	2号支石墓1号甕棺	5号支石墓	6号	1号支石墓1号甕棺	3号支石墓
性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
年齢	熟年	成年	熟年	成年	熟年	熟年	成年	熟年	成年	熟年
時期	前期初頭	前期初頭	早期	早期	前期初頭	前期末	弥生早期	弥生早期	弥生前期後半	弥生早期
備考					左大腿骨に石鏃嵌入					

残存している場合は Buikstra and Ubelaker (1994) を基準に、恥骨下角の角度・大坐骨切痕のサイズ・前耳状溝の有無、Phenice (1969) の腹側弧、恥骨下陥凹、恥骨下枝内側面隆起に基づいて判定を行った。その後眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起の発達と矛盾がないかを確認した。本稿では男性の右側のみを対象とするが、新町遺跡出土人骨のみ残存状況の関係で左側の値を用いる。

本研究では古人骨から身体活動を推察する1つの方法である MSMs を用いた。この MSMs 研究は、骨の機能適応モデルに基づいている。つまり筋使用あるいは筋にかかる負荷が強ければ強いほど、その負荷に適応するために筋粗面の複雑性は増していくということを前提に、その複雑さの程度を基準としたスコアを用いて、全身にわたる各付着部位の評価を行い、各部位の使用頻度・負荷の強弱を読み取り、そこから長期継続的な体の使い方を推察しようとする手法である。本方法は、筋肉や筋の伸び縮みによる体の動きと直接関係するかどうか未明であるとする Coimbra 大学の研究者達によってより中立的な enthesal changes という名称に置き換えるべきであるという主張がなされ、enthesal changes という用語が定着しつ

つある (Mariotti et al. 2004, 2007; Jurmain and Villotte 2010 等)。しかし、筋骨格系とは、骨格系と筋系の総称であり、骨格系は骨とそれをつなぐ靭帯・関節・軟骨を、筋系は筋と腱を含む用語であり、筋 (正確には腱) 付着部を観察している以上過不足のない言葉であると判断し、本研究では、MSMs という名称を用いる。

MSMs の評価対象とした部位は、上肢・下肢16 (カテゴリカル主成分で用いたのは15部位) 部位の筋付着部の MSMs であり (図2)、新町遺跡出土人骨は左側の、それ以外は右側の MSMs スコアの値のみを用いている。今回統計解析から除くこととなった腸腰筋 (図2-10) は、これまでの研究から考えて極めて重要な部位である (米元 2012b, 2022) が、新町遺跡出土人骨で観察できる個体が無かったためやむを得ず対象外とした。そのため比較対象集団の MSMs パターンや大友遺跡出土人骨の折れ線グラフでは示している。

MSMs の評価は、Hawkey and Merbs (1995) の基準に従い、付着部の隆起としてあらわされる頑丈性 (Robusticity) と、pitting や溝を形成する Stress lesions をそれぞれ3段階、最終的にスコア1から6までのグレー

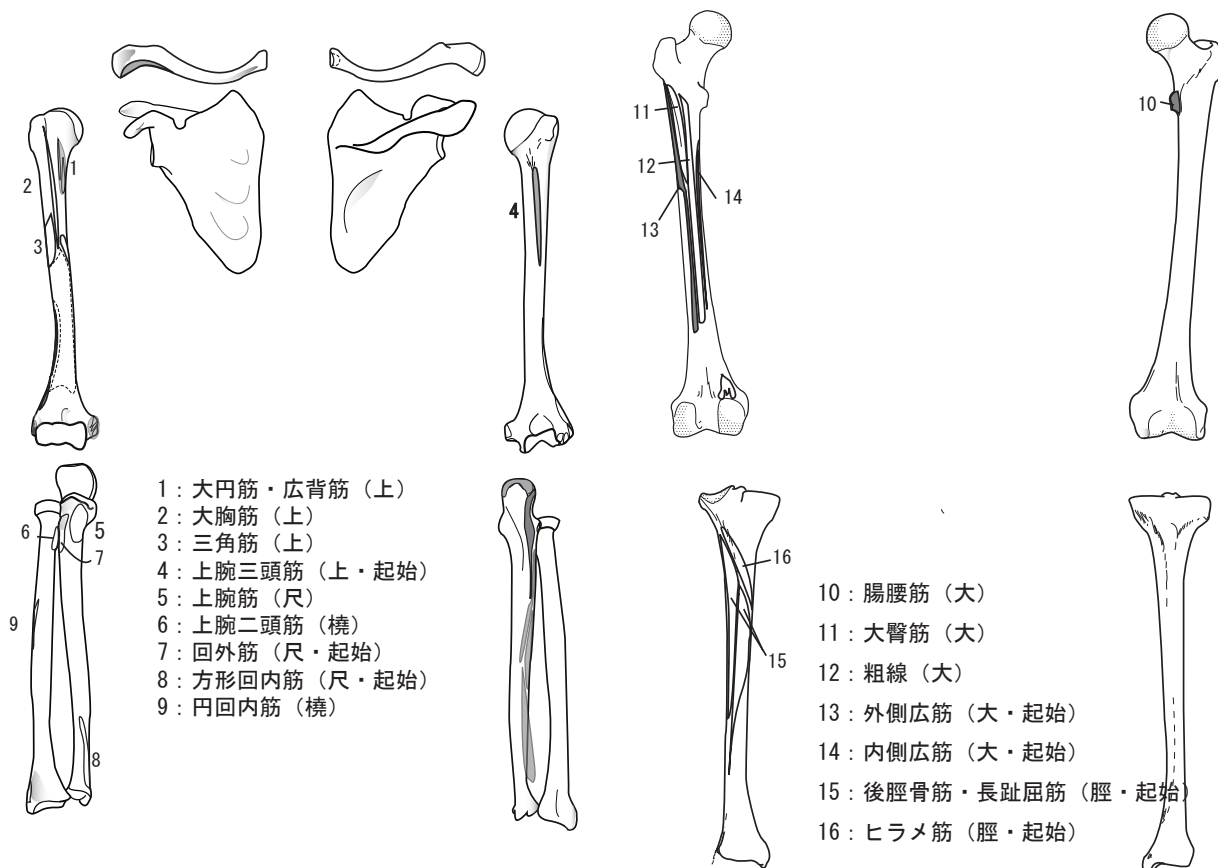


図2 MSMs 対象16部位

ドで評価した。各部位の評価基準や観察位置に関しては米元（2012）に詳述している。ここで対象にした筋附着部の変化の様相は部位によって特徴があり、部位間に見られるスコアの値の高低が必ずしも筋の発達度の強弱を示すわけではないことを注記しておく。MSMs の評価方法のうち、Hawkey and Merbs（1995）の方法を採用した理由は、明白でわかりやすく、スコアの細分によって生じる曖昧さを回避できていること、有無評価に比べて活動の差であるとの判断に基づいている。

MSMs は部位ごとにスコアを平均値化し、折れ線グラフにすることで、部位間の発達度の関係を検討する。本来は、MSMs パターンとして折れ線グラフと MSMs スコアの個体の頻度を示す100%積上げ縦棒グラフを併記するが、本稿の対象資料群の個体数の少なさから100%積上げ縦棒グラフは作成していない。

集団間比較としてカテゴリカル主成分分析を行った。統計解析は IBM 社の統計パッケージ PASW Statistics18 及び PASW Categories18 を用いた。

## 結果

各集団の MSMs の基礎統計量は表 2・3、図 3・4（折れ線）、図 5・6（比較群）に示す。新町遺跡と大友

遺跡出土人骨に関しては個体ごとの値とその折れ線グラフを示している（表 3・図 3・4）。比較として用いる各集団の MSMs パターンを図 5・6 に示した。MSMs パターンにおいては各部位のスコアの大きさを比較するのではなく折れ線グラフの上昇・下降という方向や折れ線の傾きの違いに着目する。図 3・4 で示されたように新町と大友の顕著な特徴として大胸筋のスコアが極端に高いことが挙げられ、これは縄文時代の集団（図 5）にも共通した傾向である。

次に、カテゴリカル主成分分析を行った。表 4 に男性のカテゴリカル主成分分析の主成分負荷量を示した。

第 1 主成分は、固有値が 6.22 で、寄与率が 38.87% であり、第 2 主成分は、固有値が 4.61、寄与率が 28.84%、第 3 主成分は固有値が 2.91、寄与率が 18.18%、第 4 主成分は固有値が 1.60、寄与率が 10.03% である。第 5 主成分以降は固有値が 1 以下となる。

第 1 主成分は、ヒラメ筋のみと負の相関を示すが、それ以外の部位と正の相関がみられる。そのため、第 1 主成分は、MSMs スコア全体の高低、すなわち MSMs スコアが総じて高い集団程正の値が大きくなるといえよう。第 2 主成分は大円筋と広背筋、烏口腕筋、上腕二頭筋、円回内筋と下肢の 6 部位と正の相関がみられる。一方、大胸筋、三角筋、上腕三頭筋外側頭、上腕筋、回外筋、方形回内筋と負の相関がみられる。上肢は烏口腕筋、上

表 2 各個体のスコア

人骨番号	新町					大友				
	9	11	19-1	19-2	K24	2号支石墓1号壙棺	5号支石墓	6号支石墓	1号支石墓1号壙棺	3号支石墓
性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
年齢	熟年		熟年		熟年	熟年	成年	熟年	成年	熟年
時期	弥生前期前半	弥生早期	弥生早期	弥生早期	弥生早期	弥生	弥生早期	弥生早期	弥生前期後半	弥生早期
埋葬様式	支石墓		木棺墓		木棺墓?	支石墓	支石墓	支石墓	支石墓	支石墓
備考					左大腿骨に刃物陥入					
部位	左	左	左	左	左	右	右	右	右	右
大円筋と広背筋(上)	3					3	2		3	
大胸筋(上)	6					6	2		2	
三角筋(上)	3					3	3		2	
烏口腕筋(上)	2					3	2	2		
上腕三頭筋外側頭(上・起)	3					2	1			
上腕筋(尺)	2	3	2	1	2	3	2			
上腕二頭筋(横)					2	3				
回外筋(尺・起)					2	2	3			
方形回内筋(尺・起)					3	2				
円回内(横)			3			3				
腸腰筋(大)						3		2		
大殿筋(大)	3	3				3		2		2
粗線(大)	3	2	3			3		3	3	3
外側広筋(大・起)	3	3	1			2		3	2	3
内側広筋(大・起)		3	1			3		3	2	1
後脛骨筋と長趾屈筋(脛・起)		3	3			1		3	3	
ヒラメ筋(脛・起)		2	2			3		2	3	

表3 基礎統計量

	新町			大友			響灘沿岸			福岡平野			三国丘陵		
	男性			男性			男性			男性			男性		
	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D
大円筋と広背筋(上)	1	3.00		3	2.67	0.58	28	2.18	0.61	16	1.75	0.77	48	2.40	0.64
大胸筋(上)	1	6.00		3	3.33	2.31	29	2.93	1.00	16	2.81	1.33	50	2.86	1.07
三角筋(上)	1	3.00		3	2.67	0.58	26	2.73	0.45	17	2.24	0.66	49	2.57	0.58
鳥口腕筋(上)	1	2.00		3	2.33	0.58	28	2.00	0.82	17	1.47	0.62	44	1.86	0.77
上腕三頭筋外側頭(上・起)	1	3.00		2	1.50	0.71	24	2.08	0.88	9	1.78	0.97	25	1.68	0.80
上腕筋(尺)	5	2.00	0.71	2	2.50	0.71	25	2.16	0.47	12	2.00	0.43	32	2.31	0.47
上腕二頭筋(橈)	1	2.00		1	3.00		26	2.15	0.37	10	1.80	0.63	26	2.15	0.54
回外筋(尺・起)	1	2.00		2	2.50	0.71	25	1.72	0.79	11	1.64	0.67	35	2.20	0.80
方形回内筋(尺・起)	1	3.00		1	2.00		18	1.72	0.75	15	1.60	0.74	29	2.07	0.75
円回内(橈)	1	3.00		1	3.00		27	2.33	0.88	18	1.94	0.80	34	2.26	0.90
腸腰筋(大)	0			2	2.50	0.71	16	2.50	0.52	9	2.56	0.73	26	2.50	0.58
大殿筋(大)	2	3.00	0.00	3	2.33	0.58	30	2.33	0.61	18	1.78	0.73	42	2.19	0.80
粗線(大)	3	2.67	0.58	4	3.00	0.00	33	2.45	0.67	37	2.59	0.69	65	2.72	0.52
外側広筋(大・起)	3	2.33	1.15	4	2.50	0.58	30	2.03	0.81	21	1.67	0.73	43	2.00	0.85
内側広筋(大・起)	2	2.00	1.41	4	2.25	0.96	33	2.21	0.65	27	2.04	0.81	47	2.13	0.74
後脛骨筋と長趾屈筋(脛・起)	2	3.00	0.00	3	2.33	1.15	29	1.72	0.88	33	1.58	0.79	59	1.61	0.72
ヒラメ筋(脛・起)	2	2.00	0.00	3	2.67	0.58	30	2.27	0.74	32	2.09	0.78	59	2.34	0.71
	東北太平洋岸			三貫地			房総湾岸			渥美半島			津雲		
	男性			男性			男性			男性			男性		
	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D
大円筋と広背筋(上)	10	2.20	0.42	5	2.20	0.45	18	2.22	0.43	45	2.22	0.64	12	2.08	0.29
大胸筋(上)	11	4.45	1.21	5	4.00	1.22	19	4.74	1.37	46	4.26	1.34	11	4.36	0.92
三角筋(上)	10	3.00	0.00	6	2.83	0.41	28	2.86	0.36	51	2.76	0.43	12	2.92	0.29
鳥口腕筋(上)	10	1.80	0.42	4	1.00	0.00	24	1.71	0.62	50	1.62	0.57	12	1.42	0.67
上腕三頭筋外側頭(上・起)	11	2.64	0.50	5	1.80	0.84	17	2.47	0.80	44	1.75	0.81	11	2.18	0.87
上腕筋(尺)	11	2.55	0.52	6	2.50	0.55	23	2.61	0.50	44	2.32	0.47	11	2.36	0.50
上腕二頭筋(橈)	11	2.27	0.47	5	2.40	0.55	15	2.07	0.59	43	2.21	0.41	11	2.00	0.00
回外筋(尺・起)	11	2.55	0.69	5	2.40	0.89	22	2.59	0.59	43	2.63	0.58	11	2.73	0.47
方形回内筋(尺・起)	8	2.50	0.76	5	2.20	1.10	15	2.47	0.64	35	2.49	0.74	11	2.64	0.67
円回内(橈)	11	2.00	0.89	7	2.00	0.82	20	2.45	0.76	45	2.36	0.77	12	2.00	0.85
腸腰筋(大)	7	2.57	0.53	6	2.00	0.00	14	2.36	0.63	35	2.11	0.76	11	2.00	0.00
大殿筋(大)	9	2.44	0.73	7	2.57	0.53	29	2.24	0.74	51	2.25	0.66	11	2.73	0.65
粗線(大)	9	2.78	0.44	8	2.75	0.46	33	2.91	0.29	58	2.90	0.31	10	2.60	0.52
外側広筋(大・起)	9	1.78	0.67	7	1.71	0.49	30	1.60	0.77	51	2.20	0.78	11	1.91	0.70
内側広筋(大・起)	10	2.20	0.79	8	2.13	0.64	31	2.10	0.83	53	2.30	0.64	11	2.18	0.60
後脛骨筋と長趾屈筋(脛・起)	10	2.10	0.88	5	2.20	1.10	28	2.07	0.81	38	2.08	0.85	10	2.00	0.82
ヒラメ筋(脛・起)	10	1.80	0.79	6	2.00	0.63	28	1.64	0.68	39	1.97	0.71	9	1.67	0.50

腕二頭筋, 円回内筋, さらに下肢の動作に作用する筋と正の相関が高く, 三角筋や大胸筋, 上腕三頭筋外側頭などの肩関節の動きと関連する筋と負の相関が高い。すなわち, 肩関節の動きと関連する筋よりも下肢の諸筋のほうがMSMsスコアは高いと値はプラスになると考えられよう。第3主成分は, 大円筋と広背筋, 大胸筋, 鳥口腕筋, 上腕三頭筋外側頭, 方形回内筋, 円回内, 大殿筋,

外側広筋, ヒラメ筋と負の相関がみられ, 一方で上腕筋と上腕二頭筋, 回外筋, 粗線, 内側広筋, 後脛骨筋と長趾屈筋と正の相関がみられる。第3主成分は肩関節の内転や手首関節の回内, 股関節の伸展に作用する筋付着部のスコアが高いとマイナスの値を示し, 肘関節の屈曲, 手首関節の回外, 股関節の内転・外転・屈曲に作用する筋付着部のスコアが高いとプラスの値を示すといえる。

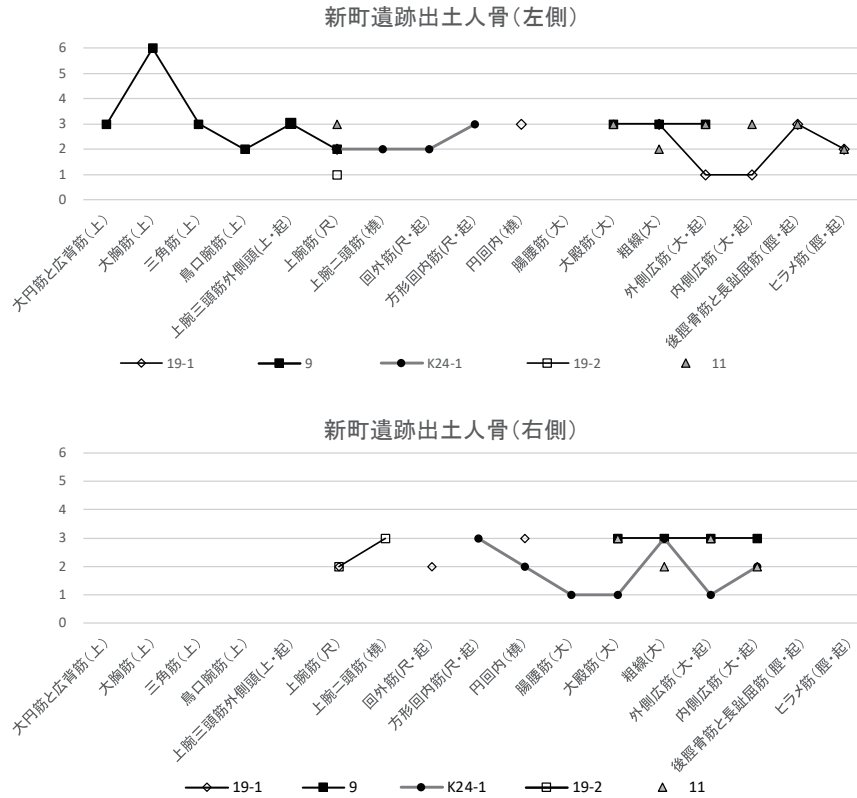


図3 新町遺跡出土人骨のMSMsスコア

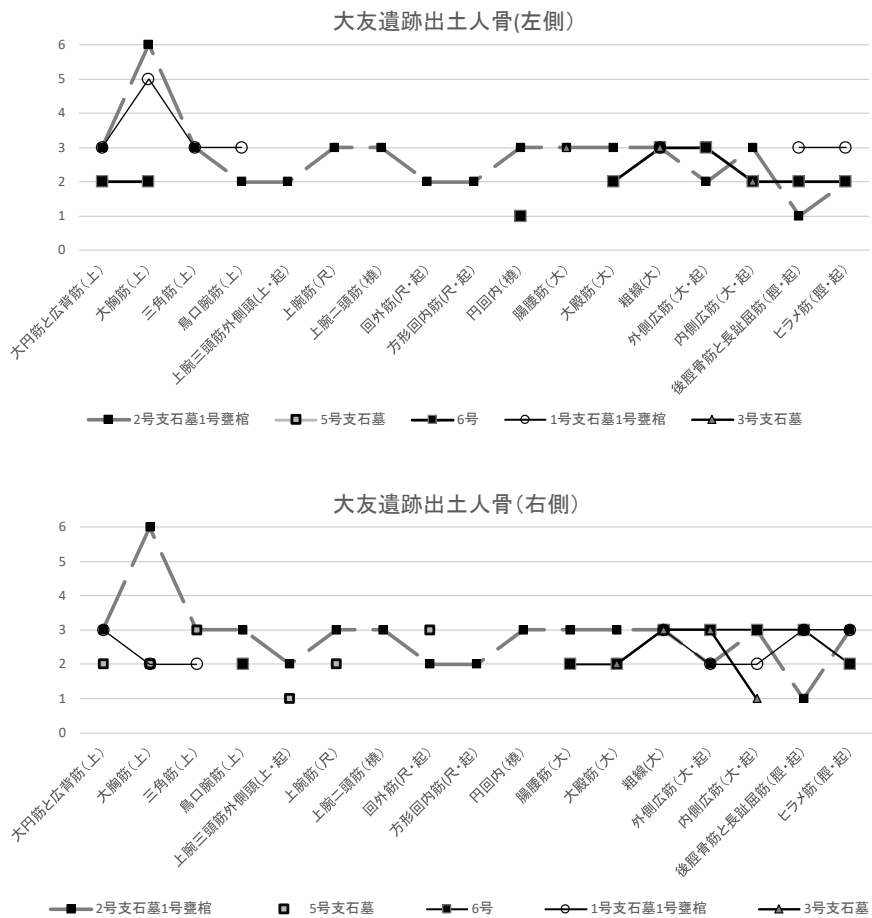


図4 大友遺跡出土人骨のMSMsスコア

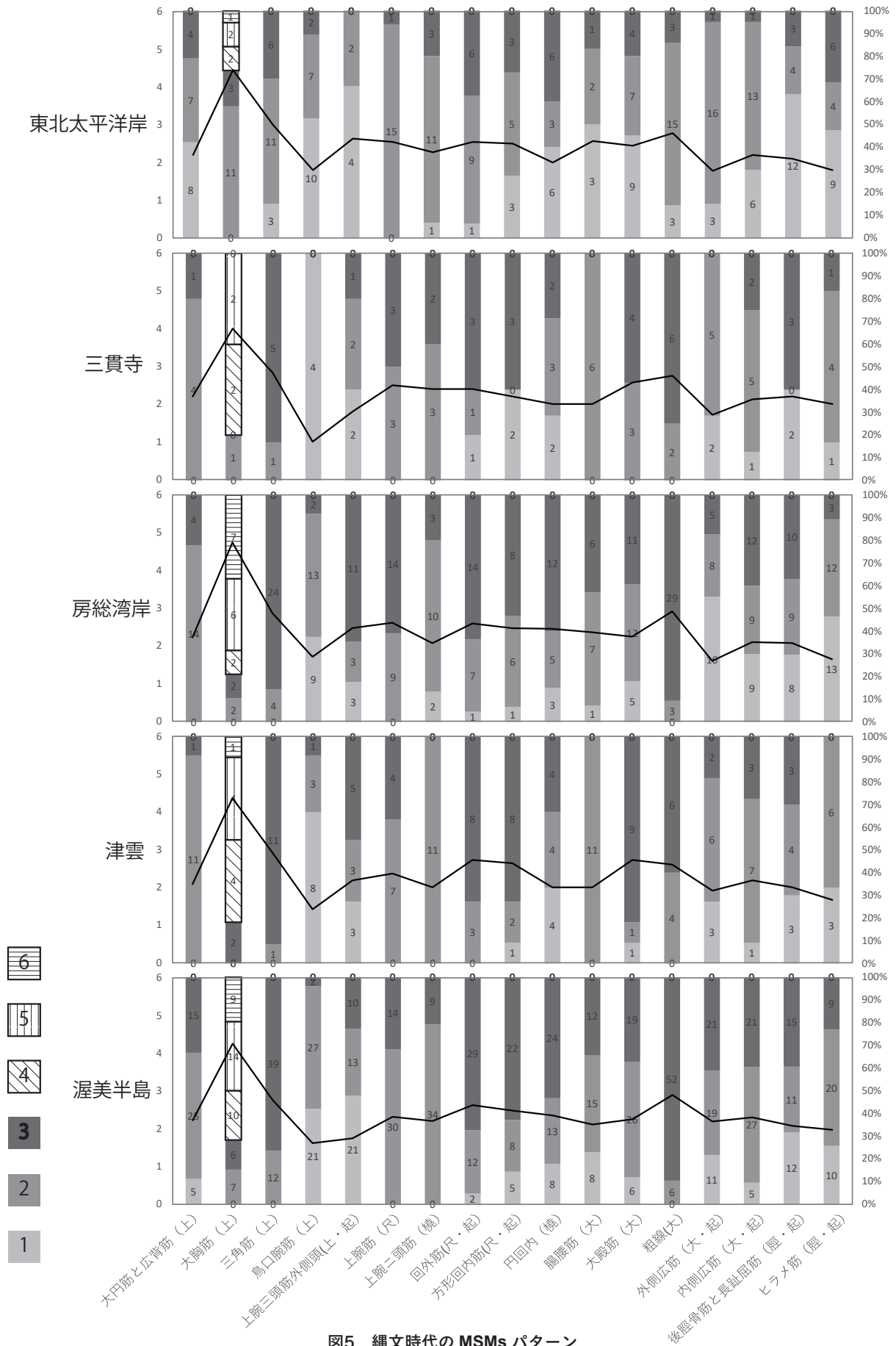


図5 縄文時代のMSMsパターン

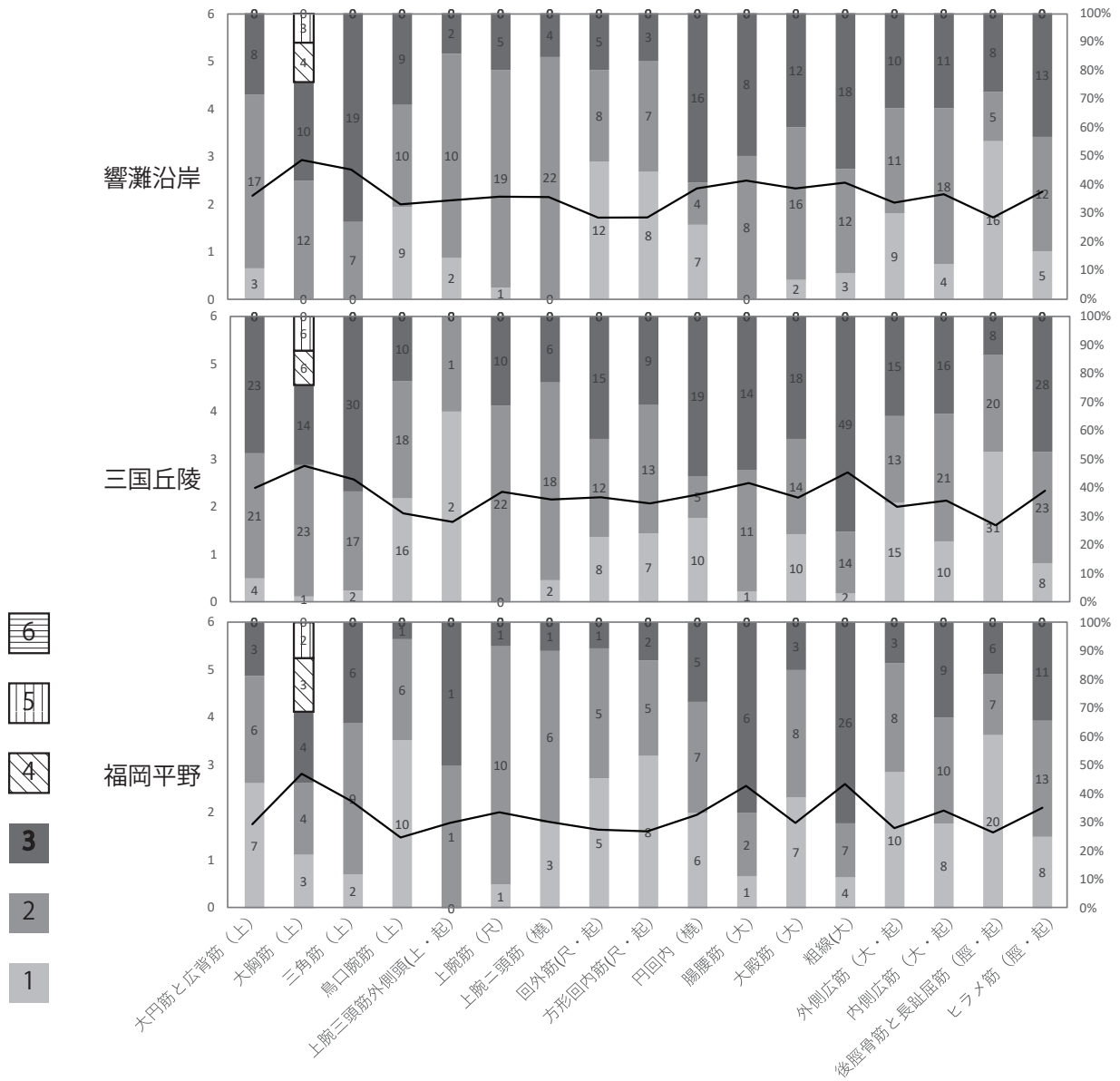


図6 弥生時代のMSMsパターン

第2主成分よりも第3主成分のほうが筋の作用と正負の相関に関連が強い。

本研究において、新町遺跡と大友遺跡のMSMsは他の集団と比べて個体数が圧倒的に少なく、ほぼ個体の値であるため、スコアの総合的な高低を示すと、値が極端に高くなることに注意が必要である。第1主成分を横軸に第3主成分を縦軸に展開した二次元展開図が図7、第2主成分を横軸に、第3主成分を縦軸に展開した二次元展開図が図8である。

その結果（図7）、縄文の各集団は第1象限に、弥生は第3限に位置し、縄文時代の各集団のほうが弥生時代の各集団よりもスコアが総じて高いこと、最もスコアが低いのは福岡平野であることが明らかとなった。さらに、

表4 主成分負荷量

	主成分負荷量				
	1	2	3	4	5
大円筋と広背筋 (上)	0.79	0.59	-0.09	-0.08	-0.09
大胸筋 (上)	0.92	-0.33	-0.14	-0.17	-0.03
三角筋 (上)	0.76	-0.62	0.01	0.09	0.19
鳥口腕筋 (上)	0.08	0.94	-0.19	-0.09	-0.26
上腕三頭筋外側頭(上・起)	0.48	-0.31	-0.82	-0.07	0.01
上腕筋 (尺)	0.48	-0.27	0.83	-0.08	0.07
上腕二頭筋 (橈)	0.36	0.58	0.49	-0.20	0.50
回外筋(尺・起)	0.57	-0.50	0.58	0.22	-0.20
方形回内筋(尺・起)	0.83	-0.45	-0.06	0.23	-0.24
円回内 (橈)	0.79	0.58	-0.09	-0.10	-0.10
大殿筋 (大)	0.80	0.16	-0.57	0.08	0.10
粗線(大)	0.43	0.22	0.55	-0.60	-0.33
外側広筋 (大・起)	0.44	0.56	-0.10	0.69	0.01
内側広筋 (大・起)	0.07	0.44	0.52	0.72	-0.06
後脛骨筋と長趾屈筋 (脛・起)	0.87	0.42	0.03	-0.14	0.23
ヒラメ筋 (脛・起)	-0.42	0.91	-0.03	-0.05	-0.05
固有値	6.22	4.61	2.91	1.60	0.65
寄与率 (%)	38.87	28.84	18.18	10.03	4.08

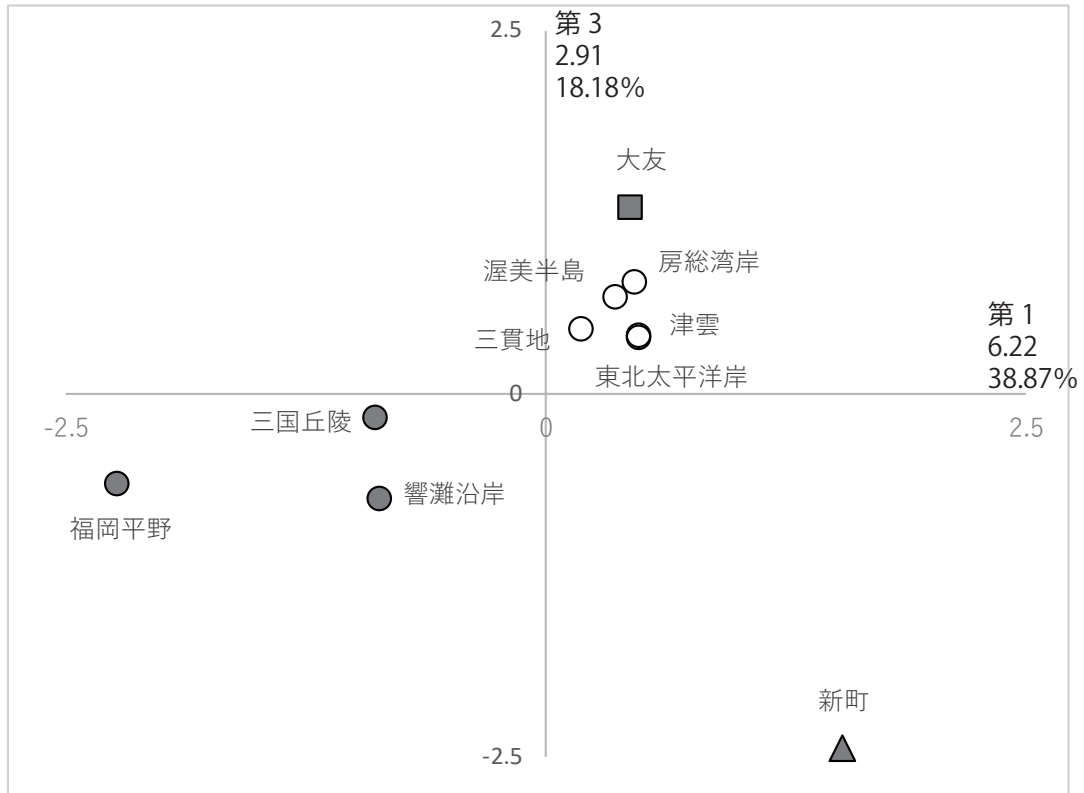


図7 主成分分析結果-第1・第3

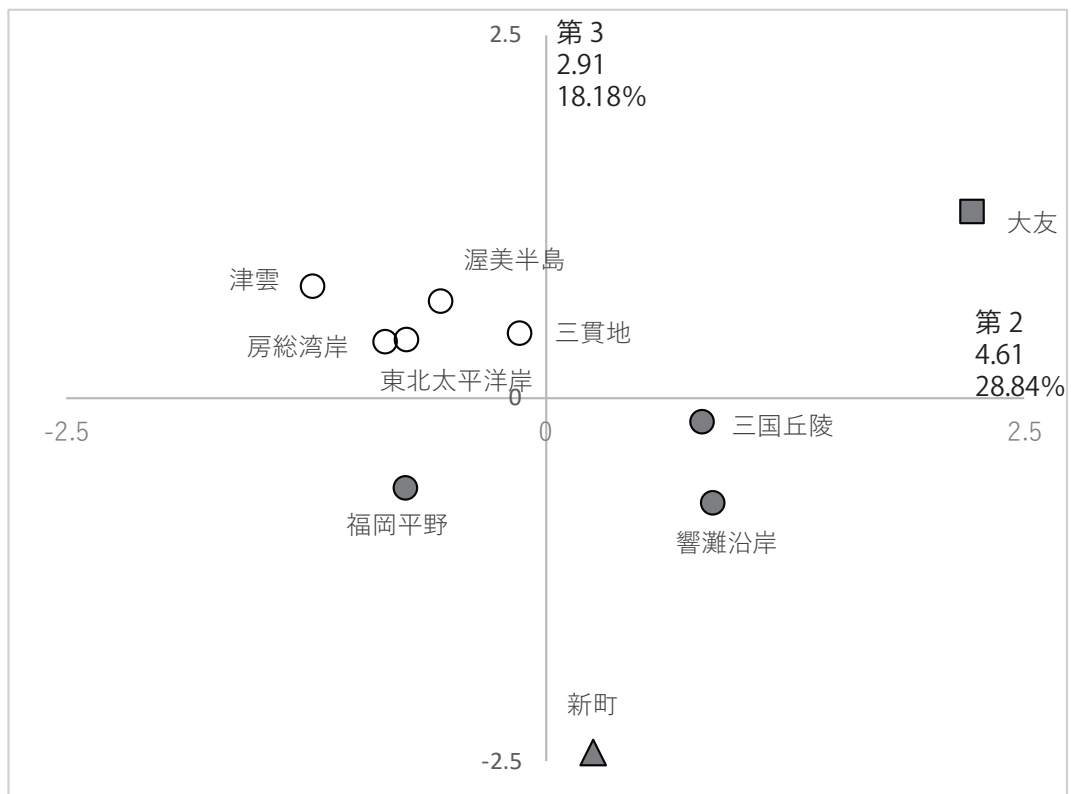


図8 主成分分析結果-第2・第3

大友遺跡出土人骨は第1象限に位置し、パターンとしては縄文各集団に似ていること、一方で新町遺跡出土人骨は第4象限に位置し、MSMsのスコアは総じて高いがパターンとしては弥生時代の各集団に類似することが示された。

さらに図8で示したように、第2・第3主成分を展開すると縄文時代の各集団は第2象限に位置し、弥生時代は福岡平野のみ第3象限、三国丘陵と響灘沿岸は第4象限に位置する。米元(2022)で述べたように、縄文時代の各集団よりも弥生時代の3集団のほうが同時代集団間のMSMsパターンの差が大きいことを示している。そして、大友遺跡は第1象限、新町遺跡は第4象限にプロットされた。大友遺跡の人々は縄文の各集団に似つつも下肢のMSMsスコアも高いという点で特異であり、新町遺跡の人々は弥生時代の集団の中でも響灘沿岸や三国丘陵の集団と類似する傾向を示すといえる。

## 考察

図7・8でみたようにカテゴリカル主成分分析の結果、大友遺跡は縄文各集団に近く、新町遺跡は弥生時代の各集団に、中でも三国丘陵と響灘沿岸に類似する傾向を示した。このように、四肢骨の形状という観点では共通する傾向を持つといわれていた大友遺跡と新町遺跡だが、MSMsを検討すると若干傾向が異なることが明らかとなった。これは方法論による精度の差と考えており、MSMsからは両遺跡の人々には身体活動に違いがあったことが示唆される。

新町遺跡の人々のMSMsと類似するとした響灘沿岸や三国丘陵の人々は生業の基盤である水稲農耕以外の活動である狩猟や漁撈の比重が高いとされている(橋口1985, 片岡1996, 中園1996, 片岡2003, 下條1975, 武末2001, 森2011, 小林2011, 沖田2014, 米田2014)。MSMsからも福岡平野の人々と比べると狩猟や漁撈、伐採といった副次的な活動の割合が相対的に高いと考えられている(米元2016b)。図7では新町遺跡の人々はこの2集団と同じ象限にプロットされることから、水稲農耕に携わりつつ狩猟や漁撈のような多様な生業活動を行っていたものと考えられる。

新町遺跡は、御床松原遺跡(弥生時代前期末～後期)

と同じ村を形成していたと考えられており(志摩町教育委員会1983, 1987, 1988)、武末(2009)によって海村の可能性が、下條(1989)によると漁村の可能性が指摘されている。下條(1989)では、御床松原の出土遺物から、漁撈を中心として狩猟・植物採集調理・農耕など各種労働が行われていたことが指摘されている。農耕については可耕地の確保が困難であることなどから従事していたとしても極めて規模の小さいものであったとする。武末(2009)も、御床松原の出土遺物から網漁の比重が高く潜水漁法も行われていたと述べている。加えて石包丁も頻度は低いが出土しているため水田も有し、水稲農耕もおこなっていた可能性があることも指摘し、海村でも比重は低いがコメを作るのが一般的であったことを示唆する。よって漁撈を中心に他の生業も行っていたこと、水稲農耕については行っていたとしてもその規模は極めて小さいものであった可能性が指摘されている。

新町遺跡のMSMsの結果から、縄文時代の各集団よりも弥生時代の響灘沿岸や三国丘陵と類似することから、水稲農耕を行いつつもその比重は福岡平野の集団と比較すると低かったものと考えられる。下條(1989)や武末(2009)が指摘するような「農耕の比重が著しく低かった」かどうかについては累積的な活動負荷を示すMSMsでは検証できない。また、新町遺跡については個体数が十分ではないという大きな問題があることには注意する必要がある。さらに、早期から前期に位置づけられる新町遺跡出土人骨の結果が御床松原遺跡の趨勢をすべて表すわけでは無いことも明らかであろう。すなわち、水稲農耕をいち早く受容した地域と考えられているのは唐津平野や糸島平野(家根1993, 端野2003, 宮地2009, 宮本2012, 下條2014, 三阪2022)であり、糸島平野に近い新町遺跡は形質的にも完全に在来的ではなく一定の交流・混血がうかがえることが指摘(米元2023)されている。一度水稲農耕を受容し、その他多くの生業活動と併存して小規模に展開しつつもその比重が時期を経るごとに変化し、漁撈依存を高めていき、先行研究で指摘するような漁撈を核とした村に変化していった可能性は十分に考えられる。しかしそれは時期的な変遷を追う人骨資料が存在しない以上MSMsからは検証することができない。

一方で大友遺跡は、縄文時代各集団と全く同じような傾向ではないものの、弥生時代の各集団よりも縄文時代の各集団により類似する傾向があることが図7・8から

明らかとなった。縄文時代と弥生時代の MSMs を比較した際に、縄文時代の特徴は狩猟採集という通年で生業の核となるような活動がなく、環境にあわせて様々な活動を季節ごとに行っていたこと、個人間に厳密な活動の区分が存在しなかったため、構成員すべてが多様な活動に従事した結果と考えている(米元2020)。米元(2020)では、生業の核となる水稲農耕が確立した弥生時代北部九州・山口地域においては、水稲農耕への依存度や、水田に適した広い平野があるか否かなどの地域的な環境の違いによって、身体活動における集団間の差異が生じていると指摘する。前者と傾向が類似する大友遺跡は、漁撈活動への比重が高く、水稲農耕のような他生業の「内部化」を進行(安室1992, 2001)させるような活動は主流ではなかったと考えられる。この「内部化」とは稲作が他の生業にも増して単一化(特化)していくとき、畑作や漁撈といった他生業が時間・空間・労力の三要素をすべて稲作活動に取り込まれる形で存在する状態を指し(安室1992)、水田二毛作や水田養魚などがその代表とされている。稲作が狩猟や漁撈とは大きく異なる点であり、複合的な生業といっても各生業が並列ではなく農閑期や水田で行える活動(水田漁撈)に収斂していくのである。MSMsにおいては、並列関係にある各種生業を総合的に行う集団は総じてスコアが高くなるために集団間の差は見えにくい、このようなベースとして水田農耕を行いつつそれ以外の活動に地域性があるという複合の在り方のほうが違いは表れやすい。さらに、江戸時代のように階層化が進行し職業の区分が身分と結びつくようになった社会における活動差が最も MSMs に違いが表れるところである(米元2020)。

大友遺跡出土人骨は、形質的にいわゆる渡来的な影響を受けていない(中橋2003, 米元2023)。さらに、MSMsの検討から前期までの時期に水稲農耕に係る活動を行っていた可能性は極めて低いと言える。三原など(2003)・宮本(2003)も指摘するように、人骨の食性分析からも、主に漁撈に生業を依存する人たちである。時代を経るごとに次第に穀物依存の度合いが高まることも指摘されているが、本稿では時期的な変遷を追うことまではできていない。

図8をみると、大友遺跡の人々は縄文時代の各集団とも弥生時代の各集団とも全く同じではない、ということも明らかである。これについては特に上腕骨の大胸筋や

三角筋など肩関節の内転や外転にかかわる筋のスコアの高さと下肢の各筋付着部のスコアの高さの相対的なバランスの問題であり、大友遺跡の人々は下肢の筋が相対的にやや発達している傾向にある。大友遺跡が位置する西北九州地域は朝鮮漁具の影響のもと縄文時代前期以降に釣漁や鉛漁などの外洋表層漁業が発達し弥生時代にも継承される(渡辺1985, 下條1989)と言われている。弥生時代に新たな九州型大形石錘も出現し、さらに外洋漁撈の技術改良が進められていたことも示唆されている(下條1989, 樋泉2009)。本来的に漁撈活動や漕艇活動に従事する集団は下肢よりも上肢に発達が偏る傾向(Stock2006, Liverse et al., 2011)があり、大友遺跡の人々も大胸筋や三角筋付着部のスコア自体は低くはないが縄文時代の各集団と比較すると下肢のMSMsスコアがやや高い傾向にあり、この点に西北九州地域の漁撈活動の独自性が表れている可能性もあろう。今後西北九州地域の資料を合わせて検討することができればより詳細な活動との関連を明らかにすることができるかもしれない。

## 結論

本研究では支石墓を主な墓制とする福岡県糸島市新町遺跡と佐賀県唐津市大友遺跡から出土した古人骨の筋骨格ストレスマーカー(MSMs)を検討した。MSMsパターンの分析の結果、大友遺跡出土人骨は、まったく同じではないものの縄文各集団に似ていること、一方で新町遺跡出土人骨は弥生時代の各集団、特に響灘沿岸や三国丘陵の人々と類似することが明らかとなった。四肢骨の形状という観点では共通する傾向を持つといわれていた大友遺跡と新町遺跡だが、MSMsを検討すると若干傾向が異なることが明らかとなった。新町遺跡の人々は水稲農耕に携わりつつも狩猟や漁撈のような多様な生業活動を行っていた可能性と、大友遺跡は、漁撈活動への比重が高く、水稲農耕のような他生業の内部化を進行(安室1992, 2001)させるような活動は主流ではなかった可能性が考えられる。しかし、新町遺跡出土人骨については他の集団が右側の値であるのに対し左側の値を用いている、部位ごとに異なる個体の値が直に反映されている等、保存状態と個体数の問題が大きく、本来はMSMsの分析に耐えることができるような集団ではない。しかし、

おそらく今後資料数が急増するような可能性は低いこと、その歴史的重要性を鑑み今回は研究を行った。そのため、比較した集団とはデータの質が異なる可能性があることは重ねて強調する。

## 謝辞

本研究は、2023～2026年度 文部科学省 科学研究費助成事業 若手研究「江戸時代人骨を対象とした身体化される格式と格差の考古・人類学的研究」(23K12311) および令和5年度糸島市協定大学等課題解決型研究事業の助成を受けたものです。

## 参考文献

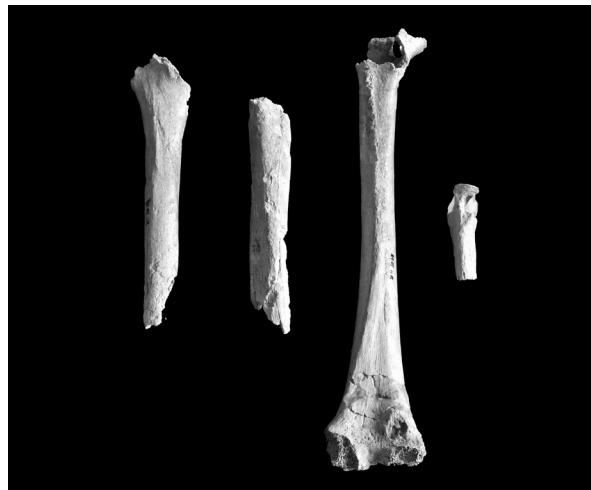
- Brooks S and Suchey JM, 1990 Skeletal age determination based on the os pubis: a comparison of the Acsadi-Nemeskeri Suchey-Brooks methods. *Human Evolution* 5, pp.227-238.
- Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. 1994 Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. *Arkansas Archeological Survey Research Series, No.44*. Fayetteville, Arkansas.
- Jurmain R., and Villotte S. 2010 Terminology. *Entheses in medical literature and physical anthropology: a brief review* [online]. Document published online on 4 February following the Workshop in Musculoskeletal Stress Markers (MSM): limitations and achievements in the reconstruction of past activity patterns, University of Coimbra, July 2-3, 2009. Coimbra, CIAS – Centro de Investigação em Antropologia e Saúde. [Accessed 25 June 2010]. Available at: [http://www.uc.pt/en/cia/msm/MSM\\_terminology3](http://www.uc.pt/en/cia/msm/MSM_terminology3).
- 橋口達也 1985 日本における稲作の開始と発展. 石崎曲り田遺跡Ⅲ, 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集(橋口達也編), 福岡市教育委員会, 福岡, pp.5-104.
- 端野晋平 2003 支石墓伝播のプロセス——韓半島南端部・九州北部を中心として—— *日本考古学*16, pp.1-25.
- Hawkey DE and Merbs CF, 1995 Activity-induced musculoskeletal stress markers (MSM) and subsistence strategy changes among ancient Hudson Bay Eskimos. *International Journal of Osteoarchaeology* 5, pp.324-338.
- 東中川忠美 1981 地理的・歴史的環境 呼子町教育委員会編, 大友遺跡——呼子町文化財報告第1集——, pp.1-8.
- 片岡宏二 1996 第3章第1節 1. 弥生時代の自然環境と集落地. 小郡市史 第1巻 通史編 地理・原始・古代(小郡市史編纂委員会編), 小郡市史編纂委員会, 小郡市, pp.268-278.
- 片岡宏二 2003 水田稲作農耕の定着と展開——三国丘陵における弥生時代前期社会の諸問題——. 三沢北中尾遺跡1地点環濠壕 県種畜場区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書2, 小郡市文化財調査報告書第181集(片岡宏二・杉本岳史・山崎頼人編), 小郡市教育委員会, 小郡市, pp.117-176.
- 小林善也 2011 響灘の墓と集落～土井ヶ浜遺跡とその周辺～. 弥生文化のはじまり——土井ヶ浜遺跡と響灘周辺——(木野戸直・塚本浩司編), 大阪府立弥生文化博物館, 大阪府, pp.78-93.
- 九州大学医学部解剖学第二講座編 1988 日本民族・文化の生成2. 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成. 六興出版, 東京.
- Lieverse AR, Stock JT, Katzenberg MA, and Haverkort CM. 2011 The Bioarchaeology of Habitual Activity and Dietary Change in the Siberian Middle Holocene. In: Pinhasi R and Stock JT editors. *Human Bioarchaeology of the Transition to Agriculture*. Wiley-Blackwell, pp.263-291.
- Lovejoy, C.O, Meindl, R.S., Mensforth, R., and Barton T.J. 1985 Multifactorial Determination of Skeletal age at Death. *American Journal of Physical Anthropology* 68, pp.15-28.
- Mariotti V, Facchini F, Belcastro MG. 2004 Enthesopathies- proposal of a standardized scoring method and applications. *Collegium Antropologicum* 28, pp.145-159.
- 松下孝幸・内藤芳篤 1989 3. 弥生人 3. 地域差 永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原真編, 弥生文化の研究 1. 弥生人とその環境 雄山閣, pp.65-75.
- 三原正三・宮本一夫・中村俊夫・小池裕子 2003 名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計による大友遺跡出土人骨の14C年代測定 宮本一夫編, 佐賀県大友遺跡Ⅱ——弥生墓地の発掘調査—— *考古学資料集*30, pp.64-69.
- 三阪一徳 2022 土器製作技術からみた稲作受容期の東北アジア 九州大学出版会
- 宮本一夫編 2003 佐賀県大友遺跡Ⅱ——弥生墓地の発掘調査—— *考古学資料集*30
- 宮本一夫 2012 弥生時代以降期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係 *古文化談叢*67, pp.147-177.
- 宮地聡一郎 2009 刻目突帯文土器と無文土器系土器——異系統土器共存の実態—— *古代文化*61-2, pp.258-268.
- 森貴教 2011 弥生時代北部九州における両刃石斧の消費形態. *考古学研究* 57-4, 50-70.
- 中橋孝博・永井昌文 1987 福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨 新町遺跡——福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査—— *志摩町文化財調査報告書*第7集 pp.87-96.
- 中橋孝博・永井昌文 1989 形質. 弥生文化の研究1, (金関恕・佐原真・永井昌文・那須孝悌編), 雄山閣, 東京, pp.23-51.
- 中橋孝博 2003 第4章大友遺跡第6次調査出土人骨. 宮本一夫編, 佐賀県大友遺跡Ⅱ——弥生墓地の発掘調査—— *考古学資料集*30, pp.50-63.
- 中山平次郎 1917 九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて(1)・(2). *考古学雑誌* 7, pp.595-632, 667-700.
- 中園聡 1996 第3章第1節 4. 弥生時代の生業と食生活. 小郡市史 第1巻通史編 地理・原始・古代(小郡市史編纂委員

- 会), 小郡市教育委員会, 小郡市, pp.320-343.
- 沖田絵麻 2014 土井ヶ浜遺跡出土動物遺存体の分析——第1～12次発掘調査出土資料について——. 土井ヶ浜遺跡 第1次～第12次発掘調査報告書(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム編), 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム, 下関市, pp.215-233.
- Phenice J.W. 1969 A newly developed method of sexing the pelvis. *American Journal of Physical Anthropology*, 30, pp. 297-301.
- Sakaue K, 2006 Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese skeletal material. *Anthropological Science* 114, pp.59-64.
- Stock J.T. 2006 Hunter-gatherer postcranial robusticity relative to patterns of mobility, climatic adaptation, and selection for tissue economy. *American Journal of Physical Anthropology* 131, pp.194-204.
- 志摩町教育委員会 1983 御床松原遺跡 井上裕弘編 志摩町気文化財調査報告書第3集
- 志摩町教育委員会 1987 新町遺跡——福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査——, 橋口達也編, 志摩町文化財調査報告書 第7集
- 志摩町教育委員会 1987 新町遺跡II——福岡県糸島郡志摩町所在墳墓群の調査——, 橋口達也編, 志摩町文化財調査報告書 第8集
- 下條信行 1975 北九州における弥生時代の石器生産. *考古学研究* 22, pp.7-21.
- 下條信行 1989 弥生時代の玄海灘海人の動向——漁村の出現と役割——. 横山浩一先生退官記念論文集1 生産と流通の考古学, (横山浩一先生退官記念事業会編), 横山浩一先生退官記念事業会, 福岡, pp.107-124.
- 下條信行 2014 西日本における初期稲作と担い手. 古代学協会編, 列島初期稲作の担い手は誰か, すいれん舎, 東京, pp.229-277.
- 武末純一 1989 山のムラ、海のムラ. 下條信行編, 古代史復元4 弥生農村の誕生. 講談社, pp.106-112.
- 武末純一 2001 石器の生産と流通——石庖丁と蛤刃石斧を中心に——. 筑紫野市史資料編(上) 考古資料(筑紫野市史編纂委員会編), 筑紫野市, pp.528-55.
- 武末純一 2009 三韓と倭の交流 国立歴史民俗博物館研究報告第151集, pp.285-306.
- 武末純一 2011 九州北部地域 甲元眞之・寺沢薫編 講座日本の考古学弥生時代(上) 青木書店, 東京, pp.85-145.
- 田中良之 1991 いわゆる渡来説の再検討. 日本における初期弥生文化の成立——横山浩一先生退官記念論文集——, 横山浩一先生退官記念事業会, 文献出版, 東京, pp.428-505.
- 樋泉岳二 2009 ③縄文文化的漁撈活動と弥生文化的漁撈活動. 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編, 弥生時代の考古学5 食料の獲得と生産. 同成社, 東京, pp.186-197.
- 安室知 1992 存在感なき生業研究のこれから. *日本民俗* 190, pp.38-55.
- 安室知 2001 「水田漁撈」の提唱. 国立歴史民俗博物館研究報告 87, pp.107-139.
- 家根祥多 1993 遠賀川式土器の成立をめぐって——西日本における農耕社会の成立——. 坪井清足さんの古稀を祝う会編, 論苑考古学, 天山舎, pp.267-329.
- 米田穰 2014 土井ヶ浜遺跡から出土した弥生時代人骨の炭素・窒素同位体分析. 土井ヶ浜遺跡 第1次～第12次発掘調査報告書, 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム編, 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム, 下関市, pp.207-214.
- 米元史織 2012 生活様式の復元における筋骨格ストレスマーカーの有効性. *Anthropological Science (Japanese Series)*, 120-1, pp.15-46.
- 米元史織 2016a 筋付着部の発達度からみる縄文時代の生業様式の地域的多様性. 九州大学総合研究博物館研究報告, 14, pp.37-57.
- 米元史織 2016b 筋付着部の発達度からみる弥生時代の身体活動の地域的多様性. 考古学は科学か. 田中良之先生追悼論文集, 上, pp.579-602.
- 米元史織 2022a 北部九州の弥生時代人——頭蓋形質の地域性について——, 九州大学総合研究博物館研究報告, 19, pp.33-50.
- 米元史織 2022b MSMsの时期的変遷からみる江戸時代武士の行動様式の確立, *日本考古学*, 54, pp.65-81.
- 米元史織 2023 北部九州の弥生時代人達——いわゆる渡来系形質について——. 九州大学総合研究博物館研究報告, 20, pp.49-73.
- 渡辺誠 1985 西北九州の縄文時代漁撈文化. 列島の文化史2, 日本エディタースクール出版部

Received Nov. 15, 2024; accepted Dec. 3, 2024



新町 9号



新町 11号



新町 19-1号



新町 19-2号

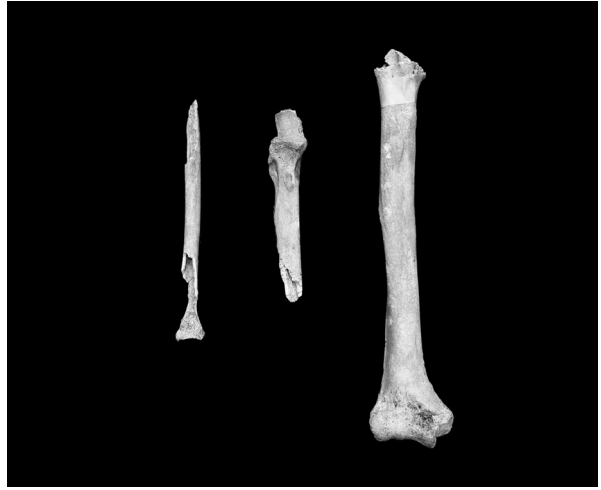


新町 24号

図9 新町遺跡出土人骨



大友 3号



大友 5号



大友 6号



大友 2号 2号甕棺



大友 2号 1号甕棺

图10 大友遺跡出土人骨

## **Shinmachi site and Ootomo site: Subsistence activities of people during the beginning of the Yayoi period revealed using musculoskeletal stress markers.**

Shiori YONEMOTO

The Kyushu University Museum  
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

This study investigated musculoskeletal stress markers (MSMs) on archaeological human bones from the Shinmachi site, Itoshima, Fukuoka Prefecture, and the Otomo site, Karatsu, Saga Prefecture, which are mainly composed of dolmen tombs. The sites studied were 15 sites in the upper and lower limbs, and MSMs were assessed according to the criteria of Hawkey and Merbs (1995). As a result of analysing the MSMs pattern using categorical principal component analysis, it was found that the MSMs pattern of the human bones from the Otomo site is somewhat similar to that of the Jomon groups, while the MSMs pattern of the human bones from the Shinmachi site is similar to that of the Yayoi period groups, particularly those from the Hibikinada coast and Mikuni Hills. As a result, the Otomo and Shinmachi sites were said to have a similar characteristic in terms of limb bone shape, with the upper limbs being relatively thicker than the lower limbs, but examination of the MSMs revealed a slight difference in trend. One reason for this difference is that the people of the Shinmachi site were involved in wet-rice farming, but also engaged in a variety of subsistence activities such as hunting and fishing, while the people of the Otomo site were more focused on fishing activities and may not have engaged in activities that promoted the internalization of other subsistence activities such as wet-rice farming (Amuro 1992, 2001). The findings in this study suggest that there were differences in the subsistence activities between the two groups.

**Key words:** Musuculoskeletal stress markers, Shinmachi site, Ootomo site, The Beginning of the Yayoi period, subsistence activities



# 大友遺跡ならびに広田遺跡から出土した 人骨におけるミトコンドリア DNA 分析

角田 恒雄<sup>1)\*</sup>・米元 史織<sup>2)</sup>・高椋 浩史<sup>3)</sup>・神澤 秀明<sup>4)</sup>・舟橋 京子<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup>山梨大学大学院総合研究部医学域法医学講座：〒409-3898 山梨県中央市下河東1110

<sup>2)</sup>九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1

<sup>3)</sup>土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム：〒759-6121 山口県下関市豊北町大字神田上891-8

<sup>4)</sup>国立科学博物館人類研究部：〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

<sup>5)</sup>九州大学比較社会文化研究院：〒812-8581 福岡県福岡市西区元岡744

\*tkakuda@yamanashi.ac.jp

**要旨：**本研究では、弥生時代早期から古墳時代後期併行期において、それぞれ西北九州型と南九州型の形態的特徴を持つ佐賀県の大友遺跡と鹿児島県の広田遺跡から出土した人骨から古代 DNA を抽出し、ミトコンドリアハプログループの分析を行った。大友遺跡では縄文人由来とされるミトコンドリアハプログループが複数体、検出された。これは弥生時代早期から古墳時代初期においても当地において母型的に縄文人由来の遺伝型を持つ人びとが存在していたことを表している。一方、東アジア大陸部・朝鮮半島からの渡来人型と考えられるハプログループも検出され、縄文時代終末期から弥生時代早期に渡来系の流入の可能性も示すが、抽出 DNA の状態が良好でないため、今後の詳細な分析結果を行い、判断する必要がある。広田遺跡においても縄文人由来と考えられているミトコンドリアハプログループが大半を占めた。本研究では弥生時代中期から古墳時代後期並行期の人骨を対象としたが、この時期においても本遺跡の人びとの多くが縄文人由来の遺伝要素を色濃く残していた可能性を示唆する。また、弥生時代以降の移入、もしくはこれまでの分析では縄文時代から存在していたが検出されてこなかったと考えられる B4 というグループも複数体で検出されており、この母型の人びとがいつ頃から種子島に移入してきたのか興味深い。今後、これら資料の核ゲノム分析などを進めることで、九州北部から琉球列島におけるさらに詳細な遺伝的変遷の推定を予定している。

**キーワード：**弥生 - 古墳時代、西北九州型、南九州型、古代 DNA 分析、ミトコンドリア DNA ハプログループ

## はじめに

九州地方において、日本人の成立に極めて重要な集団である弥生時代人はその形態的特徴の検討から、大陸から渡来した人びとの遺伝的影響が色濃く見られる北部を中心とするいわゆる渡来系弥生人(中橋・永井1989)、形態的に縄文人の特徴を色濃く残す西北九州弥生人(内藤1971, 1981, 松下・内藤1989)、頭骨形態に極端な特徴を持つ南九州弥生人(中橋・永井1989, 松下・内藤1989)が区別されており、形態学的調査に加え、これまでに九州各地の古代人を対象とした DNA 調査が進められている(篠田ら2020, 篠田ら2021a,b, 神澤ら2021など)。

佐賀県唐津市の大友遺跡は1968年の1次調査にはじま

り、1999年と2000年の5次、6次調査において多くの人骨が発掘されており(中橋2001, 2003)、副葬品や炭素14年代測定分析から弥生時代早期から古墳時代初期に属することが明らかとなっている(三原ら2003, 瀧上ら2021など)。埋葬施設は朝鮮半島由来とされている支石墓や、箱式石棺墓、甕棺墓と多様な施設が見られるが、縄文人と共通する低顔・低身長といった西北九州型の形態的特徴を持つ。一方、鹿児島県種子島にある広田遺跡は海岸砂丘につくられた集団埋葬墓地を含む遺跡で、1955年に本遺跡の集団埋葬墓地が発見されたのち、1957年から1959年に3次にわたって発掘調査が行われ、多くの人骨が発見された。その後も2005年、2006年に南種子町教育委員会によって発掘調査が行われ、最終的に弥生

時代終末期から古墳時代併行期の人骨 157 体と約 44,000 点の貝製品が出土している（桑原 2003, 木下 2020, 竹中ら 2021）。広田遺跡から出土する人骨は同時代の北部九州の人びとに比べ極端な短頭で、成人男性・女性ともに非常に低い平均身長などの特徴を持ったため、南九州型と呼ばれている（松下・内藤 1989, 中橋 2019）。どちらの遺跡からも貝輪など貝類を加工した装飾品が多数見つかっており（木下ら 2024）、弥生時代以降北部九州地域を中心にして起きた形質的な変化の流れの中で、いわゆる渡来系弥生人と異なる形質を有する人々の遺伝学的情報を明らかにすることは重要である。本研究では大友遺跡、広田遺跡から出土した人骨から古代 DNA を抽出し、ミトコンドリア DNA ハプログループの推定を行うことで、母型から見た両遺跡の遺伝情報の考察を行った。

## DNA 分析用試料と分析方法

今回の解析では大友遺跡 6 体、広田遺跡 12 体の分析を行った（表 1）。分析には、従来から古代 DNA 分析で広

く使われている歯（臼歯）（Woodward et al. 1994）に加え、古代 DNA が多く残存することが近年報告されている内耳器官を内包する側頭骨錐体部（Sirak et al. 2017）を対象とした。なお、対象とした全ての骨は、骨粉の採取前に DNAaway（Molecular Bio Products）にて表面を入念に拭き上げ、表面・裏面ともに 90 分ずつ UV 照射を行なって現代人 DNA の除去を行なっている。側頭骨を対象とした資料では、作業前に  $\mu$  CT を用い、側頭骨錐体の内部情報を X 線撮影で保存した後、骨粉の採取を行なった。骨粉採取の際には、側頭骨の形状への損傷を可能な限り少なくするため、1.5mm 径のドリルによって錐体部上面から内耳周辺の骨にアプローチを行い、およそ 200mg の粉末試料の採取を行った。また、骨資料の所蔵先である九州大学にて側頭骨錐体を採取した際には、同じく CT 撮影で内部情報を保存した後、硬質部を含む 1.5cm 角のブロックとして切り出しを行った。臼歯に関しては作業前にレプリカを作成後、歯冠と歯根を切り離し、内部から上記仕様のドリルを用いて骨粉の採取を行なった。DNA の抽出は（Adachi et al. 2013）に従い、対象資料のミトコンドリア DNA ハプログループの判定と抽出 DNA

表 1 本研究でミトコンドリア DNA 分析を行った骨資料

大友遺跡	性別	年齢	DNA抽出用試料部位	埋葬施設	副葬品	較正年代 (cal)
3号	男性	熟年	下顎右第3臼歯	支石墓（下部構造：土墳墓）	なし	760-550BC
7号	女性	成年	右側頭骨	支石墓（下部構造：土墳墓）	小壺	未分析
13号-17			右側頭骨	箱式石棺墓	なし	AD 20-160
13号-37			左側頭骨	箱式石棺墓	なし	AD 170-310
17号-3	女性	成年	左側頭骨	箱式石棺墓	なし	AD 120-230
24号	男性	熟年	右側頭骨	甕棺墓	管玉1点	350-190 BC
<b>広田遺跡</b>						
A-11号	男性	成年	左側頭骨	覆石墓	貝輪・貝連玉・土器	AD 245-405
C-5号	女性	成年	左側頭骨	土墳墓	貝符・竜佩	437-467 cal AD (7.35%) 473-521 cal AD (12.51%) 526-644 cal AD (75.59%)
D-I-5号	男性	成～熟年	右側頭骨	覆石墓	貝輪・貝符・竜佩・土器	AD 235-395
D-II-4号		小児	左側頭骨	馬蹄状配石墓	貝符・竜佩	AD 425-555
D-III-2号	男性	若年	下顎右第3臼歯	馬蹄状配石墓	貝輪・貝符・竜佩	AD 420-545
D-IV-2or3-A号	不明	不明	右側頭骨			未分析
D-IV-2or3-B1号	不明	不明	右側頭骨			未分析
D-IV-2or3-B2号	不明	不明	右側頭骨			未分析
E-III-2号	男性?	成年	左側頭骨	土墳墓	貝輪	415-566 cal AD (95.45%)
E-IV-1号	女性	熟年	上顎左第3臼歯	土墳墓	貝輪・貝符	420-587 cal AD (95.45%)
E-IV-2号	男性	成年	下顎右第3臼歯	土墳墓	なし	419-592 cal AD (95.45%)
N-1号	男性	若～成年	左側頭骨	土墳墓	貝輪・貝符	416-587 cal AD (95.45%)

性別・年齢・埋葬施設は中橋（2003）、米元（2023）、竹中ら（2021）、木下ら（2024）。較正年代は瀧上ら（2021）、竹中ら（2021）、木下ら（2024）と本研究による。

のクオリティチェックを兼ねて、APLP 法 (Amplified Product-Length Polymorphism method) を用いた分析を行った。今回用いた APLP 法は、ミトコンドリア DNA ハプログループを構成するマクロ・ハプログループのうち、M か N の判定とともに、東アジア人に多く検出される M・N のそれぞれに属するハプログループの判定も行い、さらに下位のサブハプログループまで判定を行った。APLP の実験手順に関しては、(Kakuda et al. 2016) のプロトコールに従った。

## DNA 分析の結果

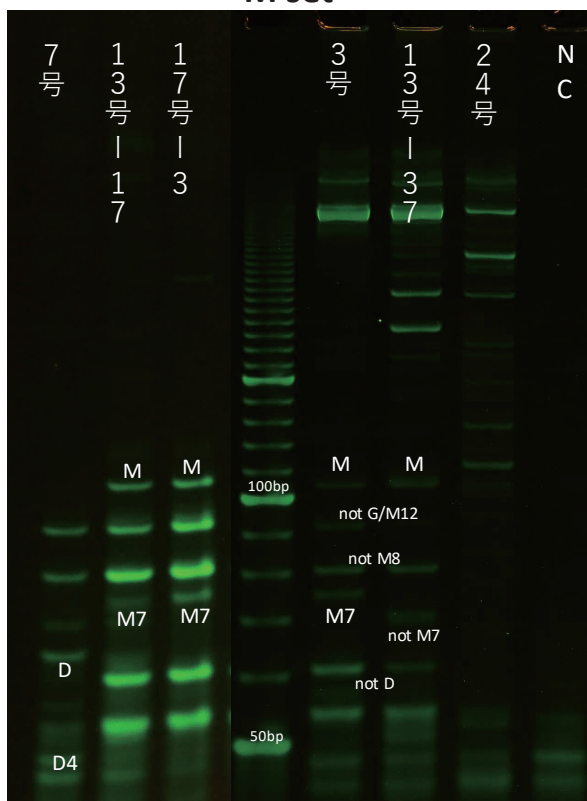
マクロ・ハプログループ M と N のグループを判定した APLP の結果を図 1, 2, 3 に、下位のサブハプログループ判定の結果を図 4, 5 に示す。M / N を判別する分析では、大友遺跡で 24 号を除き 3 体で明瞭な増幅バンドが電気泳動像上で検出され、1 体 (13 号 -37) は不明瞭な増幅バンドとなった。今回用いた APLP では、1 回の実験でミトコンドリア DNA の 6 つの座位を検出しており、

それぞれが 50bp から 100bp のバンドとして増幅され、対象とした DNA の状態が良い場合には 6 つのバンドがしっかりと確認できる。大友遺跡の 6 体から抽出された古代 DNA では、4 体 (ハプログループ D4 が 1 体、M7 が 3 体) が比較的状态が良好であることが示唆された。一方、広田遺跡の 12 体では、全て個体で良好な増幅が確認され、ハプログループ B が 2 体、M7 が 10 体と判定された。続いて、B, D4, M7 の下位のサブハプログループ判定を行ったところ、大友遺跡では D4 (a,b1,b2,e,g,h,j,o でない) が 1 体、M7a1 が 3 体と判定され、広田遺跡では、B4 (a,b,c でない) が 2 体、そして 10 体が M7a1 と判定された (図 4, 5, 表 2)。

## 考察

大友遺跡より出土した人骨は、中期までは大半の個体が西北九州型とされる縄文人と共通する低顔・低身長といった形態的特徴を持つが、朝鮮半島南部に起源をもつ墓制である支石墓や、北部九州系の埋葬施設である甕棺

### 大友遺跡



### N set

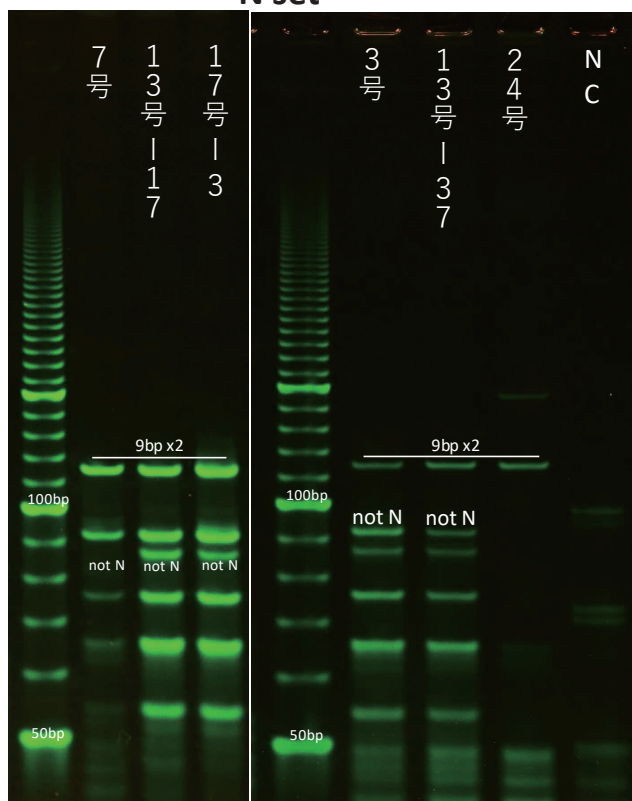


図 1 APLP M/N セットによる結果 (大友遺跡)

広田遺跡

M set

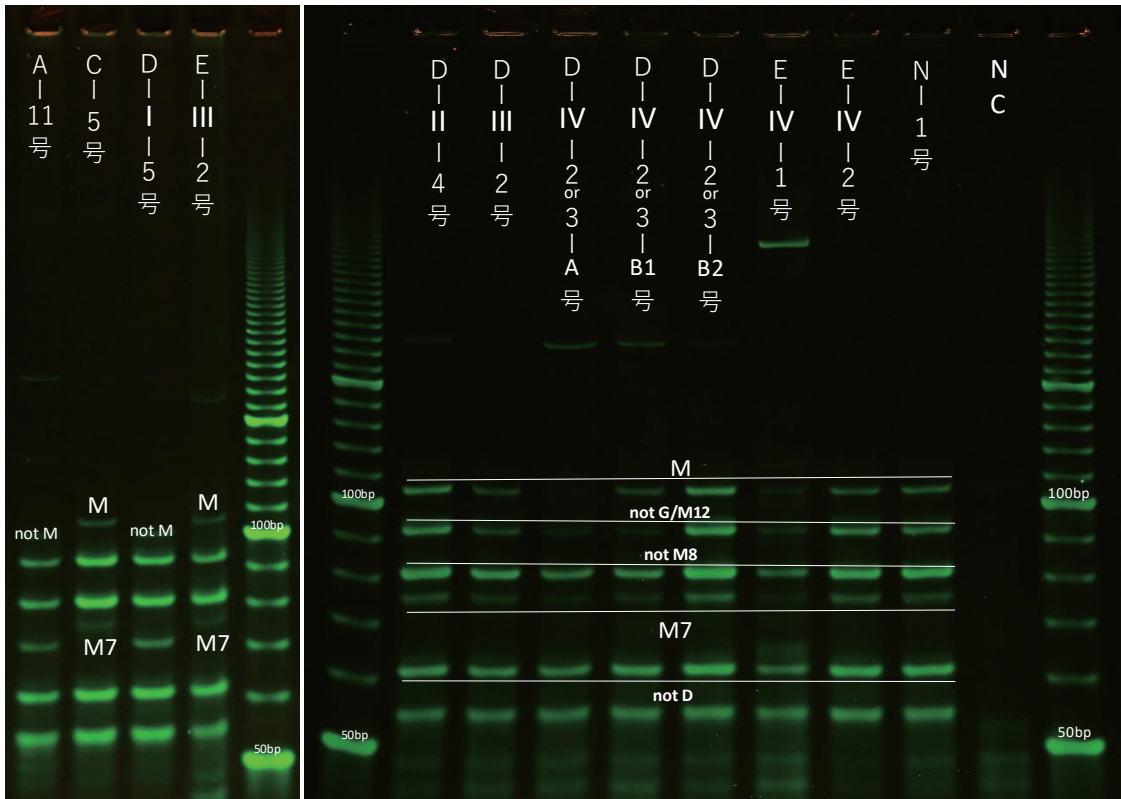


図2 APLP Mセットによる結果（広田遺跡）

広田遺跡

N set

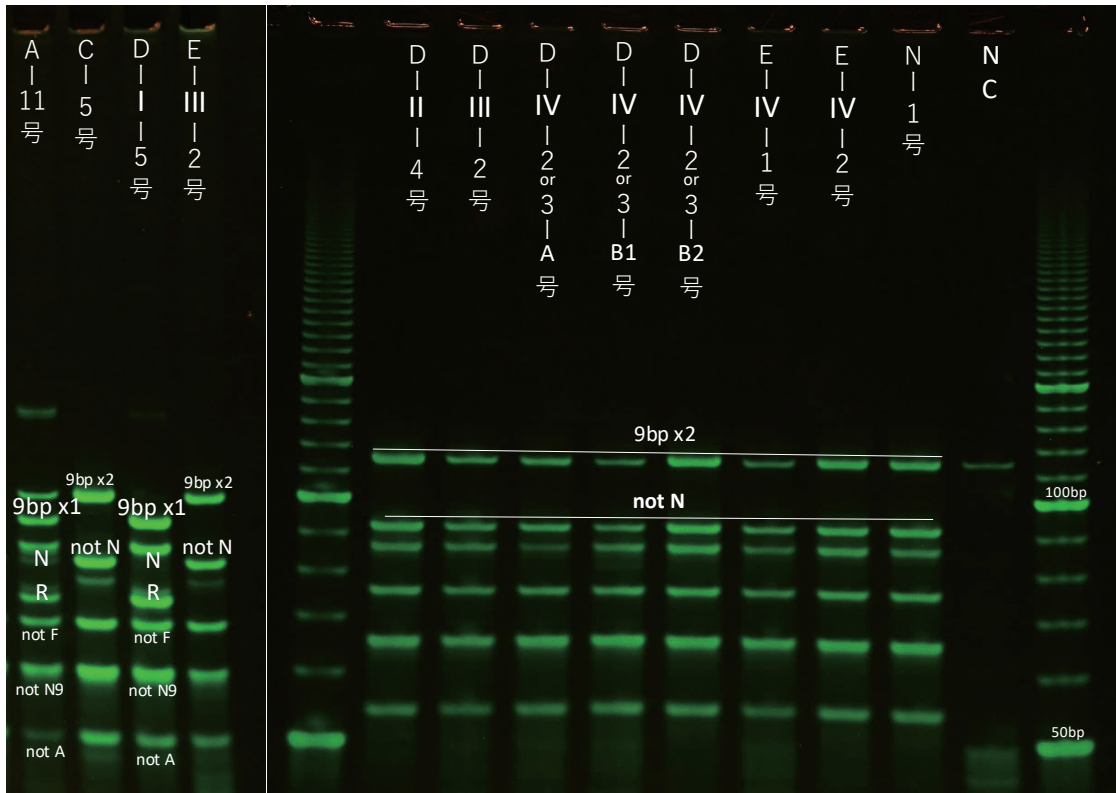


図3 APLP Nセットによる結果（広田遺跡）

大友遺跡

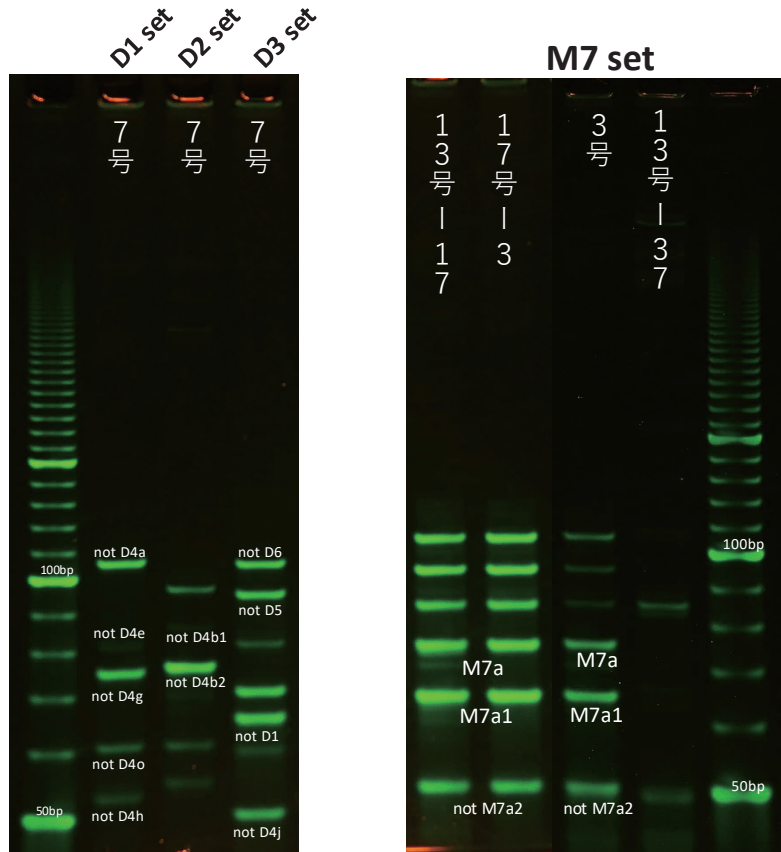


図4 細分 APLP セットによる結果 (大友遺跡)

広田遺跡 B set

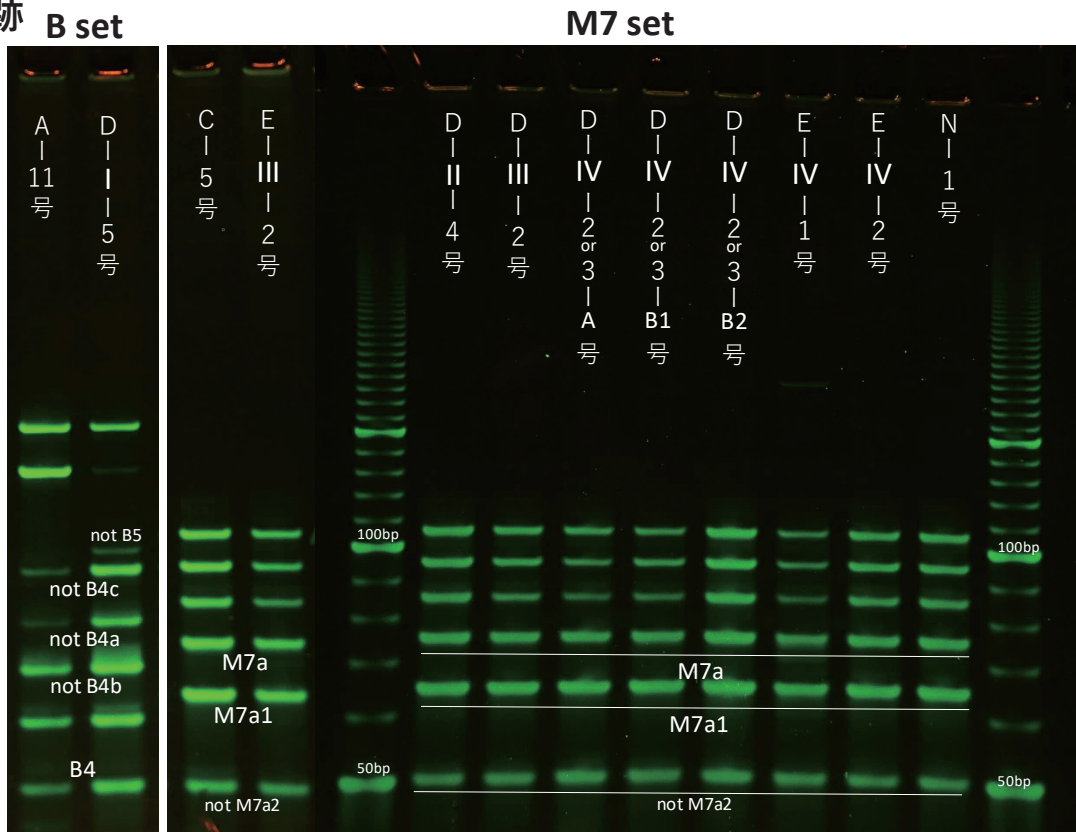


図5 細分 APLP セットによる結果 (広田遺跡)

表2 本研究で検出されたミトコンドリアハプログループ

大友遺跡	性別・年齢	埋葬施設	較正年代 (cal)	ミトコンドリアDNAハプログループ
3号	男性・熟年	支石墓（下部構造：土壙墓）	760-550BC	M7a1
7号	女性・成年	支石墓（下部構造：土壙墓）	未分析	D4(a,b1,b2,e,g,h,j,oでない)
13号-17		箱式石棺墓	AD 20-160	M7a1
13号-37		箱式石棺墓	AD 170-310	N.D.
17号-3	女性・成年	箱式石棺墓	AD 120-230	M7a1
24号	男性・熟年	甕棺墓	350-190 BC	N.D.
<b>広田遺跡</b>				
A -11号	男性・成年	覆石墓	AD 245-405	B4 (a,b,cでない)
C -5号	女性・成年	土壙墓	437-467 cal AD (7.35%) 473-521 cal AD (12.51%) 526-644 cal AD (75.59%)	M7a1
D-I-5号	男性・成年	覆石墓	AD 235-395	B4 (a,b,cでない)
D-II-4号	小児	馬蹄状配石墓	AD 425-555	M7a1
D-III-2号	男性・若年	馬蹄状配石墓	AD 420-545	M7a1
D-IV-2or3-A号	不明	不明	未分析	M7a1
D-IV-2or3-B1号	不明	不明	未分析	M7a1
D-IV-2or3-B2号	不明	不明	未分析	M7a1
E-III-2号	男性？・成年	土壙墓	415-566 cal AD (95.45%)	M7a1
E-IV-1号	女性・熟年	土壙墓	420-587 cal AD (95.45%)	M7a1
E-IV-2号	男性・成年	土壙墓	419-592 cal AD (95.45%)	M7a1
N-1号	男性・若一成年	土壙墓	416-587 cal AD (95.45%)	M7a1

性別・年齢・埋葬施設は中橋（2003）、米元（2023）、竹中ら（2021）、木下ら（2024）、較正年代は瀧上ら（2021）、竹中ら（2021）、木下ら（2024）と本研究による。

が変容しつつ使用されており、当時の人びとの遺伝的な素性やその変遷に高い興味を持たれている。今回の分析では、ハプログループが判定できた4体のうち、3体で縄文人由来と考えられるM7a1が検出された。近年、次世代シーケンサーの登場により、古代人においてもミトコンドリアゲノムや核ゲノムの解読が可能となり、より詳細に遺伝的背景を明らかにすることが可能となっており、同遺跡の古人骨では、5次調査で発掘された8号支石墓の熟年女性でミトコンドリアDNA全周配列分析の結果ではM7a1a6と判定されている（神澤ら2021）。また、同個体の核ゲノム分析では、主成分分析の結果、遺伝的に縄文人集団の範疇に収まることが判明し、大陸系集団との混血は見られていないことが報告されており（神澤ら2021）、今回の結果と矛盾しない。一方で今回、弥生早期の7号女性は渡来系とされるD4と判定されたことから、同時代において渡来系の人びとが来訪していた可能性を示唆するが、抽出DNAの状態が良好でなかった。そのため、この結果の解釈には、今後の次世代シーケンサーを用いた詳細な分析が必須と考える。

西北九州地方の遺跡におけるDNA分析では、長崎県

佐世保市の弥生後期の下本山岩陰遺跡においても実施されている。下本山2体のミトコンドリアDNAハプログループは、縄文系（M7a1a4）と渡来系（D4a1\*）の両系統が見られ（篠田ら2017）、その後の核ゲノム分析からは、いずれの個体も在来縄文集団と渡来系集団に由来する遺伝子を持っており、弥生後期の同地域において混血が進んでいたことが示されている（篠田ら2019a）。これらの結果は西北九州型とされる形態的特徴を共有する2遺跡においても、在来の縄文集団と渡来系集団の混血には、時期的・地域的な差があることを示している可能性がある。今後、より連続した時代の多くの人骨を分析することで、さらに詳細な実態が解明されてゆくと考える。また、今回ミトコンドリアハプログループの分析を行った個体のうち、M7a1と判定された個体に関しては比較的抽出DNAの状態は良好であり、同じミトコンドリアハプログループである可能性も考えられる8号支石墓女性との関連や、核ゲノム分析の結果が待たれるところである。

広田遺跡から出土する人骨は、九州地域の弥生時代人の中でも特異な形態的特徴を持ち、同時代の人びとの

関連に大きな興味が注がれている。今回の12体の分析では、全個体から良好な DNA が抽出でき、縄文人由来とされる M7a1 が10体、これまでの遺伝学的調査では縄文時代人骨からは検出されなかった B4 の2体が検出された。九州地方から琉球列島の島嶼群におけるこれまでのミトコンドリア DNA 分析では、縄文時代とその相当期において多くの個体が M7a1 の系統を示すとともに、僅かな N9b 系統も検出されている（篠田ほか 2019b）。同時代では九州南部や島嶼においてもこの傾向がみられ、上記の2系統のみ、同様の比率で検出されている（篠田ほか 2021a, 神澤ほか 2022）。弥生時代から古墳時代以降になると、縄文時代の遺跡からは検出されなかった C 系統や D4, M9 の系統も検出されるようになり、基層集団と考えられる M7a1 は徐々に検出の割合を低下させつつもハプログループの存在は確認されている（篠田ほか 2021b, 神澤ほか 2022）。今回分析を行った広田遺跡の骨資料は古墳時代前期から後期並行期のものであるが、12体中10体が M7a1 を示し、種子島という立地も考慮すると同時代の他地域よりも縄文的な遺伝的特徴を強く残している可能性が示唆される。M7a1 であった10体は、上記の弥生時代早期の大友8号支石墓女性のように、核ゲノム分析においても縄文人の遺伝要素を強く残す集団である可能性もあり、今後の詳細な DNA 分析が待たれる。またハプログループ B4 を示した2体だが、これらの出自も大変興味深い。B4 はこれまで、縄文時代以降に日本列島に移入した人びとのハプログループと考えられており、現代では台湾やフィリピン、ハワイやポリネシアなど太平洋の島嶼で多く検出されている。B4 は現代日本人で9%程度検出されているが、広田遺跡では2005年の発掘調査で発見された南区2号墓人骨が B4f であったことが（篠田ら 2021c）によって報告されている。この報告によるとこれまで登録されている B4f 系統の5個体のうち地域不明の1体を除いて全てが日本人であり、今回の2体も B4f である可能性もある。これまで行われてきた日本各地のミトコンドリア DNA 分析において、縄文時代には検出されていなかったハプログループ B4 であるが、今回の分析と篠田ら（2021c）による弥生時代後期から古墳後期並行期における人骨で検出されたことは、これらハプログループを持つ人びとが弥生時代以降に種子島に移入した、もしくはこれまで分析を行った縄文時代人からは本ハプログループを検出できていなかっただけで、

実際には九州南部から琉球列島において当時代から本ハプログループをもつ人びとが存在していた可能性も考えられる。今後のミトコンドリア DNA 全周配列の決定と核ゲノム分析によって、今回のハプログループ B4, そして B4f の出自に近づくことにも期待したい。竹中ら（2021）によって較正年代が6世紀後半から7世紀前半と報告されている南区2号墓人骨と今回の2体が同じ B4f であった場合、2体の較正年代は3世紀中頃から5世紀前半であるため、300-240年ほど遡って広田遺跡に同系統が存在していたことになる。これら2体では推定された年代も近く、埋葬施設も同じ覆石墓で、埋葬姿勢も側臥屈肢であるため（木下ら 2024）、何らかの社会関係を有していた可能性を期待できるのではないかと考える。一方、ハプログループ M7a1 の系統では、九州南部から琉球列島と九州以北の古代人や現代本土の集団とが、下位のグループレベルで異なることが報告されており（篠田ほか 2021a）、今回検出された M7a1 系統の詳細もミトコンドリア DNA 全周配列の決定から判明することが期待できる。

本研究で用いた APLP 法は簡便・迅速に対象のミトコンドリアハプログループの判定を行えるため、ゲノム分析など詳細な分析を進める上で資料の状態の良し悪しも含めた有用な判断が可能であり、対象とする集団の遺伝組成を迅速に把握することが可能である。一方でミトコンドリア DNA 上の点変異の検出を手段としているため、より下位の配列構成まで分析することが困難である。次世代シーケンサーを用いたミトコンドリア DNA の全周配列の決定や核ゲノム分析も今回の資料で進められており、これらの分析とともに近隣地域の分析結果を比較、そして形態学的情報とすり合わせを行うことによって、いまだ不明な点が多い弥生時代早期における九州地方から琉球列島の島嶼域における人びとの遺伝的素性や島嶼間における往来など、詳細が判明していくのではないかと考える。

## 謝辞

本研究は文部科学省科学研究費補助金 学術変革研究 (A) 「本州・四国・九州域における先史人類および文化の形成」(代表 神澤秀明, 課題番号23H04843) ならびに若手研究「古人骨の高精度同位体分析に基づく先史時代における琉球列島の人の移動

の解明」(代表 高椋浩史, 課題番号 20K13234) の助成により行われました。

## 引用文献

- Adachi N., Sawada J., Yoneda M., et al. 2013: Mitochondrial DNA Analysis of the Human Skeleton of the Initial Jomon Phase Excavated at the Yugura Cave Site, Nagano, Japan. *Anthropological Science* 121 (2): pp.137-143.
- Kakuda, T., Shojo, H., Tanaka, M., et al. 2016: Multiplex APLP System for High-Resolution Haplogrouping of Extremely Degraded East-Asian Mitochondrial DNAs. *PLoS ONE* 11 (6): e0158463. doi:10.1371/journal.pone.0158463.
- 神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一 2021: 「佐賀県唐津市大友遺跡第5次調査出土弥生人骨の核DNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集, pp385-393.
- 神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一 2022: 「熊本大学医学部所蔵人骨のミトコンドリアDNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第237集, pp135-149.
- 木下尚子(編), 2020: 『広田遺跡の研究 人の形質・技術・移動』熊本大学, 熊本.
- 木下尚子・坂本稔・瀧上舞 2024: 「鹿児島県南種子町広田遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第252集, pp179-190.
- 桑原久男(編), 2003: 『種子島広田遺跡』廣田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター 黎明館, 鹿児島.
- 松下孝幸・内藤芳篤 1989: 「3. 弥生人 3. 地域差」『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』(永井昌文・金関恕・那須孝悌・佐原眞編) 雄山閣 pp.65-75.
- 内藤芳篤 1971: 「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』78巻, pp236-248.
- 内藤芳篤 1981: 「弥生時代人骨」『人類学講座 5 日本人 I』人類学雑誌(人類学講座編纂委員会編) 雄山閣 pp57-99.
- 中橋孝博・永井昌文 1989: 「3. 弥生人 1. 形質」『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』(永井昌文・金関恕・那須孝悌・佐原眞編) 雄山閣 pp.23-51.
- 中橋孝博 2001: 「大友遺跡第5次調査出土人骨」『佐賀県大友遺跡——弥生墓地の発掘調査——』 pp.60-67.
- 中橋孝博 2003: 「大友遺跡第6次調査出土人骨」『佐賀県大友遺跡II——弥生墓地の発掘調査——』 pp.50-63.
- 中橋孝博 2019: 『日本人の起源——人類誕生から縄文・弥生へ——』講談社学術文庫, 篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登 2017: 「佐世保市岩下洞穴および下本山岩陰遺跡出土人骨のミトコンドリアDNA分析」*Anthropological Science (Japanese series)* 125 (1) pp. 49-63.
- 篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登 2019a: 「西北九州弥生人の遺伝的な特徴——佐世保市下本山岩陰遺跡出土人骨の核ゲノム解析——」*Anthropological Science (Japanese series)* 127 (1) pp. 25-43.
- 篠田謙一・神澤秀明・安達登・角田恒雄・土肥直美 2019b: 「貝塚前期を中心とした人骨のDNA分析」『沖縄考古学会2019年度研究発表会資料集』 pp.25-26.
- 篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登 2020: 「福岡県那珂川市安徳台遺跡出土弥生中期人骨のDNA分析」国立歴史民俗博物館研究報告 219集: 195-205.
- 篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登 2021a: 「鹿児島県徳之島所在遺跡出土人骨のミトコンドリアDNA分析 面縄第1貝塚・トマチン遺跡・下原洞穴遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集, pp.449-458.
- 篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登・竹中正巳 2021b: 「南九州古墳時代人骨のミトコンドリアDNA分析: 島内地下式横穴墓群・町田堀遺跡・立小野堀遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集, pp.417-425.
- 篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登・竹中正巳 2021c: 「鹿児島県南種子町広田遺跡出土人骨のミトコンドリアDNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』228集: 433-440
- Sirak K.A., Fernandes D.M., Cheronet O, et al. 2017: A Minimally-Invasive Method for Sampling Human Petrous Bones from the Cranial Base for Ancient DNA Analysis. *BioTechniques* 62: pp.283-289 (June 2017) doi 10.2144/000114558.
- 瀧上舞・坂本稔・藤尾慎一郎 2021: 「佐賀県唐津市大友遺跡第5・6次調査出土弥生人骨の補正年代について」『国立歴史民俗博物館研究報告』228集, pp375-384.
- 竹中正巳・坂本稔・瀧上舞 2021: 「鹿児島県南種子町広田遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』228集, pp427-432. Woodward, S. R., M. J. King, N. M. Chiu, M. J. Kuchar, and C. W. Griggs, 1994. Amplification of Ancient Nuclear DNA from Teeth and Soft Tissues. [PCR methods and Applications], 3: pp244-247.
- 米元史織 2023: 「北部九州の弥生時代人達——いわゆる渡来系形質について——」『九州大学総合研究博物館報告』20, pp 49-73.

Received Nov. 20, 2024; accepted Dec. 24, 2024

## Ancient mitochondrial DNA analysis of skeletal remains excavated from the Otomo archaeological site in Saga Prefecture and Hirota archaeological site in Kagoshima Prefecture, Japan

Tsuneo KAKUDA<sup>1)</sup>, Shiori YONEMOTO<sup>2)</sup>, Hirofumi TAKAMUKU<sup>3)</sup>,  
Hideaki KANZAWA-KIRIYAMA<sup>4)</sup>, Kyoko FUNAHASHI<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup> Department of Legal Medicine, Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering,  
University of Yamanashi, 1110 Shimo-kato, Chuo, Yamanashi, 409-3898, Japan

<sup>2)</sup> The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

<sup>3)</sup> Doigahama Site Anthropological Museum, Kandakami 891-8, Toyokita-cho, Shimonoseki, Yamaguchi, 759-6121, Japan

<sup>4)</sup> Department of Anthropology, National Museum of Nature and Science, 4-1-1, Amakubo, Tsukuba, Ibaraki, 305-0005, Japan

<sup>5)</sup> Faculty of social and Cultural Studies, The Kyushu University, Motooka 744, Nishi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

In this study, we conducted the analysis of ancient mitochondrial DNA from human remains excavated from the Otomo site in Saga Prefecture and the Hirota archaeological site in Kagoshima Prefecture from the early Yayoi period to the middle of Kofun period. Human remains from the Otomo site and the Hirota site have morphological characteristics of the northwest and the southern Kyushu type, respectively. At the Otomo site, mitochondrial DNA haplogroup that are thought to have originated from Jomon period were detected from multiple individuals. This indicates that people with maternally Jomon-derived genotype existed in the region from the early Yayoi period to the early Kofun period. On the other hand, haplogroups that are thought to be immigrant types from continental East Asia and the Korean Peninsula were also detected, indicating the possibility of an influx of immigrants from the late Jomon period to the early Yayoi period. However, since the extracted DNA is not in good condition, further detailed analysis is necessary. The majority of the haplogroup at the Hirota site are thought to be of Jomon origin. This study suggests that many of the individuals at this site may have retained high degree of genetic components of Jomon people even from the middle Yayoi to the Kofun period. In addition, haplogroup B4, which had not been detected in the Jomon period remains in previous studies, have been detected from some individuals. It is interesting to know when this maternal type of people first immigrated to Tanegashima Island.

We have plans to analyze nuclear genomes using these materials to estimate more detailed genetic changes in the area from northern Kyushu to the South-East Islands.

**Key words:** Yayoi-Kofun period, northwest type, southern Kyushu type, ancient DNA analysis, mitochondria DNA haplogroups



# 文武大嘗宮論のための予備的検討

岩永 省三

九州大学総合研究博物館専門研究員：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
rocksrk@yahoo.co.jp

**要旨**：藤原宮朝堂院における文武天皇の大嘗宮の位置論を展開するための予備的検討を行う。まず、大嘗祭の機能を再確認し、服属儀礼としての側面に注目し、大嘗祭の成立時期・成立過程、大嘗祭形成の歴史的事情など、大嘗祭に関わる基本的問題を検討する。続いて、文武即位に先立つ7世紀における大王家の王統の形成過程を辿り、文武の即位を強行した持統の皇位継承構想と皇統観、文武即位の歴史的评价などを確認する。最後に、安閑から文武に至る歴代大王陵について、造営場所、改葬・追葬の有無などの基礎的情報を整理し、それらの背後に、王統の確認・正統化・強化などの政治的意図があることを確認する。

**キーワード**：大嘗宮、大嘗祭、持統天皇、文武天皇、大王陵

## はじめに

大嘗祭は、天皇即位後に実施される最初の新嘗祭であり、天皇就任に伴う祭儀の一環である。大嘗祭は、律令国家による全国支配を正当化する政治的意図が強く反映された祭儀であり、7世紀後半における国家機構の急速な整備と並行して、天孫降臨神話・国譲り神話などの体系化を前提に、新たに創出されたとみられ、神話と儀礼の平行な形成が想定できる。大嘗祭で用いられ、儀式の終了と共に撤去された仮設の建物群が大嘗宮であるが、儀礼執行の場とその形成・整備過程が、大嘗宮遺構の変遷として考古学的にも物証を持って把握できる点は、まさしく稀有な例である。

古代の大嘗宮については、平城宮で元正・聖武・淳仁・称徳・光仁・桓武の5天皇の即位に伴う大嘗宮が発見され、奈良時代における大嘗宮の構造と変化が判明したが(岩永2006a・2006b・2010)、平城宮を遡る藤原宮・飛鳥浄御原宮における大嘗宮遺構の解明が渴望される。筆者は藤原宮における文武・元明大嘗宮の在り方について検討したことがあるが(岩永2010)、藤原宮朝堂院内における文武大嘗宮のあり方について、新たな仮説を提示することとした。その前提として、大嘗宮が単に大嘗祭が

挙行される場であるにとどまらず、朝堂院内で大嘗宮が設けられる位置には、即位する天皇の王統上の位置づけと天皇位継承の正当性が表現されていると考えている。

小稿はそのような見通しに立って、文武大嘗宮論を展開するための予備的検討を行うものである。「1」では、大嘗祭の機能を再確認し、服属儀礼としての側面に注目し、大嘗祭の成立時期・成立過程、大嘗祭形成の歴史的事情など、大嘗祭に関わる基本的問題を検討する。「2」では、文武即位に先立つ7世紀の大王家の王統の形成過程を辿り、文武の即位を強行した持統の皇位継承構想と皇統観、文武即位の歴史的评价などを確認する。「3」では、安閑から文武に至る歴代大王墓について、造営場所、改葬・追葬の有無などの基礎的情報を整理し、それらの背後に、王統の確認・正統化・強化などの政治的意図があることを確認する。

## 1. 大嘗祭の基礎的再検討

### A. 近年の学説

大嘗祭の意義については学説の整理をしたことがあるが(岩永2006)、不十分な点があり、要点を再度述べて

おく。

折口信夫は天皇が大嘗祭で天皇霊を身につけて資格が得られると論じ（折口1930）、この「真床覆衾」論は大きな影響力を持った。現在でも大嘗祭を天皇の即位儀礼と見る説がある。もしそうであるなら大嘗祭を経なければ真の天皇になれないはずだが、即位儀を行い天皇になってから大嘗祭を行っており、大嘗祭を即位そのもの－天皇の資格獲得に関わる儀礼と見るのは無理がある。

また、大嘗祭で天皇霊＝神格を身に付けるという折口の仮説は、岡田精司（岡田1983）・岡田荘司（1990a・1990b）・西本昌弘（西本2009）によって、否定されている。現存史料に基づく限り、神膳供進と共食の儀礼としか言えないようである。現存史料に秘儀の核心的な部分が描写されていない可能性は残るが、無い物ねだりではできないし、史料にない事を想定しても検証のしようがない。そもそも聖性獲得儀礼であるなら、同じ儀礼を悠紀殿の儀、主基殿の儀で二回もする必要はないことに基づけば、東日本・西日本に対する服属儀礼とする説（大津1999）が蓋然性が強そうである。

以下、大嘗祭の儀式としての機能について、聖餐説、受霊説、聖婚説に整理して再確認しておく。

聖餐説は、天皇が神に食物を供し、共食し豊穰を祈願する儀礼と考えるもので、折口信夫の受霊説が登場するまで中世以来の共通理解となっていた。

折口信夫が提唱した受霊説（折口1930）は、天皇が寝殿内の寝所で真床覆衾にくるまって天皇霊を身につけ資格を完成するとし、神との共食＝聖餐は二義的な意味しか持たないとする。

岡田精司の聖婚説（岡田精1983→1992a）は、折口説を批判したうえで、大嘗宮に置かれた二組の寝具に注目し、聖餐で神と一体化した天皇が寝所で聖婚儀礼を行なったとし、「ニヒナメ・ラスクニ儀礼」における天皇と采女との聖婚を経て、天皇・中宮の寝具の並置が生じたとみる<sup>1</sup>。岡田精司の聖婚説は岡田荘司らから厳しく批判されているが、岡田精司の1992年論文を一読すれば分かるように、聖婚説は論の主たる部分ではない。大嘗祭は全国土の象徴として悠紀・主基の斎田を設定して、律令的国郡制に対応した服属儀礼を行なうために創始された儀礼とされた。

岡田荘司は、神殿内の寝座に天皇が臥して寝具にくるまり受霊や聖婚などの秘儀を行うという説には史料上の

根拠がないとして受霊説・聖婚説を批判し、天皇による神膳供進、天皇と神の共食が儀礼の内容であるとした（岡田荘1990a・b）。この岡田荘司説は、中世以来の聖餐説を継承し補強を図ったものと解せる。森田梯は岡田荘司説を評価しつつ、寝具の問題や中宮の関与について検討した（森田1991）。

聖餐説と受霊説・聖婚説の対立を生み出す史料解釈上の相違点は限られていた。『江次第抄』所引の「内裏式」と「新儀式」の神今食に関する規定である。神今食は月次祭の夜に天皇が行う神饌親供の儀礼で、新嘗祭や大嘗祭の卯日神事と次第が共通する部分が多いため、大嘗祭の意味を示す根拠として注目されてきた。神今食における神饌親供の次第は、『江次第抄』所引の「内裏式」および「新儀式」逸文に詳しく描写されており、両史料は成立年代が古く神今食の本義を伝えるものとして重視されてきた（西本2009）。

「内裏式」逸文にある「縫殿寮供寝具、天皇御之」を、折口の受霊説では寝具に天皇がくるまって天皇霊を受身すると解した（折口1930）。岡田精司の聖婚説（岡田1992a）では実際に寝具に伏したとし、『延喜式』掃部寮式神今食条に中宮の寝具も設けられていたとあるのを重視して聖婚儀礼を行なったと解した。これに対して岡田荘司は、「御之」は天皇が神嘉殿に出御することを意味すると解し、森田梯は、寝具を天皇が供神のため御（おさ）めたと解して秘儀の要素を否定した。

この史料解釈上の相違を解決しうる重要な研究が西本昌弘によってなされた（西本2009）。西本は、九条家本『神今食次第』所引の「内裏式」新出逸文を検討し、「内裏式」大嘗祭の卯日神事や新嘗祭と同じ祭祀構造を持つ神今食を分析した。神今食祭儀の核心は神饌親供で、秘儀とされたためか史料が限られるが、「内裏儀式」逸文中の「縫殿寮供寝具、天皇御之」という一節が、神殿内における天皇の所作をあらわすものとして注目されてきたという。この一節の解釈として、神今食の際に寝殿内に設けられた寝座上に天皇が臥すとみる立場では、寝座上で天皇が真床覆衾にくるまる所作を行うとする説（折口信夫・松前健・洞富雄）と、寝座上で天皇が聖婚儀礼を行なうとする説（岡田精司・山尾幸久）があり、臥さないとみる立場では「天皇御之」について、天皇が神嘉殿に着御したとみる説（岡田荘司旧説）、天皇が寝具を供御のため御（おさ）めたとみる説（森田梯）、天皇が神嘉殿

の西隔より神嘉殿まで出御して寝具を備える儀式に立ち会ったとする説（岡田荘司新説）、に分かれると整理した。そのうえで西本は、研究史上の核心的指摘について、「天皇御之」は天皇が祭服に着替える以前の次第であり秘儀の要素は持たない、「御之」の「之」は寝具を指す、寝座は神を迎えるための神座であり寝具は「神の御衣」である、の3点に整理した。

これらの指摘を勘案して、「内裏式」新出逸文から得た新たな手掛かりから、「天皇御之」は、神今食祭儀の準備過程の一つで、神選親供に先立って天皇が寝具に何らかの所作を加えることと考えざるを得ず、これのみから祭儀の本質を読み取ることは妥当ではない、と結論付けた。そして寝具は、『西宮記』『年中行事』『江家次第』の記述から「御衾」と同義で、天皇みずから寝具（御衾）を供進することで神の来臨をより強く祈念する姿勢を示したと解し、「天皇御之」を根拠に、天皇が寝具にくるまたと解釈することは困難になったとした。これによって、「真床覆衾」論と天皇の聖婚儀礼説は、ともに否定されたと言って良い。

西本は、記紀にみえる海神宮訪問神話と神今食祭（大嘗祭）との関連性を、松前健（松前1970）・次田真幸（次田1985）・川上順子（川上1973）・岡田精司（岡田1992b）が指摘していることに賛意を表すとともに、神今食の神話的投影が海宮遊幸神話であったとし、「神今食は天皇が遠来の神を新座上の八重畳に迎えて神饌を供する儀礼」、「神今食・新嘗祭は年に三回、天皇が遠来の神を新座上に迎えて最高の接待を尽くすことで、国土の安穏と治世の繁栄を祈る行事であった」と結論付けた<sup>2</sup>。

それに加えて西本は、神今食の際に天皇が神座上に神の寝具を整えたことに注目し、「最高の接待」の中には神と采女などとの聖婚儀礼が想定されていた可能性がある、と提唱した。神今食で天皇が遠来の神を神座上の八重畳に迎えて神饌を親供する儀礼が、記紀にみえる海宮遊幸神話のモチーフと酷似しており、海宮遊幸神話に聖婚のモチーフが見られる事から、神今食にも神と陪膳采女との聖婚儀礼の要素を認めるべきと考えている。神今食・新嘗祭で国魂を体現する采女の介添えを受けながら、そこに神が有るが如くに酒食を供進し、最後に采女との聖婚を行わせたと考えた。

## B. 服属儀礼としての大嘗祭

こうしてみると大嘗祭は、天皇による受霊・聖婚（西本が言う神と采女の聖婚は除く）の儀礼ではなく、聖餐（天皇が新穀を食しその神宴を神々にも供する）神膳供進・共食の儀礼とみるのが妥当と考えられるが<sup>3</sup>、儀礼自体の内容はそうであるとしても、それだけでは、即位後ほどなく一代一度の盛儀として大嘗祭が特設された意義が説明できないであろう。

大嘗祭の本義を神膳供進・共食儀礼とした岡田荘司説に対して、赤坂憲雄は「かぎりなく平板で、限りなく貧しい」、「国民とも国家とも関わりのうすい、天皇家のイエ祭にすぎないという結論が導きだされはしないか」と批判したが、この赤坂の指摘に対して小倉慈司は、「しかしそうではなく、岡田荘司説を踏まえたうえで、なおかつ、一見素朴に見える天皇の神祭りが一代一度の大嘗祭として規定、実施されたことの意味こそ考えるべきであろう」、「大嘗祭実施にかけられた費用や労働力に思いを馳せるだけでも、決してそれが「素朴」と片づけられるものでないことが明らかとなろう」と述べた（小倉2011）。ただし小倉自身はその「意味」を示してはいない。

ここで、天皇が畿外の四方の国を「食国」として支配・服属させる関係を確認するために、畿外諸国から献上された食物を天皇が神と共食する儀礼（岡田1983・1992、大津1999）という面が極めて重要となってくる。

岡田精司は、天皇が統治する国土＝オスクニを象徴する地域として、畿外に悠紀・主基の国郡を卜定し、その齋田から奉った稲米によって製した酒飯を神に扮した天皇が食べることによって国土の統治権が確認されるとし、また、齋国の郡民が都へ動員されて齋院における準備から大嘗宮の造営まで奉仕し、祭りの日に両国の芸能を奏することが畿外諸国の服属の証であるとした。そして大嘗祭は、国土統治権確認の対象が律令制による国郡であることから、律令の国郡制支配に対応した服属儀礼、すなわち呪的に全国土を服属せしめる祭儀として設定されたものであり、即位儀によって天皇の資格を得た直後に、服属する畿外の国々の貢上する初穂をもって天皇の守護神を祀るところに大嘗祭の本来の意義があったとした（岡田精1983・1992a）。「神に扮した天皇が食べる」とした点は、神を迎えて神と共に天皇が食べるとすべきであろうが、それ以外は妥当な見解と思われる。西本が指摘した、遠来の神に国魂を体現する采女を神に差し出す

という事も、采女が、服属する畿外の地方豪族から服属の証として貢上されたものであったから、初穂を捧げるのと同義（国土の産物の総動員）と考えられる。

単なる聖餐・神膳供進・共食儀礼でなく、即位後ほどなく一代一度の盛儀として大嘗祭が特設された意義は、岡田精司が述べたように、天皇の全国土支配を呪的に確認するという点にあったとみられる。新嘗祭との区別が明確になるのが持統大嘗祭であったとしても、悠紀・主基の斎国を指定しての大規模な祭儀を創始したのが天武であったのならば、天智朝以来の臨戦態勢と全国支配システムの強固化を目指す中で、王権を強化する儀礼の整備にも着手したと意義付けられるであろう。

### C. 大嘗祭形成の歴史的事情

大嘗祭の重要な意義を服属儀礼と考える場合、それが形成された歴史的事情が問題となる。

岡田精司は、服属儀礼としての食物供献儀礼の変遷について、(A) 小国家の族長による国占め、(B) 征服戦争における敗者からの食物供献、(C) 新嘗祭と結合したヲスクニ儀礼の宮廷儀礼としての整備、(D) 即位の大嘗祭としての定着・形式化、という展開を想定し、(A)～(C)が大化前代、(D)を天武朝以降とした(岡田精1970)。

このうち「ニイナメ＝ヲスクニ儀礼」については、地方の国造的豪族層が大和政権への服属に際して御酒・御饌を供進し寿歌を奏する儀礼が、大和政権の中央集権化と専制化が進行する過程で、大和政権と地方首長との間で反復され、収穫祭の新嘗と結合し宮廷儀礼として形を整えるに至ったもので、国造制に対応する服属儀礼としている。そして、天武が国造の服属儀礼に代わるものとして、悠紀・主基の国郡を設定し国郡司以下を新嘗祭に奉仕させようとしたと推定した。(岡田精1983)。

岡田精司は、「ニイナメ＝オスクニ儀礼」が、一代一度の大嘗祭へ移行したとしており、天武朝の過渡期を経て、持統朝に確立したとみているが、岡田による「ニイナメ＝オスクニ儀礼」の概念化および、(C)「ニイナメ＝オスクニ儀礼」から(D)大嘗祭への移行という説は、大化前代の実例からの帰納というより、天武朝から持統朝にかけての新嘗祭・大嘗祭の推移から時間を遡って仮説的に推定されたものとみられる。

そもそも「オスクニ儀礼」が新嘗祭の日に行われたと推定したのは、服属儀礼としての食物供献が収穫祭の日

に行われるにふさわしいものであるからと説明されているが、服属儀礼と新嘗との密接な関係は「大嘗祭の内容から推察し得る」と明言され、やはり遡上の推定である。

『日本書紀』には、天武2年12月に「大嘗」に奉仕した中臣・忌部・神官の人々と播磨・丹波の郡司などに賜物を与えたとあり、大嘗祭そのものの挙行記事はないものの、大嘗祭は実施されたとみられる。他方、天武5年の9月に新嘗祭のために斎忌・次の国郡を卜定し、さらに天武6年11月にも新嘗に奉仕した神官・国司に賜禄して、新嘗祭においても国司を動員した大規模な祭儀を行ったようである。つまり「大嘗」と「新嘗」は区別されていなかった。これに対し、持統は5年11月に「大嘗祭」を挙行し、播磨・因幡の郡司らを供奉させているが、新嘗祭における国郡卜定記事はない。

つまり、国郡卜定を伴って実施されていた新嘗祭が、大嘗祭の新設によって国郡卜定を伴わなくなり簡略化されたのに対し、大嘗祭は国郡卜定を伴い続けて新嘗祭との差異化が図られたとみられる。

これらの事実関係から岡田精司は、天武朝には新嘗祭の度に悠紀・主基の国郡からの貢物をもって全国からの献上を象徴させていたが、持統朝以降にはユキ・スキの卜定は、大嘗祭に限定されるようになったとする。つまり天武朝には服属儀礼を毎年の新嘗祭でやっていたが、持統朝には服属儀礼は即位後最初の一回(大嘗祭)だけになり、その後の新嘗祭は服属儀礼の要素を欠落した単なる収穫祭になったという評価である。

岡田精司は、この変化を大化前代に遡上させた。ユキ・スキの国郡卜定(特定2郡で畿外全体を象徴させるという事)が史料上では天武より前にはまったく遡らないことから、大化前代には毎年の新嘗祭の度に全国の国造的豪族たちが服属のシンボルとして酒餞を貢上していた、すなわち、服属の誓いとして行われるようになった食物供献が、大和政権の支配体制の整備に伴い、服属した地方政権首長との間に定期的に反復して行われるようになっていた、と推定した<sup>4</sup>。

大津透も、岡田精司の説を受け、大嘗祭は天皇が畿外を「食国」として服属させるという関係を象徴する儀式であり、畿外の国郡が悠紀・主基国に卜定されて新穀を天皇に献上して食べてもらい、まさに「食国」により服属奉仕を示すとした。大化前代には四方国の多くの国造が儀式に参加したと推測され、畿外の国造全体が天皇に

服属することを象徴的に意味し、それにより天皇の即位が保証されたとしている（大津1985・1999）。

『養老神祇令』では、大嘗祭と新嘗祭をともに「大嘗」と記し、「毎世」で国司が行うもの（大嘗祭）と、「毎年」で所司が行うもの（新嘗祭）とに区別しており、国郡卜定と特設儀場の設営、国司・郡司による労働の動員の有無において差異化が図られていると思われる<sup>5</sup>。ただ、神殿でおこなう祭儀の内容は同じであるため、『神祇令』ではともに「大嘗」と記して問題なかったであろう。

#### D. 畿外の服属儀礼の必要性

大津透は、畿外にたいして繰り返し服属儀礼が要求されるのは、自立した在地首長を通じてしか畿外を支配できず、畿外が天皇支配の及ばぬ「まつろわぬ地」であったからとする（大津1985）。畿外は天皇の支配が完全には及んでいないのであり、律令制を施行してもなお、まつろわぬものであり、異郷の地であったとする（大津1986）。

そして、出雲国新任儀礼の分析から、服属儀礼の本質を、国造から神宝を大王へ献上させ、逆に、大王から国造に対して宝器を賜与し祭らせることで祭祀権を召し上げる（差し出させる）こととみた。一方で、これは個別の国造への対応であり、律令国家による全国統一支配の成立にはなお一段の飛躍が必要であったとも述べる（大津1999）。

さらに大津は、全国における郡司の任命については、早川庄八の研究（早川1984）に拠りつつ、郡司任命の儀式が国造任命儀を継承した服属儀礼と言えとしたが、郡司の場合、国造と異なり服属を示す宝器の交換はなくなり位記の授与のみとなっていることに注目する。その背景には、律令国家の成立に伴って地方支配における「宝器の交換」は不要となり、一片の辞令で任命できるようになったことがあるとし、地方豪族の郡司への任命で、郡司が朝廷に服属奉仕し全国支配が可能になった背景の探索が必要とした。

大嘗祭において畿外の国郡が悠紀・主基に卜定されて天皇に奉仕することは、畿外の国造全体が天皇に服属することを象徴的に意味し（大津1985）、律令制下の大嘗祭では悠紀・主基の二郡が畿外を代表するという象徴的・現実的な意味を持っていたとする（大津1985）。

養老元年に元正天皇が東国行幸した際に、近江の行在所には「山陰道伯耆以来、山陽道備後以来、南海道讃岐

以来」の諸国の国司が参上して歌や舞を披露し、美濃の行在所では「東海道相模以来、東山道信濃以来、北陸道越中以来」の諸国の国司が雑技を披露している<sup>6</sup>。

大津は、この時に参向した国司に畿内国司が入っておらず、畿外の国司のみが近国と中国のほとんどすべて集められて服属儀礼を行なっていることに注目し、畿外が天皇に服属すべきもので、律令制が施行されて国造がいなくなった後も、畿外の服属は決して形式化したものではなく、現実が必要であり、畿外の服属の上で初めて天皇は即位、支配できるという考えが律令制下にも存在していたことを示すとした（大津1985・1986）。

仁藤智子は、この元正天皇の東国行幸について、近江国で西国の、美濃国で東国の、元正天皇に対する服属をそれぞれ確認し、一連の儀礼を通じて元正天皇の国土統治の正当性を明確にし、律令制天皇として西海道を除く全国支配を貫徹したことを可視的に見せる場として用意されたと評価した（仁藤2020）。

このように、天皇の全国支配は、7世紀後半に体系的な国家が成立して以降でも、天皇の代替わりごとに畿外の服属を確認する必要があったようであり、これが服属儀礼としての大嘗祭が創始された事情であったとみられる。

#### E. 大嘗祭の成立過程をいかに把握するか

そうすると、大嘗祭の起源論は、服属儀礼の要素を持ち特設会場の設営を伴う新嘗祭（天武朝に数回実施されたと記録があるもの）が大化前代に遡るかどうかということにかかるといえる。先に述べたように、岡田精司が大化前代において「ニイナメ＝オスクニ儀礼」の存在を考えたのは、大化前代の実例からの帰納ではなく、天武朝から持統朝にかけての新嘗祭・大嘗祭の推移から時間を遡って仮説的に推定した結果とみられる。悠紀・主基の国郡卜定（特定2郡により畿外全体を象徴させる）が史料上では天武より前にはまったく遡らないことから<sup>7</sup>、大化前代には全国の国造的豪族たちが毎年の新嘗祭の度に服属のシンボルとして食物供献を行っていたと推定した。

大津透も、岡田の説を受け、大嘗祭の制度が整えられるのは天武朝だが、それ以前から四方国（畿外）の多くの国造が参加して新穀や贄を献上する原大嘗祭と言うべき儀式はあったと推定している。（大津1985・2010）。当然、この仮説は検証を要するが、そのような儀式の存在が考古学的に立証できるかどうかは問題である。儀式の

場が後の大嘗宮のような構造であったのかどうか、それが特設であったのか常設施設の利用であったのかが問題となる。大嘗祭のルーツを7世紀前半以前で探るなら、食物の献上儀式、および天皇が食物を食することで支配・服属関係を確認する儀式の場を探さねばならない。そのような儀式の場の成立過程に関しては、大嘗宮の悠紀院・主基院の構成要素たる、正殿・膳屋・白屋・廻立殿に相当する建物を見出すことが必要であろうが、単体では何の変哲もない掘立柱建物であるから、遺構の機能を特定することは困難だろう。建物群の空間構成が悠紀院や主基院に似たものであれば認識しやすいが、配置が徐々に変化していった場合、途中段階のものを大嘗宮と認定できるのかどうか課題となる。6世紀代の王宮はまったく不明であるので、7世紀の豊浦宮・小墾田宮・飛鳥岡本宮・飛鳥板蓋宮・難波宮・後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮における儀式関連遺構の様相が将来的に明らかになるのを期待するしかない。

新嘗祭については、平安宮では天皇親祭の場合は常設神祇祭祀施設である中和院の神嘉殿で実施され、特設の会場を用いない。藤原宮・平城宮での新嘗祭の場所は不明だが、特設の大規模な場を用いる大嘗祭との差異は明確化されていたとみられるから、宮内の既設施設で行われたのであろう<sup>8</sup>。ただし、大嘗宮の場合、複数の建物の配置に特異性があるがゆえに大嘗宮と認定できるが、儀式用施設をさまざまな祭儀に用い、内部の設えのみ変える場合、外見上はいかなる祭儀に用いたのか判定できないので、様相の解明は容易ではない。

## F. 天武朝～文武朝における神祇政策の進展と重層的服属儀礼の創設

大嘗祭の成立の意義を探る場合、それ単独ではなく、ほぼ同時期(天武朝～文武朝)に整備された諸儀礼の意義・整備事情と合わせ考える必要がある。天武朝には、宗教政策、特に神祇祭祀において重要な国家的祭祀が創始された。天皇即神思想が生まれ、地方豪族により担われていた全国の神々の祭祀権が天皇と神祇官に集約された。

まず、広瀬祭・龍田祭という新たな国家祭祀が始められ、奈良盆地を対象とする班幣祭祀の原形が作られ、それを受けて、六月と十二月に実施される畿内を対象とした班幣祭祀である月次祭も整備された。持統即位にあたり、神祇令にもとづく即位式と畿内の天地神祇への班幣<sup>9</sup>

が実行された(大津1999・2010)。

大宝令頒布直後の大宝2(702)年2月に諸国の国造を招集し大幣を班ち、3月には大祓に際して全国(畿内+七道)の神社に班幣を頒布した。国造への班幣により地域の神祭に間接的に介入することができるようになり、その後の祈年祭では国造でなく神社の神主や祝部を招集することで、地域の神祭に直接かかわるようになった。

大津透は、律令国家の成立とともに全国の官社を対象とする班幣祭祀が成立することに注目した。文武即位後の大宝2年にはじめて全国対象の班幣がなされたことを、大宝律令施行に伴うさまざまな律令国家スタート措置の一環と評価している。また、畿内のみならず畿外を含めた全国への班幣について、大宝2年の全国班幣に際して国造が上京し、国内の全官社の祝部を率いて幣を朝廷から受け取ったことを服属儀礼と解し、班幣祭祀(即位時と毎年の祈年祭)が、旧来の国造の服属儀礼を継承しつつ、全国を対象に統一的に形式化した新しい祭儀だと評価した。奈良時代に即位や祈年祭に幣を班つことによって地方の神々を服属させたことに、天皇による全国支配の根拠があったと推測している。すなわち、律令国家政府に対して郡司・地方社会が服属・奉仕した前提は、地方の神社の祝部が宮都へ集められて神祇官で幣帛を受けることにより、全国の祭祀権を朝廷が掌握したことにより、郡司制によって、かつて国造が保持していた祭祀権を切り離し行政権だけを与えたことで、郡司が権力を縮小され、国司の下に地方官人として奉仕することになったという(大津1999)<sup>10</sup>。

このように、文武朝の大宝令施行により、畿外も含む畿内七道の全官社への班幣祭祀としての毎年二月の祈年祭が行われるに至り、天皇即位に際しても全官社への班幣が行われるようになった。班幣祭祀は、天皇が奉る幣帛を諸神に班つことであるが、令制では神祇官に全国の官社の祝を集めて幣を配ることから、天皇が各社に使いを遣わして幣帛を奉る奉幣と異なり、天皇が地方の神々を支配・統制するという性格が強く表われている。丸山裕美子は、天皇が天神の子孫としての権威、支配の正当性を表明する手段を手に入れたが<sup>11</sup>、神祇令祭祀が創出された時点では、その権威を四方の国々まで浸透させるに至っていなかったため、地方の国つ神を統制するために神祇官という装置を設け、そこで班幣する大掛かりな儀礼が必要であったとする(丸山2001)。

大嘗祭が畿外首長の服属儀礼の意味（「食国」として服属させる）を持ち、かつては王権と畿外国造との間で個別に、あるいは畿外の国造たちを参集させて行っていた服属儀礼を、悠紀国・主基国に卜定された国郡を奉仕させる形に象徴化したものであるとしても、天皇親祭の秘儀であり、それだけではいささか抽象度・象徴度が高く、畿外の個別首長との間の支配－服属関係を明示・再生産する実効性に乏しいから、別種の服属儀礼を重層化させる必要があったと思われる。

その一つが班幣祭祀であって、神祇官で班幣を受けた祝部たちが、各地域に帰還後、地元の神に幣帛を奉ること、幣帛を与えた「皇御孫の命」が地域の神祭に強制介入して地方首長の祭祀権を召し上げた事を象徴し、地方首長の服属儀礼としての実効性が明らかであるといえる。

さらに、各国庁では、宮城における元日朝賀に対応して、国守が介以下の属官や郡司等を率いて拝賀の儀式を行い、天皇への臣従を確認していた<sup>12</sup>、毎月の国庁での郡司告朔儀は、国司と郡司との支配従属関係更新の機会となっていた（山中1994）。国司は国内支配のために郡司ら地方豪族の伝統的支配力に依拠しなければならなかったから、郡司らに対する国司の支配力や権限の維持・強化が、さまざまな機会・場を利用して図られていた（山中1994）。畿外の現場で郡司らの地方豪族の服属儀礼として機能していたのは、国庁での各種の儀式であった。

### G. 大嘗祭の成立時期

一代一度の大嘗祭が成立した時期については、天武朝説、持統朝説、に分かれる。

日本書紀には、天武2年（673）12月に大嘗に奉仕した中臣・忌部・神官の人々と播磨国・丹波国の郡司などに賜物を与えたとあるが、大嘗祭そのものの挙行記事はない。ただし、天武5年（676）の9月に新嘗祭のために斎忌・次の国郡を卜定し、天武6年（677）11月にも新嘗に奉仕した神官・国司に賜禄している。新嘗祭でも国司を動員した大規模な祭儀を行ったようである。これに対し、持統は持統5年（691）11月に大嘗祭を挙行し、播磨・因幡の郡司らを供奉させているが、新嘗祭での国郡卜定記事はない。

これら書紀の記事については、大嘗祭の成立時期として、二つの評価がある。

天武朝説 天武朝には大嘗祭が創始されるとともに、

大嘗祭のみならず毎年の新嘗祭に際しても悠紀・主基の国郡を決めていたが、持統朝以降、国郡卜定が大嘗祭限定になるという説（大津2011・小倉2011）。

持統朝説 岡田精司は、天武2年の「大嘗」の語は書紀編者の追記で、天武朝には大嘗祭は存在しなかったとみる。天武は毎年の新嘗祭での悠紀・主基の国郡の奉仕を計画したが、民衆への負担が大きいため毎年挙行を中止し、治世最初の新嘗祭のみを悠紀・主基の斎国郡を設定することに後退し、それを大嘗祭として実施したのは持統即位後が最初であったとする（岡田精1992）

どちら妥当か判断しにくい、新嘗祭と大嘗祭の相違は、既設の神祇祭祀施設を用いるか、大規模な特設会場を祭儀の時だけ設けるかの差である。天武5年・6年における「新嘗」では悠紀・主基を卜定し国司以下に奉仕させているから、元正以降の大嘗祭と同じく特設会場を設けたのであろう。『続日本紀』が記す天武2年の「大嘗祭」が、真に「大嘗祭」と呼ばれたのか、「大嘗祭」の名称が未成立で「新嘗祭」であったのかにかかわらず、悠紀・主基の斎郡を設定し、特設祭儀場を設けた実態は同じであろう。したがって両説の違いは、天武2年の祭儀の名称のみとなる。

### H. 悠紀・主基選定に関わる諸問題

前述のように、大津透は、畿外にたいして繰り返し服属儀礼が要求されるのは<sup>13</sup>、畿外が自立した在地首長を通じてしか支配できず、天皇支配の及ばぬ「まつろわぬ地」であったからとする。大化前代には四方国の国造が即位儀礼に参加していたと推定し、律令制下の大嘗祭では悠紀・主基の二郡が参加するだけだが、それは前代の遺制としての意義を失っているのではなく、畿外を代表するという象徴的・現実的な意味を持っていたという（大津1985）。ではその選定法はどうであったのだろうか。

大嘗祭で悠紀・主基両国が卜定されて天皇に服属を誓うのだが、畿外の国郡のみが卜定される。畿外の国造が天皇に対して服属を誓うというかつての構造を代表・象徴して行っている（大津1986）。天皇の畿外に対する支配権は、四方の国の国造の服属によってのみ保証される。畿外・四方の国の服属を象徴するなら、畿外のどこから選んでも良さそうだが、そう簡単ではなさそうだ。

#### ◎ 2国選んで、同じ儀礼を2回する。

同じ儀礼を悠紀殿・主基殿で2回行う理由はどう考え

られてきたか。畿外の服属を象徴する儀礼であるなら1回でも良いはずだが、なぜ代表2郡を選んで同じ儀礼を繰り返すのか。岡田精司は、本来の形では「ユキ」が神聖な神事用の稲田を意味し、「スキ」は天武5年紀に「次」の字を用いていることから、主たる齋田に穢れなどが起った時の予備として設けられたと考えた。しかし、そうであれば、齋田には予備を選んでおくとしても、神事自体は一度で良いはずであるので、必ず二回、別殿舎を造ってまったく同じ儀礼を繰り返す理由があるはずである。

森田悌は、二度の共饌について、一人の神に対し悠紀・主基二殿が作られるのは不可解であるから、二人の神に対して各別の御殿が作られ天皇がそれぞれに対し給仕していると考えるのが良く、二人の神は男女一対の神を指すと推定した(森田1991)。二人のうち片方が女性神であった場合、前項で紹介した、神今食・新嘗祭で、国魂を体現する采女の介添えを受けながら、そこに神が有るが如くに酒食を供進し、最後に神と采女との聖婚を行わせたとする説(西本2009)とは整合しなくなる。神の性別は難しい問題ではあるが。

同じ儀礼を2回する事情は、天皇が畿外の四方の国を「食国」として支配・服属させる関係を確認するために、畿外諸国から献上された食物を天皇が神と共食する儀礼という面に注目すれば、「四方の国」を2回で象徴する必要性があったからと考えられようか。

### ◎ 選ぶ範囲は畿外全体でなく狭く限られる。

古代国家では、畿外でも西日本と東日本は性格が異なるとの国土認識を持っていたのではないだろうか。そうであれば、悠紀・主基の齋国が畿外全体の中の半分ずつを象徴するとみるのが理解しやすい。では、西日本から一か所、東日本から一か所といった選定法なのだろうか。

悠紀・主基の齋田をどの国から選んでいるかを、儀式の形式化(大嘗宮正殿の40尺移動の停止)が進む前の光仁以前の天皇について見ると、畿内の西側・東側から1か所ずつとなったのが元明(遠江・但馬)・元正(遠江・但馬)・孝謙(因幡・美濃)・光仁(三河・因幡)、畿内より西側から2か所となったのが天武(播磨・丹波)・持統(播磨・因幡)・聖武(備前・播磨)・淳仁(丹波・播磨)、畿内より東側から2か所となったのが文武(尾張・美濃)・称徳(美濃・越前)となるから、必ず国土の東西から象徴的に選ばれたという訳ではない<sup>14</sup>。

しかし、天武朝頃に整えられた古代の七道との関係を

見ると、西側から2国、東側から2国の場合を含めて、別「道」から選ぶのが基本であり、唯一の例外が、2国共に山陽道(播磨・備前)から選ぶ聖武のみであるから<sup>15</sup>、1「道」から2か所にならないように別「道」に振り分けるのが基本であったようだ。

### ◎ 二か所を選ぶ範囲はなぜ近国か

光仁以前について、悠紀・主基の2国を選定する空間的範囲を検討すると、西は備前・因幡以東、東は遠江・美濃・越前以西であり、それより外部には及ばない。この範囲は民部式の定める、京との行程での区分における「近国」の中にほぼ収まるが、近国でも、南海道に属す讃岐・阿波・淡路・紀伊は除かれている。また、畿内の東側から北に延びる伊勢・伊賀・近江<sup>16</sup>・若狭・丹後も除かれている。「中国」では、越前・遠江が悠紀・主基に卜定されている。「中国」でも「近国」に接する国である<sup>17</sup>。

このように、悠紀国・主基国は、伊勢・伊賀・近江・若狭・丹後に間に挟んで、その西側の五国(備前・播磨・因幡・但馬・丹波)と東側の五国(越前・美濃・尾張・三河・遠江)の中から選ばれている。近国をベースとするが、「近国」のすべてではなく、「中国」のほとんどと遠国は除外されている。その範囲の中で、すでに述べたように、畿内の東か西かには拘らずに、2「道」から1か所ずつ選ぶのが基本であったとみられる。

悠紀国・主基国がこのような範囲となった事情を検討しよう。

養老元年(717)、元正天皇の東国行幸の際に、天皇に対する服属を確認するために、近江および美濃の行在所に集められた国司には、「近国」の17か国がすべて含まれる一方で、「中国」は出雲・伊予の2国、「遠国」はすべて除外されている。

仁藤智子は、この東国行幸について、比較的馳せ参じやすい近国・中国の国司を呼び寄せて服属を確認することで、律令制天皇として西海道を除く全国支配を貫徹したことを可視的に見せる場として用意されたと評価した(仁藤2020)。この評価が成り立つ場合、道別にみれば、一部で全体を象徴するとみなされていたことになる。

前項で述べたように、大嘗祭は天皇が畿外を「食国」として服属させるという関係を象徴する儀式であり、畿外にたいして繰り返し服属儀礼が要求されるのは、畿外が天皇支配の及ばぬ「まつろわぬ地」であることを象徴するという。とはいえ、王権のために服属が確認される

べき範囲が、まずは「近国」、せいぜい「中国」までしかなかったとは考え難い。斉明朝以降、「蝦夷」居住域への、文武朝以降、「隼人」居住域への侵攻が進められるが、「遠国」であっても、王朝の教化に従わない化外の異文化集団の居住域を除けば化内であるから、「近国」・「中国」同様に、服属の確認がなされるべき地域のはずである。したがって、大嘗祭の如き大規模な儀式の準備では、人員や文物を確実に動員できる国から選ぶ、という実際の事情が強く効いていたと考えざるを得ない<sup>18</sup>。

## 2. 文武即位に至る王統の形成とその後

### A. 敏達大王から舒明大王への王統の形成

#### ◎ 敏達

欽明の王子のうち蘇我氏の血を引かず欽明の死後まで生存したのは、詔語田淳中倉太珠敷王子（後の敏達）であった。敏達が即位した事情は、欽明の死去時に蘇我氏所生の王子が大王家の嫡流になっておらず、敏達が大王家嫡流の立場にあったからである（倉本2015）。敏達は、欽明と蘇我堅塩媛の第四子である額田部王女（後の推古）と婚姻した。非蘇我系の敏達にとって、蘇我氏との融和をはかり権力を確立するためであった。敏達の王子には、額田部王女を母とし蘇我の血を引く竹田王子と、息長氏出身の広姫を母とし蘇我の血を引かない押坂彦人大兄王子がいたが、共に即位せずに亡くなった。

#### ◎ 上宮王家と押坂王家

押坂彦人大兄王子と糠手姫王女の子が田村王（後の舒明大王）である。敏達－押坂彦人大兄王子－舒明という王統は、蘇我氏との血縁関係を持たず、吉川真司は「押坂王家」と呼んだ（吉川2011b）。この王家は押坂を本拠地とし、上宮王家と同様に、大きな部民集団（オシサカ部＝刑部）を有して経済的基盤とするとともに、大和西部の交通の要衝である広瀬を開発して拠点とした。そして、この王家からは舒明－皇極－孝徳－斉明－天智－天武－持統－文武－という王統が成立した<sup>19</sup>。

6世紀後半から7世紀前半にかけて、蘇我氏は大王の外戚（大王生母の近親者）の地位を獲得しており、用明・崇峻・推古は蘇我氏の血を引いていた。崇峻の死後、欽明二世王世代の王子が多く、政争を回避するために、前大后額田部王女が即位した（推古）。推古の在位期初期

に、（額田部と敏達の子）竹田王子も、（敏達と広姫の子）押坂彦人大兄王子も死去したため、用明の子・厩戸王子（聖徳太子）が時期大王候補となった。厩戸は交通の要衝である斑鳩に宮と寺を造り、彼の一族（上宮王家）は斑鳩を勢力拠点とした。上宮王家は全国にミヤケを有し、厩戸王子は壬生部という大規模な部民を与えられて政治力・経済力の源泉とした。その後、推古の長命のため、厩戸王子が即位できぬまま死去すると、山背大兄王が上宮王家の後継者となった。しかし、推古死去後に大王を継いだのは蘇我系嫡流の山背大兄王ではなく、非蘇我系嫡流の田村王だった（舒明）。推古が遺詔で田村の方を次期大王に指名し、大臣の蘇我蝦夷としても、田村が蘇我法堤郎媛との間に古人大兄王子を儲けており、古人への継承が期待できたからである（倉本2009）。山背大兄王は、用明の二世王にすぎず、父が即位しておらず、蘇我系王統の嫡流でもなくなっていたが、斑鳩に一族が盤踞し政治力・経済力は維持していた。蘇我本宗家との関係も良くなかったようで、結局、皇極2年に入鹿らによって滅亡させられた。

### B. 舒明系王統の登場

#### ◎ 敏達死後の大王位継承－用明・崇峻

敏達の死後、敏達と同じく欽明の子で、蘇我稲目の娘・堅塩媛を母とする大兄王子が即位した（後の用明）。用明の在位中に用明の異母弟（小姉君系）の穴穂部王子が大王位の継承を画策して物部守屋と結び付き、蘇我馬子と物部守屋の対立が激化した。用明の病死後、穴穂部王子と守屋が討滅されて、欽明王子の世代で残った泊瀬部王子（後の崇峻）が即位したが、さまざまな問題で馬子・前大后や支配者層との関係が悪化して暗殺され、欽明の王子世代の兄弟継承が終わった。

#### ◎ 推古の即位事情

そこで欽明の孫世代に継承が降りてきたが、結局、額田部王女が即位した（推古）。

推古即位の事情については、いくつかの説がある。

まず、欽明孫世代の王子のうち、敏達の子・押坂彦人大兄は用明死後の物部守屋討伐軍に名が見えないことからおそらく、用明末年の抗争中に暗殺されたか病死し、同じく敏達の子・竹田王子も守屋討伐後ほどなく病死し、さらに、用明の子・厩戸皇子は崇峻暗殺時にはまだ若かったことから、結局、額田部が即位したとする説がある（大



津2010).

他方で、押坂彦人大兄の子である舒明の生年（推古元年（593））から、押坂彦人大兄が推古朝初期までは在世しており、大王位継承資格の点で最有力の押坂彦人大兄の即位を阻止するために、蘇我氏が苦肉の策として、敏達の大后で押坂彦人大兄の義母たる推古を立てたとする説（蘭田1981）がある。さらに押坂彦人大兄が推古より長生きした場合でも、彼の即位を阻止するために、蘇我の血を引き馬子の娘を妃とする厩戸王子を太子につかせたとする説（熊谷2001）がある。

欽明の孫世代（二世王）には、即位した大王の王子だけでも、押坂彦人大兄・竹田・尾張・厩戸・来目・殖栗・茨田らがあり、馬子・大夫層も誰を選べば良いか分からない状態で、各氏族が別々の王子を支持して政治抗争を始めるのを回避するためとする説もある（倉本2015）。

### ◎ 舒明の即位事情

推古は蘇我系の竹田王子と非蘇我系の押坂彦人大兄王子が死去したため、蘇我系の厩戸王子（聖徳太子）を次期大王候補者とした。しかし結局、推古の治世は36年間も続き、厩戸も即位できぬまま推古より先に死去してしまった。推古死後の群臣による皇位決定会議で、押坂彦人大兄王子の子・田村王か、聖徳太子の子・山背大兄王かで揉めた。山背大兄は馬子の娘・刀自古郎女を母としていたが、蝦夷とは対立していた。田村王自身は蘇我の血を引かぬが、馬子の娘・法堤郎媛を夫人とし古人大兄を儲けていたため、蝦夷は田村を支持し、山背を推した境部摩理勢を殺害したため、田村王が大夫から要請されて即位した（舒明）。このように舒明は、蝦夷に擁立されて即位はしたものの、非蘇我系の嫡流であって、本人の自己認識では、けっして蘇我氏のみ依存した存在ではなく、施策には独自性が現れてくることとなった。

### ◎ 舒明朝の画期性

舒明の代は『日本書紀』の記事が少なく、極めて印象が薄いものとなっているが<sup>20</sup>、内政・外交の双方において積極的で、遣唐使を派遣し、朝鮮三国との交渉も進め、東北や南島へも勢力を伸ばしたほか、政治秩序の整備（王宮参集励行、采女密通処罰）を試みた（吉川2017）。このほか、舒明朝にはいくつかの画期的な点がある。

○宮の造営 舒明2年（630）に「狭義の飛鳥」に宮（飛鳥岡本宮）を設け、代替わり毎に王宮を移動する事を改めて、以後飛鳥に正宮が固定する端緒となった。しか

し、飛鳥岡本宮が舒明8年（636）に焼亡すると、田中宮に遷御した。さらに、舒明11年（639）には、西国・東国から国単位の力役徴発を行い、百済大宮・百済大寺の造営を開始した。この方式は、皇極の百済大寺造営、飛鳥板蓋宮造営に継承された。蘇我氏が地盤とする飛鳥を離れ、倭王権成立以来の本拠地である磐余の地における大宮と大寺の造営は、蘇我氏の軛を脱し、独自の権力基盤を求めようとする舒明の強い意志を背景とする、と評価されている（倉本2009・2015）。

○百済大寺の造営と意義—新伽藍配置の創出 百済大寺は蘇我氏主導で飛鳥の地に造営された飛鳥寺に対し、王権主体で新たに造営した最初の国立寺院である。百済大寺は桜井市の吉備池廃寺とみて良く、飛鳥寺・斑鳩寺・山田寺より格段に規模が大きく、伽藍配置がその後の寺院に影響を及ぼしたほか、用いられた軒丸瓦の文様が各地の寺院で用いられた。

百済大寺の伽藍配置、すなわち東西棟の金堂を東、塔を西に置き、周囲を回廊で囲む配置は、従来「法隆寺式」と呼ばれてきたが、百済大寺の発見により、百済大寺に起源すると考えるべきであろう<sup>21</sup>。

この配置は中国・朝鮮半島諸国には無く、日本独自のもので、地方寺院に多いと言われてきた。この配置は、670年代以降に造営が始まった法隆寺西院伽藍で採用されたほか、法輪寺・安部寺などで見られる。金堂と塔を囲む回廊の北面回廊を講堂につなげる配置は、百済大寺式（法隆寺式）からの派生型と評価できよう。後者のうち、百済大寺・法隆寺と同様に金堂を東、塔を西に置く配置は、平川廃寺・相模国分寺などにある。百済大寺・法隆寺と逆に、金堂を西、塔を東に置く配置には2種あり、金堂が東西棟のもの（法起寺式）は法起寺・高麗寺、金堂が南北棟のもの（観世音寺式）は観世音寺・多賀城廃寺などでみられる。

法隆寺式・法起寺式・観世音寺式は、7・8世紀の伽藍配置が推測可能な寺院の過半数に及ぶ（上原1986）。従来、これらの伽藍配置は、藤原京や平城京内の寺院にはみられないことから、「氏寺型」「私寺型」と評価されてきた。また、法隆寺西院伽藍は、年代的には川原寺・本薬師寺の官大寺と併行するが、所用瓦や建築様式には官大寺の影響はなく、在地氏族や地域氏族の援助で造営されたため、朝廷が造営した官大寺とは異なった展開を遂げたと評価されている（林2007）。しかし、法隆寺西院

の伽藍配置が大王家の寺院たる百済大寺の系譜と判明したので、以上とは別の評価が可能となろう。高橋照彦は、百済大寺で成立した配置が、それ以前の蘇我氏などによって建立されてきた飛鳥寺や四天王寺などとは意図的に差別化をはかっていると評価している（高橋2005）。

法隆寺西院伽藍で百済大寺式を採用したのは、大王家の寺で採用された格式高い配置であったからであろう。法隆寺の伽藍配置計画が立案された670年代の時点では、本薬師寺は発願前であるし、川原寺は発願直後で造営の初期段階である。百済大寺の発見前には、金堂と塔を東西に並べる点で、法隆寺西院に川原寺式の影響をみる説もあったが（森1983）、百済大寺からの系譜とみませば、川原寺の影響とみる必要はない。

百済大寺は天武2年（673）に高市に移され高市大寺となった。高市大寺の位置と伽藍配置は不明だが、百済大寺をそのままの形で移築した可能性が大としても（小澤2003）、文武朝にはさらに場所を移して伽藍配置も異なる大官大寺となった。そうすると、官大寺における百済大寺式の伽藍は、百済大寺・高市大寺が存在した70年間ほどしか存在しなかったことになるが、7世紀後半から8世紀に創建された寺院の伽藍配置に百済大寺式（法隆寺式）・法起寺式・観世音寺式の寺院が多いのは、実用性（横置き配置は奥行が狭い土地に向く（澤村1979）、金堂か塔の片方の造営が遅れても寺院活動を開始できる（箱崎2003））に加えて、王家の寺の配置という認識・評価・意義付けがあったと考えられる。

天智朝以降に再建が始まった法隆寺自体が、天武の代以降、推古の代に国政に参与していた厩戸皇子が古代国家建設の起点として認識され（倉本2015）、偉大な「聖徳太子」として神格化されたのを背景に、上宮王家の氏寺的性格を脱し官寺化していった。西院伽藍の建設に当たり、王家の伽藍配置が採用されたと評価できるだろう。

伽藍配置のみならず、百済大寺で採用された新たな文様の軒丸瓦も東アジアの軒瓦としては異色であり（高橋2005）、その後の各地の寺院で用いられた。これもかつては、山田寺式が広範に影響を及ぼしたと考えられてきたが、山田寺式が百済大寺式の影響下にあることが判明したので、王家の寺の瓦が模倣の対象となったと評価すべきであろう。蘇我氏同族氏族のそれぞれが、別個の氏寺を建立して飛鳥寺に集結しなくなったことや、蘇我倉氏の氏寺たる山田寺で、飛鳥寺や豊浦寺系の瓦ではなく

百済大寺系の瓦を採用したことについて、蘇我本宗家が嫡系で氏上を継承したことに対して蘇我氏の同族氏族が反発し、本宗家の規制を外れて独立した政治的動きを始めたことの表れと評価されている（倉本2015）。

○新形式大王陵の創出 舒明の墓は八角形墳で、大王墓の墳形が八角形に変わる端緒となった。舒明は皇極元年（642）に初葬陵・滑谷岡に葬られ、皇極2年（643）に押坂陵に改葬された。滑谷岡の初葬陵については小山田古墳説があるが、岩屋山古墳説（小澤2023）もある。岩屋山古墳は二段築成で上段が八角形の可能性が高いとする説がある（小澤2023）。押坂陵（段ノ塚古墳）は方形壇を伴う八角形墳である。以後、斉明・天智・天武（持統）・文武の陵は八角墳であり、大王陵にふさわしい形態が創作されたと言える。高橋照彦は、大王陵の八角墳への変化について、蘇我氏が在来文化としての前方後円墳を否定して大王陵に導入した方墳との差別化を図ったものと評価している（高橋2005）。

八角形の起源については、八角円堂説（菅谷1973）・八角塔説（近江1976）・中国政治制度説（網干1979）・八葉蓮華説（田村1981）などがある。筆者は高御座と同様に、大王・天皇が統治する国土を象徴すると考えるが、ここでは深入りしない。

#### ◎ 舒明系王統の始祖－押坂彦人大兄王子

欽明以降、蘇我系王統と非蘇我系王統が成立し、その後の大王位継承において両王統の王子女が候補となる。乙巳の変後に、舒明の子だが蘇我氏の血も引く古人大兄が討滅されると、蘇我系王統が滅亡し、6世紀末の大王位継承が非蘇我系王統の全面勝利で決着し、それ以後の大王位継承は非蘇我系王統によって限定されるようになった。非蘇我系王統の優位が確定していく過程で、本来あまり有力な王族でなかった押坂彦人大兄王子（母の広姫が地方豪族で、キサキの母も地方豪族）が、天智・天武の父である舒明の父、天智・天武の母である皇極の祖父であったことから「皇祖」と位置付けられていった（倉本2009）。特に、光仁・桓武以降に、天智系王統が確立すると、皇祖としてさらに重視されたようである。『延喜諸陵寮式』の墓歴名には、中大兄皇子の皇統を正当化する政治的意図をもった系譜的資料が含まれ（北1996）、押坂彦人大兄王子は、母で敏達の大后・広姫王女、キサキの糠手姫王女、キサキの大俣王女<sup>22</sup>と所生子の茅渟王とともに載っている。中大兄の父母たる舒明・皇極双方

に繋がり（押坂彦人大兄の子が舒明、孫が皇極）、光仁－桓武以降の皇統の始祖として、ことさらに重要視されるようになったのであろう。

押坂彦人大兄の墓は『延喜式』墓歴名では、「成相墓」と呼ばれ、東西15町・南北20町という歴代最大の兆域を有しているが、これも押坂彦人大兄の中大兄系王統の始祖としての過大な評価なしには考え難い事であろう<sup>23</sup>。

### C. 皇極から持続への王統の形成

#### ◎ 皇極

舒明の死後、その大妃であった宝女王が即位した（皇極）。父は押坂彦人大兄王子の子の茅渟王、母は吉備女王であり、非蘇我系王統に属す。祖父も父も即位していないが、前大后としての即位であった。舒明の死後、大王候補となる有力王族は、上宮王家の山背大兄王、舒明王子の古人大兄王子（蘇我系）、舒明王子の中大兄王子（非蘇我系嫡流）であった。世代的には山背大兄王が舒明と同世代で古人・中大兄より上であり、山背が残る中での世代交代では紛争を招きやすいし、古人・中大兄のどちらに継承させればよいかも明確になっていなかったために、ぎりぎりの選択として前大王の大后が即位したという事情であった（倉本2015）。即位後、皇極は王宮を百済の地から飛鳥に戻し、舒明の飛鳥岡本の宮があった地に板蓋宮を造らせたが（飛鳥板蓋宮）、これは蘇我氏への配慮であったようだ（倉本2015）。

#### ◎ 孝徳

蘇我入鹿は、皇極の次には、舒明王子の中で蘇我系嫡流の古人大兄王子への大王位継承を考えていたが、非蘇我系嫡流の中大兄王子を中心とするクーデターによって蘇我入鹿・蝦夷が排除された。しかし、中大兄王子がすぐには即位できなかったため<sup>24</sup>、皇極の譲位によって同母弟の軽王（孝徳）が即位した。軽王は父（茅渟王）も祖父（押坂彦人大兄王子）も即位していない三世王にすぎない非蘇我系王統の庶流であり、中大兄の同母妹の間人王女を大妃とする形で非蘇我系嫡流に婿入りする形となっていたが、間人との間に王子を儲けられず嫡流の形成に失敗していた（倉本2009）<sup>25</sup>。

#### ◎ 斉明

中大兄・前大王皇極・間人王女・大海人王子らが倭京に移ってしまい、難波宮に取り残された孝徳が白雉5年（654）に死去した後、大王位は嫡流の中大兄王子には継

がれず、王家の宗主的地位にあった皇極が世代を遡って重祚した。中大兄が政治的実権を握りつつフリーハンドで国際情勢に対処するために即位を避けたとみられ（倉本2009）、斉明は「祭の御輿」にすぎなかった（吉川2011）。斉明4年（658）に孝徳の遺児・有馬王子を抹殺し中大兄が専権を確立したが、斉明は文化的な面で独自性を発揮した<sup>26</sup>。倭は百済滅亡後に遣民救援軍の派遣を決め、斉明は王族を率いて九州に至ったが、朝倉橘広庭宮で急死し、中大兄が称制を始めた。中大兄は斉明の追善のために観世音寺造営を発願したが造営は遅れた。

#### ◎ 天智

中大兄は白村江の敗戦後の様々な国土防衛策、甲子の宣発令（664）、近江遷都（667）、庚午年籍作成（670）、近江令編纂・施行（668）、官制改変（671）などを実施した。この間、近江遷都後の668年によく即位したが、天智10年（671）に重病となり、大海人皇子に後事を託して死去した。天智の大王位継承構想については、天智自身に大友皇子を即位させる意思があったか否かで諸説あるが、大海人が天智の死後には非蘇我系王統の嫡流に立つべき存在であり、ヤマト王権以来の兄弟継承の慣習から、即位するのが自然であったので、大海人王子自身は天智の近江王朝を篡奪して自分の王権を確立したなどという認識を持ってはおらず、鷗野王女も父の王権を夫が滅ぼしたなどという認識はなかったであろう（倉本2009）。

#### ◎ 天武

天武は天武10年（681）に草壁皇子を皇太子に立てるとともに、近江令の改訂に着手した。草壁即位にあわせて新法典を施行するための準備と評価されている（吉川2011）

さらに天武は、中央氏族の秩序再編のための「八色の姓」の制定、官僚制整備のための氏の秩序の改変、冠位制改訂や服制・宮廷儀礼の整備、律令の編纂、天皇の支配の正当性強化のための歴史書編纂（史書諸本の整理、神話の総合化）、永続的な支配拠点としての「新城」の造営、貨幣の発行、宗教政策としての神祇祭祀の整備（広瀬祭・龍田祭の創始、大嘗祭・月次祭の整備、伊勢神宮の皇祖神としての重視と伊勢神宮祭祀の整備）、仏教の振興（王宮や寺院での儀礼の整備）などの諸施策を開始した。

それら国家支配強化のための政治的諸制度やイデオロギー的諸制度の整備は、さらに進展したうえで、草壁へ

の皇位継承が順調に進めば、草壁の治世を飾るはずのものであっただろう。しかし、天武15年(686)に天武は急病で倒れ、国政を鸕野皇女・草壁皇子に託して死去した。律令の改訂、史書の編纂、都城の建設などは未完成であった。

### ◎ 持統

天武の死去に伴い「臨朝称制」を開始した持統は、大津皇子を排除し、皇太子草壁の即位を目指していたが、草壁が病気となり即位できぬまま死去(持統3年(689))したため、草壁の子・珂瑠王を後継者に据えようとしたが、珂瑠王はまだ7歳であったから、持統4年(690)に自ら即位し、珂瑠王の成人を待つこととした。その間、自分以外のキサキを母とする天武の皇子で即位の資格を有す者(成人しており生母の地位が高い)を掣肘し即位を阻止するとともに<sup>27</sup>、天武が手掛けた事業の継承を遂行することにしたとみられる。

持統は草壁の死の直後に浄御原令を施行し(持統3年689)、それに基づいて庚寅年籍を作成した。天武の長子ながら地方豪族を母とし皇位継承の候補になりがたい高市皇子を太政官首班に据え、自らの政治の補佐をさせた。天武が途中まで進めていた「新益京」の造営を引き継ぎ、京と宮を完成させて持統8年(694)に遷都した。

珂瑠王を草壁以外の天武の皇子達と差別化するには、草壁と彼の異母弟たちを差別化せねばならず、持統を軸とした皇統の尊貴性を高めねばならないと考えたようである。そこから、持統の立場は天武とは微妙に異なった面を持つようになった(倉本2009)。

持統は天武の皇后ではあったが、草壁-珂瑠王への継承のために、自身が天智の血を引くことを強く意識し、天智及び、天智が追善に尽力した斉明の顕彰に注力した<sup>28</sup>。天智が発願した近江の志賀山寺(崇福寺)は天武朝から持統朝にかけて造営が進み、文武4年(700)から30年間食封が施入された。天智の勅願寺を庇護しようという持統の意向が効いているのであろう<sup>29</sup>。また、持統が天智と草壁皇子の忌日の齋会、悔過に関わる法会を志賀山寺で始めた可能性がある(櫻井1996)。文武3年(699)には、斉明陵とともに天智陵が修造され<sup>30</sup>、大宝2年(702)には天智の忌日の廃務が決定された<sup>31</sup>。天智が斉明の菩提を弔うために発願したものの、造営が進んでいなかった筑前の観世音寺についても、持統朝から堂塔の造営を本格的に開始した<sup>32</sup>。このように持統は、様々

な手段で、天智および斉明の事績を顕彰し、追善意識を高揚させ、斉明-天智-持統-草壁-珂瑠王と続く皇統の尊貴性・優越性を高めようとした<sup>33</sup>。

### D. 舒明系王統中で重要視される人物の変化

舒明系王統の中で重要視される人物は、文武の死後に変化があったようである。

元明は、即位詔において、持統が珂瑠王に皇位を授け太上天皇として共治してきたのは、天智が定めた「不改常典」に基づくとわざわざ述べている。元正天皇から首皇太子(聖武)に譲位した際にも、元明が元正への譲位時に「天智が定めた「不改常典」に従って我が子(この場合は首皇子)に皇位を授けよ」と元正に命じた詔に従って、首皇太子に譲位すると述べている。聖武が孝謙に譲位した際の宣命にも、元正が聖武に対して、天智の「不改常典」に従い皇位を皇嗣に伝えよと命じた、とある。

以上の諸皇位継承の際に、何度も天智が定めた法が持ち出されている。持統が珂瑠王に継承する根拠であれば、天武の言葉・意向などを持ち出しても良さそうだが、そうしていないのは、天智の実際の行動、すなわち群臣からの推戴なしに「大王家内部による自立的な王位継承」を行ったことが、持統による自己の子孫への皇位継承に有利と評価されていたからである(倉本2009)。他方、聖武即位の際には元明の元正への命、聖武譲位の際には元正の聖武に対する命の根拠として天智の法が持ち出されており、どちらの場合も、元正の即位、孝謙の即位、という天皇位の継承として相当に無理がある事態を乗り切るために、譲位する天皇自身の意志ではなく、天智の法「不改常典」を天武系皇親や群臣に一切異論を許さない理屈として持ち出したのであろう。したがって元明・元正・聖武天皇の場合、ことさらに天智の血を引くことを重視したわけではなく、持統が確立した律令国家の政権構造-「持統と不比等、およびそれぞれの子孫が皇統と舗政を継承する」体制(文武-首皇子への直系皇位継承路線)および「単なる天武系とも天智系とも異なる、いわば持統「王朝」とでも称すべき皇統」(倉本2009)を護持しようとしたといえよう<sup>34</sup>。

孝謙(称徳)は、天武と持統の双方の血を受け継いだ草壁の子孫こそが天皇家の正統を受け継いだ者であるという認識(草壁(天武-持統)皇統を過剰に意識する)を強く有し(倉本1998)、天平宝字2年(758)に草壁皇

子に「岡宮御宇天皇」の尊号を追号し、天平神護元年(765)には紀伊行幸の途上で草壁皇子の檀山陵を拜した。持統は、自分の血を引かない天武系皇親を忌避したが、孝謙が天武と持統の双方の血を受け継ぐという事を重視したため、結果的に天智・天武両方の血を受け継ぐことの価値が上がり、天武と天智皇女(持統以外)との間の皇子(舎人・長・弓削)を祖とする系統(特に舎人皇子系)も有力となってしまい、草壁皇統を過剰に意識する孝謙との対立関係が厳しくなった(倉本1998)。例えば、孝謙は敵対した恵美押勝と結びついた舎人系皇統を敵視したが、孝謙が尊崇した草壁皇子は、天智-持統-草壁という血統であり天智に由来するから、天智の血を引くことを尊貴性の源とすれば、天智-新田部皇女-舎人皇子の血統も価値が上がってしまう。このため、孝謙・称徳の時代には天智の事績を語ることは控えられたのであろう。このように、同じ皇統のどこを切り出して尊重するかは極めて恣意的に操作されていた。

称徳が道鏡を皇位に就けることに失敗し皇嗣を定めぬまま崩じると、藤原永手・藤原良継らが、天武系元皇親(文室浄三・文室大市)を推した吉備真備の意見を退けて、白壁王を皇太子とした。白壁王は天智の孫で、聖武の子・井上内親王を妻とし他戸親王をもうけていたので、聖武の血を引く他戸王への中継ぎの男帝として立てられたとみられる。しかし、白壁王の即位後、皇后となった井上内親王と皇太子他部親王が廃されてしまい、藤原式家と結びついた山部親王が皇太子となり、光仁の譲位によって即位するに至った(桓武)。

桓武の即位は他戸王への中継ぎと言う意味を持った光仁の即位と異なり、まったく新しい王朝の到来を意味するものであった(倉本1998)。母が渡来系の卑姓であり、天武系天皇のような権威・正統性・カリスマ性を欠いた状態で即位した桓武は、母系を介さず父系で天智の血を引くことを、尊貴性の源として前面に出さざるを得なかった。即位の正当化のため、即位宣命で天智が定めたとされる「不改常典」を持ち出したが、かつて「不改常典」を持ち出した天武系諸天皇とは異なる意図による。さらに桓武は、自己の「新王朝」の施策として、長岡遷都、郊祀祭天義、国忌の整理、『神撰姓氏録』の編纂などを行った(坂上2001)。延暦10年の国忌の整理では、聖武以外の天武系皇統を省いて、天智系の皇統構成員を残し、「新王朝」を明示することとなった。

## E. 文武即位の歴史的評価のために

### ◎ 即位の事情と後世への規定性

持統は、太政大臣に任じた高市皇子の死去(持統10年(696))後、珂瑠王を立太子させ<sup>35</sup>、譲位して即位させた(持統11年697)。珂瑠の即位に際しては、草壁・高市亡きあとでも天武の皇子がまだ数人おり<sup>36</sup>、皇位を天武の孫世代に降ろすことへの抵抗が強かったようだが<sup>37</sup>、持統は、天武の皇子達に珂瑠の即位が阻まれぬように手を打ち<sup>38</sup>、珂瑠の立太子を強行し、速やかに譲位して即位させ<sup>39</sup>、自らは太上天皇となって文武を後見しつつ、政治に関わり続けた。太上天皇への就任は史上初であった<sup>40</sup>。

日本古代の王権は、天皇個人の身に権力を集約させず、天皇、それに親権を及ぼす太上天皇、天皇生母、天皇生母の近親者(外戚)などから構成され、「天皇家の長」の主導の下、それらによる共同統治を行うという形態をとった(倉本2009)。また、太上天皇は天皇と同格の君主として扱われ、天皇大権を行使する法制化された地位であったが、それは、持統と文武の権力行使の実体を反映させて、大宝律令で制定されたものとされる(倉本2009)。太上天皇の権限と「共同統治」形態の成因が、王権の出発点における持統と文武と藤原氏との特殊な関係にあったとすれば、その後の歴史の展開によっては、天皇の権力が強化され専制君主化する選択肢、あるいは藤原氏以外の氏族が外戚の座に居座る事もあり得たはずだが<sup>41</sup>、実際にはそうはならなかった。

太上天皇と天皇の関係については、持統の文武に対する後見が、元明の元正に対する後見、元正の聖武に対する後見、聖武の孝謙に対する後見、孝謙の淳仁に対する優位と言う形で再生産され「構造化」されたといえよう。薬子の変の後に、天皇と太上天皇の権能の調整がなされ、摂関期までは太上天皇が政治の前面に立つことはほとんどなくなるが、院政期に至って、再び太上天皇の権力が上昇する。

### ◎ 即位に伴う儀礼の整備

文武即位の時点では、天武・持統の直系で、持統太上天皇の万全の後見を受け、都城・律令を完備した文明国の新天皇が、父である草壁が果たせなかった即位を満を持して果たしたとみなされただろう。しかし、『続日本紀』には即位儀の記述はない。文武2年(698)の正月一日に大極殿に出御し朝賀を受けており、拝賀の儀式は常の通りであったと記されているから、即位式及びそれ

と全く同じ儀式次第である朝賀儀は、文武即位までに式次第の整備が完了していたとみられる。文武3年・4年には朝賀の記述はない。文武5年＝大宝元年(701)の朝賀の儀について『続日本紀』は、「文物の儀ここに備われり」と特記し、詳しく記述する。式次第はともかく、儀式の設えはこの年に整えられたということであろう。

文武2年(698)11月に大嘗祭が行われた。持統5年(691)に挙行された持統の大嘗祭は、天神寿詞を読み、播磨・因幡が(悠紀・主基に)奉仕したとの記述があるが、文武大嘗祭については大楯・楯・杵を立て、尾張・美濃が(悠紀・主基に)奉仕したと記される。新都藤原宮での最初の大嘗祭であり、満を持して入念に執行されたはずであるが、記述はあっさりしている。式次第は持統大嘗祭で確立されていたからであろうか。

### ◎ 文武朝の諸政策の意義

文武の治世は持統太上天皇との共治体制として始まり、律令の編纂と施行、年号の制定、版図の南北両端での城柵修理、銭貨の鑄造、遣唐使派遣などの諸事業が次々と遂行された。

それらの意義を再確認しておく。

#### ○律令の編纂と施行

そもそもは草壁の治世で作動すべく編纂開始された飛鳥浄御原令は、草壁の死の直後持統3年(689)に施行されており、完成を目指していた藤原宮・京での政治運営に必要であった(渡辺2001)。しかし律は未編纂で、律も含めた体系的な法令の整備が、文武の治世を支えるためにも必要で、文武即位の前後から大宝律令の編纂作業が始められ<sup>42</sup>、令の完成が文武4年(700)、律の完成が大宝元年(701)であった。

#### ○年号の制定

新律令の施行に先立ち「大宝」という年号が制定され(大宝元年701)、大宝令儀制令では、公文書に年を記載する際には年号を用いることが定められた。新令の規定と連動した年号の制定であった。

#### ○版図の南北両端での城柵修理

文武即位当初には、当時の王権の版図の南北両端で、孝徳・天智朝に作られた柵・山城の修理が集中的に行われている。その意図は何であったのか。

朝鮮半島での拠点・足場はすでに6世紀に失っていたが、「任那の調」が大化元年(645)で途絶し、百済も滅んだ。文武即位の時点では、唐は朝鮮半島から撤退し、

半島を統一した新羅との関係も好転し、唐・新羅の列島への侵攻の脅威は去っていると同時に、海外の朝貢国を従えた「帝国」を装う事がもはや不可能となっていた。

しかし、大宝2年(702)には隼人との衝突が発生し、文武没後には薩摩国・大隅国が置かれている。東北でも和銅2年(709)以降、蝦夷の反乱が勃発している。したがって、文武朝における城の修理は、斉明6年(660)でいったん終わっていた列島内異民族征服策、すなわち、律令国家の中央から異文化集団、「異民族」「化外の民」とみなされ、支配下に入っていない集団を征服し、版図・国家領域の拡大を図る「帝国化」政策の再開・強化を念頭に置いた事業であろう。

#### ○銭貨の発行

また、文武の即位当初には国内各地から鉱物の献上がなされている。そのうち銅とアンチモンが銭貨の原料であるし、文武3年(699)には鑄銭司が設置されていることから、富本銭がこの時期にも鑄造されたとみられる(渡辺2001)。そもそも天武朝に鑄造され始めた富本銭を文武朝初期に再度鑄造しているとするれば、大宝の遣唐使で持参した可能性が高いという(渡辺2001)。

#### ○遣唐使派遣とその結果

大宝元年(701)に、天智8年(669)に出発した第7回遣唐使以来、32年ぶりに遣唐使が任命され、大宝2年(702)に出発した。この遣唐使派遣の目的については、対外的に律令国家成立を宣言するため(渡辺2001)、あるいは絶域にありながら唐皇帝の徳を慕って稀に施設を派遣してくる文明国と位置づけてもらうため(坂上2011)と言った説がある。白村江での敗戦以来、推進してきた国内体制の整備＝律令国家建設の成果を唐に対して示して認識してもらい、唐を中心とする世界秩序の中で確固たる位置を得ようとしたということであろう。ただし具体的成果のそれぞれについては、きちんと披露できたかあやしいもの、時代遅れの不十分さを痛感させられたものがあり、帰国した遣唐使が伝えた課題は、その後の大変動の原因となった。

都城について、天武朝に計画・設計・造営開始され、持統朝に完成した新益京は『周礼』に基づいた理想的都城を意図したが、唐・長安城とは似ても似つかぬものとなっていた。どこが弱点と認識されたかは、藤原京と平城京、藤原宮と平城宮を比較すれば判明するが(岩永2008)、ここでは深入りしない。

律令について、唐とそっくりの法制度を整えたことを高く評価してもらうために見せに行ったとする説もあるが、唐を「外蕃」呼ばわりしており披露はできないとする説もある（坂上2011）。

錢貨について、富本錢は中国古典の学習・理解に基づいてデザインされたが（松村1999）、唐の開通元寶（開元通寶）とは全く違う時代遅れのものであった。

国号・年号について、外蕃国を冊封体制に組み込もうとする唐の基本方針からすれば、国号は唐から与えられ、年号は唐と同じものを用いなければならない。したがって、日本が独自の国号・年号を定めたのは、本来的には唐の方針とは相いれない。新国号「日本」については、新国号の宣言が目的で粟田真人が国号の改称を唐人に説明したとする説（渡辺2001）があるが、白村江で対戦した「倭」とは異なる新しい国家として唐を中心とする国際交流の舞台に登場しようとしたため「倭」と「日本」との関係は曖昧にしか伝えなかったとみる説がある（坂上2011）。

#### ○文武政権が残した課題

以上のように、天武・持統の時代に当時の「世界標準」を意識した国家建設の事業が進展し、文武の治世中に一応の成果が実った。遣唐使派遣によってそれを唐に対して示し国際社会に復帰はしたものの、大きな課題も明らかとなり、その一部である遷都について検討を始めた時点<sup>43</sup>で文武は25歳で死去した。文武の治世中に達成された諸成果の多くは、結果的には「時代遅れ」となってしまう、早世しなければ、元明・元正朝になされることになった遷都、新錢貨の発行、新律令の撰定などが文武政権の仕事となり、「賽の河原の石積み」の如き苦難を味わうことになったであろう。

### 3. 大王墓の位置決定・改葬・追葬について

#### A. 6～7世紀の歴代大王墓の基礎的情報

6～7世紀における歴代大王の墓所はいかにして決定されたのか。墓が集まる場所が、それらの墓を築いた大王系譜の政治的拠点と一致すると考える説がある（白石1999など）。他方、墓が集まる場所は、政治的拠点の場所とは必ずしも一致せず、王宮の場所を重視すべきだとする説もある（吉村2010）<sup>44</sup>。『延喜諸陵寮式』に記載さ

れる各大王の王宮と墓の場所がどれほど信頼できるのかという問題はあがあるが、5世紀代には河内の古市古墳群・百舌鳥古墳群に墓を設ける大王が多い。6世紀に入り、武烈大王死去後に仁徳以来の王統が途絶え、応神5世孫の継体が即位し、実質的に新王統が成立するが、この王統の歴代大王は古市古墳群・百舌鳥古墳群にはほとんど墓を造らず、大和ないし河内飛鳥に設けている。

大王家が、群臣の会議や推戴を経ることなしに、大王家内部による自律的な王位継承ができるようになるのは天武以降であるから（倉本2009）、それ以前は、大王家内部の王位継承候補者と諸豪族内の特定勢力との結びつきの離合集散関係によって大王位の行方は左右された。王墓を営む場所についても、そのような関係が影響していたと推定できる。墓の造営時期によって、造営主体が大王自身か次期大王かが違って来る。しかも、6～7世紀には、墓を築いて一旦埋葬した大王を、わざわざ別の場所に新規に墓を設けて改葬したり、新たに墓を築かずに既にある親族の墓に追葬したりする例が散見される。このような事例は従来注目されてはきたが（石部1989）、その理由が十分明らかにされているとは言えないだろう。

そこで、安閑から文武に至る歴代大王墓について、位置、改葬・追葬の有無などの基礎的情報を確認しておく。

#### ◎ 安閑陵・宣化陵

そもそも継体は自身の王権継承の正当性を確保すべく、仁賢の娘の手白香王女と婚姻した。継体と尾張連草香の娘・目子媛の間には安閑・宣化が生まれたが、両者は母が地方豪族の出であるため、安閑は手白香の異母姉妹の春日谷山田王女、宣化は手白香の同母姉妹の橘仲王女と婚姻し、王権継承の正当性を配偶者の血縁によって確保しようとした（白石2005）。白石太一郎は安閑が春日山田王女、宣化が橘仲王女と合葬された根拠をそこに求め、内実は、春日山田王女の墓への安閑の合葬<sup>45</sup>、橘仲王女の墓への宣化の合葬であったとみている。

#### ◎ 欽明陵を巡る諸問題

欽明は欽明32年（571）の没後に、河内古市の殯宮に安置されてから「檜前坂合陵」に葬られた。王宮が大和の磯城嶋金刺宮であるのに河内で殯が実施された点が不自然であるので、一旦河内で葬られ（初葬陵は河内大塚山）、大和に改葬されたとみる説がある（石部1989）<sup>46</sup>。大和の「檜前坂合陵」については、五条野丸山古墳（森1965・高橋2005・白石2009）か梅山古墳（小澤2002）か

で説が鋭く対立している。『日本書紀』には「檜前坂合陵」のほかに「檜前大陵」「檜前陵」の語があり、これらの関係（特に「檜前坂合陵」＝「檜前陵」であるかどうか）や、それぞれにどの古墳を当てるかということについても諸説がある。

推古20年（612）には「檜前大陵」に欽明の後の堅塩媛が改葬・追葬された。

「檜前大陵」＝「檜前坂合陵」＝五条野丸山古墳とする説では、石室内の2基の石棺を欽明と堅塩媛の棺と見なすが、問題は、堅塩媛の棺が奥にあり、欽明の棺が手前にあることである<sup>47</sup>。五条野丸山古墳＝欽明陵説批判の立場からは、大王たる欽明の棺を脇に押しつけて堅塩媛の棺を奥に据える行為は想定しがたく、この点についての欽明陵説の立場からの明快な説明が無いとの批判がある（小澤2023）。この場合注意すべきは、推古20年（612）の堅塩媛の改葬の前月には、推古が蘇我氏をたたえる歌を馬子に対して与えており、改葬に当たっては、軽の街で誄の儀礼が行われたことである。まず推古の誄が読まれ多量の品物が供えられるとともに、諸皇子の誄、大臣蘇我馬子の誄が読まれ、最後に馬子自身が「八腹臣等」（蘇我氏の多くの支族）を率いて、境部臣摩理勢に「氏姓之本」を誄させた。

これは、誄の序列によって王権の序列を可視的に示し、欽明と稲目に始まる大王家と蘇我氏による王権の正統性を再確認する儀礼として評価できる。欽明の墓に追葬されたのが、宣化の娘の石姫玉女でなく、堅塩媛であったのは、倭王権の正当性を蘇我氏と欽明とのミウチ的結合に求めるといふ推古と馬子の認識を、象徴的・可視的・大規模に示すためであった（倉本2015）。堅塩媛は推古・用明の2大王の母であり、蘇我氏の繁栄をもたらした人物として厳かに顕彰されたのであろう。このような場であれば、堅塩媛の棺を大王の棺より上座に据える僭越もなされ得たのではないか。倉本一宏はこれを「推古と馬子の認識」と見ている（倉本2015）。

五条野丸山古墳を蘇我稲目の墓とする説（斎藤1966・小澤2023）があるが、その場合、稲目が大王陵をしのぐ規模の墳墓を造営したことになる。稲目は欽明の治世初期から大臣に任じられ、堅塩媛と小姉君を欽明のキサキとし、堅塩媛は橘豊日大兄王子（後の用明）、額田部玉女（後の推古）、小姉君は泊瀬部王子（後の崇峻）を生むが、いずれも稲目の生前には即位しておらず、稲目は大王の

外戚の地位は獲得していなかった<sup>48</sup>。つまり、稲目はまだ万全の権力を手に入れてはおらず、大王陵をしのぐ規模の墳墓を造営したとは考えがたい（倉本2015）。蘇我氏所生の王子が大王に即位するのは、馬子が大臣の時の用明に始まり、崇峻・推古と続いて外戚の地位を手に入れ権力を確立するに至ったが<sup>49</sup>、馬子の時期の絶大な権力をそのまま稲目の時期まで遡らせることはできない。

『日本書紀』における蘇我氏の専横に関する記事は、馬子による崇峻の殺害、馬子による葛城県の要求、蝦夷による祖廟の建設と「八佾の舞」挙行、蝦夷・入鹿による国中の民を徴発しての寿墓の造営と「陵」の呼称、蝦夷・入鹿による甘樫丘邸第の建設と「宮門」の呼称、入鹿らによる上宮王家の討滅などがある<sup>50</sup>。稲目が大王陵を凌ぐ巨大な墓を築いていれば、蘇我氏の横暴を非難する文脈で非難されていても良さそうだが、そのような記述はない。

また、五条野丸山古墳を蘇我稲目の墓とする説では、その地が蘇我系陵墓域に当たり、大王と言えども蘇我氏領域には墓を造ることができなかつたとする（小澤2023）<sup>51</sup>。しかし、蘇我氏の領域はいきなり一円的・面的に形成されたわけではなく、稲目・馬子・蝦夷・入鹿と順次拡大していったとみる方が良い<sup>52</sup>。稲目の時期に五条野丸山古墳の場所がすでに蘇我氏領域であったとみるよりは<sup>53</sup>、大王家の外戚化、大王家とのミウチ化を目指していた蘇我氏が、稲目の拠点近くに欽明陵を築かせ、その後、欽明陵の東側の丘陵地にも次々と拠点を設け、欽明の墓を取り込んで蘇我氏の拠点群が形成されて、大王家を名実共に囲い込んでいったとみるべきであろう。

推古28年（620）には、「檜前陵」に砂礫を葺き、域外に山を造ったとあり、これらの特徴が五条野丸山古墳には該当せず梅山古墳が該当することから、「檜前陵」＝梅山古墳＝欽明陵とする説がある（和田2005、小澤2023、増田2005）。しかし欽明陵を五条野丸山古墳とする場合、当然ながら「檜前陵」＝梅山古墳は欽明以外の人物の墓になる<sup>54</sup>。

#### ◎ 敏達陵を巡る諸問題

敏達は敏達14年（585）に死去し、その6年後に母后・石姫の磯長陵に追葬された。陵は太子西山古墳が治定されており、治定を認める説が多い<sup>55</sup>。『延喜式』諸陵寮の記載（1墳2陵）から、前方部と後円部の別埋葬とする説がある（石田2019）。太子西山古墳は河内飛鳥・磯長

に出現した最初の大王陵であるが、以下の①～③が問題となる。

①敏達が磯長に葬られた理由。

②敏達の死去（585年）から磯長陵に追葬（591年）されるまで時間がかかった理由。

③敏達の死去から磯長陵に追葬されるまでに陵墓の造営はなされたのか、

①敏達がなぜ磯長に葬られたのかという点について。

この問題はさらに、①A 磯長とはいかなる場所であるか、①B 石姫の墓がなぜ磯長にあり、①C 敏達はなぜ石姫墓に合葬されたのか、に分けて考える必要がある。

①A 磯長とはいかなる場所であるか

磯長を含む河内の石川郡が蘇我氏の興った場所とする説もあるが、乙巳の変の後に蘇我氏の氏上を継承した蘇我倉氏（後の石川氏）が、石川郡を地盤とし、蘇我氏全体の氏族系譜を作り上げたため、あたかも蘇我氏が河内の石川から起こったようにみえるだけであり、大和盆地内の本拠地から飛鳥地方と河内の石川地方に進出したとする説（倉本2015）が妥当であろう。倉本は、進出の時期を馬子の子・倉麻呂の代とみている<sup>56</sup>。しかし、敏達の磯長への埋葬や<sup>57</sup>、初葬地が大和盆地内であった用明の磯長への改葬については、倉麻呂の活躍期より古いから、大和から河内に至る要衝を抑えるための馬子による動きとみるべきで、倉麻呂成人後に倉麻呂に磯長を抑えさせたとみるべきであろう。その後の厩戸王子の埋葬や、推古の大和からの改葬は、蘇我倉氏による磯長の確保を顕示する作用を持ち、蘇我倉氏による誘致の面もあったであろう。本宗家による氏上継承が確立してくると、蘇我倉氏をはじめとする河内を根拠地とする蘇我氏同族が、本宗家とは独立した立場を取ることが多くなるが（倉本2015）、推古の改葬はそうした動向との連関も考えるべきであろう。

白石太一郎は、5世紀に大王墓が設けられた古市古墳群・百舌鳥古墳群を含む大阪平野南部地域が、大王家の本拠地であり（白石1999）、それに加えて、磯長が蘇我系大王墓の造営地のみならず、「河内王家」の本拠地でもあったとみなしている（白石2005）。また、6世紀になると、葛城氏・大伴氏・蘇我氏など時の大王を支える有力豪族の本拠地に大王墓が造営されるようになるが、4世紀末葉以来6世紀中葉頃まで代々の大王墓が営まれた河内南部の古市古墳群とその周辺は、大王の墓が営まれ

るべき地として意識されていたとする（白石2005）。しかし、宣化以降の大王の中で、大和盆地南部以外の地に陵が有るのは、敏達・用明・推古だけであるから、磯長谷が5世紀以来大王陵の地であったとは言えないだろうし、もともと大王家の墓域であったから用明・推古の陵が造られたわけでもなからう。

①B 石姫の墓がなぜ磯長谷にあるのか。

石姫は蘇我氏との血縁関係を持たない王族であり、父・宣化の墓は大和・身狭に、伯父安閑の墓は古市にある。では石姫の墓はなぜ磯長に道営されたのであろうか。

白石太一郎は、磯長谷がもともと「河内王家」の墓域に含まれていたとしたうえで（白石2016）、欽明妃の石姫王女の墓の造営に際しては、王統を護るべき役割を担った妃として、大王やその一族の霊の眠るべき土地である古市やその周辺の南河内に葬るべきとの特別の意識が存在したと推定する（白石2005）。その場合にも、古市古墳群の中ではなく、なぜ磯長なのかという問題が残る<sup>58</sup>。

他方、高橋照彦は、父母が大王家出身である石姫墓としては古市古墳群周辺がふさわしいにもかかわらず、新たに磯長で造営が開始された点から、大王陵の伝統的所在地である古市古墳群内や、石姫の父である宣化の陵が築かれた大和の身狭地域付近での築造が意図的に避けられたとみた。蘇我氏の思惑・目論見としては、欽明の妃のうち蘇我氏出身で推古・用明の母である堅塩媛を格上げし、非蘇我氏である石姫の欽明との合葬や欽明陵近辺での埋葬を回避したいとの狙いがあったとした（高橋2007）。その場合でも、なぜ磯長なのかという問題が残る。高橋は、石川流域に拠点を有した蘇我氏氏族との関係により磯長に墓が配されることになったとする。しかし、石姫が死去したのは、蘇我氏と物部氏の主導権争いが激化していた時期<sup>59</sup>、つまり馬子による大和から河内に至る要衝を抑える動きが生じていた時期であることを勘案すれば、蘇我氏（馬子）が石姫の墓を磯長に設け、敏達との関係、および敏達政権内での立場を良くするとともに、磯長の確保を確実にすることを狙っていたからと考えるべきではないか。

①C なぜ敏達は石姫墓に追葬されたのか。

敏達は欽明の王子のうち、宣化の娘である石姫王女を母とする非蘇我系であるから、敏達を石姫の墓に追葬することは、血脈を明示することにはなるが、実行者は蘇我氏と思われる<sup>60</sup>。その後、初葬で磐余池上陵（谷首古

墳か)に葬られた用明が、推古元年(593)に河内磯長陵(春日向日山古墳)に改葬され、推古も初葬の大野丘上陵(植山古墳か)から、後に科長大陵(山田高塚古墳)に改葬された。結果的に、欽明の子世代の陵は、殺害された崇峻を除いて磯長に集合することになった。蘇我本宗家の氏上の墓は終始飛鳥付近にあるが、蘇我系大王の墓は磯長に置かれたことになる。推古在位中に死去した厩戸王子の墓も磯長にある。このような用明・厩戸・推古の磯長谷埋葬から見ると、敏達の石姫墓への合葬は、非蘇我系血脈の強調ではなく、むしろ逆に、非蘇我系王族と蘇我系王族との融合、前者の后者への取り込みを意図したとみた方が良かろう。そして、取り込みからの離脱を明確に志向するのが、舒明・天智である。舒明以降、非蘇我系大王が続き、難波宮で死去した孝徳を除けば陵が磯長に設けられる事はなくなった。

②敏達の死去(585年)から磯長陵に追葬(591年)されるまで時間がなかった理由

敏達死後、次の大王となった用明の治世は2年と短く、その間、敏達期以来の蘇我馬子と物部守屋の主導権争いが激化し、用明が病悩すると次期大王位を巡る抗争も激化した。敏達の葬儀を執行する余裕もなかったと推測される。穴穂部王子と物部守屋が滅ぼされた後に即位した崇峻は、そもそもは大臣馬子・前太后豊御食炊屋姫を含む群臣の推戴を受けたが、后妃問題・宗教政策・地方支配・対外戦争といった諸問題により大臣・前太后や支配者層との対立を引き起こしていた(倉本2015)。これも敏達の葬儀が遅れた事情であろう。

③敏達の死去から磯長陵に追葬されるまでに陵墓の造営はなされたのか

高橋照彦は、『日本書紀』にある「檜前陵」が、欽明陵である「檜前大陵」とは別の墓で、梅山古墳に当たり、敏達の陵として造営されたと推定する(高橋2005・2012)。高橋は、「檜前陵」を梅山古墳とする根拠として、『延喜諸陵寮式』では皇極天皇の母親である吉備姫王(皇極2年(643)没)の「檜前墓」が「檜前陵」の域内にあったとされ、この「檜前墓」が梅山古墳の東側の金塚古墳に当たると考えられる事を挙げる<sup>61</sup>。

「檜前陵」=梅山古墳の被葬者については、欽明説(小澤2014)、蘇我稲目説(白石2009・2016)、堅塩媛説(増田1991)などがあるが、高橋照彦は敏達の未完成陵とする(高橋2012)。高橋は檜前陵(梅山古墳)の被葬者を

絞り込むにあたって、北康宏が『延喜諸陵寮式』中に見出した「中大兄系譜資料」(北1996)に注目する。このリストは、北が「中大兄の血統を正当化するという政治的意図を持った系譜的資料」と呼ぶ非蘇我系血脈を明示するリストである。「檜前陵」の域内に、「中大兄系譜資料」に含まれる人物(吉備女王)の墓が存在することから、「檜前陵」の埋葬予定者は、非蘇我系に位置付けられる大王家の有力人物であり、蘇我稲目や堅塩媛の墓ではありえないとともに、蘇我稲目との結びつきが強い欽明の墓でもないとする。そこから高橋は、梅山古墳の造営年代である6世紀後半に亡くなり、陵と呼ばれる墓に葬られ、非蘇我系の人物としては、敏達以外には考え難いと結論付けた。そして、用明の改葬、堅塩媛の欽明陵への合葬に続く「推古の古墳整備計画」が、「順序としてもごく自然な流れ」であると評価した。

この高橋説に対しては、「史料の証拠能力の限界を超えた仮説」「史料をまったくもたない仮説」(白石2009)、「史料の裏付けを欠く想像にすぎない」(小澤2014)という批判があるが、「檜前陵」の埋葬予定者が中大兄に繋がる非蘇我系の有力王族であったとする推論自体は成り立つと考える。

ただし、高橋が触れていない問題、すなわち、③A敏達のための陵の築造は進んでいたが結局そこに敏達が埋葬されなかった理由、③B推古28年(620)に檜前陵を修築した理由、③C修築したにも関わらず敏達を磯長から帰葬しなかった理由、が検討を要する。

③A敏達のための陵の築造は進んでいたが結局そこに敏達が埋葬されなかった理由。

①で述べたように、用明の治世は2年と短かったが、死後即座に埋葬されており、初葬陵が谷首古墳とすれば(高橋2005)、横穴式石室をもつ方墳がすでに築かれていたことになる。

用明の次に即位した崇峻は、馬子によって暗殺されたが、即日埋葬されているから、陵はすでに用意されており、赤坂天王山古墳であれば、大規模な石室をもつ方墳が築かれていたことになる。

このように、通常、大王の生前から大規模な陵は築かれていたようであるから、敏達の陵も生前から造営を開始していたとみるべきであろう。石姫の墓への追葬が当初から予定されていたのであれば、高橋が述べるように、死後いつでも埋葬できたはずであるが、実際には死後6

年も経過した崇峻4年(591)に埋葬していることから、石姫墓への追葬は当初からの予定ではなかったとみられる。用明在位中には用明の病悩と次期大王位を巡る抗争の激化による遅延が考えられる。

梅山古墳 = 敏達の未完成陵であった場合、檜前に築造されつつあった梅山古墳の造営を中断し、磯長の石姫墓に追葬したことは、その2年後の推古元年(593)に用明が河内磯長陵(春日向山古墳)に改葬された(初葬陵は磐余池上陵(谷首古墳)か)点と併せて考えると、蘇我氏による磯長進出や、磯長を大王陵の地とする構想を背景とすると考えられる。

### ③ B 推古28年に檜前陵を修築した理由

『日本書紀』によると、推古28年(620)には、「檜前陵」の上に砂礫を葺き、域外に土を積んで山を造り、その上に氏ごとに大柱を立てさせた、とあるが、この「檜前陵」を梅山古墳とする場合、空であるはずの梅山古墳で、このような儀礼が行われたことになるが、その事情はどう説明できるであろうか。

この修築について高橋昭彦は、推古の夫であり、推古が天皇としての地位を得る上で存在が無視できない敏達の檜前陵を整備するのは理にかなうとし、推古が、同母兄・用明を改葬し、母・堅塩媛を父・欽明の陵に合葬したことに続いて檜前陵を整備していることから、「推古の古墳整備計画」と述べた(高橋2012)。その場合、檜前陵は未完成かつ空であったから、その時点で檜前陵の修築をした推古の意図が問題となる。

推古28年には、厩戸王子と蘇我馬子がともに議って「天皇記および国記、臣・連・伴造・国造・百八十部あわせて公民らの本記」が録された(『日本書紀』)。「天皇記」は天皇系譜、「国記」は宮廷伝承を中心とし、「本記」は中央豪族・地方豪族・豪族支配下の部民の記録であり、天皇から部民までの倭国の全階層の由来が記録された書物であったという(吉川2011)。推古十五年(607)の第二次遣隋使が倭国の歴史や神話を皇帝から聞かれても答えられなかったことを踏まえたものである(倉本2015)。大王家の歴史、王権の正当性に対する意識が顕在化してきたと言えよう。

「檜前陵」での儀礼には諸氏が参加しており、大王と王権を構成する中央豪族の結束を再確認・強化する意図があったのであろう。蘇我の血を引かぬ大王であった敏達の未完成陵を、蘇我系の推古の命により、石で荘厳して

王族の融和を図り、回りに柱を立てさせて高さ、すなわち王権への奉仕度を競わせたのであろうか<sup>62</sup>。その王権は、蘇我氏がミウチ関係で大王家と結合した点に正当性を求めるものであった(倉本2015)。

しかし、裏を返せば、それだけ支配者集団の結束が危機的状況に瀕していたことの現れともみられる。王権に結集する諸氏の中で、蘇我氏への権力集中が進み圧倒的に優位となるほど、支配者集団の結束に揺らぎが生じていく。蘇我氏に仕えた倭漢氏が立てた柱が最高だったとあるのは偶然であろうか。

推古の長命の裏で、次の大王位をめぐる王族内の対立も生まれていた。大王位継承予定者であった厩戸王子は即位できぬまま晩年を迎えていたが、上宮王家は斑鳩に拠点を建設し、壬生部や全国各地の屯倉を有し、独立権力体を形成していた。他方で押坂王家は、押坂宮のほか、斑鳩の南方の広瀬にも拠点を設け、大規模な刑部を有して、政治的・経済的基盤を形成していた(吉川2011)。檜前陵での儀礼は、こうした王権中枢部内での危機的状況を背景にして、蘇我系と非蘇我系の融和を図る意図があったとみられる。修築を完成させたいうで、敏達を磯長から檜前陵へ改葬することまで計画されていたかは定かではないが、その可能性もあったとは考えられまいか。

この修築の1ないし2年後(『日本書紀』と『天寿国繡帳』銘で異なる)に死去した厩戸皇子の陵は磯長に設けられ、推古は遺詔によって当初は竹田王子墓(五条野丸山古墳の東の植山古墳)に葬られたが、後(時期不詳)に磯長谷に改葬されたから、蘇我系王族の磯長谷への埋葬方針はうかがわれるが、非蘇我系王族の埋葬地について、後に用いられるようになる檜前・真弓に集約する方針は未成立であっただろう。それが明確化するのには、非蘇我系王族が主導権を握った乙巳の変以降である。

### ③ C 修築したにも関わらず敏達を磯長から帰葬しなかった理由は何か

石姫墓が古市古墳群内ではなく磯長に設けられた事情は、① B で述べたように、蘇我氏(馬子)が敏達との関係、および敏達政権内での立場を良くするとともに、磯長の確保を確実にすることを狙っていたことにあるとみられる。また、敏達が石姫墓に追葬された事情は、① C で述べたように、非蘇我系血脈の強調ではなく、むしろ非蘇我系王族と蘇我系王族との融合、前者の後者への取

り込みを意図したとみた方がよかろう。「檜前陵」での儀礼も、蘇我氏の強力化によって亀裂が入った王権を構成する中央豪族の結束を再確認し強化する意図があったのであろう。この儀礼の時点で、推古・厩戸王子・蘇我馬子が揃って高齢で、次期大王の決定が権力核の重大案件となっていたらう。非蘇我系の田村王はすでに宝女王（皇極）との間に中大兄をもうけており、馬子の娘・法堤郎媛が古人大兄を生んでいたかは不明だが、蘇我氏としては非蘇我系王統の強力化は望んでおらず、敏達の高長からの帰葬は憚られたとみられる。

### ◎ 用明陵

用明は磐余池上陵に葬られたが、推古元年（593）に河内磯長陵に改葬された。磐余池上陵は桜井市・谷首古墳とする説がある（高橋2005）。河内磯長陵は現在の治定陵である春日向山古墳である可能性が高い。用明は欽明と堅塩媛の皇子であり蘇我系である。河内磯長陵への改葬は、河内飛鳥へ蘇我系王陵を集める方針に基づくものであろう。

### ◎ 崇峻陵

崇峻は暗殺されて即日埋葬されたので、すでに墓が造営されていたはずであり、赤坂天王山古墳に当てる説が有力である。

### ◎ 推古陵

推古は遺詔により竹田皇子墓に葬られたが、後に河内の磯長谷に改葬された。初葬陵は「大野岡の上」にあるとされ、横穴式石室を2基有す榎原市・植山古墳であることが確認されている。改葬された陵は現在の治定陵である山田高塚古墳である可能性が高い<sup>63</sup>。

### ◎ 舒明陵

舒明は先に述べたように、初葬時に滑谷岡に葬られたが、後に押坂陵（段ノ塚古墳）に改葬された。滑谷岡が規模・構造が劣る仮埋葬地であったとする説（重見2019）、岩屋山古墳を初葬陵とする説（小澤2017、岸本2019）、小山田古墳を初葬陵とする説があるが、小山田古墳については蘇我蝦夷墓の「大陵」とする説（小澤2017）に従う。段の塚古墳の石室に関する江戸時代の記録には石棺が二つあり、母の糠手姫王女との合葬説がある（大津2017）。糠手姫王女は天智3年（664）に死去したから、追葬は中大兄の判断に基づくだろう。

### ◎ 孝徳陵

孝徳は、皇極・中大兄・間人皇女らが飛鳥に去ったの

ち、讓位を考え山背の山碕に宮を造ろうとしたが難波宮で死去し、河内石川郡の大坂磯長陵に葬られた。

### ◎ 齊明陵を巡る問題

齊明は661年に筑紫の朝倉宮で死去したが、天智6年（667）に間人王女（天智4年（665）没）と「小市岡上陵」に合葬され、陵の前に大田王女が葬られたという。齊明陵については、死去から「小市岡上陵」に葬られるまでの間にどこに葬られたのか、「小市岡上陵」にどの古墳を当てるか、候補となる古墳の造営年代について説が対立している。各説を記しておく。

《牽牛子塚（巨石石槨）・天智6年（667）》2009～2010年の牽牛子塚古墳の発掘調査によって、墳丘が八角形と判明し、隣接地に越塚御門古墳が発見されたことから、「小市岡上陵」が牽牛子塚古墳であり、大田王女墓が越塚御門古墳であることが確定的になったと言われることが多く、最も有力な説である。

《鬼の俎・雪隠古墳（齊明初葬陵）・齊明7（661）年→牽牛子塚（巨石石槨）・天智6年（667）》牽牛子塚古墳を「小市岡上陵」としたうえで、齊明の初葬陵を鬼の俎・雪隠古墳とする説（西光2002、重見2020）もある。齊明が、8歳で夭逝した中大兄嫡子・建王（齊明4年没）について、自分の墓に合葬するように詔したため、建王墓（今来谷に設けられ、齊明陵の予定地だった）に齊明を合葬したのが鬼の俎・雪隠古墳であるとする。

《牽牛子塚（簡素施設）・天智6年以前→牽牛子塚（巨石石槨）・文武3年（699）》牽牛子塚古墳が天智6年に齊明と間人が合葬された墓と断じるには、検討すべき点がある。天智6年に齊明と間人王女を合葬した際に、中大兄が群臣に「齊明天皇の遺命を聞いてからは、万民を憂え哀れむ気持ちから、石郭の役を起こさせなかった。」と述べているから、小市岡上陵が造営されても、当初は巨石を用いた横穴式石室や横口式石槨ではなかったとする説（和田2005）がある。また文武3年（699）に越智・山科の二山陵の修造が行われたが、和田萃は、この際に両陵に派遣された官人の冠位や構成から、修造事業は職に準じる規模の官人構成であり、修造工事がきわめて大規模で当初の規模を一変せしめるほどのものであり、埋葬施設にも改変が及んだと推測する（和田2005）。和田の推測が妥当であれば、凝灰岩の巨石をくり抜いて内部に2室を設けた横口式石槨の造営が、天智6年ではなく文武3年に下る可能性が生じる。

《斉明初葬陵 = 岩屋山古墳・天智6年(667)→牽牛子塚(巨石石槨)・文武3年(699)》和田と同様に牽牛子塚古墳が文武朝に下るとしつつも、天智朝の斉明陵を岩屋山古墳とする説(今尾2005, 白石2011)がある。白石は岩屋山古墳に葺石・貼石がないことから、「石槨の役」を石室の造営ではなく、墳丘の石材による化粧と考えている<sup>64</sup>。

《牽牛子塚(巨石石槨)・天智6年(677)→擁壁追加・文武3年説(699)》牽牛子塚の刳拔式石槨の外周に、わざわざ方形切石を擁壁状に巡らせる構造が特異である。これは石槨にひびが入っていて割れる危険性が生じたので、周囲を硬質石材の擁壁で囲い押さえ込んだ可能性が考えられる<sup>65</sup>。その場合、石槨本体の構築が天智6年で、擁壁の設置といった大改修が文武3年と振り分けられる可能性がある。擁壁の年代観に関わらず石槨本体の年代を天智6年とする場合、天智の、「石槨の役は起こさせない」との発言とは齟齬が生じる。

《牽牛子塚(巨石石槨, 建王+斉明合葬)→牽牛子塚(巨石石槨, 建王+斉明+間人王女合葬)》牽牛子塚古墳はまず斉明と建王の合葬墓として造られたが、建王は今来谷から改葬され、のちに間人王女が追葬されたとする(西本2014)。

これら諸説のうち、いずれが妥当かは、石棺系横口式石槨・刳拔式石槨の編年・実年代の比定をどう考えるかに関わってくる。編年を行う諸説(猪熊1976, 広瀬1995, 白石2011, 重見2020)は、石造りの義道部の有無などを基準に編年しているが、鬼の雪隠・俎古墳、牽牛子塚古墳、越塚御門古墳など被葬者の推定が可能である古墳の実年代観を前提として編年を組み立てている事が多く、個々の古墳の位置づけについて、かなりの相違・逆転が生じる結果となっている。

ここでは、石槨を石材加工技術から編年した廣瀬寛の論を参照する(廣瀬2015)。廣瀬は、構築技術・石工技術を検討し、構築技術の合理性の有無を根拠に、刳拔式横口式石槨(和田晴吾のお亀石型・仏陀寺型・牽牛子塚型)を古く、組合式石槨(和田晴吾の塚穴山型・高松塚型)を新しく編年した。ただし牽牛子塚古墳の年代については検討の余地がある。

廣瀬は、牽牛子塚が、構築技術の合理化が進んだ組合式横口式石槨(7末～8初)より先行するので、「7世紀後半でも中頃に近い」とする。これは天智6年の造立を

念頭に置いているのであろう。ただし、牽牛子塚文武3年説の側からでも説明は可能である。

硬質石材から軟質石材への切り替えはある時点で急に変わるのではなく、並存期があるであろうし、廣瀬自身が言うように硬質石材用平滑化技術が軟質石材に応用されていくのであれば、技術も急に切り替わるわけではなかろう。廣瀬は「二上山凝灰岩の刳拔式横口式石槨と7世紀末～8世紀初頭にかけて盛行する同組合式横口式石槨とを比較すると、両者には加工技法において顕著な相違が認められず、基本的には同一の石工集団の産物と考えられる」と言っているから、刳拔式と組合式との間に年代差を認める根拠は「構築技術の合理化」にあって、合理化していないものから合理化したものへ変化する、という1点に絞られる。しかしキトラ古墳や高松塚古墳の被葬者は、高位者としても臣下の墓説が有力であるから、文武および背後にいる持続にとって、自分達の尊貴性、他の王族(天武の皇子達)からの超越性の根拠たる斉明(+間人+大田)の墓を「合理的」ではない復古的な技術(刳拔式)で壮大に造り直した(造り直す前の天智6年時点では簡素な造りだった)という説明も可能ではある。もちろん「牽牛子塚(巨石石槨)天智6年→擁壁追加, 文武3年説」の項で述べたように、刳拔式石槨部分は天智6年で、硬質の石英安山岩(寺山石)を使用する外周の擁壁のみ文武3年となる可能性もある<sup>66</sup>。

### ◎ 天智陵

天智陵は八角形墳の御廟野古墳(京都市山科区)であることが確実とされているが、この天智陵が文武朝に藤原宮大極殿の真北となる位置に文武朝に造営されたとする説がある(藤堂1998)。これに対しては、確かに天智陵は藤原宮大極殿のほぼ真北に位置するが、造営方位に則った藤原京中軸線の北延長上や、下ツ道の北延長から東へ二里の位置からはずれるため、意図的に藤原京の真北や中軸線の延長線上に配置したのではなく、天智陵が藤原宮のほぼ真北に位置するのは偶然とする批判(小澤2009)がある。

### ◎ 天武・持統陵

天武陵(檜前大内陵)は八角形墳の野口王墓古墳であることが確実とされている。この陵が藤原京朱雀大路の南延長線上に位置することは岸俊男によって指摘され(岸1969)、追認されている(小澤2009)。

持統は天武陵に追葬されたが、追葬は敏達(生母・石姫

の磯長陵へ)、推古(竹田王子墓へ)に次ぐものであった。

### ◎ 文武陵

文武陵(檜前安古山陵)は八角形墳丘の中尾山古墳であることが確実とされている。

### B. 非蘇我系大王陵の位置と大王墓造営域設定に関わる諸問題

以上の大王陵のうち、陵の比定に関して説が鋭く対立しているのが欽明陵・敏達陵である。筆者は、欽明陵を五条野丸山古墳、梅山古墳を敏達未完陵とする高橋照彦説を支持するが、その場合に生じる幾つかの問題点について、欽明から推古に至る時期の複雑な政治状況を勘案すればある程度説明可能であることも既述した通りである。

梅山古墳から野口王墓古墳に至る東西方向尾根の南斜面には4基の古墳が連なるが、その評価が問題となる。

高橋照彦は、梅山古墳を『延喜式』の檜前陵に比定するとともに、敏達の埋葬が予定されていたとし、吉備女王の「檜前墓」を梅山古墳の東のカナヅカ古墳に当てた。そして、「真弓岡」は、現在の檜前あたりから見ると、西から北東へと大きく弓状に連なる丘陵をなしており、そこには、草壁皇子の墓とみられる東明神古墳、岩屋山古墳、「檜前陵」(梅山古墳)、「檜前墓」(カナヅカ古墳)、鬼の俎・雪隠古墳、天武・持統陵古墳があると述べている。高橋は『延喜式』にみえる「中大兄系譜資料」(非蘇我系の血脈を示すリスト)にある「檜前陵」「檜前墓」があることに注目したうえで、梅山古墳を取り巻くように、敏達系の斉明(牽牛子塚)、天武・持統(野口王墓古墳)、文武(中尾山古墳)が築かれていることに注目した(高橋2012)。

重見泰は、梅山古墳＝檜前陵＝敏達陵とする高橋説を受けて、金塚古墳＝檜前墓＝吉備女王墓とし、皇極が吉備女王墓を敏達陵のそばに作ったのは、立場が磐石ではない皇極が、自身の皇統を正当化するためとした(重見2020)。また、梅山古墳を軸とする陵墓域は、皇極が創り、自身及びその皇統を正当化し、自身に続く系譜が皇位継承する基盤を固めるためであったとした。さらに、天武・持統陵がその延長線上に築造されたのはその空間的特性があったからとし、金塚古墳と天武・持統陵の間の鬼の俎・雪隠古墳を斉明の初葬陵(建王との合葬)とする西光慎治の説(西光2002)を支持した。

他方、西光慎治は、梅山古墳を欽明陵とし、その東に、

吉備女王(カナヅカ古墳)、斉明+建王(鬼の俎・雪隠古墳)、天武・持統(野口王墓古墳)の陵が並ぶことを、「飛鳥の皇統譜」を表すとし、斉明を中心とする母系の人びとの墓域とみた(西光2002)。辰巳俊輔は、梅山古墳について、推古朝に葺石を施し域外に山を造り大柱を立て、斉明朝には南方を開発・整備していることから、「飛鳥時代の始祖王墓」であり、被葬者欽明を始祖王として先祖祭祀の対象とし、天皇の隔絶化を図る事業に利用したと評価した(辰巳2016)。

高橋・重見説、西光・辰巳説ともに、梅山古墳から野口王墓古墳に至る古墳群に、ある王統の表示・顕彰機能を認めているが、梅山古墳を欽明陵とするか敏達未完陵とするかで異なり、意義や歴史的評価が異なってくる。たしかに欽明は7世紀の歴代大王の先祖ではあるが、蘇我系嫡流と非蘇我系嫡流の双方を創出し、以後、乙巳の変に至るまで、大王位継承が両者の対立を基調としていたから、非蘇我系王統にとっては必ずしも欽明が始祖として尊重されるべき存在ではなくなる。

皇極以降の大王の造墓事情を再度確認しておこう。舒明死後の宝女王(皇極)の即位は、有力な大王位継承候補者として山背大兄王・中大兄王子・古人大兄王子がおり、上宮王家・押坂王家・蘇我本宗家の大王位継承紛争が予想されたがための事態の先送り(吉川2011)、そして舒明と同世代の山背大兄王が残る中での世代交代による紛争を避けるためのぎりぎりの選択(倉本2009・2015)であった。

皇極は即位後すぐに、舒明が造営していた百済宮から飛鳥に王宮(飛鳥板蓋宮)を戻し蘇我氏に配慮しており(倉本2015)、ほとんど蘇我氏の傀儡(吉川2011)であったとの評価もある。しかし蘇我氏から距離を取った動きもしている。

皇極朝には蘇我氏の専横記事が目立つ。それらは必ずしも蘇我氏の専横を示すと考えなくても良いようであるが(倉本2015)、上宮王家が討滅されると、古人大兄王子を擁する蘇我系王統と中大兄王子を擁する非蘇我系王統との大王位継承争いが不可避となった。舒明の滑谷岡への埋葬、押坂陵への改葬、吉備女王の檀弓岡への埋葬は、蘇我入鹿らによる上宮王家討滅に先立つ在位初期に行われた。舒明を当初滑谷岡に埋葬したが、「押坂王家」の本拠地に移葬しているのが、皇極は、舒明同様に非蘇我系王統＝「押坂王家」の一員として、必ずしも蘇我氏

のみには依存しないという自己認識を維持していたと言えよう。

この点から、梅山古墳＝「檜前陵」を敏達の未完陵とし、その兆域内に吉備女王の「檜前墓」が設けられたとする高橋照彦説・重見泰説が妥当であろう。「檜前墓」が金塚古墳であるのか岩屋山古墳であるのか、舒明初葬陵が岩屋山古墳であるのか金塚古墳であるのか、斉明初葬陵が鬼の俎・雪隠古墳であるのか、などの点は問題として残るが、「檜前陵」を中心として敏達系王統の大王墓造営域を設け、その北側に広がる蘇我氏の勢力域とは一線を画そうとしたと考えられよう<sup>67</sup>。

重見は、皇極の意図について、立場が盤石ではない皇極自身及びその皇統を正当化し、自身に続く系譜が皇位継承する基盤を固めるためであったとした(重見2020)。これが認められるとしても、乙巳の変後の古人大兄王子の討滅で蘇我系王統が滅亡し、6世紀以来の大王位継承が非蘇我系王統の全面勝利で最終的に決着して以降、大王位継承が非蘇我系王統に限定されるようになった(倉本2009)のを機に、王陵域設定の目的が変わっていくと考えるべきである。

重見は、斉明の重祚についても、有力な皇位継承者として有馬王子がいたことに加え、中大兄が孝徳の意に反した倭京遷都を強行し、孝徳朝の政治理念を否定したため、斉明と中大兄が皇統の正当性を示す必要があったからとした(重見2020)。たしかに中大兄は斉明即位後に有馬を抹殺したが、有馬自身は非蘇我系王統庶流の孝徳の王子にすぎないため、本来大王位継承権を有すはずではなく、支配者層も中大兄の下に結集しており、孝徳の死によって中大兄は完全に主導権を握ったから、斉明の重祚は、中大兄が大王位につかぬままフリーハンドで東アジア国際情勢に対処するためとみられる(倉本2009)。したがって、斉明・中大兄が皇統の正当性をわざわざ示すというよりは、王家の宗主・斉明を前面に立て中大兄が専権をふるうためであったと考えるべきだろう。

斉明は中大兄によって間人王女と合葬され、大田王女も陵前に葬られた。中大兄が白村江での敗戦後で国土防衛に尽力している時期で、近江遷都の直前であるが、斉明が皇極時代に設けた吉備女王墓・舒明初葬陵、斉明時代に設けた建王墓(鬼の俎・雪隠古墳か)の場所とはかなり離れた「越智」にあり、紀路から見上げるような場所に斉明・間人の合葬墓(牽牛子塚古墳)を造り、高句

麗・百済・新羅の使人に大路から哀悼を捧げさせたから、斉明の権威を超越化することを図ったと言えよう。

天智陵(御廟山古墳)の造営時期は定かではない。藤堂かほるは、壬申の乱の影響で天智陵が未完成に終わっていたため、文武が藤原京中軸線の真北(天極)に「営造」し「律令国家の初代天皇」として位置づけようとしたとする(藤堂1998)。先述の通りこの位置論には批判があり偶然の結果と見られるが(小澤2009・2016, 吉川2011)、藤堂が文武3年の越智陵(斉明陵)・山科陵(天智陵)の「営造」は、律令国家の新秩序形成にかかわる事業であり、特に天智がこの時にあらためて国家祭祀の対象に組み入れられたとし、天智に対する国家的顕彰行事であったと評価した点は重要である<sup>68</sup>。「営造」が新造でなく改修であれば、文武3年に斉明陵とともに改修されたことになり、持統・文武による天智の顕彰、および斉明-天智-持統-草壁-珂瑠王と続く皇統の尊貴性・優越性を高めようとした動向として評価できよう。

天武陵(野口王墓古墳)は草壁が造営を進め、新益京朱雀大路の南延長線上に位置する<sup>69</sup>。天武朝における一連の天皇の権威付け、天皇即神思想の醸成による天皇の超越化(大隅2001)と繋がる施策であろう。

持統は天武と合葬されたが、単に天武の皇后であったから、という単純な理由ではなさそうだ。持統の即位は珂瑠王を即位させるとともに、生存する天武の皇子達でなく、持統を軸とした皇統(珂瑠王と持統の妹たち)に皇位継承の重心を移すための策であった(倉本2009)。天武陵が持つ象徴的意味を引き継ぎ、持統を超越化する必要が文武にはあったのである<sup>70</sup>。

文武の父、草壁の墓は東明神古墳の可能性が高く、「越智崗」の斉明陵の南方にある「真弓丘」に設けられた。紀路から望見できるような場所であり、斉明と持統の血を引き天皇に即位すべきであった草壁の超越化を意図し、斉明陵と似た立地の場所に陵を設けたのであろう。

天武陵は中尾山古墳とみてよい。新益京朱雀大路の南延長線上から西に173mずれるが(小澤2016)、新益京南方の丘陵地の中でも中軸線に近い場所が天皇の陵域と定められたのであろう。実際には平城遷都によって元明以降の天皇は平城京北方の丘陵地に陵を設けるようになったが、遷都後でも新益京南方に高位貴族墓として高松塚古墳<sup>71</sup>が造られたのはその名残であろう。

### C. 6～7世紀大王墓における改葬・追葬・同葬の事情

冒頭に述べたように、大王家内部による自律的な王位継承ができるようになる天智以前には、大王位の行方は、大王や王位継承有資格者と、諸豪族内の特定勢力との結びつきの離合集散関係によって左右され、群臣の会議や推戴を経る必要があった。王墓を営む場所についても、そのような関係が効いていたはずであり、6～7世紀の大王墓・王族墓にみられる改葬・追葬・同葬についても、そうした事情を検討する必要がある。

継体と尾張連草香の娘・目子媛の間に生まれた安閑・宣化は、母が地方豪族の出であるため、王権継承の正当性を配偶者の血縁で確保すべく、安閑は手白香の異母姉妹の春日谷山田王女、宣化は手白香の同母姉妹の橘仲王女と婚姻した。安閑が春日山田王女、宣化が橘仲王女の墓に合葬されたのはそうした事情の可能性がある。

欽明陵へ、宣化の娘の石姫王女でなく、堅塩媛が追葬されたのは、倭王権の正当性を、蘇我氏と欽明とのミウチ的結合に求めるという推古と馬子の認識を、象徴的・可視的・大規模に示すものであり（倉本2015）、堅塩媛は推古・用明の2大王の母であり蘇我氏の繁栄をもたらした人物として厳かに顕彰されたのであろう。

敏達が磯長の石姫墓に合葬された事情は複雑だ。敏達は欽明の王子のうち、宣化の娘である石姫王女を母とする非蘇我系であるから、敏達を石姫の墓に合葬することは、非蘇我系の血脈を明示することにはなる。しかし、合葬の時期は崇峻4年、実行者は蘇我氏であろうから、その後の、用明・厩戸・推古の磯長谷への埋葬と合わせ考えると、敏達の石姫墓への合葬は、非蘇我系血脈の強調ではなく、むしろ非蘇我系王族と蘇我系王族との融合、前者の後者への取り込みを意図した策と見た方がよかろう。

推古は遺詔に基づき竹田王子墓（植山古墳）に葬られた後に、河内の磯長谷に改葬された。大和から河内に至る要衝たる磯長を抑え、蘇我系大王陵を磯長に集める蘇我氏の策に基づくものであろう。

舒明は当初「滑谷岡」に埋葬されたが、1年後に「押坂王家」の本拠地たる押坂に改葬され、天智朝に母の田村王女が追葬されたとみられる。皇極や中大兄の王統意識に基づくものであろう<sup>72</sup>。

斉明は当初は詔に基づき建王と合葬されたとみられるが、間人王女の死後に、「越智」に改葬され間人と合葬された。斉明が皇極時代に設けた吉備姫王墓・舒明初葬陵、

斉明時代に設けた建王墓（鬼の俎・雪隠古墳か）の場所とはやや離れた「越智」に斉明・間人の合葬墓が造られたのは、中大兄による斉明の権威の超越化を図る意図に基づくだろう<sup>73</sup>。

大王と妃の葬送に関しては、複数のキサキがいる中で、どのキサキをいつ・どこに埋葬するかという点は、その時々葬儀を主宰した現大王と前大王との関係、現大王と権力核を構成する有力氏族との関係などが関わっている。王統の確認・正統化・強化などの政治的意図が背景にある場合が多い。

こうして見ると、王族墓における追葬・改葬・同葬には、単なる親族関係の背後にある複雑な事情が関わっており、血縁関係・親族関係の直截的な表現ではない。これは、古墳時代における親族構造研究の検証に6・7世紀の大王墓の事例を用いる際に注意を要する点であるが、この問題については稿を改めたい。

本稿によって、文武大嘗宮の位置論を展開するための前提を整えることができた。文武即位に先立つ7世紀の大王家の王統の形成過程を辿り、文武の即位を強行した持統の皇位継承構想と皇統観、文武即位の歴史的評価などを確認した。また、安閑から文武に至る歴代大王墓について、造営場所、改葬・追葬の有無などの基礎的情報を整理し、それらの背後に、王統の確認・正統化・強化などの政治的意図があることを確認した。次の稿では、藤原宮朝堂院における文武大嘗宮の位置を、既調査地の検出遺構の詳細な検討によって推定し、その背後にある持統の皇統観を描き出すことにしたい。

### 追記

「3.」では大王陵の前方後円墳から方墳への墳形変化には触れなかった。この問題については高橋照彦が諸説を整理し論点を纏めており、前方後円墳の終焉の推進者を、蘇我系王統の大王や王族、さらに蘇我氏と同調する大夫層などの諸豪族としている（高橋2024）。用明～文武までの時期の大王・王族の墓のうち、蘇我系は方墳、非蘇我系は円墳ないし八角形墳という傾向があるのは確かである。ただし、蘇我系の厩戸王子墓を叡福寺古墳とすれば円墳である。非蘇我系王族でも、押坂彦人大兄王子の子・茅渟王の墓説（塚口1990）がある平野塚山古墳、

茅渟王の妻・吉備女王の墓説（西光2000）があるカナヅカ古墳，斉明初葬陵説（西光2002）がある鬼の俎・雪隠古墳はいずれも方墳と推定されている。厩戸王子墓が叡福寺古墳であるのか，平野塚穴山古墳，カナヅカ古墳，鬼の俎・雪隠古墳が方墳であるのかについては，さらなる検討を要するだろう。なお，茅渟王の墓を平野2号墳と見る場合には円墳である。

## 謝辞

本稿を草するにあたり，辻田淳一郎氏，小田裕樹氏には様々なご教示を賜った。末筆ながら，深甚の謝意を表します。なお，文章の校閲と挿図作成に岩永玲の助力を得た。（2024年11月27日稿了，12月22日改稿）

## 注

- 岡田精司の1992年論文では大嘗祭聖婚説を唱えたと他研究者から捉えられている。たしかに大嘗宮に置かれた二組の寝具を天皇・中宮の寝具と捉え、『新儀式』逸文の「天皇御之者」から天皇が実際に寝具に伏したとしている。ただし、「天皇はこの衾・辱に臥すことにより降臨した神と一体となり，神の資格において神饌を口にし，更に聖婚儀礼を行う形式のものであった」と述べるのを，実際に中宮と聖婚儀礼を行なったと読み取れるのかは，やや不鮮明である。1970年論文では，悠紀殿・主基殿内の衾は，かつて采女との神婚が行われた「衾の遺物」であり，大化前代の新嘗の祭場における性的儀礼の「痕跡」と述べ，大化前代の「ニイナメ＝オスクニ儀礼」で行われていた天皇と采女との神婚が大嘗祭では見られなくなったと述べていたから，1992年論文でも，大嘗祭には聖婚儀礼の「形式」のみが残っているにすぎないと暗示していると読み取るべきかもしれない。
- 岡田精司は大嘗祭を確実に反映した神話は存在しないとしたが，松前健が指摘した海神宮訪問神話と大嘗祭との対応（松前1970）を認めつつも，大嘗祭を王位就任儀礼としたために，海神宮訪問神話に王位就任の要素が見られないことから，同神話が大嘗祭の祭儀神話ではないと断じた（岡田1983）。しかし大嘗祭を王位就任に伴う儀礼ではあっても，王位就任そのものに必須の儀礼ではないとみなせば，海神宮訪問神話を大嘗祭の祭儀神話と見なすことはできよう。
- 大津透も，『貞観講書私記』に，大嘗祭について，天皇が新穀を食し，その神宴を神々にも供する祭りであると明快に論じている点に注目している（大津1999）。
- そのほかにも，大化前代の「ニイナメ＝オスクニ儀礼」では，地方首長から人質として貢進された采女による御酒・御饌の供進，天皇と采女との神婚，寿歌の奏上が行われたと推定した。天皇と采女との神婚説（岡田精1970）は，大嘗祭における天皇と中宮の「聖婚儀礼」説（岡田精1992）に展開したと言える可能性はあるが，注1に記したように，大嘗祭における聖婚は「形式」のみと読み取れる余地がある。いずれにせよ，岡田精司説の要点は聖婚説ではなく服属儀礼説と捉えるべきであろう。
- 小倉滋司は，養老令で両者を「大嘗」とする点について，律令制定時には法制上，同一の祭儀とみなしたが，『日本書紀』天武・持統紀や『続日本紀』では大嘗祭と新嘗祭は区別されているので，両者の区別が養老令以後に生じたわけではないとする（小倉2011）。
- 元正の東国行幸を倉林正次は「新嘗の旅」とみなし，天皇を新嘗祭に来訪するまればと神に準えている（倉林1971）。倉林は，大嘗祭を折口説と同様に，「すめみまの中」に「天皇霊をおいれする」儀とみているから，大嘗祭後の元正の行幸を神の来訪と捉えたのだろうが，折口説を採らない場合，その点には注意を要する。
- 大化前代の新嘗祭に悠紀・主基の卜定を伴っていたのかどうかであるが，単なる収穫祭の場合でも，どこの新穀を用いるか卜定するのはあり得るだろうが，悠紀国・主基国を定め国司に奉仕させるのは国家祭祀になってからであろう。
- 天皇親祭の場合は内裏，そうでない場合は神祇官と言った可能性はあろう。平城宮では奈良時代後半の神祇官が判明しているが（奈文研1993・1997），個々の建物の使用法は不明である。
- 班幣は畿外（四方国）より奉られたミツキの荷前（初穂）を神々に貢上することによる祭祀の実施で，地方豪族層の服属の確認と祭祀権の掌握（在地首長の祭祀の統括）を象徴的に意味すると評価されている（大津1999）。天皇即位時と毎年の祈年祭における班幣祭祀は，旧来の国造の服属儀礼を継承し，それを，全国を対象に統一的に形式化した新しい祭祀であり，天皇による祭祀権の掌握を象徴しており，即位や祈年祭での班幣で地方の神々を服属させたことに，天皇による全国支配の根拠があったと評価されている（大津1999）。
- 大津透は律令国家による全国統一支配の成立に先立つ地方豪族の国造任命が，国造の祭祀権を形の上で召し上げて朝廷に服属させる儀礼であったとしたうえで，律令国家の全国統一支配の成立のためにはもう一段の飛躍が必要であり，それが班幣祭祀であったとする（大津2010）。
- 丸山裕美子は天皇がいかにして手に入れたか明示していないが，文脈から判断すると，『古事記』『日本書紀』という史書で天神に繋がる天皇系譜を神聖化し，国つ神に対する天皇の優位を描いたという事であろう。大津透も『古事記』の編纂や国史の編纂による神話にもとづく天皇支配の正当化がなされたと述べている（大津2010）。
- 大津透は，地方首長による食物の貢献が服属儀礼としての意味を持つとし，大極殿における元日朝賀と同時に地方の国庁で行われる朝拝後に，国司が郡司等の在地豪族が提供する食事を食するのは，服属儀礼としての「食国」であり，服属儀礼としての意味を含んで機能していたという（大津1999）。
- 崇峻大王の暗殺に先立ち，蘇我馬子は東国の調を進上すると偽って大王を出御させた。東国の国造が服属の証としてミ

ツキを進上する儀式が、大王が出御すべき重要な国家的行事であったのは、国造が大王に対して服属するものであったからだという（大津2010）。

14 桓武以降もみてみると、桓武～宇多では、全てが畿内の西側・東側から1か所ずつ選んでいる。桓武（越前・備前）・平城（伊勢・備前）・嵯峨（三河・美作）・淳和（美濃・丹波）・仁明（近江・備中）・文徳（伊勢・播磨）・清和（三河・美作）・陽成（美濃・備中）・光孝（伊勢・備前）・宇多（近江・播磨）。西は備中以東、東は三河以西で、それより外部には及ばない。畿内の西側・東側から1か所ずつ選ぶのは光仁以降に定式化すると言えるので、天智系王統を意識する桓武が光仁の先例を踏襲し、平城以降の天皇は桓武の先例を踏襲したと言えよう。醍醐以降は孝明まで悠紀国は近江に固定し、円融以降は孝明まで主基国は丹波か備中に固定してしまう。

15 2024年の平城第658次調査で、平城京左京三条一坊二坪の土坑から聖武大嘗祭に関わる木簡が多数出土した。荷札付札のうち120点は、備中国と明記されるもののほか、郡名ないし郷名により備中国からもたらされた物品に付けられたものと推測され、備中国に由来する可能性がきわめて高い。しかも備中国の9郡すべてからもたらされた荷札が含まれる（山本2024）。悠紀国が備前、主基国が播磨であるのに、備中から物品（供神雑物）が調達された事情は検討を要す。『続日本紀』の記載が誤りで、悠紀国が備中であったとする説もあるようだがいかなものか。

16 大津透は近江の地域的性格について、王権による植民開発の地であり、畿内豪族連合の外にある地方豪族が居住する畿外であるとする（大津1987）。近江は令制三関（鈴鹿・不破・愛媛）の内側に入ってしまうが、令制三関は天智朝に大津宮防衛のために設定され、それを遺制として律令制が引き継いだもので、畿内・畿外の境としては相坂の方が現実的とみている（大津1987）。

近江はあくまで畿外という事だが、伊賀・伊勢・近江は畿外の近国であるにもかかわらず、光仁以前には悠紀国・主基国になっていない。伊賀・伊勢・近江を避ける何らかの事情があったのかもしれない。これら三国は、壬申の乱の時の大海人軍、および養老元年・二年の東国行幸時の元正、天平十二年の行幸時の聖武が通過した諸国であり、天武系王統の天皇が畿内に準じる国と認識したのかもしれない。平安時代になると、近江は仁明・宇多で選ばれ、醍醐以降は孝明まで悠紀国に固定されるようになる（52回）。近江は平安京に東接し、畿内政権の財政的基盤の役割があったから（大津1987）、それが重視されるようになったのであろうか。ただし、大海人軍・元正・聖武の三者が通過した美濃（中国）は、文武・孝謙・称徳の大嘗祭で悠紀・主基になっており、伊賀・伊勢・近江とは扱いが異なる。不破関があり、畿外でも王権への服属がとくに重視された国であるからだろう。称徳が美濃・越前を選んだのは「朝廷の護としての関の国」との評価があったようだ（北山1969）

17 平安時代になると、「中国」の美作は嵯峨・清和で選ばれた。備中は仁明・陽成・村上で選ばれ、円融以降は孝明まで、備中（18回）か丹波（30回）が主基国に固定されるようにな

る。近江・丹波は平安京がある山城の隣国で物資・人員の調達がし易いのが選定の理由であろうが、備中（中国）選出の事情は何であらうか。

18 畿外からの役民の徴発に際しては、近国→中国→遠国という順番があったようだ（丁匠赴役条についての『古記』注）。次期が下るが、飢饉などの際に播磨から淡路へ（神護景雲元年、延暦18年、）、播磨から和泉へ（元慶2年）、播磨・備前から摂津へ（元慶2年）穀物が運ばれたほか、小治田宮に播磨・備中・讃岐から穀を運んだ（天平宝字4年）例があり、大津透は播磨の財政的位置づけを示すとみる（大津1987）。播磨以外でも悠紀国・主基国に選ばれた諸国は王権からの財政的評価があったと思われる。逆に、そのような評価から漏れた諸国は選定されなかったようで、近国の紀伊・伊賀・若狭・丹後が一貫して選ばれないのはそのせいであらうか。また讃岐・阿波・淡路は海を隔て、動員に難がある点が効いているだろう。更に時期が下るが、応仁の乱後の公事停滞とりわけ大規模行事の停滞が生じ、後柏原天皇・後奈良天皇、正親町天皇は、即位礼は寺院や有力氏の資金援助で挙行できたものの、大嘗祭はできなかった。即位礼に比して大嘗祭は、資材の調達や人員の動員が大規模で、多大な費用を要したからで、古代においても事情は同様であったであろう。

19 もっともこの王家の人物も、蘇我氏と緊密な婚姻関係を結んでいたから、舒明以降に蘇我系の大王が即位しなかったものの、蘇我氏は王権のミウチ氏族として王族の尊貴性を保証する重要な位置を占めた。

20 その原因は、舒明が造営した百済大寺を起源とする大安寺系の縁起が『日本書紀』の原史料として採用されなかったことによるという（倉本2015）。

21 法隆寺では、金堂と塔を囲む回廊の北外に講堂を置く。百済大寺では北面回廊と講堂が未検出であるが、同様の配置であったと推定する。

22 『延喜諸陵寮式』の墓歴名には、「大伴皇女」と記されるが、北康宏は、原史料では「大俣皇女」であり、転写過程で「大伴皇女」に誤写されたとみている（北1996）。

23 押坂王家は押坂の根拠地以外に、大和西部の広瀬に副拠点を設けて産業開発と交通掌握をはかるとともに、巨大な部民集団「刑部」保有し政治的・経済的基盤としていた（吉川2011b）。新納泉は、蘇我氏による政敵の排除が最も激しかった6世紀末から7世紀初頭に没し、たいして活躍もしていない押坂彦人大兄が、「天皇陵をはるかにしのぐ規模の兆域をもつ古墳を築造した」ことを疑問とする（新納2009）。しかし、押坂彦人大兄墓が巨大な兆域を有すことと、押坂彦人大兄の実際の政治力はそもそも別個の問題である。中大兄の執政期に成立した中大兄の皇統を正当化するために作られた系譜的資料が、桓武朝に再発見され墓歴名に利用されたが（北1996）、その中で中大兄の父・母双方の祖である押坂彦人大兄が「皇祖」として特に評価され、成相墓（15町×20町）は、天智の山科陵（14町×14町）とともに天武の檜前大内陵（5×4町）などを遥かに凌ぐ巨大な兆域が設けられたと考えられる。ただし押坂彦人大兄が、7世紀後半時点で王統の始祖的扱いをされていた明証はない。

- 24 この時点での大王位継承の主導権は葛城王子と中臣鎌子が握っていたが、葛城はまだ若すぎ、古人大兄が存在する中で世代交代が避けられた(倉本2009・2015)。
- 25 孝徳は阿部小足媛との間に有馬皇子がいたが、有馬に大王位継承権はなかった。しかし、中大兄は有馬の存在を許さず、蘇我赤兄に唆された有馬を抹殺した。
- 26 焼失した飛鳥板蓋宮跡地に後飛鳥岡本宮を造営した。その東方の丘陵には石垣を巡らせた特殊な施設を築き、飛鳥寺の北西側には漏刻(水落遺跡)や饗宴・儀礼のための大規模な施設(石神遺跡)を設けた。須弥山を象った石像を用いて仏教行事や夷狄の服属儀礼・饗宴を行うなど、王権の神聖化を図った。この時期には蝦夷居住域への侵攻を日本海沿いと太平洋沿いの双方で進め蝦夷に朝貢させることで、異民族を支配する「帝国」の体裁を整えようとした。
- 27 草壁皇子死去の時点で成人していた天武の皇子である高市・忍壁・磯城は碑母の所生で即位の可能性に乏しいが、未成人の皇子のうち舎人・長・弓削は生母が皇女で、成人すれば即位を主張できる立場となり、天武二世王にすぎない(父が即位していない)珂瑠王より血縁的に優位に立つ。彼らを飛び越えて珂瑠王を草壁の後継者にするには、珂瑠王が成人するまで彼らを掣肘する必要がある、自身が即位するしかなかった(倉本2009)。
- 28 天智の血を引くのは草壁のライバル大津皇子も同じであるが、天武死去の直後に無実の「謀反」で葬っていたから、その後は天智の血を引く天武の皇子は草壁のみとなった。
- 29 『続日本紀』大宝元年八月甲辰条に、「太政官処分」によって、志我山寺へは庚子年(文武四年)から三十年間食封を施入し、食封停止後は準じた物を施入すると決定された、とある。この食封施入の意味については、造営援助ではなく、天智の国忌齋会などの仏事法会費とする説がある(櫻井1996)。
- 30 この2陵の修造は、持統が、自己と文武の皇統の始祖として斉明・天智の顕彰を始めたと評価されている(倉本2009)。白石太一郎は、持統による天智陵の「修造」は、壬申の乱によって未完成であった天智陵を、持統が天智陵にふさわしいものにしたと解し、立派に完成していたはずの斉明陵の「修造」は、天皇家の権威の確立のために、夫天武と父天智の母で直近の天皇であった祖母・斉明の陵を「修造」したと解した(白石2011)。
- 31 天智の国忌が、大宝2年より前、朱鳥2年(687)から崇福寺で始まっていたとする『公事根源』(一条兼良筆)の記述を受け、天武の崩後に持統が父である天智の国忌を定めとする速水房常の解釈を支持する説がある(櫻井1996)。
- 32 観世音寺の造営過程については、朱鳥元年(686)の封200戸の施入以前に主要伽藍が完成していたとする説(高倉1983)もあるが、所用の老司式軒瓦の年代観から主要堂塔の造営を持統朝と考える(岩永2009)。
- 33 天智以外に、持統の母方の祖父である蘇我山田石川麻呂の追善にも注力し、造営が中断していた山田寺の造営の再開にも注力した。持統の母である遠智娘の妹である姪娘の娘・安陪皇女は草壁皇子の妃であったから、遠智娘・姪娘の父である石川麻呂は尊重さるべき人物であった。
- 34 持統が確立した皇位継承構想と「王朝」と称すべき皇統も、文武が皇子を二人しか残さず25歳で死去したため、持統が皇位継承から遠ざけた蘇我系皇族や天武二世王に皇位継承の可能性が生じてきて、奈良時代を通じて危機に瀕することとなった。(倉本2009)
- 35 皇位継承予定者として一人だけの皇太子を定める制度は、飛鳥浄御原令で初めて成立した可能性が高いが、天皇の即位とほぼ同時に皇太子が定められ、原則としてその皇太子が即位するのが通例となってくるのは光仁朝以後のことで、それ以前には、皇太子が定められていない期間が多かったという(大隅2001)。大化前代に存在した、大王が群臣に推戴されるという手続きが大化改新以降変化し、王権が独自に王位継承を行うようになって行く。皇太子制度、天皇の生前譲位と、太上天皇となつての新天皇の後見は、皇位継承過程への群臣の介在の余地を排除し、王権が王位継承を独自に行う意志の表れであった。しかし、王権を支える貴族層全体でなく王権と癒着した藤原氏など一部の貴族勢力の利害と結合していたため、皇位をめぐる権力闘争が激化し、最終的には天武系皇統の中絶という皮肉な結果をもたらした。
- 36 持統10年(696)に高市皇子が死去した時点で生存した天武の皇子は7人で、このうち舎人皇子・長皇子・弓削皇子が天智の皇女の所生、穂積皇子が蘇我氏、新田部皇子が藤原氏の所生で、生母の地位が高かったが、新田部は未成人であったから、舎人・長・弓削・穂積の4人が即位の可能性を有していた(倉本2009)。
- 37 特に舎人皇子は、阿倍氏と天智の間に生まれた皇女と、天武との間に生まれ、すでに成人していたので、彼を差し置いて、天皇を父としていない天武二世王にすぎない珂瑠王に皇位を継承させることは、きわめて強引な措置であり、これほど大量の旧世代(天智の皇子・皇女も多く生存)を残しての世代交代は歴史上例のないことであった(倉本2009)。
- 38 藤原不比等と葛野王を協力者とし、皇嗣決定会議で、参加者の議論が紛糾したなかで、葛野王に兄弟相承を否定し嫡系父子継承を正当化する発言をさせ、反論を封じ込めた。
- 39 珂瑠王は、15歳で皇太子となったが、律令制に基づく最初の皇太子は、これまでの年齢の慣例や、執政経験とは無縁の地位となった。立太子のわずか5か月後に、皇太子としての経験もほとんど経ないまま、持統が譲位して天皇となった。(倉本2009)
- 40 持統の譲位に先立って、乙巳の変に伴う皇極の孝徳への譲位があるが、通常の譲位と異なり事実上の廃位と見る説があり(吉川2011)、皇極をのぞけば、譲位も持統が史上初となる。
- 41 文武も聖武もほとんど皇子を残せず、天武二世王たちが皇位継承権を持つ諸王となつてしまい、藤原氏の専権に反感を持つ他氏族によって、皇嗣として擁立する陰謀に担ぎ出された。しかしすべて失敗し、藤原氏の優位が揺るぐ事はなかった。
- 42 吉川真司は、天武の近江令改訂の理由の一つに、草壁の即位に備えて基本法典に手を入れて国制を整備する意図をあげ、大宝律令は珂瑠皇子、養老律令は首親王の立太子とともに編纂が始まったと推察している(吉川2011b)。
- 43 文武在位中に議論された遷都の具体的内容がいかなるもの

であったのかについては説が分かれ、イ遷都をすべきか否か、ロ遷都することは決まっていますが、どこに都をおくのか、ハ平城遷都がすでに組上にのぼっており、それに向けての具体化の議論、と言った可能性が考えられるという(寺崎2020)。景雲4年(707)2月19日の遷都の議が、慶雲3年(706)11月の文武の病気による譲位表明のすぐ後であることが関わっている。しかし、慶雲元年(704)に帰国した遣唐使がもたらした情報によって遷都の必要性が認識され検討され始めたのであるし、文武の発病以前の慶雲3年(706)2月に「百姓身役」という造営工事への労働力の徴発が制定されて、すでに新都計画が進められていたとすれば(鎌田2001)、慶雲4年の遷都の議の時点で、遷都そのものの是非が問題にされるのは不自然である。景雲3年9月の難波行幸が遷都に向けての視察を兼ねていたとする説があるが(鎌田1991)、すでにこの時点で平城の地が有力な遷都候補地になっていたとみられる(岸1988)。

また、遷都の議の後、6月の文武の死去と元明の即位、11月の文武の埋葬を経て、翌年の和銅元年(708)2月には平城に都邑を建設する詔が出されているから、この間までには平城が新都と決定されていたことになる。文武が、遷都先が平城の地と確定したのを知っていたかどうかは微妙だが、新益京を去らねばならぬことは認識していたはずである。

- 44 5世紀に大王墓が設けられた古市古墳群・百舌鳥古墳群を含む大阪平野南部地域が、大王家の本拠地であったのか(白石1999)、政治的本拠地は終始ヤマトで王墓の造営地が大阪平野であったのか(吉村2010)、説が分かれる。
- 45 『日本書紀』には安閑が春日山田皇女墓に合葬されたと記すが、合葬ではなく、安閑陵(高屋築山古墳)の隣の高屋八幡山古墳が春日山田皇女の墓とする説もある(高橋2012)。
- 46 河内大塚山古墳については、安閑未完成陵説(岸本2011)、欽明陵説(石部1989)、敏達陵説(森2011・水谷2011)、物部守屋墓説(小澤2023)などがあるが、ここでは深入りしない。安閑・宣化を支持する勢力と、後の欽明を支持する勢力の対立関係や王権の分立を史実と認めるか、安閑の即位を認めるか、によってどの古墳を誰の陵とするかが左右されるので、判断は容易ではない。
- 47 前棺を古く、奥棺を新しくみる説が多いが、白石太一郎は、両者が近い年代で置換えは無いと考えている(白石2008)。白石は五条野丸山古墳を欽明陵とするから、奥棺が欽明、前棺が堅塩媛の棺とみていることになるが、型式変遷観に無理があるように思える。
- 48 欽明はそもそも手白香王女に婿入りして即位した継体の後継者ではあったが、欽明を支持する勢力と、異母兄弟の勾大兄王子(安閑)・檜前高田王子(宣化)を支持する勢力との対立が続き、その収束のために、宣化の娘の石姫王女を妃とした。他方で、蘇我稲目が分裂していた王権の收拾にあたり、欽明王権を支持し、娘二人を欽明のキサキとした。その結果、欽明は蘇我氏出身のキサキと大王家出身のキサキの双方から後継者を儲け、蘇我系嫡流と非蘇我系嫡流を創出した(倉本2015)。ただし、欽明死後、石姫王女所生の敏達が即位したように、稲目が世中には蘇我氏所生の王子が大王家の嫡流になる状況ではなかった。欽明には安閑・宣化・大伴氏との対抗、

新興の氏族である蘇我氏と政治的な提携を必要とする事情があったが、蘇我氏・稲目側にも、欽明の後援で大臣に就任し婚姻関係を形成し、欽明-稲目の政治同盟を進展させることが、勢力の強大化には不可欠であった。

- 49 蘇我氏は稲目が大臣の時期に額田部王女が詔語田淳中倉太珠敷王子(後の敏達)のキサキとなっていたが、後に敏達の大后になった。敏達の死後、用明の即位によって蘇我氏は大王家の外戚の地位を手に入れた。崇峻の暗殺後、額田部王女が即位し(推古)、馬子が大臣の時期に蘇我系王統・非蘇我系王統の双方と姻戚関係を結んで後継者を設けた。大王家との強力なミウチ関係の構築に成功するとともに、畿内有力氏族から各一人の代表を出すマヘツキミ制の原則を破って、マヘツキミに大臣と大夫を出すようになり、マヘツキミ氏族の中で隔絶した勢力を有するようになった(倉本2015)。このような条件が未成立の稲目の時期の蘇我氏の権力を過大評価はできない。蘇我氏が同族氏族をマヘツキミ会議に参加させるようになり、推古の代以降に全体の3分の1(10人ほど)を占め、本宗家が大臣として会議を主導して権力集中を果たすが、稲目の代には2人でしかなく倭王権の制覇には程遠い。
- 50 これらは乙巳の変の正当化のためのという『日本書紀』編者の意図に基づき、反王権の立場が強調された面があり、必ずしも不敬・専横とは解せないものがある(倉本2015)。
- 51 これとは逆に、蘇我氏が巨大な大王墓を自らの本拠地に営んで権勢を示したとする説(白石2016)もある。白石は、5世紀末から6世紀代には、大王を支えた有力豪族がその本拠地に大王墓を営むようになるとし、顕宗陵(狐井城山古墳)は葛城氏の本拠地、継体陵(今城塚古墳)は摂津三島の勢力の本拠地、宣化陵(鳥屋ミサンザイ古墳)は大伴氏の本拠地、欽明陵(五条野丸山古墳)は蘇我氏の本拠地に営まれたとする。この場合でも、稲目の段階で、五条野丸山の地がすでに蘇我氏領になっていたかは即断すべきではないと思う。
- 52 稲目は「小墾田の家」「向原の家」「軽の曲殿」、馬子は「飛鳥川の傍」「石川の宅」「槻曲の家」、蝦夷は「甘檜丘」「畝傍山の東」と言うように、主要道路の交差点付近に拠点を設け、点から線へ、線から面へというように、領域を拡大していき、入鹿時点では軽・五条野丸山古墳・小山田遺跡・豊浦を結ぶ範囲を面的に領域とするに至ったようだ。しかし稲目時点ではそのような面的領域の形成には至っていなかったとみるべきであろう。
- 53 『日本書紀』によれば、欽明17年に大臣稲目を遣わして、韓人大身狭屯倉(からひとのおおむさのみやけ)・高麗人小身狭屯倉(こまびとのおおむさのみやけ)を置き、韓人・高麗人を田部にして経営に当たさせた。身狭は見瀬にあたる。この屯倉の地と五条野丸山古墳との関係は問題であるが、屯倉は蘇我氏が経営に当たったとしても王権の支配地であり、蘇我氏の領域にはなっていなかったとみられる。
- 54 梅山古墳の被葬者については、欽明説の他、蘇我稲目説(白石2009・2016)、堅塩媛説(増田1991)などがある。「檜前陵」は『日本書紀』推古28年の記述から、葦石、域外の土山・大柱という要素を持つとともに、『延喜式諸陵寮式』では吉備姫の「檜前墓」(金塚古墳とする説が有力)が域内にあるとされ

ており、梅山古墳に当たることは間違いない。さらに、「檜前陵」の域内に、『延喜式諸陵寮式』の中で、北康宏が「中大兄の血統を正当化するという政治的意図を持った系譜的資料」と呼ぶ非蘇我系血脈を明示するリスト（北1996）に含まれる人物（吉備姫王）の墓が存在することから、蘇我稲目や堅塩媛の墓ではありえないとともに、蘇我稲目との結びつきが強い欽明の墓でもない、とする高橋照彦説が妥当と考える（高橋2012）。欽明のキサキの石姫王女がリストにあるのは、宣化の王女であり非蘇我系だからである。そもそも、梅山古墳が稲目の墓であれば「檜前陵」と呼ばれるのがおかしくなる。

55 石部正志は、太子西山古墳が葉室一須賀古墳群の盟主墳的位置を占めることから豪族墓である公算が高く、石姫・敏達の陵と断定はできないとする（石部1989）。他方、白石太一郎は磯長谷を、蘇我氏と関係を持たない石姫（宣化の皇女）の墓が営まれ、そこに蘇我氏と血縁関係を持たない敏達が合葬されたことから、「河内王家」の本拠地、磯長谷古墳群を「河内王家」の墓域とし、太子西山古墳を石姫墓（敏達陵）と認めている（白石2016）。

56 平石古墳群が蘇我倉氏の墓とする説があるが、族長墓たるシシヨツカ古墳・ツカマリ古墳・アカハゲ古墳の中で最古のシシヨツカ古墳は、6世紀末～7世紀初頭まで上り（安村2006、森本2012）、倉麻呂の活躍期より古くなりそうであるから、被葬者がどの氏族であるのか検討を要す。

57 敏達陵が建造途中で中断していたとすると、そこに敏達を葬らずに崇峻4年（591）に石姫の墓に追葬されるという形で磯長に葬られたのも、磯長の確保を狙う蘇我氏（馬子）の意向であったとみられる。

58 厩戸王子の墓は磯長谷であるが、弟・来目王子の墓は古市古墳群の中にある。蘇我系の王族でも磯長とは限らないから、非蘇我系の石姫は古市古墳群内でも良さそうであるが、そうなっていない。

59 石姫の没年は不明であるが、敏達元年（572）に、「皇太后」に立てられており、崇峻4年（591）年に石姫陵に敏達が追葬されているから、572～591年の間に没したことになる。

60 義江明子は敏達が石姫墓に追葬されたのは、自らの血統的位置を示そうとする敏達の意志と推定した（義江2024）。しかし、その追葬の実行者は蘇我氏であるから、単純に敏達の意志が実行されたのではあるまい。また義江は、石姫墓の造営について、敏達が将来の自分の追葬を想定して大王墓にふさわしい規模の大型前方後円墳を築いたとするが、場所が磯長であることからすれば、単純に敏達の意向ではなく、蘇我氏（馬子）の政略に基づくものと考えたい。

61 吉備姫王の「檜前墓」をカナヅカ古墳に当てる説が有力であるが、検討の余地がある。日本書紀では、吉備姫王は「檀弓岡」に葬られたとあり、吉備姫王の墓を檜前墓とも檀弓岡の墓とも称していたことになる。和田萃はこれについて、紀路（近鉄吉野線の飛鳥駅付近～壺阪山駅付近までの区間）を境に、その東側を檜前、西側に続く丘陵の北半を越智岡・越智野、南半を佐田の岡・真弓の岡と称していたと推定し、古代の檜前地域と、その西南の真弓地域の境（紀路が境界）に吉備姫王の檀弓岡墓（檜前墓）が営まれたからであるとした

（和田2005）。真弓岡と越智岡の境界をどこに推定するかが問題だが、牽牛子塚古墳の南側を通り、西方の越智の集落に至る谷筋を境界とすれば、岩屋山古墳がある越の集落は真弓岡の北端に位置することになる。そうすると、檜前と真弓の境界に近い場所にある7世紀の古墳は岩屋山古墳しかない。岩屋山古墳とカナヅカ古墳はともに岩屋山式の横穴式石室を持ちほぼ同時期であるので、岩屋山古墳が「檀弓岡」の吉備姫王墓である可能性が出てくるであろう。

ただしその場合、岩屋山古墳が檜前陵の域内と見なせるかどうかが問題となる。『延喜式諸陵寮式』には「檜前陵」の兆域の記載は無いが、「檜前坂合陵」と同じ方4町とすると、岩屋山古墳は梅山古墳の中心から西南方向約435mにあり、兆域の西南角から160m外に出てしまう。ただし、兆域規模は不明であるから域外と即断もできない。岩屋山古墳の墳丘を、方形基壇を持った八角形とする復元もあり（白石1982）、斉明初葬陵説（白石2012）、舒明初葬陵説（岸本2013、小澤2023）もあるが、墳形については検討の余地が有り（岸本2019）、大王陵ではない可能性もあろう。

高橋は、吉備姫王の墓をカナヅカ古墳としたうえで、それが檜前墓とも檀弓岡の墓とも称された点について、檀弓（真弓）岡の範囲を、鬼の俎・雪隠古墳付近にも「真弓」の字名が残ることから、東明神古墳（草壁皇子の真弓丘陵か）から岩屋山古墳を経て野口王墓古墳（天武・持統陵古墳）あたりにもまで及ぶ弓状の広範囲とみることで説明している（高橋2012）。しかし、「真弓岡」の範囲を高取川の東まで拡張するのが疑問とする説もあり（白石2009）、「真弓岡」を高取川以西とする場合、「檀弓岡」の「檜前墓」=吉備姫王墓を岩屋山古墳に当てる余地はあろう。ただしその場合、カナヅカ古墳の被葬者問題が新たに生じる。舒明初葬陵の可能性もあると思うが、可能性を示すにとどめておく。

いずれにせよ、岩屋山古墳・カナヅカ古墳ともに岩屋山式石室（白石1982）であり、その年代観が問題となる。岩屋山式を設定した白石太一郎は7世紀中頃から第三四半期まで下げており（白石1982・2011）、年代を上げる立場からの批判が出された（新納1994など）。岸本直文は、来目王子墓、厩戸王子墓、推古陵、吉備姫王墓の4例が岩屋山式であり7世紀前半とする（岸本2013・2019）。岩屋山式のような「切石技法」がいつ頃出現するかが問題であるが、河内・平石古墳群のシシヨツカ古墳で6世紀末頃の花崗岩切石技術による横穴式石室が発見され（安村2006）、従来7世紀後葉と考えられてきたツカマリ古墳・アカハゲ古墳も7世紀中葉までに収まる可能性が出てきていることからすれば、岩屋山式も7世紀前半に上げて問題なかろう。

62 大柱は、被葬者の霊、天皇霊を招き寄せるための依代という説がある（和田2005）。しかし、諸氏に何本も柱を立てさせたのであれば、柱は陵を荘厳する設えと見る方が良く、幡などを掲げる旗竿であろうか。

63 義江明子は推古の磯長への改葬は推古の思いを断ち切る行為であり、推古陵を大王陵最後の大規模方墳として磯長に遷したのは、大王陵の八角墳への転換を実行した皇極だつたこととみている（義江2024）。改葬の時期・実行者は不明であるが、

時期的には蘇我蝦夷の優勢期であり、舒明や皇極の意向と見るよりか、蘇我系大王陵を磯長に集中させる蘇我氏の構想の結果と見るべきであろう。

- 64 ここでも岩屋山式石室の年代観が問題となる。注61を参照されたい。
- 65 牽牛子塚古墳の刳抜式石槨には現状で数本の亀裂が入っており、亀裂を漆喰が覆っているようである。牽牛子塚古墳の石槨と同様の横口式石槨とされる益田岩船は、槨の刳り抜き工程で石材に亀裂が入って放棄されたと考えられる。牽牛子塚の石槨は完成して使用されたものの、ある時点で石材に亀裂が入って割れる危険性が生じたと考えれば、周囲に切り石擁壁を巡らせ漆喰で固めるという大袈裟・嚴重で特異な構造を採った理由が説明できる。
- 66 廣瀬説では組合式石槨の平野塚穴山古墳について、キトラ古墳・石のカラト古墳・高松塚(藤原京期及び以降)より「やや古い段階」としているの、7世紀末と見ているようである。そうすると、和田D系統(塚穴山形+高松塚型)(和田1989)の全体の年代が、圧縮されすぎると思う。平野塚穴山古墳の被葬者は、皇極・孝徳の父・茅渟王の片岡葦田墓(延喜諸陵寮式)とみる説が有力である。その場合、茅渟王の没年は不明だが、キサキである吉備姫王(643年没)、異母兄弟の舒明(641年没)の没年からすると、7世紀第2四半期くらいまで上る可能性があり、廣瀬説との差異が大きくなる。
- 67 梅山古墳を欽明陵と見なす説では、梅山古墳から吉備姫王墓(カナヅカ古墳)をへて天武持統陵へとつづく陵墓群を「天皇家の陵墓域」と捉え、蘇我氏の勢力基盤、奥津城の地と対峙するとみている(小澤2002)。この場合、欽明をその後の王統の始祖として位置づけることになる。たしかに敏達以降の大王・天皇は欽明の子孫ではあるが、蘇我氏との血縁関係を濃密に有する蘇我系王統と、蘇我氏との血縁関係をまったくもたない非蘇我系王統がともに欽明から発しており、後者にとって欽明は王統の始祖とはならないので、非蘇我系王統の陵墓域を形成する場合、始祖墓は欽明陵にはならない。
- 68 藤堂かほるは、天智陵が大極殿の北に設けられ、忌日が国忌に指定されたのは、律令国家の初代天皇として位置づけられたことを意味するとした。律令国家の新秩序形成とは、陵による天皇系譜の具現化によって、陵墓を律令国家のイデオロギー装置の一環とすることとされた。大極殿の北に造営されたという点を除けば、重要な指摘だろう。ただし、持統・文武が、天智に対して特に顕彰事業をおこなった事情には注意を要する(「2」参照)。
- 69 天武死去時点で新益京は未完成だが、造営は始まっており、中軸線の位置は決定されていたので、それを南に延長させることは可能である。
- 70 義江明子は、持統の天武陵への合葬は、君主として死後も天武と並ぶ存在であった存在であり続けることを選んだ持統の意志によるとした(義江2024)。しかし、合葬を実行したのは文武であり、文武の意図こそが重視されるべきである。
- 71 時期が下って天平神護元年に、称徳は紀伊への行幸の途上、草壁の檀山陵通過の際、騎馬の者を下馬させ儀仗兵に旗や幟を巻かせ敬意を表させた。称徳は、天武と持統の双方の血を

受け継いだ草壁の子孫こそが天皇家正統を受け継いだ者であるという認識(草壁(天武-持統)皇統を過剰に意識する)を強く有していた(倉本1998)。

- 72 高松塚は石上麻呂(717年没)説(白石2005, 小澤2023)が有力だが、忍壁皇子(705年没)説(小笠原2019)もある。なお、キトラ古墳は阿部御主人(703年没)説(白石2005)が有力だが、弓削皇子(699年没)説(小笠原2019)もある。新益京南面の墓域にある高位被葬者墓の主は、天武の皇子が相応しいと考えられがちだが、即断はできない。草壁死後に天武皇子を差し置いて珂瑠王の即位を画策した持統、文武の死後に首皇子の即位を目指した勢力にとって、天武諸皇子はまずは警戒の対象であった。高市・忍壁・磯城は卑母の所生で即位対象から外れるが、天智皇女を母とする舎人・長・弓削、蘇我氏を母とする穂積、藤原氏を母とする新田部は即位の資格を有した(倉本2009)。弓削(699年没)・忍壁(705年没)はキトラの被葬者、長(715年没)・穂積(715年没)は高松塚の被葬者の候補にはなりえるだろう。しかし、弓削は持統10年頃の皇嗣決定会議で、珂瑠王を推挙した葛野王に対し意見を述べようとして葛野王から制止されており、その後宮廷でどのような扱いをされたのか問題となろう。マルコ山古墳の被葬者説が有力な川島皇子は、天智の皇子だが、大津皇子の謀反を密告し、草壁の天武後継者としての地位を確かにしたため持統から評価され、草壁墓の北方、真弓丘に葬られたとみる説がある(小笠原2019)。天武の皇子であれば等しく手厚い扱いを受けたとは言えないであろう。
- 73 岸本直文は、舒明の「滑谷岡」から押坂への改葬について、蘇我蝦夷が舒明初葬陵(岩屋山古墳)を超える墳丘規模の「大陵」を築いたことへの対抗措置とみている(岸本2019)。その場所が押坂であったことについては、皇極や中大兄の王統意識に基づくと考えられるべきであろう。
- 74 義江明子は、中大兄による斉明の牽牛子塚への改葬は、斉明を継ぐ者としての自己の正統性を強く誇示し王統の正当化を図る意図によるとした(義江2024)。しかし、斉明が皇極時代に設けた吉備姫王墓・舒明初葬陵、斉明時代に設けた建王墓が纏まった領域にあり王統の連続性・正統性を示していたのであれば、斉明・間人合葬陵もそこに設ければよかつたはずで、そう遠隔地ではないとはいえ、敢えて立地が異なる「越智」に移したのは別の要因を認めるべきであろう。

## 参考文献

- 網干善教1979「八角方墳とその意義」『橿原考古学研究所論集第五』
- 石田茂輔2019「敏達天皇」『令和新修 歴代天皇・年号事典』吉川弘文館
- 石部正志1989「推古と王陵の谷」『古代を考える 河内飛鳥』吉川弘文館
- 猪熊兼勝1976「飛鳥時代墓室の系譜」『研究論集』Ⅲ奈良国立文化財研究所
- 今尾文昭2005「八角墳の出現と展開」『古代を考える 終末期古

- 墳と古代国家』吉川弘文館
- 岩永省三2006a「大嘗宮移動論——幻想の議政官合議制——」『九州大学総合研究博物館研究報告』4
- 岩永省三2006b「大嘗宮の付属施設」『喜谷美宣先生古希記念論集』
- 岩永省三2008「日本における都城制の受容と変容」『九州と東アジアの考古学——九州大学考古学研究室50周年記念論文集——』上巻
- 岩永省三2009「老司式・鴻臚館式軒瓦出現の背景」『九州大学総合研究博物館研究報告』7
- 岩永省三2010「大嘗宮移動論補説」『坪井清足先生卒寿記念論文集』下巻
- 上原真人1986「仏教」『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店
- 大隅清陽2001「君臣秩序と儀礼」『日本の歴史第08巻 古代天皇制を考える』講談社
- 大津 透1985「律令国家と畿内——古代国家の支配構造」『日本書紀研究』第十三冊, 塙書房
- 大津 透1986「万葉人の歴史空間」『国語と国文学』63-4
- 大津 透1987「近江と古代国家——近江の開発をめぐって」『日本書紀研究』第15冊, 塙書房
- 大津 透1999『古代の天皇制』岩波書店
- 大津 徹2010『天皇の歴史1 神話から歴史へ』講談社
- 近江昌司1976「中尾山古墳管見」『史跡と美術』464号
- 小笠原好彦2019『検証 奈良の古代遺跡 古墳・王宮の謎をさぐる』吉川弘文館
- 岡田精司1970「大化前代の服属儀礼と新嘗——食国(ヲスクニ)の背景——」『古代王権の祭祀と神話』塙書房
- 岡田精司1983「大王就任儀礼の原形とその展開」『日本史研究』245
- 岡田精司1992a「大王就任儀礼の原形とその展開(補訂)」『古代祭祀の史的研究』塙書房
- 岡田精司1992b「大王の夢と神牀」『古代祭祀の指摘』
- 岡田荘司1990a「“真床覆衾”論と寝座の意味」『大嘗の祭り』学生社
- 岡田荘司1990b「『内裏式』逸文「神今食」条について」『大嘗の祭り』学生社
- 小倉滋司2011「「敬神」と「信心」と——古代～近世」『天皇の歴史9 天皇と宗教』講談社
- 小澤 毅2002「三道の設定と五条野丸山古墳」『文化財論叢Ⅲ——奈良文化財研究所創立五〇周年記念論文集——』奈良文化財研究所
- 小澤 毅2003「寺名比定とその沿革」『吉備池廃寺発掘調査報告——百濟大寺の調査——』奈良文化財研究所
- 小澤 毅2009「藤原京中軸線と古墳の占地」『季刊明日香風』第111号
- 小澤 毅2014「飛鳥の都と古墳の終末」『岩波講座日本歴史 第二巻 古代2』岩波書店
- 小澤 毅2016「日本古代の測量技術をめぐって」『ふびと』第67号
- 小澤 毅2017「小山田古墳の被葬者をめぐって」『三重大史学』第17号
- 小澤 毅2023『古代大和の王宮と都城』同成社
- 折口信夫1930「大嘗祭の本義」『古代研究・民族学篇二』(『折口信夫全集』3, 中央公論社, 1966に再録)
- 川上順子1973「豊玉毘売神話の一考察」『日本文学』22-8
- 鎌田元一1991「郷里制の施行と霊亀元年式」『古代の日本と東アジア』小学館
- 鎌田元一2001「平城遷都と慶雲三年格」『律令公民制の研究』塙書房
- 岸 俊男1969「京域の想定と藤原京条坊制」『藤原宮——国道一六五号線バイパスに伴う宮域調査——』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第二五冊, 奈良県教育委員会
- 岸 俊男1988「平城京へ・平城京から」『日本古代宮都の研究』岩波書店
- 岸本直文2011「河内大塚山古墳の基礎的検討」『ヒストリア』第228号, 2-26
- 岸本直文2013「後・終末期古墳の『治定』問題」『季刊考古学』124号, 雄山閣
- 岸本直文2019「岩屋山古墳の墳丘と石室」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社
- 北 康宏1996「律令国家陵墓制度の基礎的研究——『延喜諸陵寮式』の分析からみた——」『史林』第79巻第4号
- 北山茂夫1969『女帝と道鏡』中央公論社
- 熊谷公男2001『日本の歴史第03巻 大王から天皇へ』講談社
- 倉林正次1971「大嘗祭の成立」『古代の日本』2 角川書店
- 倉本一宏1998『奈良朝の政変劇 皇親たちの悲劇』吉川弘文館
- 倉本一宏2009『持統女帝と皇位継承』吉川弘文館
- 倉本一宏2015『蘇我氏——古代豪族の興亡』中央公論新社
- 西光慎治2000「飛鳥地域の地域史研究(1) 欽明天皇檜前坂合陵・陪塚 カナヅカ古墳の覚書」『明日香村文化財調査研究紀要』創刊号
- 西光慎治2002「飛鳥地域の地域史研究(3) 今城谷の合葬墓」『明日香村文化財調査研究紀要』2
- 齋藤 忠1966『古墳文化と古代国家』至文堂
- 坂上康俊2001『日本の歴史第05巻 律令国家の転換と「日本」』講談社
- 坂上康俊2011『シリーズ日本古代史④ 平城京の時代』岩波書店
- 櫻井信也1996「志賀山寺の「官寺」化と仏寺法会」『日本書紀研究』第二十冊, 塙書房
- 澤村 仁1979「白鳳・天平の寺院建立」『日本古寺美術全集3 薬師寺と唐招提寺』集英社
- 重見 泰2019「滑谷岡と舒明陵」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社
- 重見 泰2020『日本古代都城の形成と王権』吉川弘文館
- 白石太一郎1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』一
- 白石太一郎1999『古墳とヤマト政権』文春新書
- 白石太一郎2005a「磯長谷古墳群の提起する問題——敏達・石姫合葬墓を中心に——」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報9』
- 白石太一郎2005b「古墳の終末と古代国家」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館

- 白石太一郎2009「五条野丸山古墳の被葬者をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報12』
- 白石太一郎2011「牽牛子塚古墳と岩屋山古墳——考古学から見た芥明陵——」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報15』
- 白石太一郎2016「古墳から見た物部氏」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報20』
- 菅谷文則1973「八角堂の建立を通じてみた古墳終末期の一樣相」『論集終末期古墳』塙書房
- 藺田香融1981「皇祖大兄御名入部について——大化前代における皇室私有民の存在形態——」『日本古代財政史の研究』塙書房
- 高倉洋彰1983「筑紫観世音寺史考」『大宰府古文化論叢』下、九州歴史資料館
- 高橋照彦2005「欽明陵と檜前陵——大王陵最後の前方後円墳——」『待兼山考古学論集——都出比呂志先生退任記念——』大阪大学考古学友の会
- 高橋照彦2007「六・七世紀の大王陵における合奏について——摂津・勝福寺古墳の位置付けをめぐって——」『考古学論集——小笠原好彦先生退任記念論集——』真陽社
- 高橋照彦2012「欽明陵と敏達陵を考える」『天皇陵古墳を考える』学生社
- 高橋照彦2024「前方後円墳から方墳へ」『日本考古学の論点 上』雄山閣
- 辰巳俊輔2016「飛鳥の始祖王陵——梅山古墳の歴史的意義——」『明日香村文化財調査研究紀要』第15号
- 田村圓澄1981「八角墳と舒明天皇一家の仏教信仰」『仏教史学研究』23巻1号
- 塚口義信1990「茅渟王伝考」『堺女子短期大学紀要』25号
- 次田真幸1985「海幸山幸神話の形成と安曇連」『日本神話の形成と成立』明治書院
- 寺崎保広2020「元明天皇即位に関する覚書」『奈良史学』第37号
- 藤堂かほる1998「天智陵の造営と律令国家の先帝意識」『日本歴史』第602号、吉川弘文館
- 奈文研1993「式部省東官衛の調査 第236次」『1992年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈文研1997「式部省東方官衛の調査——第273次」『奈良国立文化財研究所年報 1997-III』
- 新納 泉1994「巨石墳と終末型古墳の編年」『展望考古学』考古学研究会
- 新納 泉2009「前方後円墳廃絶期の暦年代」『考古学研究』第56巻第3号
- 西本昌弘2009「九条家本『神今食次第』所引の「内裏式」逸文について——神今食祭の意義と皇后助祭の内実——」『史学雑誌』118-11
- 西本昌弘2014「芥明天皇陵の造営・修造と牽牛子塚古墳——建王・間人皇女・大田皇女の合葬墓域として——」『飛鳥・藤原と古代王権』同成社
- 仁藤智子2020「元正天皇行幸論——東国行幸と養老改元の史的意義——」『難波宮と古代都城』同成社
- 箱崎和久2003「伽藍配置の復元」『吉備池廃寺発掘調査報告——百濟大寺の調査——』奈良文化財研究所
- 林 正憲2007「若草伽藍から西院伽藍へ——年代論の再整理」『法隆寺若草伽藍発掘調査報告書』奈良文化財研究所
- 広瀬和雄1995「横口式石槨の編年と系譜」『考古学雑誌』第80巻4号
- 廣瀬 覚2015『三次元計測による飛鳥時代の石工技術の復元的研究』（平成23～26年度科学研究費（学術研究助成金（若手研究B））研究成果報告書）
- 増田一裕1991「見瀬丸山古墳の被葬者——檜前・身狭地域所在の大王墓級古墳を中心として——（上）・（下）」『古代学研究』124・125
- 増田一裕2005「最後の前方後円墳——時代区分の中の橿原市丸山古墳——」『土曜考古』第29号
- 松前 健1970「大嘗祭と南九州的要素」『日本神話の形成』塙書房
- 松村恵司1999「富本銭」『奈良国立文化財研究所年報1999-II』
- 丸山裕美子2001「天皇祭祀の変容」『日本の歴史第08巻 古代天皇制を考える』講談社
- 水谷千秋2011「『記・紀』からみた大王陵とその改葬——河内大塚山古墳と安閑天皇をめぐって——」『ヒストリア』第228号
- 森 郁夫1983『瓦と古代寺院』六興出版
- 森 浩一1965『古墳の発掘』中公新書
- 森 浩一2011『天皇陵古墳への招待』筑摩書房
- 森田 悌1991「大嘗祭・神今食の本義」『論争 日本古代史』河出書房新社
- 森本 徹2012「シシヨツカ古墳の喪葬儀礼」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』16
- 安村俊史2006「河内の終末期古墳再検討——シシヨツカ古墳を中心として——」『喜谷美宣先生古希記念論文集』
- 山中敏人1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 山本 崇2024「大嘗祭木簡の語ること」『奈良文化財研究所第131回公開講演会「奈良時代の大嘗祭——聖武天皇即位1300年を記念して」』奈良文化財研究所
- 義江明子2024「天皇陵における“夫婦同葬”をめぐって」『日本考古学の論点 下』雄山閣
- 吉川真司2011a「天皇の歴史02巻 聖武天皇と仏都平城京」講談社
- 吉川真司2011b『シリーズ日本古代史③ 飛鳥の都』岩波書店
- 吉村武彦2010『日本古代史②ヤマト王権』岩波書店
- 和田 萃2005「飛鳥の陵墓——檜前坂合陵の再検討——」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- 和田晴吾1989「畿内横口式石槨の諸類型」『立命館史学』10号
- 渡辺晃宏2001『日本の歴史第04巻 平城京と木簡の世紀』講談社

Received Dec. 14, 2024; accepted Jan. 20, 2025

## Preparatory study on Emperor Monmu's Daijo-kyu

Shozo IWANAGA

The Kyushu University Museum  
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

This article is a preparatory study to develop a theory on the location of Emperor Monmu's Daijo-kyu at the State Halls Compound of the Fujiwara Palace. In the first part, the author reviews the functions of the Daijo-sai festivals and examines the basic issues, such as when and how they were established. In the next part, the author traces the formation process of the royal lineage of the Great Kings in the 7th century prior to the enthronement of Emperor Monmu, and examines the historical evaluations of Emperor Monmu's accession to the throne. In the last part, the author sorts the basic information such as the location of tumuli of the Great Kings from Ankan to Monmu, and whether those tumuli underwent reburials or additional funerals or not.

**Key words:** Daijo-sai festivals, Daijo-kyu, Empress Jito, Emperor Monmu, Tumuli of Kings



# 実践報告：企画展示「弥生時代の人々 ——九州大学の自然人類学研究——」関連イベント 『体験！3D スキャナーで骨をスキャンしよう！』

吉田 明世\*・米元 史織・黒木 鳳弥

フジィギャラリー：〒819-0395 福岡市西区元岡744  
九州大学総合研究博物館：〒812-8581福岡市東区箱崎6-10-1  
\*yoshida.akiyo.032@m.kyushu-u.ac.jp

**要旨：**筆者らは、九州大学総合研究博物館2024年度企画展示として、「弥生時代の人々 ——九州大学の自然人類学研究 ——」を開催した。この展示の開催中に、『体験！3D スキャナーで骨をスキャンしよう！』を企画した。本イベントは、今や身近になった3D データを生成することと、その実践を通して弥生時代人骨の特徴について理解を深めてもらうことを目的とした。当館で実際に用いている三次元計測器（3D スキャナー）を使った本格的なスキャン体験と、展示解説を交えたスマホアプリによる簡易的なスキャン体験により、人骨の特徴について体感できるイベントとした。本報では、イベントの概要と、実施した中で明らかとなった知見について報告する。

**キーワード：**ワークショップ、ハンズ・オン、三次元（3D）、Space Spider、Scaniverse

## 1. はじめに

### 1-1. フジィギャラリーとは

フジィギャラリー（以下当ギャラリー）は、2022年5月にサイエンス&アートの展示や企画を実施するギャラリーとしてグランドオープンした（図1a）。人が集うギャラリー1と展示に適したギャラリー2からなる（図1b）。広く公開されており、キャンパスの散策スポットとしてキャンパスガイドマップにも掲載されている。椎木講堂と中央図書館の2階と接続しているため（図1c）、両者間を行き来する新たな流れをうみだしている。ギャラリー

のコンセプトは『触発を促しその創造性を育む「発想する空間」』であり、このギャラリーでの活動が次の何らかのアウトプットにつながることを目指している。それと同時に九州大学の「Kyushu University VISION 2030」が掲げるシチズンサイエンスの促進や研究の「みえる化」をふまえ、挑戦的なギャラリーの使い方を模索している。

当ギャラリーでの展示は、主に九州大学総合研究博物館（以下当館又は九大博物館）が企画・実施してきた。それに加え、令和4年度からは、学内各部局が主催する企画・展示等の学内募集を行い、教育・研究成果をさらに広く社会に発信する支援を始めた。本年度は募集や使

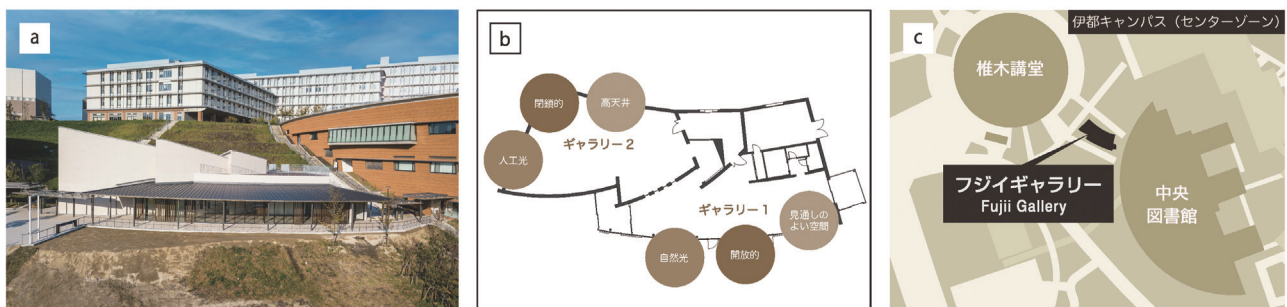


図1 a: 外観写真, b: 平面図, c: 立地図

用申請による企画展示は8回（博物館主催3回，公募によるもの3回，利用申請によるもの2回）実施され，全学的な利用が進みつつある。

1-2. 『2024年度企画展示「弥生時代の人々——九州大学の自然人類学研究——」』  
本稿で取り上げる関連イベントは，九大博物館主催で

2024年10月3日から2025年1月10日まで開催された，『2024年度企画展示「弥生時代の人々——九州大学の自然人類学研究——」』（図2 ab）のなかで実施されたものである。この展示は，膨大な資料を核として九州大学で進められている自然人類学的研究を紹介するものであった。特に九大博物館は約4000体の遺跡出土人骨を所蔵しており，それらは日本列島の人々がどのような過程をた



図2 ab. 展示チラシ（両面），c. イベントチラシ

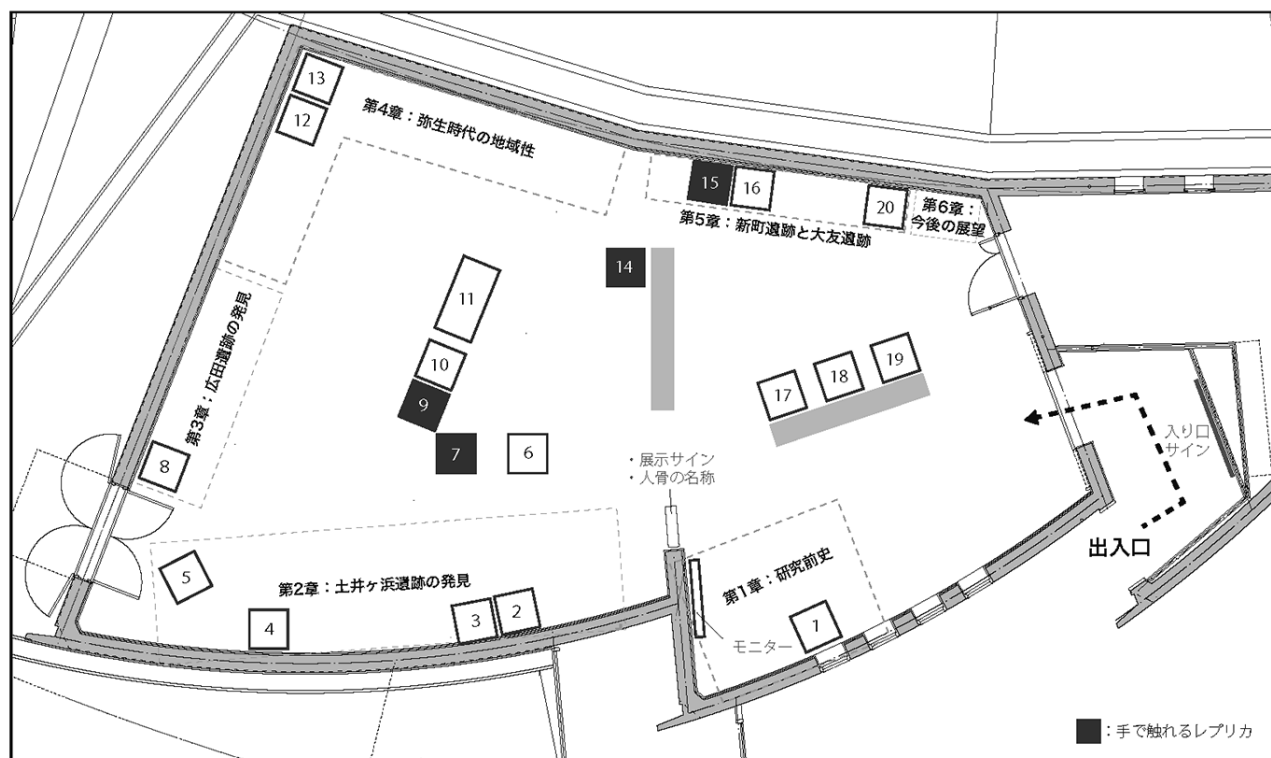


図3. ギャラリー2での展示配置図

どってきたのかを示す重要な資料群となっている。本格的な学術講演として、九州大学名誉教授中橋孝博先生による記念講演会『弥生人骨—「日本人の起源」探究のミッシングリンク』を10月26日に開催することとした。同時に、親子や若年層がより参加しやすい「体験！3D スキャナーで骨をスキャンしよう！」（以下スキャンイベント）を企画することとした。イベントの説明に先立ちまず、今回の展示について説明しておく。

本展示は、ギャラリー2で実施されたものである（図3、表1）。第1章は研究前史、第2章は土井ヶ浜遺跡の発見、第3章は広田遺跡の発見、第4章は弥生時代の地域性、第5章は新町遺跡と大友遺跡、第6章は今後の展望とした。展示配置は時系列とし、1953年の土井ヶ浜遺跡の発見をきっかけに始まった弥生時代人骨の研究をもとに、いわゆる日本人の起源論争と呼ばれる学史を概観する内容となっている。現在までの研究がどのように進んできたのかを分かりやすくするため、解説パネルは1テーマごとに1組（日英2カ国語各1枚ずつ）とした（表2）。パネル解説以外にも、発掘時の写真や展示ビジュアルとなるバナーを用いた。それぞれ、目線より高い位置に配置したり天井から吊るしたりすることで、ギャラリー

2の特徴である高天井の展示空間を生かした。

本展示では3D スキャンデータにより作られた頭蓋骨や四肢骨などのレプリカを数多く展示しており、来館者が実際にレプリカに触れて骨の形をみることのできるハンズ・オン形式の展示品を数多く配置した。頭蓋骨の出展数だけを見ても47点（実物資料数32点、レプリカ15点）にも及ぶ資料の多さには、来館者アンケートでも「ほぼオール・骨の展示で、骨だけ見ても人類の歴史や営みの多くに迫ることができるのかと興味深く思った」「3D プリンターの模型に実際に触れ、違いを見れたのがよかった」など好評を得た。他機関において古人骨資料は、各時代の代表として1、2体を展示するケースや、重要な墓の被葬者など考古学・歴史学の展示の一部として扱われるケースが多い。さらには人間の遺体であるという側面から「見たくない人への配慮」も必要とされるため、古人骨資料のみで構成される展示は本学以外の他機関ではなかなか行うことが難しく、このことから本展示は九大博物館らしい挑戦的な内容であったといえる。

### 1-3. 本イベントを企画した理由

展示期間中にスキャンイベントを考案した背景は以下

表1. 展示資料一覧

章	展示資料番号 (図3の数字に対応)	展示資料				
1	1	縄文時代人骨 熟年男性 (福岡市桑原飛櫛貝塚遺跡出土1号)	2	3	11	広田遺跡出土人骨(C-8)
	2	弥生時代人骨 成年男性 (下関市土井ヶ浜遺跡出土130号) 渡来系弥生人 (土井ヶ浜遺跡出土130号) 復顔図 縄文時代人骨 成年男性 (広島県堂面洞窟遺跡出土64-1号)		4	12	福岡県春日市 一の谷遺跡出土人骨K45熟年男性
	3	弥生時代人骨 熟年女性 (下関市土井ヶ浜遺跡出土313号) 縄文時代人骨 成年女性 (広島県堂面洞窟遺跡出土78-1号)		13	福岡県小郡市 正原遺跡出土人骨 K2熟年男性	
	4	佐賀県三津永田遺跡出土126号人骨 熟年男性 三津永田遺跡出土3号人骨 熟年女性		14	広島県堂面遺跡出土人骨のレプリカ (上腕骨・大腿骨・脛骨) 塚崎東畑遺跡出土人骨のレプリカ (上腕骨・大腿骨・脛骨)	
	5	下関市土井ヶ浜遺跡1112号墓出土人骨		15	福岡県糸島市 新町遺跡出土9号人骨 熟年男性のレプリカ	
	6	縄文時代人と弥生時代人の復顔レプリカ		16	福岡県糸島市 新町遺跡出土9号人骨 熟年男性	
	7	縄文時代の頭蓋骨のレプリカ 弥生時代の頭蓋骨のレプリカ		17	福岡県みやこ町 大熊遺跡出土人骨 成年女性 福岡県福岡市 金隈遺跡出土 K352 熟年女性 福岡県小郡市 津古牟田遺跡出土 K7 熟年女性 福岡県春日市 門田遺跡出土人骨 K69 老年女性	
	8	鹿児島県種子島広田遺跡出土人骨D-2-3 成年女性 鹿児島県種子島広田遺跡出土人骨D-3-2 成年男性 南九州弥生人 (広田III-1号) 復顔図		18	福岡県春日市 西平塚遺跡出土人骨 K55 熟年男性 福岡県春日市 若葉台遺跡出土1号人骨 熟年男性 福岡県福岡市 金隈遺跡出土 K298 熟年男性 福岡県小郡市 津古牟田遺跡出土 K10 熟年~老年男性	
	9	広田の扁平頭蓋骨のレプリカ		19	福岡県飯塚市 スダレ遺跡出土人骨 K3 熟年男性 外傷部分のレプリカ 刺さっていた剣先のレプリカ	
	10	貝製品 E-2-1 未製品 ゴホウラ製貝輪		20	福岡県飯塚市 スダレ遺跡出土人骨 K3 熟年男性 佐賀県 大友遺跡出土人骨 西北九州弥生人 (大友17号) 復顔図	

表2. 解説パネル一覧

章	解説パネル
1	研究前史
2	土井ヶ浜遺跡の発見 金関丈夫の渡來說 金関丈夫の渡來說と鈴木尚の小進化説 金関丈夫 土井ヶ浜遺跡の埋葬
3	広田遺跡の発見 貝輪 広田遺跡の人々の出自を探る
4	弥生時代人骨の地域性 縄文時代と弥生時代の形質の違い 渡来したのは小規模か、大規模か 北部九州における混血と文化変化の過程モデル 大陸の古人骨
5	糸島市新町遺跡の発見 弥生時代の顔面部形質の個体差 大友遺跡の発見と最新のDNA研究
6	今後の展望

の3つである。1つめは、小規模でカジュアルなイベントにすることで参加へのハードルを落とし、誰でも参加しやすいようにしたかったということである。小規模にすることで参加者からの質問や発言を拾いやすいため（吉田ほか2024）、対話的にイベントを進められると考えた。2つめは、一般的には「人骨＝怖い」という負の印象をもたれやすいため（藤野ほか2012）、そのような先入観にとらわれずに学術研究対象としての人骨に関心を持ってもらいたかったということである。そのために、難しい説明の簡易化や、データ計測による体験的な観察の効果を試してみたいと考えた。3つめは、コロナ禍をきっかけにVRで博物館を体験できるようなコンテンツが流行し、それとともにデジタルアーカイブ化も博物館での日常となってきたことである。九大博物館でも創設以来デジタルアーカイブ化を進めており（三島2024）、2020年からは本格的な資料の3Dデータ化を開始している。特に古人骨資料や古生物資料を中心に3Dデータ化が進んでいる。データの活用例として、タッチパネルを使用した3Dデジタル展示<sup>1</sup>、AR写真体験<sup>2</sup>、360°VRツアー<sup>3</sup>など、コンテンツ作成にも力を入れている。2022年の博物館法改正<sup>4</sup>でも、博物館の事業として博物館資料のデジ

タルアーカイブの作成と公開が新たに盛り込まれている。しかしながら、このようにデジタル化や3Dが身近になっているにも関わらず、データ化までの過程や計測機材などに一般の方が触れられる場がまだ少ない。したがって、その機会を提供したいと考えたためである。

以上のような背景に加え、特に本格的な道具が扱えたり本物の資料を非接触で扱えたりするようなイベントは先行事例がなく、先進的な試みとして本3Dスキニング体験を企画した。次項から詳細について報告する。

## 2. 実施概要

【企画名】「体験！3Dスキャナーで骨をスキャンしよう！」（図2c）

【日時】2024年11月30日（土）

①10時30分～12時00分、②13時30分～15時00分

【会場】フジイギャラリー

【対象】不問

【定員】各回10人（事前申込制、先着順）

【参加費】無料

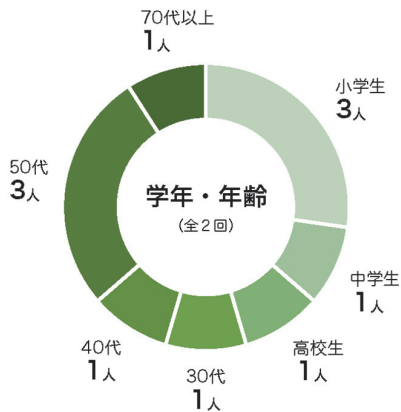


図4. 全参加者の年代

【参加人数】① 3名（高校生1名，50代1名，70代以上1名）

② 8名（小学生3名，中学生1名，30代1名，40代1名，50代2名）

【企画立案】 米元史織，吉田明世

【実施体制】 司会進行：吉田，解説班：米元，  
スキャン体験班：黒木鳳弥

（九州大学共創学部4年）

【タイムスケジュール】

10:20/13:20	フジイギャラリー ガallery 1 集合・受付
10:30/13:30	イベント開始 司会者・解説者・スキャナー実践者の自己紹介，フジイギャラリーの紹介，趣旨説明，諸注意
10:40/13:40	Gallery 2 に移動，参加者を2班に分割 解説・スキャン体験スタート
11:10/14:10	解説班とスキャン体験班の入れ替え
11:40/14:40	解説・スキャン体験終了 しめくり，Gallery 1 に移動，アンケート記入
12:00/15:00	イベント終了

### 3. 実施内容

本項では2回実施した際の様子を，記述や写真の記録などをもとに示す。

#### 3-1. 導入 (図5a)

最初にフジイギャラリーの紹介をするため，参加者はGallery 1 に集合してもらった。フジイギャラリーの施設概要を簡単に紹介した後，今回の主要となる3D スキャナーについての紹介を行なった。

注意事項として，スキャン実践には本物を用いるため，扱いには十分に気を付けてほしい旨を強調し，アンケートの説明，手荷物預かりの案内の後，Gallery 2 へ移動した。

#### 3-2. 本展示の総論

Gallery 2 に移動し，本展示について簡単な説明を行った後，「スキャン体験」と「展示解説」の2グループに分かれた。どちらも体験してもらえるよう，30分交代制で実施した。

#### 3-3. スキャン体験 (図5b, 5c, 5d)

体験にあたり，3D データ測定するスキャナー・測定されたデータを確かめる PC・資料をのせる回転テーブルを2台準備し，2組同時に体験ができるようにした。今回使用した Artec 社の Space Spider<sup>5</sup> は，青い LED ライトを使用した高解像度3D スキャナーで，最大撮影範囲171 × 152 mm で中程度の対象物を高精度でスキャンする場合に最適である。当館では，主に古人骨の頭蓋骨のほか，削岩機コレクションやクランツ標本などの3D データ化にも使用している。測定により完成した3D データモデルは，3D プリンターや CAD で使用されるファイル形式の STL データに出力することが可能である。今回の展示では，実際に測定したデータを元に3D プリンターで出力した頭蓋骨や四肢骨のレプリカを多く展示している。

参加者には初めにスキャナーの持ち方，スキャン開始・終了のスイッチ操作，1度にスキャンする範囲や秒数など，黒木による実践を見てもらった。注意事項として，スキャナーが回転テーブル上の頭蓋骨に触れないよう距離を保つことや，頭蓋骨の角度変更は黒木が行うことを説明した。スキャナーの操作について一通り確認した後，参加者によるスキャン体験をスタートした。体験は自由に計測してもらう形をとり，黒木は様子を見つつ巡回でのアドバイスを行なった。

複数箇所のスキャンデータが取れた時点で，黒木は複数のスキャンデータを合成し統合する「位置合わせ作業」

のレクチャーを行った。参加者とともにプレビュー画面に映る測定したデータを見ながら、頭蓋骨の角度を回転し向きを合わせ、一致する特徴点を選択し、合成・統合をした。一致する特徴点を見つけるため、眼窩部や頬骨、下顎のオトガイ隆起部など、骨の特徴的な部分を実物やデータと見比べ、頭蓋骨全体をさまざまな角度からよく観察する参加者の様子が見られた。

参加者は、頭蓋骨とスキャナーの近すぎず遠すぎない距離感覚や、レーザーを頭蓋骨に当てる照射角度など、感覚を掴むのが難しい様子であった。しかし、初めてのスキャン体験に「ずっとやっていると肩が凝るほど、スキャナーがこんなに重く大変とは知らなかった」「スキャナーがアイロンのような形をしているとは思わなかった」という声を耳にした。普段はできない体験であったため新鮮な感想も多く、よく挙がった質問として、

- ・1つをスキャンするのにどのくらいの時間がかかるのか
- ・何分割して頭蓋骨のデータを作り上げるのか
- ・骨のくぼみに隠れた裏側など、細かな部分はどのようにスキャンするのか

以上のような内容が多く寄せられた。

さらに、別々に撮った3Dデータが1つに繋がる瞬間には歓声が上がリ、次の面をうまく撮るにはどうしたらよいか質問する様子や、参加者同士で特徴点を教え合う様子も見られた。

### 3-4. 展示解説 (図5e, 5f)

展示解説は展示ケースを見ながら行われた。米元が適宜解説しながら、参加者からその場で挙がった質問にも答えるような形で進められた。スキャナーでの計測とは別的手段として、スマートフォンなどで気軽に体験できる「Scaniverse」というアプリを使用し、展示ケース内の頭蓋骨をスキャンしてもらいデータ化して楽しんだ。

「Scaniverse」では最大5m先までの範囲を3Dスキャンする事が可能で、物体だけでなく空間も素早く3Dスキャンすることができる。スマートフォンなどのデバイスにアプリをインストールすれば、専用機器がなくても3Dスキャンを体験することができ、どこでも測定したデータを見返し、楽しむことができる。参加者は全方向のデータを撮影するために、展示ケースを一周するような形でスキャンを行っていた。身近なデバイスであるスマー

トフォンでできることから、特に小学生がスキャンを楽しんでいる様子が見られ、展示ケースを正面からだけでなく360度様々な角度からの観察につながった。子供にとっては、パネルに書かれた文章を読むよりも、展示空間全体の雰囲気を楽しむという新しい体験の仕方につながっていたようである。

図3-7では、縄文時代と弥生時代の頭蓋骨の違いを実感するために、3Dプリンターで作成したレプリカを参加者に自由に触ってもらった。特徴的である鼻根の高低差を確認するために鼻部分(鼻根部)を触る、目の窪み(眼窩部)をなぞる、裏側(頭蓋底)を覗き込む様子などがよく見られた。実際に触れる展示によって、より深い関心を持つようになった子どもは、四肢骨のレプリカ展示部分に移動し、教えてもらった骨の部位を、自分の体に合うよう当ててみる様子も見られた。

### 3-5. 締めくくり

「スキャン体験」と「展示解説」のそれぞれを体験後、アンケートに回答してもらった。参加者には3Dプリンターで作成した縄文時代と弥生時代の頭蓋骨のミニレプリカを1組1セットプレゼントし、イベントを締め括った。

## 4. アンケート結果

今回のイベントの最後にアンケート(図6-1)を実施した。以下にその結果を示す。全2回分で、学年・年齢については、2. 実施概要および図4のとおりである。太字は今回のワークショップの総括にあたり、筆者らが特に注目したコメントである。

## 5. 現場での気づきと考察

九州大学総合研究博物館では、運営する展示室への展示はもちろん、学外施設への公開展示や公開講演会など、研究成果の発表や教育普及活動を行なっている(平井・三島2010, 三島など2010, 三島など2011)。これらの企画・展示は家族世帯の関心も高く、多くの方に来館いただいており、フジイギャラリーもその拠点の1つとなるよう展示やイベントを運営しているところである。



図5. 会場の様子 (2024年11月30日, 吉田撮影)。

a: ギャラリー1での導入, b: 黒木によるスキャン実践, c: スキャン体験の様子, d: 位置合わせ作業, e: 「Scaniverse」を使って展示物をスキャンする様子, f: 頭蓋骨のレプリカに触れる参加者

今回は、レプリカを多用した展示を企画し、イベントではそれらを用いた展示解説、さらに実物資料を対象とした3D スキャナーの実践を行った。これらの試みは体験を通してより深く学ぶということを意図したものであった。以下に、今回の実践をふりかえる。

フジイギャラリーでは展示や企画を通して本学の研究成果の社会還元に取り組んでいるが、今回のようなレプリカに触れたり、実際の研究で使用している3D スキャナーに触れたりできる「ハンズ・オン形式の展示」や「体験型のイベント」は珍しく、代表的なもの1つとなっ



### 『3Dスキャナーで 骨をスキャンしよう!』 アンケート

\* 学年・年齢を教えてください。

- 就学前( )歳     小学生( )年生     中学生( )年生  
 高校生( )年生     専門学校・大学生・大学院生  
 10代・20代(社会人)     30代     40代     50代     60代     70歳以上

\* 今回のイベントを何でお知りになりましたか。(複数選択可)

- フジイギャラリーHP     総合研究博物館HP     九大HP  
 総合研究博物館SNS     九大SNS     その他WEBサイト・SNS  
 新聞     チラシ     県や市町村の広報誌     友人・知人から  
 その他( )

\* イベントに参加しようと思った理由を教えてください。

\* イベントについて、あなたの評価を教えてください。

- 1                      2                      3                      4                      5  
不満                      やや不満                      どちらともいえない                      やや満足                      満足

\* 本展示「弥生時代の人々―九州大学の自然人類学研究―」への感想

\* イベントを通して得た気づき・感想など

\* 今後フジイギャラリーに期待することなど

ありがとうございました

図6-1. アンケート

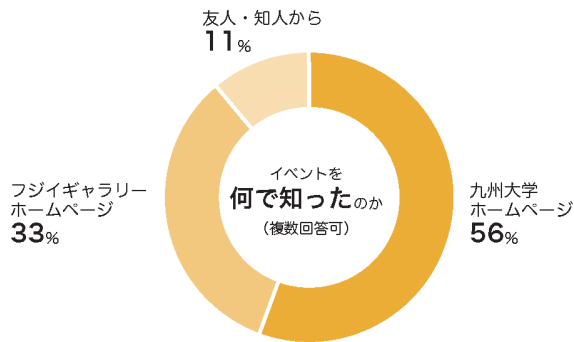


図6-2. アンケート集計結果：イベントを知ったきっかけ。

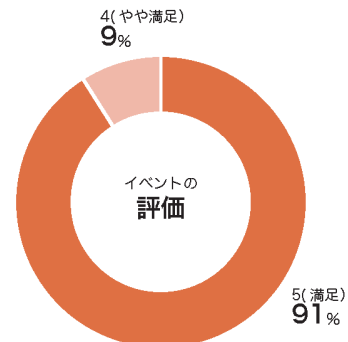


図6-4. アンケート集計結果：イベントの満足度。

\* イベントに参加しようと思った理由を教えてください。

- ・弥生時代に興味がありました。糸島に住んでいるのでここが一番文化の入り口だった時代を勉強したいと思っています。
- ・**3Dスキャナーにさわってみたかった**ので
- ・母親(私)が縄文・弥生に興味あり。日本がどのように誕生したかなど。子もDNAに関心あり。申し込みは締め切られていたが展示が見たく来てみました。
- ・面白そうだったから。**3Dスキャンにも弥生時代にも興味があった**から。
- ・3Dスキャナーが楽しそうだったから。
- ・3Dスキャナーの使い方を知りたかったため。
- ・3Dスキャンを体験したかったため

図6-3. イベントに参加しようと思った理由。

\* 本展示「弥生時代の人々——九州大学の自然人類学研究——」への感想

- ・新しい発見をふまえて、どんどん解明が進んでいることがわかって、本当に面白かったです。先生から直接、解説していただけて、どのように渡来人との混血が進んだのか、**人口が増加しながら弥生時代が進んでいく様子がイメージできました**。
- ・縄文人と弥生人の顔つきが違うことは授業で聞いたことがあったが、そうなった理由や変化の過程について詳しく知ることができて面白かった。
- ・体系的にまとめられて、わかりやすかった。
- ・縄文から弥生へどのように変化をしていったのが、人骨を元に研究を継続されていることに興味を持ちました。
- ・弥生時代と縄文時代の人の骨の違いが面白かった。意外にも虫歯の人が少ないような感じで歯並びもきれいで驚きました。
- ・骨が変化していたのが分かった。
- ・本格的な博物館の展示を見られて、満足しました。
- ・**解説をいただきながら案内してもらいわかりやすかった**。
- ・ほねをはくつしてすごいと思った。

図6-5. 参加者による、本展示「弥生時代の人々——九州大学の自然人類学研究——」への感想。

\* イベントを通して得た気づき・感想など

- ・縄文人骨と弥生人骨の違いを、レプリカをさわって実感することができました。うまくスキャナーを扱うことができず苦勞しましたが、丁寧に指導いただいて、得がたい体験をさせていただきました。
- ・光を当てただけなのにPCの中に立体ができて感動した。手動でもスキャンができると知らなかったので驚いた。
- ・先生自らの説明を受けることは想像していなかったので感激しました。
- ・縄文と弥生、顔のつくりのみならず、足の骨など骨格から生活が想像され発見でした。
- ・比較して考えるためにも、対象は多い方が分かることが多いのだなと思いました。
- ・骨の位置合わせが難しかった。でも楽しかった!
- ・体験と説明とのバランスが良かったです。
- ・九州の各地点で骨に特徴があることから、人の移りや発展が分かることが興味深かった。新しい機械を使ってレプリカ等手にさわられる様々な展示がされており、とても分かりやすかった。
- ・外国人とのほねとはちがかった。

図6-6. 参加者からの「イベントを通して得た気づき・感想」。

\* 今後フジイギャラリーに期待することなど

- ・時々寄らせていただいています。九大の中ではこのような場所は本当に重要で、楽しく工夫をこらした展示をいつも楽しみにしています。
- ・今後も色々な講座を期待します。
- ・今後も最新の学術発表の場として楽しみにしています。
- ・体験型のイベントを引き続き開催していただきたいです。**現役の先生、学生さんの話が聞けるととても面白いし楽しいしその分野に興味をわきます。**
- ・またイベントがあったら参加したい。
- ・最近の展示は非常に充実していて、毎回期待しています。
- ・子どもと一緒に体験できるイベントが多いとうれしいです。

図6-7. 参加者からの「今後フジイギャラリーに期待することなど」。

たといえる。

展示内容から「人骨=怖いもの」というようなイメージを抱く来館者もいた中、普段触れることのない頭蓋骨や四肢骨のレプリカに触れられる場を作ることで、「体験を通して学べる面白さ」や「親しみやすい印象」を付加でき、パネル解説のみの展示鑑賞では得られない興味の惹きつけや理解への一助となったと考える。黒沢(2015)が、「博物館教育のなかでレプリカの使い方として最も効果的な点は、実際に触ることのできるという点、原品を触る体験の代替とすることができる」と述べているように、本イベントでもレプリカ鑑賞において、実物資料では見えない部分を観察でき、視覚のみならず、触覚による確認作業もできることから、手元での間近な鑑賞が有意義であったと考える。

アンケートでも「縄文人骨と弥生人骨の違いを、レプリカをさわって実感することができた」「新しい機械を使ってレプリカ等手にさわられる様々な展示がされており、とてもわかりやすかった」(図6-6, 下線部)とあり、いずれの体験も観察視点の変化により理解が深化したといえる。

加えて、技術として3Dスキャンへの関心も高いが、普段の生活の中ではまだ手にとって体感するほどの手軽さではないようであり、身近なものになりつつも未だ自分の周りにはないものへの知的好奇心を満たせるイベントであったと思う。今回のイベントでは、実際に3Dスキャンを実践してもらうことで、CC0<sup>6</sup>で公開されることが多い3Dデータがどのように生成され、どのような研究に活用できるのか、未来の技術発展の可能性を体感する機会にもなった。

## 6. おわりに

今回のイベントは、3D スキャンを体験し、レプリカに触りながら展示解説を受けることで、展示ケース越しでは見えない・わからない情報を、触れるという実体験によって立体で理解することができるような試みを行った。また、相乗効果として、新たな角度から観察するような探索行動を刺激したイベントとなった。学びが楽しい体験は、弥生時代という歴史的なテーマでも子供にも興味を持ってもらいやすく、講演会での解説形式とはまた違う理解を深める体験型学習になったといえる。

アンケートの回答によると、3D スキャンに興味がある人、弥生時代に興味がある人など参加理由はそれぞれであったが、6 組中4 組が親子での参加であった。

コメントにもあるように、子どもが参加できるイベント、あるいは子どもと一緒に参加できるイベントの開催を求めている声も多く、先生や学生と直接話ができる機会を求めている人も見受けられた(図6-7)。フジイギャラリーの現状として、福岡ミュージアムウィークや学内キャンパスツアー、展示内容に関連する学会が開会された際には休日に開館する機会を設けている。オープンキャンパスでの休日開館の際には親子で来館する人も多く、「九大にこのような施設があるなんて」と驚かれることも多い。平日の来館となると親子共に仕事と学校があり、来館が難しいと考えられるため、今後もこのような休日開館でのイベントを企画し、教職員や学生以外の方への周知・来館に繋げていきたい。

九州大学総合研究博物館には貴重資料も多く、実物の公開が難しい場合も多くあるが、今回のように3D スキャンを活用したレプリカを活用することで、実物を見る・触れる貴重体験を行うことを可能とした。今後もこのような企画を通して当館に興味を持ってもらえるような動機づけや教育普及活動を継続的に行っていきたい。

## 謝辞

本稿執筆にあたりまして、日頃よりフジイギャラリーの展示設営に協力頂いている有限会社ケイ・ネットワーク様、福永将大先生をはじめとする博物館の皆さま、フジイギャラリーの森田裕子専門員、本イベントへ参加くださいました多くの皆さまに深く感謝いたします。末筆になりますが、論文指導を行っていただいた三島美佐子先生にも記して謝意を表します。

## 注

- 1 2023年度春季企画展示「元寇防塁研究と九州大学」蒙古兜データなどデジタル展示
- 2 2023年度夏季企画展示「九州大学と旧工学部本館」削岩機データなどAR写真体験
- 3 <https://www.museum.kyushu-u.ac.jp/VR/index.html> 参照。2024.12.3閲覧。
- 4 文化庁博物館総合サイト <https://museum.bunka.go.jp/law/> 参照。2025.1.9閲覧。
- 5 「Artec Space Spider」Artec サイト <https://opt-techno.com/ARtec-3D-scanners/ARtec-spider.html> 参照。2024.12.3閲覧。
- 6 クリエイティブ・コモンズ・ジャパンサイト <https://creativecommons.jp/sciencecommons/aboutcc0/#:~:text=CC0%20とは,科学者,できるようになります%E3%80%82>参照。2024.12.3閲覧。

## 参考文献

- 吉田明世・福永将大・米元史織, 2024. 実践報告：元寇防塁研究と九州大学『ギャラリートーク——発掘担当者とする元寇防塁展——』, 九州大学総合研究博物館研究報告21, 131-144, 九州大学総合研究博物館。
- 藤野理香・田中あかり・坂倉真衣・三島美佐子, 2012. 実践報告：骨標本資料に対するネガティブな先入観の乗り越え——ワークショップ・プログラム「九大博物館を探検 骨から分かることをおしゃべりしながら考えよう！」の事例から——, 九州大学総合研究博物館研究報告10, 51-62, 九州大学総合研究博物館。
- 三島美佐子, 2024. 九州大学総合研究博物館ミュージアムレポート vol.32, 九大広報 vol.130, 15, 九州大学広報課。
- 平井康之・三島美佐子, 2010. 九州大学総合研究博物館常設展示室におけるインクルーシブデザイン・ワークショップ, 九州大学総合研究博物館研究報告8, 67-74, 九州大学総合研究博物館。
- 三島美佐子・平井康之・清水麻記・中西哲也・丸山宗利・南博文, 2010. 九州大学における今後の「アウトリーチ」のあり方, 九州大学総合研究博物館研究報告8, 43-48, 九州大学総合研究博物館。
- 三島美佐子・坂倉真衣・田中あかり・松隈明彦・岩永省三, 2011. 実践報告：九大博物館のホンモノ標本でチャレンジ！——見よう・描こう・比べよう！——, 九州大学総合研究博物館研究報告9, 69-76, 九州大学総合研究博物館。
- 黒沢浩, 2015. 博物館教育論, 講談社。

Received Dec. 25, 2024; accepted Jan. 16, 2025

# **Practical Report: Events related to the exhibition “People of the Yayoi Period: Natural Anthropology Research at Kyushu University Let’s Scan Bones with a 3D Scanner!”**

Akiyo YOSHIDA, Shiori YONEMOTO, Takahiro KUROKI

The Fujii Gallery  
The Kyushu University Museum

The authors held the exhibition “the People in Yayoi Period – The Physical Anthropological studies in Kyushu University” at the Kyushu University Museum in 2024. During the exhibition, we organized “Let’s Scan Bones with a 3D Scanner!” The purpose of this event was to improve understanding of the characteristics of human skeletal remains from Yayoi period through the generation and practice of 3D data, which is now familiar to participants. The event designed to allow participants to experience the characteristics of human skeletal remains through a full-scale scanning experience using the 3D scanner used in the museum, a simplified scanning experience using a smartphone application and explanations of the exhibition by an expert. This report provides overviews of the event and the findings from the experience.

**Key words:** Workshop, Hands-on, 3D, Space Spider, Scaniverse

# 天神山貝塚・山鹿貝塚から出土した貝類資料 ——九州大学総合研究博物館収蔵資料を対象として——

福永 将大\*・伊藤 泰弘

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
\*fukunaga@museum.kyushu-u.ac.jp

**要旨：**九州大学総合研究博物館に収蔵されている、福岡県所在の天神山貝塚と山鹿貝塚から出土した貝類資料の再検討を行った。出土した貝種の同定作業を行いつつ、合わせて出土貝類の生息域や生態について再検討し、両遺跡における貝類採集活動について考察した。また、貝類資料の一部に関して、放射性炭素年代測定を実施し、両遺跡における貝層形成時期を考える上で重要なデータを得ることができた。

**キーワード：**九州大学総合研究博物館収蔵資料，資料報告，天神山貝塚，山鹿貝塚，縄文時代

## はじめに

九州大学総合研究博物館には、もともと同大医学部解剖学第二講座にあった縄文～弥生時代の遺跡から出土した資料が収蔵されている。長崎県カラカミ遺跡や佐賀県小川島貝塚、福岡県天神山貝塚、同県山鹿貝塚、同県前田山遺跡、熊本県天岩戸岩陰遺跡、同県若園貝塚といった、いずれも1970年代に発掘調査された遺跡から出土した資料で、そのほとんどは貝類・動物骨・魚骨といった自然遺物である。これらの資料については博物館データベースへの登録がなされていなかったため、令和5（2023）年度から整理作業を開始した。本稿は、その整理作業の過程で実施した、天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類の調査分析成果の一端について報告するものである。

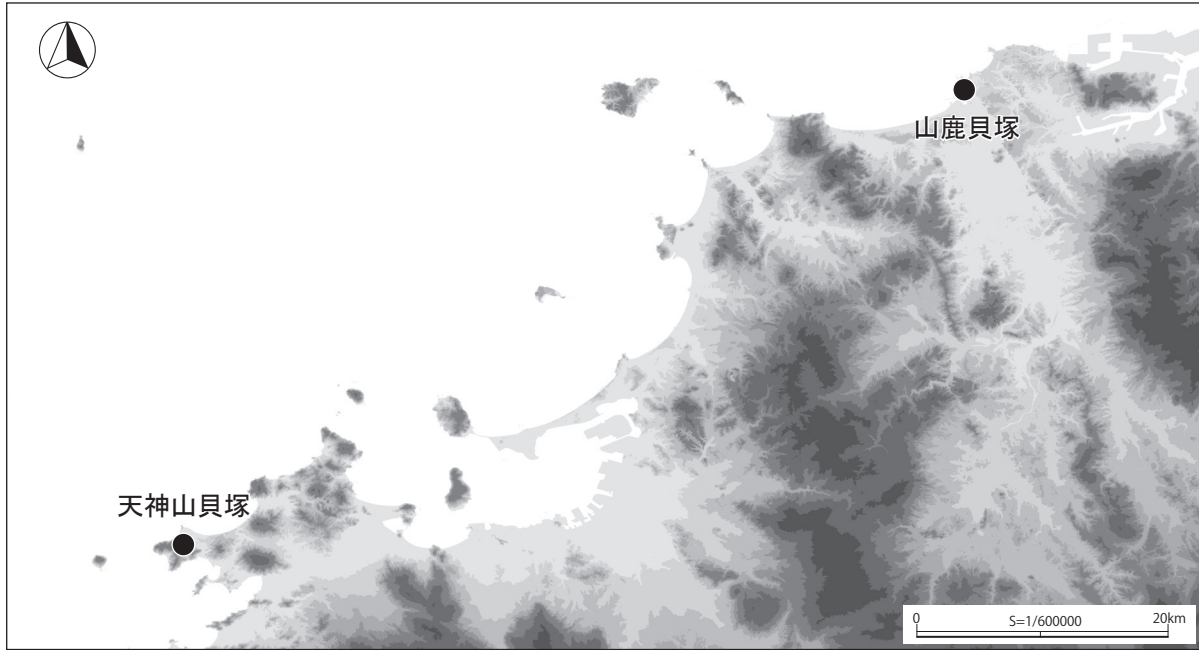
福岡県糸島市に所在する天神山貝塚は昭和49（1974）年に、同県遠賀郡芦屋町に所在する山鹿貝塚は昭和40（1965）年・昭和43（1968）年にそれぞれ発掘調査が実施されており、いずれも既に発掘調査成果報告は刊行されている（永井ほか編1972；前川編1974）。九州の縄文時代貝塚として著名な遺跡で、これまで多くの研究者によって研究対象とされてきており（木村1980・1987・1994；田中1985；山崎1975a・1975b・2007など）、九州縄文時代史を考える上で欠かすことができない遺跡である。

本稿で対象とする天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類は、発掘調査報告書の中で既にデータが公表されている資料と考えられる<sup>1</sup>。どちらも資料はきれいに洗浄されており、出土層位・貝種ごとに袋分けした状態で収蔵されていた。既報資料ではあるものの、データベースに登録するにあたって、再度貝種の同定作業を実施することとした。合わせて出土貝類の生息域や生態について再検討し、両遺跡における貝類採集活動について考察を試みる。

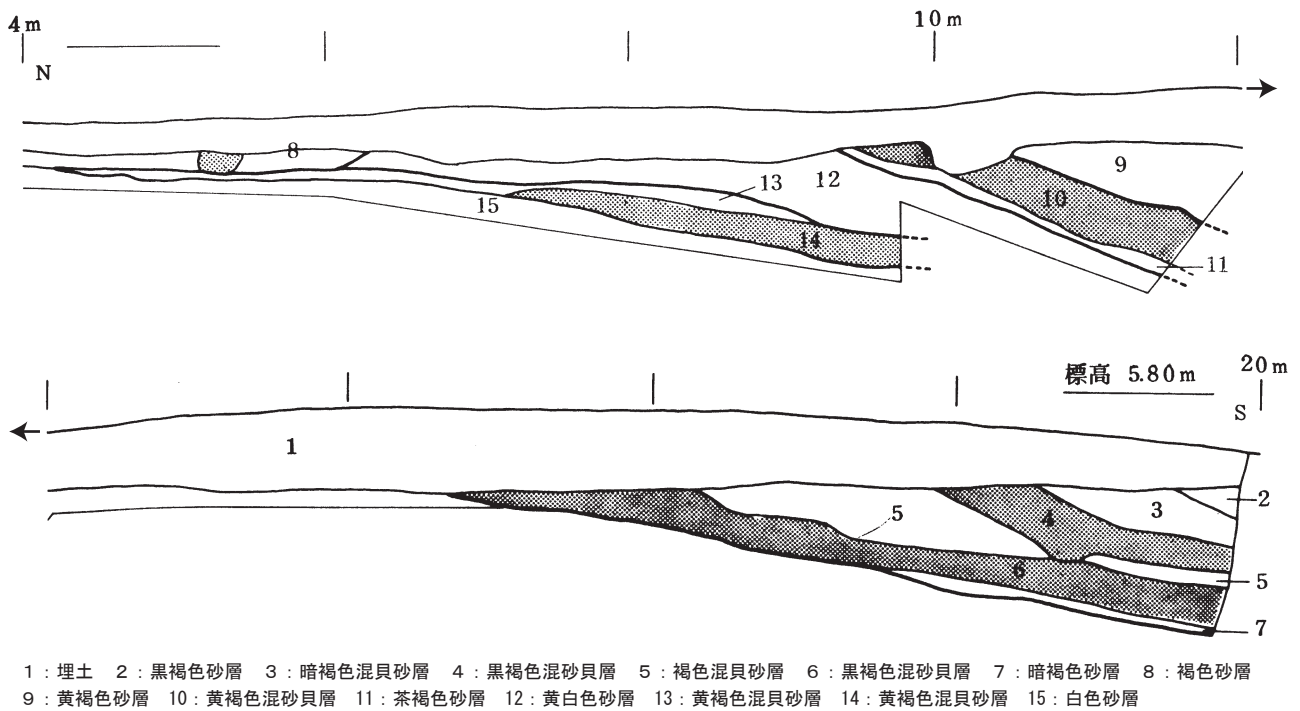
また、貝類資料の一部に関して、放射性炭素年代測定を実施した。山鹿貝塚では出土貝類の年代測定が実施されているが（永井ほか編1972, p.91）、1970年代の分析であり、その精度にはやや不安が残る。天神山貝塚に関しては、これまで実年代データは得られていないこともあり、天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類を対象とした年代測定実施の意義は大きいと考える。以下、1・3を福永が、2を伊藤が執筆し、4については福永・伊藤で協議しつつ執筆した。

## 1. 天神山貝塚と山鹿貝塚について

まず、天神山貝塚と山鹿貝塚で検出されている貝層の状況をまとめて、対象とする貝類資料の遺跡内での位置



第1図 天神山貝塚・山鹿貝塚位置図



第2図 天神山貝塚 トレンチ東側土層図

づけを明確にしておきたい。

(1) 天神山貝塚

福岡県糸島市志摩に所在する。貝塚のすぐ北側に玄界灘が広がっており、外海に面した場所に立地している。しかし、貝塚から出土する貝類や魚類は内湾性のものが

主体を占めることから、貝塚南東に広がる平地部は、縄文時代には引津湾側に口を開く内湾で、その内湾から主に貝類や魚類を獲得していた可能性が指摘されている（前川編1974）。

昭和49（1974）年に地形測量と発掘調査が実施されている。貝層と遺物の出土状況の把握を目的として、幅1

m, 長さ20mのトレンチを設定して調査が行われた。第2図は、トレンチ東壁の土層図である。発掘調査報告書から読み取れる各層の位置づけは以下の通り。

- 1層：現代の攪乱層。
- 2～7層：混貝砂層と混砂貝層が交互に層をなす縄文時代後期の遺物包含層。特に4層と6層の混砂貝層は、一部で純貝層を呈するところもある。縄文時代後期初頭の坂の下式・中津式が主体で、後期前葉の福田K2式が少量出土している。
- 10・11層：縄文時代前期の遺物包含層。10層は貝層である。縄文時代前期の轟式・曾畑式が出土しているが、出土量は多くない。
- 13・14層：時期の特定が難しい土器片2点のみ出土。縄文時代早期末頃の所産である可能性があるとのこと。魚骨が比較的多く出土している。

なお、今年年代測定を行った試料は、「4層」・「5層」・「前期貝層」とラベリングされた貝類（ハマグリ）である。上述のとおり、4層・5層は縄文時代後期初頭～前葉の遺物包含層であり、「前期貝層」は縄文時代前期の遺物包含層である10・11層に該当しよう。

## (2) 山鹿貝塚

福岡県遠賀郡芦屋町に所在する。遠賀川の河口近くに位置し、東西約200m, 南北約70mで細長く、高いところで標高12m強の低い砂丘上に立地する。貝塚の西側は外海に面するが、東側は、縄文時代には古遠賀湾に通じる内湾が存在していたと考えられている（永井ほか編1972）。

発掘調査は過去5回にわたって実施されている（永井ほか編1972；山田・吉田編2002）。博物館に収蔵されている貝類資料には、「2層 Fトレ B貝塚」とラベリングされている。Fトレンチは、昭和43（1968）年に実施された第3次調査の補足調査（＝第4次調査）において設定されているトレンチであり（第3図）、当該貝類資料はこの時の調査で採取されたものと考えられる<sup>2</sup>。

第4図は、Fトレンチ<sup>3</sup>西壁の土層断面図である。表土層（I層）を除去すると貝層（II a層～II h層）がブロック状をなして出土したとされている。II a層～II h層で出土する土器に変化はなく、縄文時代後期初頭から後期前葉に位置づけられる土器が出土している。今年年代測定を行った試料は、「2層」とラベリングされてお

り、第4図II a層～II h層のいずれかから採取されたものと考えられる。

これらの貝層の下部で確認されたII i層は、貝をあまり含まず堅くしまっており、炉跡と考えられる痕跡も見つかっていることから、この面が当時の生活の場として使用されていた可能性が指摘されている。

III層からは遺物は出土していないが、このIII層中に、縄文時代後期の堆積層（II層）の最下層から掘り込まれた土壌墓2基（15号人骨・16号人骨）が発見されている。

山鹿貝塚では縄文時代後期以前の資料も出土しているが、発掘調査報告書を見る限り、Fトレンチでは縄文時代後期の資料しか出土していないようである。

## 2. 収蔵貝類資料の検討

収蔵貝類資料は、天神山貝塚（前期貝層、5層、4層、3層）および山鹿貝塚（2層）から出土した貝類である。資料の同定は、現生貝類図鑑および現生貝類標本との肉眼比較で行った。現生貝類標本として、九州大学総合研究博物館所蔵の佐藤勝義コレクションを利用した。貝類の学名・和名および棲息環境は、奥谷（1986・2000・2017）を参考にした。

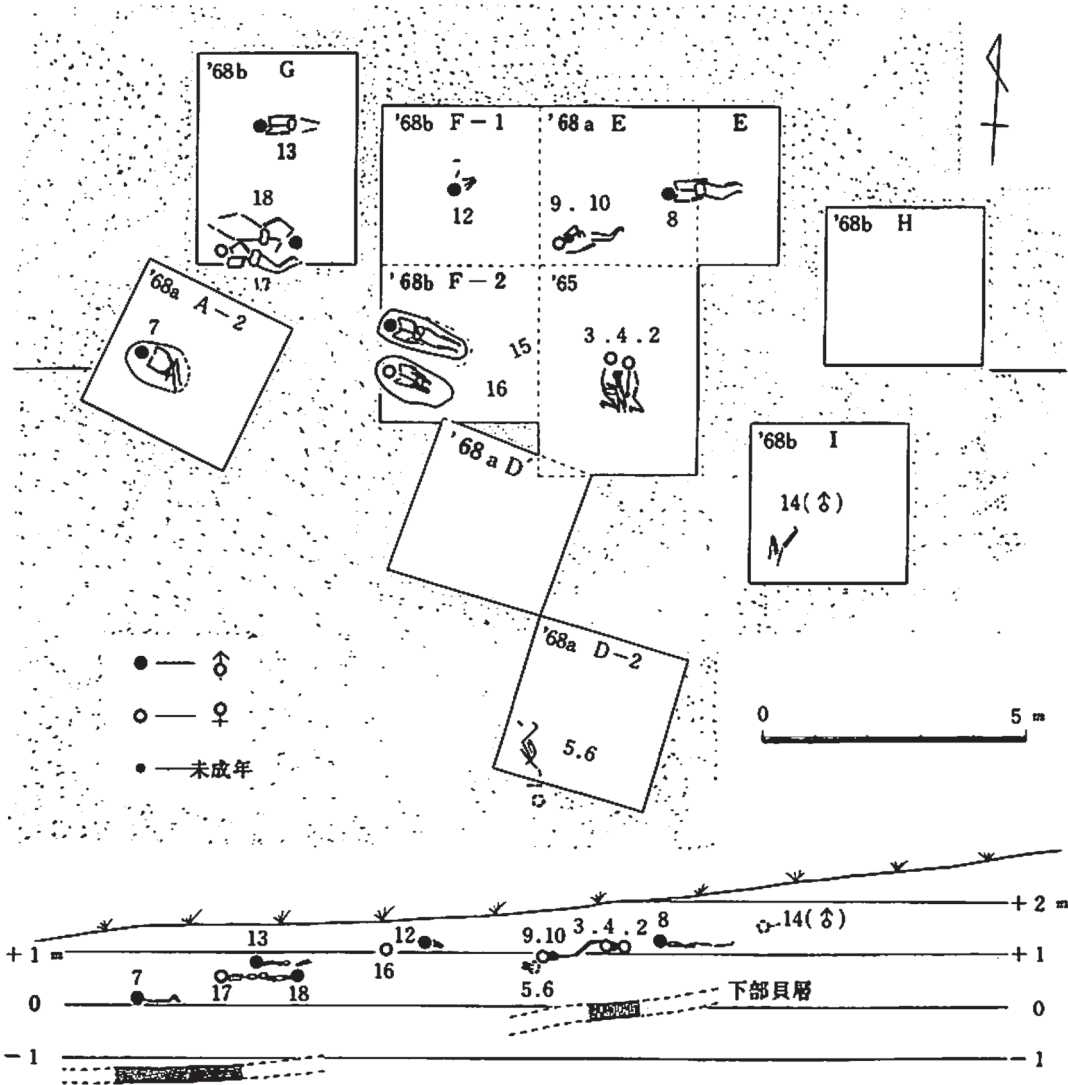
資料の係数は、腹足類（巻貝類）において殻口部あるいは殻軸のあるものを1個体とし、二枚貝類においては左右のどちらかの殻頂部ないし概ね3分の2以上あるものを0.5個体とし、その総数を切り上げた。さらに破片化したものが、多数ある場合は+を付記した。

天神山貝塚および山鹿貝塚から出土した貝類は、いずれも貝殻の溶脱が進んでおり、破片化したものや同定不能なものも多かった。特に、山鹿貝塚からのマガキは溶脱や破片化が著しく計数が困難であった。貝塚各層の同定結果の一覧は、第1表に示す。

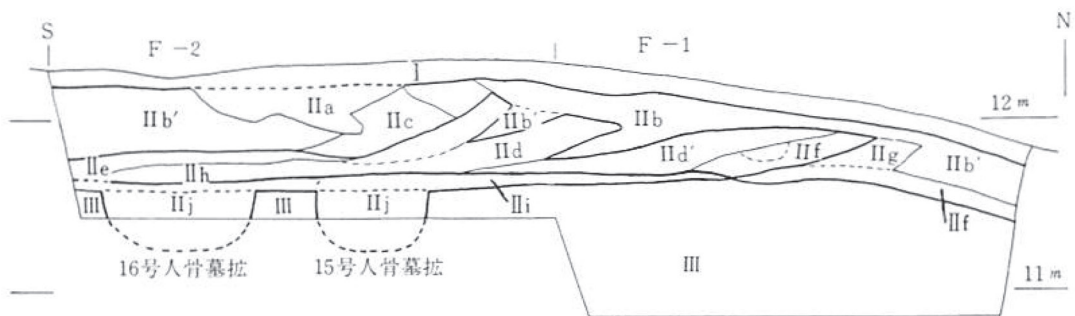
### (1) 天神山貝塚

#### i) 前期貝層 [資料番号：No. 29]

ハマグリが卓越するが、貝殻の総点数が100点ほどで少ない。ハマグリ他、オキシジミ、シオフキ、アサリなど、内湾の潮間帯中下部の砂泥底に棲息する貝類が中心である。それ以外に、サザエの蓋など岩礁性の貝類も僅かながら含まれる。前期貝層を形成した時代は、内湾の



第3図 山鹿貝塚 トレンチ配置図



- |     |              |      |                       |
|-----|--------------|------|-----------------------|
| I   | 黑色砂層 (表土)    |      |                       |
| IIa | 黑色砂層         |      |                       |
| IIb | 黄褐色砂層        | IIb' | 黄褐色砂層 (少量貝が混じる)       |
| IIc | 混貝(少量) 暗黄色砂層 | IId' | 破碎貝混褐色砂層 (黑色を帯びる)     |
| IId | 破碎貝混褐色砂層     | IIh  | 混貝黒褐色砂層 (A貝層)(完形貝を含む) |
| IIe | 暗褐色砂層        | IIi  | 暗黄褐色砂層                |
| IIf | 破碎貝混暗黄色砂層    | IIj  | 暗黄色砂層                 |
| IIg | 破碎貝混黄褐色砂層    | III  | 黄色砂層                  |

第4図 山鹿貝塚 Fトレンチ西壁土層図

第1表 天神山貝塚・山鹿貝塚 出土貝類種名表大友遺跡(1)

水深	底質	和名	分類	前期貝層 No.29	5層 No.28	4層 No.27(4)	3層 No.27(3)	山鹿貝塚 2層
潮間帯	岩礁	カサガイ類	腹足綱					3
潮間帯	岩礁	カリバガサ類	腹足綱					1
潮間帯	岩礁	マツバガイ	腹足綱		11	3	7	
潮間帯	岩礁	クロヅケガイ	腹足綱		10	14	8	
潮間帯	岩礁	イシダタミ	腹足綱		39	96	75	2
潮間帯	岩礁	ミミガイ類	腹足綱			2	1	
潮間帯	岩礁	スガイ(殻)	腹足綱	1	25	63	33	118
潮間帯	岩礁	スガイ(蓋)	腹足綱	3	19	24	54	245
潮間帯	岩礁	スソカケガイ	腹足綱		11	7	9	
潮間帯	岩礁	タマキビ	腹足綱		108	92	85	
潮間帯 ～潮下帯	岩礁	レイシガイ	腹足綱	1	4	21	12	4
潮間帯～20 m	岩礁	クボガイ	腹足綱		211	116	109	
潮間帯～20 m	岩礁	ヘソアキクボガイ	腹足綱			30	23	27
潮間帯～20 m	岩礁	オオコシダカガンガラ	腹足綱		4	9	6	
潮間帯～20 m	岩礁	クマノコガイ	腹足綱	1	48	22	15	1
潮間帯～20 m	岩礁	イガイ類	二枚貝綱	1	24	19	12	
潮間帯下部 ～20 m	岩礁	サザエ(殻)	腹足綱		3	15	4	11
潮間帯下部 ～20 m	岩礁	サザエ(蓋)	腹足綱	8	11	25	25	77
河川(淡水)	砂泥底	カワニナ	腹足綱			6	2	
潮間帯 (河口・汽水)	砂泥底・干潟	ヤマトシジミ	二枚貝綱					2
潮間帯～潮下帯 (汽水)	砂礫・泥底	マガキ	二枚貝綱	2			2	181+
潮間帯～潮下帯 (汽水)	礫やマガキ等 に付着	ウネナントマヤガイ	二枚貝綱					42
潮間帯	泥底・干潟	ウミニナ	腹足綱		8	205	112	3

第1表 天神山貝塚・山鹿貝塚 出土貝類種名表大友遺跡(2)

潮間帯	泥底・干潟	ホソウミニナ	腹足綱			75		23
潮間帯	干潟	ヘナタリ	腹足綱		1	112	16	2
潮間帯	泥底	フトヘナタリ	腹足綱		22	135	28	27
潮間帯	転石上	イソニナ	腹足綱			2	1	
潮間帯	砂～砂泥底	イボキサゴ	腹足綱			2	3	
潮間帯上部	砂底	ナミノコガイ	二枚貝綱		4	667	31	
潮間帯上部 ～20 m	砂泥底	サルボウ	二枚貝綱					1
潮間帯～10 m	泥底	ハイガイ	二枚貝綱	2				
潮間帯～20 m	岩礫	カリガネエガイ	二枚貝綱	1	15		2	
潮間帯 ～20 m	岩礫	コベルトフネガイ	二枚貝綱		1			
潮間帯中部 ～下部	泥底	イボウミニナ	腹足綱					15
潮間帯中部	砂底	マテガイ	二枚貝綱			2	9	
潮間帯中部 ～10 m	砂礫泥底	アサリ	二枚貝綱	8	10	147	44	
潮間帯中下部	岩礫底	トマヤガイ	二枚貝綱		2		1	
潮間帯下部	砂底	オキアサリ	二枚貝綱			1	2	
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	ハマグリ	二枚貝綱	49	25	60	33	77+
潮間帯下部 ～20 m	砂底	チョウセンハマグリ	二枚貝綱	1				
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	オキシジミ	二枚貝綱	17	1	134	20	2
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	シオフキ	二枚貝綱	11	7	90	33	
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	バカガイ	二枚貝綱				1	
潮間帯 ～50 m	細砂底	ツメタガイ	腹足綱		3	11	5	
水深約 10 m	砂底	バイ	腹足綱			1		
10 m～以深	細砂底	クダタマガイ類	腹足綱					1

潮間帯中下部の砂泥底に潜って棲む二枚貝類が中心であり、干潮時などに貝を掘って採取していたと考えられる。

ii) 5層 [資料番号：No. 28]

貝殻の点数で見ると、クボガイ、タマキビ、クマノコガイ、イシダタミ、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝が多く含まれる。ハマグリやアサリなどの砂泥底に棲息する二枚貝類も含まれるが少ない。その他に、ウニの棘やフジツボ類も見られる。

第5層が形成された時期は、主に岩礁の表面に棲息する巻貝、特に海水に浸からない場所を好むタマキビなどが採取されていたと考えられる。潮の満ち引きの影響を受けにくい岩礁での採取は、干潟での採集に比べて安定していたと考えられる。

iii) 4層 [資料番号：No. 27 (4)]

引き続き、クボガイ、タマキビ、イシダタミ、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝が多く含まれる。潮間帯下部のサザエやその蓋も見られる。また、内湾の潮間帯の砂泥底の表面に棲息するウミナ類の巻貝や、アサリ、オキシジミ、シオフキ、ハマグリなどの内湾の潮間帯中下部の砂泥底に潜って棲息する二枚貝も非常に多い。また、外洋に面した砂浜の波打ち際に棲息するナミノコガイの二枚貝が点数的には卓越する。その他に、ウニの棘やフジツボ類も見られる。

4層では、引き続き岩礁に棲息する巻貝が多く見られるが、一方で、内湾の潮間帯中下部の砂泥底に潜る二枚貝類が非常に豊富になる。さらに、注目すべき点として、外洋に面した砂浜に棲息する二枚貝のナミノコガイが大変多く含まれている。これらの特徴から、この時期には、岩礁だけでなく、干潮時に露出する内湾の干潟や外洋の砂浜でも、特に二枚貝類を中心に採取していたと考えられる。

iv) 3層 [資料番号：No. 27 (3)]

引き続き、クボガイ、タマキビ、イシダタミ、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝が多く含まれる。また、内湾の潮間帯の砂泥底の表面に棲息するウミナ類の巻貝も多く含まれるが、4層と比較すると少ない。また、アサリ、ハマグリ、シオフキも含まれるが、4層と比べると大幅に少ない。その他に、ウニの棘やフジツボ類も見られる。

3層でも、岩礁に生息する巻貝は多く見られるが、4層で見られるような干潮時に採取できる二枚貝類は少な

くなっている。これは、岩礁での採取が継続される一方で、干潮時の採取が減ったことを示唆している。

v) 小結

天神山貝塚の5層、4層、3層の貝類構成を比較すると、潮の満ち引きの影響を受けにくい岩礁表面での貝類採取は、比較的安定して行われていたことがわかる。一方、4層に見られるように、二枚貝類は堆積物中に棲息するため、干潮時に採取する必要があり、潮位の変化に大きく左右される。そのため、これらの層の違いは、採集時期の違いを反映している可能性があり、特に4層は、干潮時の潮位が大きく低下する春から夏にかけて形成されたものではないかと考えられる。

(2) 山鹿貝塚

i) 2層

汽水域で潮間帯の干潟や砂泥底に棲息するマガキが貝類の大部分を占め、カキなどの表面に付着するウネナシトマヤガイが特徴的に含まれる。また、砂泥底の表面に棲息するウミナ類や、砂泥底に潜って生活するハマグリも含まれる。貝類の点数で見ると、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝や、潮間帯下部のサザエの蓋が多く確認された。

2層が形成された時代には、マガキの群集またはカキ礁が形成された干潟が存在したと考えられる。当時の山鹿地域は、遠賀川河口に位置した大規模な干潟が広がっており、カキなどの採取が行われていたと推測される。さらに、岩礁地帯に棲息する貝類も多く見られ、現在も遠賀川河口東側の岩礁でサザエなどが採取されることから、当時もこれらの岩礁地帯で巻貝を中心に採取していたと考えられる。

3. 収蔵貝類資料の年代測定

天神山貝塚・山鹿貝塚から出土した貝類を対象に、放射性炭素年代測定を実施した<sup>4</sup>。天神山貝塚出土貝類から6点、山鹿貝塚出土貝類から2点を試料として抽出しており、第2表は、年代測定結果を示したものである。

天神山貝塚の「前期貝層」とラベリングされた試料2点は、4279-3945 cal BC, 4271-3939 cal BCの測定値を示した。第3表は、「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測

第2表 天神山貝塚・山鹿貝塚 年代測定結果

No.	遺跡名	収蔵ラベル	試料	測定番号	年代測定結果 (2σ 暦年代範囲)
1	天神山貝塚	天神山貝塚 前期貝層 30×30×20ブロック 740324 ハマグリ (R) 54個	ハマグリ右殻	PLD-51305	4279-3945 cal BC (95.45%)
2	天神山貝塚	天神山貝塚 前期貝層 30×30×20ブロック 740324 ハマグリ (L) 45個	ハマグリ左殻	PLD-53064	4271-3939 cal BC (95.45%)
3	天神山貝塚	天神山貝塚 第5層 30×30×10ブロック 740324 ハマグリ (R) 24個	ハマグリ右殻	PLD-51306	2670-2279 cal BC (95.45%)
4	天神山貝塚	天神山貝塚 第5層 30×30×10ブロック 740324 ハマグリ (L) 25個	ハマグリ左殻	PLD-51307	2609-2224 cal BC (95.45%)
5	天神山貝塚	天神山 第4層 30×30×30 740323 No.2 ハマグリ (L) 61	ハマグリ左殻	PLD-51308	2676-2283 cal BC (95.45%)
6	天神山貝塚	天神山貝塚 第4層 30×30×30 740323 No.2 ハマグリ (R) 58個	ハマグリ右殻	PLD-53065	2696-2301 cal BC (95.45%)
7	山鹿貝塚	山鹿貝塚 第2層 Fトレ B貝塚	ハマグリ右殻	PLD-53066	2353-1916 cal BC (95.45%)
8	山鹿貝塚	山鹿貝塚 第2層 Fトレ B貝塚	ハマグリ右殻	PLD-53067	2410-2021 cal BC (95.45%)

第3表 年代測定データ一覧

時期	土器型式	cal BC	遺跡名	時期	土器型式	cal BC	遺跡名
早期末	轟2式	5,331	湯屋原遺跡	中期前半	春日式	2,623	西畑瀬遺跡
前期前半	轟B式	5,212	一陣長崎鼻遺跡	中期前半	春日式	2,571	上水流遺跡
前期前半	轟B式	4,936	湯屋原遺跡	中期末	阿高式	2,512	中尾田遺跡
前期前半	轟B式	4,717	九郎遺跡	中期末	阿高式	2,339	南田代遺跡
前期前半	轟B式	4,681	西畑瀬遺跡	中期末	阿高式	2,276	中尾田遺跡
前期前半	轟B式	4,497	三角山I遺跡	後期前半	坂の下式	2,203	東畑瀬遺跡
前期前半	轟B式	4,250	西畑瀬遺跡	後期前半	南福寺式	2,133	山ノ中遺跡
前期前半	轟B式	3,985	中川原遺跡	後期前半	岩崎式	2,282	宮ノ上遺跡
前期前半	轟B式	3,948	二日市洞穴	後期前半	岩崎式	2,200	宮ノ上遺跡
前期前半	轟B式	3,493	湯屋原遺跡	後期前半	岩崎式	2,193	宮ノ上遺跡
前期前半	轟B式	820	湯屋原遺跡	後期前半	指宿式	2,297	宮ノ上遺跡
前期前半	轟4式	3,758	上伊良原榎遺跡	後期前半	指宿式	2,136	山ノ中遺跡
前期前半	轟5式	3,977	上伊良原榎遺跡	後期前半	指宿式	2,136	山ノ中遺跡
前期後半	曾畑式	4,841	向田遺跡	後期前半	指宿式	2,133	山ノ中遺跡
前期後半	曾畑式	4,037	一湊松山遺跡	後期前半	指宿式	2,035	芝原遺跡
前期後半	曾畑式	3,961	一湊松山遺跡	後期前半	指宿式	1,880	山ノ中遺跡
前期後半	曾畑式	3,797	一湊松山遺跡	後期前半	御手洗A式	2,468	中川原遺跡
前期後半	曾畑式	3,766	三角山I遺跡	後期前半	市来式	2,287	干迫遺跡
前期後半	曾畑式	3,512	桐木耳取遺跡	後期前半	市来式	1,952	下鶴遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,511	中ノ原遺跡	後期前半	市来式	1,896	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,366	上水流遺跡	後期前半	市来式	1,886	下鶴遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,332	宮ヶ原遺跡	後期前半	市来式	1,881	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,085	堂園平遺跡	後期前半	丸尾式	2,199	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	2,919	仁田尾遺跡	後期前半	丸尾式	1,881	下鶴遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,089	上水流遺跡	後期前半	丸尾式	1,872	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式 日木山	3,101	上水流遺跡	後期前半	鐘崎式(粗製)	2,011	西畑瀬遺跡
中期前半	船元II式	3,376	北大久保A遺跡	後期前半	辛川式	1,608	干迫遺跡
中期前半	船元II式	3,352	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,625	干迫遺跡
中期前半	船元式	3,511	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,517	釘野千軒遺跡
中期前半	船元式	3,369	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,510	釘野千軒遺跡
中期前半	船元式	3,360	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,607	下鶴遺跡
中期前半	船元式	3,102	九郎遺跡	後期後半	西平式	1,509	下鶴遺跡
中期前半	船元式	3,099	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,505	玉名平野条里跡
中期前半	船元式	3,076	桐木耳取遺跡	後期後半	西平式	1,414	玉名平野条里跡
中期前半	船元式	2,906	上水流遺跡	後期後半	太郎迫式	1,510	西畑瀬遺跡
中期前半	本野タイプ	3,511	北大久保A遺跡	後期後半	三万田式	1,438	大野遺跡
中期前半	上水流タイプ	3,210	北大久保A遺跡	後期後半	中岳式	1,283	西原遺跡
中期前半	春日式	2,902	桐木耳取遺跡	後期後半	中岳式	1,256	西原遺跡
中期前半	春日式	2,894	上水流遺跡	後期後半	御領式	1,260	西畑瀬遺跡
中期前半	春日式	2,849	上水流遺跡				

定データベース」をもとに、九州縄文時代前期～後期の年代測定データを収集し、かつ、Intcal20で暦年校正を行った年代値を表にしたものである(福永2022)。第3表から判断すると、天神山貝塚の「前期貝層」とラベリ

ングされた試料2点の年代値は、縄文時代前期の轟B式に概ね相当することがわかる。上述のとおり、天神山貝塚の前期遺物包含層(10・11層)からは轟B式が出土しており、年代測定結果と大きな矛盾はない。

また、「5層」とラベリングされた試料2点は、2670-2279 cal BC, 2609-2224 cal BC の測定値を、「4層」の試料2点は、2676-2283 cal BC, 2696-2301 cal BC の測定値を示した。第3表から判断すれば、概ね縄文時代中期末～後期初頭に相当する。4層・5層は縄文時代後期初頭～前葉の遺物包含層であるが、縄文時代中期末の並木式と考えられる土器小片が1点確認されており、報文中では遺跡内に縄文時代中期の包含層が存在する可能性も言及されている（前川編1974）。

山鹿貝塚の「2層 Fトレ B貝塚」とラベリングされた試料2点は、2353-1916 cal BC, 2410-2021 cal BC の測定値を示した。発掘調査成果報告書の中で、縄文時代後期貝層（A-2区上層貝層）から出土したハマグリを対象に年代測定を実施しており、較正はされていないが3376±150年 B.P. という値が示されている（永井ほか編1972）。分析対象試料を抽出した貝層が違うことや、分析精度の問題などもあり、単純に結果を比較することはできないが、今回の年代測定結果は、以前示された年代値よりも古い値を示し、第3表から判断すれば、概ね縄文時代中期末～後期前葉に相当しよう。

#### 4. 若干の考察

天神山貝塚の収蔵貝類資料を検討した結果、縄文時代後期の5層・4層・3層において貝類構成に差異が認められた。これらの差異は、採集時期（季節）の違いを反映している可能性がある。これまで、天神山貝塚の貝層間に認められる貝種構成の変異は、海進・海退などの自然環境の変化によって生じたものと考えられており（山崎1975b）、本稿では先学とは異なる解釈を提示したことになる。

放射性年代測定の結果、5層の試料2点は、2670-2279 cal BC, 2609-2224 cal BC の測定値を、4層の試料2点は、2676-2283 cal BC, 2696-2301 cal BC の測定値を示しており、両層間で年代差は認められない。この測定結果を見る限り、5層・4層は比較的近い、あるいはほぼ同時期に形成されたと想定できる。その場合、両層に認められる貝種構成の差異について、海進・海退という中・長期的な要因を想定するよりは、採集時期（季節）の違いを反映しているとみる方が、より妥当性は高いと考え

られる。しかし、年代測定を行った試料数も少なく、現状のデータのみでは、貝層形成時期の評価は難しいことも確かである。今後、貝採集季節の推定に有効と考えられる出土貝類の貝殻成長線分析の実施や、同層から出土した魚骨など、当時の生業活動を反映するような貝類以外の資料を分析することで、検証作業を続けていく必要があるだろう。

次に山鹿貝塚の分析結果について述べたい。第2・3次発掘調査で検出された縄文時代後期の層は、鐘崎式・北久根山式併行期（「山鹿XII」・「山鹿XIII」）の土器群が主体を占め、埋葬人骨の時期もこの時期と推定されている（永井ほか編1972）。しかし、上述のとおり、今回の年代測定結果は、概ね縄文時代中期末～後期前葉の年代値を示しており、報文中の後期堆積層の推定年代よりも、やや古い値となっている。

確かに、山鹿貝塚からは、縄文時代中期末の並木式・阿高式や、縄文時代後期初頭の中津式・坂の下式はそれほど多くの出土は認められず、報告書掲載土器図面でも、後期前葉～中葉の小池原上層式・鐘崎式・北久根山式が目立つ。報文中で縄文時代後期の層を鐘崎式・北久根山式併行期（「山鹿XII」・「山鹿XIII」）と推定したのも、こうした出土土器の様相を踏まえてのことであろう。

一方で、山鹿貝塚の採集資料の中には、縄文時代後期初頭～前葉の中津式・福田K2式に伴う粗製土器と考えられる屋敷式（中村2005）が多く存在している（福永2018）。採集品も含めた資料状況と今回の年代測定結果を踏まえれば、山鹿貝塚において、縄文時代後期初頭～前葉の人々の活動痕跡も無視し得ない。発掘調査成果報告書の文章・図面によって、「山鹿貝塚の縄文時代後期貝層や埋葬人骨の年代＝鐘崎式・北久根山式併行期」とする漠然としたイメージが形成されてきた感がある。しかし、今回の年代測定結果などから判断する限り、後期貝層や埋葬人骨の年代に関しては今後より慎重な評価・検討が必要であると考えられる。

#### おわりに

九州大学総合研究博物館に収蔵されている、天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類を対象として、出土貝類の構成や貝類採集活動について検討し、さらに、貝類資料の一部

に関して放射性炭素年代測定を実施した。残された課題は多いものの、天神山貝塚・山鹿貝塚ともに、新たな知見を得ることができた。既報資料ではあるものの、その再検討を行う意義を改めて感じた次第である。

九州大学総合研究博物館には、長崎県カラカミ遺跡や佐賀県小川島貝塚、福岡県前田山遺跡、熊本県天岩戸岩陰遺跡、同県若園貝塚などから出土した貝類・動物骨・魚骨といった自然遺物がまだ眠っている。今後、これらの資料の再検討も進めていきたい。

## 註

- 1 発掘調査報告書に掲載されている各貝種の個体数と、収蔵資料の個体数は一致しない点がかかる。とはいえ、後述する資料の収蔵状況からは整理・報告作業を実施したことが推察され、これらの資料は各発掘調査報告書の中でデータ公表された資料である可能性が極めて高いと考えられる。
- 2 ラベルにある「B貝塚」については、発掘調査報告書（永井ほか編1972）の記述でも確認できず、詳細は不明である。第4図の土層注記に「II h 混貝黒褐色砂層（A貝層）（完形貝を含む）」とあり、「B貝塚」という記載と何か関連があるのかもしれないが、よくわからない。
- 3 発掘調査報告書（永井ほか編1972）の中では、「Fトレンチ」と「F区」が混在して用いられている。両者は同義と考えられ、本稿では収蔵資料に付されたラベルに「Fトレ」と記載されていることもあり、「Fトレンチ」の呼称で以下記述する。
- 4 年代測定は、株式会社パレオ・ラボに分析を依頼した。なお、暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：Marine20）を使用し、分析試料は海洋性のハマグリということで、海洋リザーバー効果に対する較正も行っている。

## 引用文献

奥谷喬司（編・監修）1986『生物大図鑑・貝類：決定版』世界文化社

- 奥谷喬司（編著）2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会  
 奥谷喬司（編著）2017『日本近海産貝類図鑑 第二版』東海大学出版部  
 木村幾多郎 1980「総括——自然遺物よりみた新延貝塚の漁撈、狩猟活動について」『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会、pp.129-135.  
 木村幾多郎 1987「北部九州の漁撈活動」『文明のクロスロード：Museum Kyushu』第24号、博物館等建設推進九州会議、pp.9-18.  
 木村幾多郎 1994「北部九州の狩猟・漁撈活動」『九州の貝塚——貝塚が語る縄文人の生活——』北九州市立考古博物館、pp.14-23.  
 田中良之 1985「北九州の縄文時代」『北九州市史 総論 先史・原始』北九州市、pp.293-334.  
 永井昌文・前川威洋・橋口達也（編）1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団  
 中村友博 2005「屋敷式土器について」『やまぐち学の構築』創刊号、pp.1-18.  
 福永将大 2018「福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚採集の土器資料——船津常人氏収集資料（1）——」『九州考古学』第93号、pp.101-110.  
 福永将大 2022「玉泉館旧蔵資料の研究——福岡県みやま市下楠田貝塚出土の土器資料について——」『九州大学総合研究博物館研究報告』第19号、pp.17-26.  
 前川威洋（編）1974『天神山貝塚』志摩町文化財調査報告書第1集、志摩町教育委員会  
 山崎純男 1975a「九州地方における貝塚研究の諸問題——特に自然遺物（貝類）について——」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会、pp.129-165.  
 山崎純男 1975b「縄文時代遺跡の地域的検討——福岡県糸島半島の貝塚について——」『熊本史学』第46号、熊本史学会、pp.1-14.  
 山崎純男 2007「九州縄文時代生業活動の展開」『第17回九州縄文研究会福岡大会 九州における縄文時代早期前葉の土器相 発表要旨・資料集』九州縄文研究会、pp.1-11.  
 山田克樹・吉田浩之（編）2002『山鹿貝塚（第5次調査）』芦屋町文化財調査報告書第14集、芦屋町教育委員会

Received Dec. 29, 2024; accepted Jan. 21, 2025

## **Shellfish Materials Excavated from Tenjinyama Shell Mound and Yamaga Shell Mound**

—Materials from the Kyushu University Museum Collection—

Masahiro FUKUNAGA, Yasuhiro ITO

The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

Shellfish materials excavated from Tenjinyama Shell Midden and Yamaga Shell Midden in Fukuoka Prefecture, Japan, which are housed in the Kyushu University Research Museum, were reviewed. While identifying the excavated shell species, we also reviewed the habitats and ecology of the excavated shells, and discussed the shellfish collecting activities at the two sites. In addition, some of the shellfish materials were radiocarbon dated, which provided important data on the timing of shell mound formation at the two sites.

**Key words:** the Kyushu University Museum Collection, report of materials, Tenjinyama Shell Mound, Yamaga Shell Mound, Jomon period



## 九州大学総合研究博物館研究報告 投稿規定

本研究報告は九州大学の研究資料ならびに九州大学総合研究博物館の研究内容に関する論文を掲載する査読付き雑誌である。本博物館の関係者（教員，各種研究員，ボランティア，教員の指導学生）が投稿できるが，九州大学の研究資料に関係する内容であれば，その限りではない。

不定期刊とし，ある程度の数の原稿が集まった段階で印刷する。投稿の前に編集担当者と出版の日程を十分に相談する。

投稿料は基本的に無料とする。ただし，15ページを超えるか，多数のカラーページを掲載する場合には，印刷費の一部を投稿者が負担することがある。

著者校正は原則として初校のみとする。校正時の内容の変更や追加は認めない。もし，やむを得ない事情により変更・追加する場合は，それにともない発生する費用を投稿者が負担することがある。

別刷は50部単位で作成し，当館負担とする。それ以上は投稿者の負担とする。

電子版別刷（PDF ファイル）は当館負担で作成する。PDF 別刷の挿図のみカラーを希望する場合は連絡事項に記すこと。

原稿は十分に推敲され，適切な校閲を既に受けたものとする。投稿された原稿は，原則として2名の校閲者によって査読される。

投稿原稿の採否は，査読者の意見に基づき，編集担当が決定する。編集担当は原稿の内容について訂正，再検討を求めることがある。重大な修正が要求されない場合は，変更箇所などについて，事前に著者に通知を行わない。

### 原稿作成要領

原則的に電子メールによる投稿原稿（ファイル添付）を受け付ける。原稿はA4サイズの横書きとし，A4判用紙を用い，上下左右各3cm以上の余白をサイズのあけ，基本的な体裁（引用文献の表記を含む）に関しては，最新の号を参照し，Microsoft Wordで作成する。

原稿1ページ目の上部には，少なくとも1/4ページ以上の余白をあけ，ランニングタイトル，別刷冊数を記入する。清書する活字の大きさフォントサイズは14ポイント（和文12ポイント）とし，句読点には「.,;:・」を用いる（和文では全角）。なお，欧文では，表題や見出しを含めて，いかなる場合にも大文字だけで表記しない。

特殊なレイアウトを必要とする場合，ファイル中でフォントの大きさや行間等を指定する。

論文原稿は，和文論文の場合，表題，著者名，所属機関とその所在地（または住所），代表著者のメールアドレス，要約，キーワード，本文，および文献の順に配列する。最終ページに英文で上記の表題からキーワードまでを追加する。欧文論文の場合，最後に和文のタイトル，著者名，要約をつける。著者が2人名以上である場合は，著者名と所属機関およびその所在地（または住所）はそれぞれまとめて記す。キーワードにはタイトルに含まれない単語を仮名順（alphabet 順）で列記する（タイトルを補足する検索用の単語）。

写真や原画などの挿図は印刷希望の寸法を指定し，JPG か TIFF ファイルで提出する（350 dpi 以上）。Word ファイルのなかに図を入れ込まないこと。多数の小さな図がある場合，編集の煩雑さを避けるため，個別に本文中に入れ込むことはしない。画像編集ソフトで1枚～数枚のプレートにまとめ，各図に番号をふり，キャプションをつけて提出する。キャプションは本文の Word ファイル中の最後にまとめておく。

テーブルは Microsoft Excel で作成し，別のファイルで提出する。そのキャプションは本文の Word ファイル中の最後にまとめておく。

生物の新種記載や学名の変更に関わる論文は欧文とし，各種命名規約を遵守する。

投稿の際，参考までに信頼できる査読者を2～3名指定する。

原稿は当館の各専門分野の教員に送付し，やり取りを行う。当該分野の教員が存在しない場合には，編集担当の丸山宗利に問い合わせる。



〈表紙写真の説明〉

九州大学福岡演習林で採集された珍種キオビチビオオキノコムシ

*Spondotriplax flavofasciata* collected in the Kasuya Research Forest, Kyushu University

九州大学総合研究博物館研究報告第22号

令和7年3月31日発行

発行者 || 九州大学総合研究博物館  
編集者 || 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
|| Phone 092-642-4252 / Fax 092-642-4299  
|| URL <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印 刷 || 城島印刷株式会社  
|| 〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6  
|| Phone 092-531-7102 / Fax 092-524-4411

# 九州大学総合研究博物館研究報告

第22号  
2025年3月

## 目次

山崎 真治／福永 将大／片多 雅樹 玉泉館旧蔵資料中の琉球関係資料について	1
城戸 克弥 九州大学福岡演習林の甲虫類	19
米元 史織 新町遺跡と大友遺跡：筋骨格ストレスマーカーから明らかにする弥生時代開始期の人々の身体活動	53
角田 恒雄／米元 史織／高椋 浩史／神澤 秀明／舟橋 京子 大友遺跡ならびに広田遺跡から出土した人骨におけるミトコンドリアDNA分析	71
岩永 省三 文武大嘗宮論のための予備的検討	81
吉田 明世／米元 史織／黒木 鳳弥 実践報告：企画展示「弥生時代の人々—九州大学の自然人類学研究—」関連イベント 『体験！3Dスキャナーで骨をスキャンしよう！』	117
福永 将大／伊藤 泰弘 天神山貝塚・山鹿貝塚から出土した貝類資料 —九州大学総合研究博物館収蔵資料を対象として—	129